HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
4

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

4

——【残り35人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）
~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
~~四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）~~
五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）
~~六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）~~
~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~
九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）
~~十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）~~
十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
~~十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）~~
~~十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）~~
~~十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）~~
~~十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~
~~十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~
十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
~~十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）~~
十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
~~二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）~~
~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~
~~二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）~~
~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
~~三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~
三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）
~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~
~~三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）~~
~~三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）~~
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~
四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
~~四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）~~
~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~
四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）
~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~
~~四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）~~
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）
四十八番　少年　（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~
五 十 番　スフィー　（すふぃー）

~~五十一番　住井　護　（すみい・まもる）~~
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~
~~五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）~~
~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~
~~六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）~~
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~
六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）
~~六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）~~
六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）
~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
~~七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）~~
~~七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）~~
~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~
~~七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）~~
~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~
~~七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）~~
~~七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）~~
~~七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）~~
七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）
~~八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）~~
~~八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）~~
~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）~~
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる　（みちる）~~
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
八十九番　御堂　（みどう）
九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）
~~九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）~~
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
~~九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）~~
九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）
~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~
~~九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）~~
~~九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）~~
~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~
九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）
~~百　　番　リアン　（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：秋★枝

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

450　潜入

「ねえ、ジュン？　こんなところに来てどーしたの？」
「まあ、黙って見てろって……へへ……」
ピィン！
「そら、開いたぜ」
「……？」
浩之と、あかりと……悲しみの再会を終えて――
我々、北川隊員とヘレン隊員はとある商店街のはずれへと足を運んだ。
ここに一軒の店がある。いわゆるスーパーマーケット。略してスーパーというやつだ。
入り口は固く閉じられていたが、この俺の手にかかれば針金でちょいちょい……だ。
いや、護直伝のやりかたをマネただけなんだけどな。あの頃の悪巧みがまさかこんなところで役に立つなんて皮肉なもんだぜ。
まあ、そんなこんなで――
「――我々はこのスーパーを占拠している」
「さっきから何ブツブツ言ってるデスカ？」
「いや、なんでもないなんでもないんだよ隊員二号」
「二号って何？　オイシイ？」
（力の一号の方がよかったか？）
とにもかくも、慎重に身を潜めつつここまでやってきた二人。随分と時間がかかってしまったが幸い誰にも会うことなく……（ある意味不幸だな）ここまでやってこれた。
「護がいればこんな作業屁でもねぇのになぁ」
貧乏くじを引いたさえない少年のような顔で北川は目的の物を探す。
「スーパーで探し物……もずくデスカ？　きっとたくさんあるヨ！」
「ちが～う！　と、とにかくあたりには気を配って

くれ。こんなところで襲われたら一瞬でミンチになる」
「Ｏｈ！　ミンチ……ワタシタチ狩られてしまうデスか……その時は狩られる前に狩る方が効率的ネ」
もしもの時はやむを得まい。殺られるわけにはいかないのだ。
先の放送……死亡者リストは最多の十三人。北川の知り合いである水瀬名雪もその中に含まれていた。そして、レミィの大切な友人達も、だ。
——バイバイ……大切な、トモダチ……
レミィが見せたあの時の表情——今も忘れることはない。
忌まわしいゲームは今も続いている。今まで襲われたことのない二人はなんと幸運なことか。だが、これからもそう……とはとても言えない。
もしもの時は……生き残るために応戦することも考えねばならなかった。
現在の二人の武器は……水鉄砲一丁、もずく三パック、ノートパソコン。
(敵と出会ったときどうやってこの武器で戦う？　考えろ、考えるんだ潤！)
北川は頭の中で、まだ見たこともないような異星人との戦いをシミュレートしてみた。
1．ハンサムな潤は突如起死回生の案をひらめく
2．仲間がきて助けてくれる
3．殺される。現実は非情である
(理想は相沢達と協力できれば——だから2なんだけどな……そう上手くはいかないよな……やっぱり1か……)
「ジュン……難しい顔してどうしたの？」
「もうすぐ俺、結婚するんスよ！」
「？」
「いや、すまん……ちょっと考え事をな……」
どんなに真面目に考えても、景色が赤く染まった

吐き気のするビジョンが脳裏に浮かんだ。
「ジュンはワタシが守るカラ大丈夫よ！」
そう言いながら刀をぶんぶんと振り回す。
「そ、その刀どこにあったんだ？」
「さっき拾ったバッグの中に入ってたヨ？」
「そ、そうか……」
すっかり失念していた。浩之のものと思われるバッグの中にいくつか身を守る武器が入ってたじゃないか。
北川は少しだけ安心したように息を吐いた。かといって銃器に対抗できるのか？　という危機感までは拭えないが。
「と、とにかく人の気配がしたら伝えてくれ……こんなスーパー誰も来ないとは思うけどな」
そう言いながら敷居に囲まれた売り場の一角へと足を運ぶ。
「ここに……なにがあるの？」
「やっぱ泥棒にみえるか？　まあ見てろって……」

この建物はスーパーの外観をしていたが中身はがらんどうだった。棚だけあって売り物はほとんど無い。映画のセットのような粗雑な作りである。
北川は、鞄からノートパソコンを取り出して、電源プラグをコンセントに挿した。
「……よし、電気は来てるみたいだな。これならなんとかなりそうだ」
ＰＣを立ち上げると、見慣れたＯＳの起動画面が画面に表示されてほっとする。これなら扱える。パスワードは掛かっていなかった。
起動後の画面には特に変わったアイコンは無さそうだった。
早速、¼と書かれたＣＤをソケットに入れて少し待つ。
「あー、やっぱりプロテクトが何重にもかけられてるな……へへ、腕がなるぜ……レミィ！　懐中電灯とってくれ！」
「イエッサー！」

暗闇の中、小さな明かりが点る。
怪しげな文字の羅列が下から上へと一気に流れていく。
その後、カタカタとキーボードを打ちこみながら北川は得意そうに鼻を鳴らした。
「何してるノ？」
「解析……わかるか？」
「サッパリです……」
「本当なら護の得意分野だ……って俺この手の分野で護より得意なものってあったっけな……」
　そう言いながらもキーボードを打つ手は止まらない。
「ネット環境が整ってりゃあハックもできそうなんだけどな……こりゃあ骨が折れそうだ。なんちゅう厳重なプロテクトだ……よほど大事なものなんだろうな。しかも、解析に入るとウイルスまで侵入するようになってやがる……駆除駆除と……う～ん、神奈備命？　……何だそれ？　さっぱり分からん……ああっ、やっぱ駄目だ……護がいればなぁ……」
　徐々に落胆の色が宿る。
「……？　……サッパリです……」
「結局ＣＤを全部集めなきゃ駄目ってことだ。それにマザーシステムみたいな所で使わないと意味がない」
「……？」
「これの他にＣＤが必要ってことだ。一枚は無記入だけど……1/4、2/4ってなってるだろ？　他にも……最低二枚はあるってことだ。それがこの島にあるかどうかはわからないけど」
　解析は成功であって失敗。
「昔、護――俺の従兄弟が言ってたことなんだが『俺にかかれば断片化された情報を並べなおして複製するなんてたやすいぜっ！』ってな。マネして残りのＣＤの複製を作ろうとしたんだが失敗……というかとてもじゃないが、できるもんじゃない。うかつに偽物を使おうものならこの島ごとドッカン……

だ」
「爆発するですか……」
「それに全部集めないと完全解析不可能ときている。たとえ護でも無理だ。だからやっぱり他のＣＤを探す必要がある……最低内容……ＣＤの意味を理解するには3/4、4/4のＣＤが欲しいところだ」
おそらくＣＤの総数は北川の持つＣＤを入れて合計五枚か六枚になるのだろう。
だが、残りのＣＤがこの島に存在しているかどうかは定かではない。最悪の事態も考えられる。
例えばたった一枚だけでも敵が持っていたとしたら……
「というか、そう考えるのが自然……だよなぁ……」
ここに三枚あるということはあと何枚か参加者がもっていたとしても不思議じゃない。
だが、これが本当に大事なものだとしたら、すべてを参加者に渡すとは考えられない。
最低一枚は敵が持っていると考えるのが普通だ。
「とりあえず大事なＣＤってことが確信できただけでもいいか……」
複雑に暗号化されたＣＤの中身。
すべてを集めて調べればそれが分かるかもしれない。
（前途多難だけどな……一歩前進だ）
とりあえずＣＤを集めさえすれば解析可能なノートパソコンに変化しただけでもＯＫとしよう。
――ＣＤがおかあさんといっしょでなかったのは残念だけどな。
北川は強くそう思った。
「ジューン、おまたせーーっ！」
「どこ行ってたんだレミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチ」
尋問するように言葉を吐く。
「食品売り場で新鮮な食料を手に入れて来たのヨ！」

「おお、でかしたっ！　腹がへっては戦はできぬとはよく言ったものよ……ささ、近う寄れ。……で、ゲットした新鮮な食料とはっ⁉」
「もずくよもずく！　一パック五十八円のもずくが全部タダよ！　嬉しいねハッピーね、タダで買い物なんて奥さん買い物ジョーズね！　ほめてほめて！」
「もずく……」
　胃の中のもずく達がやんややんやと騒ぎ出す……
（まああ、慌てるなってもずく。もうすぐおまえ達の仲間が増えるからな、喜べ）
　なんとなく薄れゆく意識の中、北川はふと、そう思った。

451　導かぬ灯台

　荒波の打ち寄せる、島の北端。その絵に描いたように峻険な崖の上には、ただひとつ屹立する、白い灯台があった。
　いや、それを灯台と言っていいのかは疑問が残る。なぜならば、その灯台は何者も導かないからだ。
　一見すると確かに灯台なのだが、照明の代わりに回転するのはレーダーであり、発するのは誘導光ではなく、地対空ミサイルだ。強いて誰かを導くというのならば、死へと導くのみである。
　かつて高槻が――どの高槻かは解らないが、全員が自分だと思っている以上、オリジナル寄りの高槻のどれかが――最初にこの島に作った施設であり、組織の方針で現在は放棄されているはずの、この「導かぬ灯台」の地下管制室にて、三つの同じ声が言葉を交わしていた。
「そっちはどうだ？」
「随分高度があるから難儀したが……漸く捕捉したよ」
「……やるか？」
　三人の視線の先に、光点が一つ。

遥か上空にある、監視者たちの航空機を示すそれを中央に据えて、同じ顔が不気味にほくそえむ。
「今ならまだ、ＥＬＰＯＤはドックから出ていない可能性が高い。潜水艦で脱出するには、最適のチャンスではあるな」
「爺どもを撃ち落とし、俺達は脱出する。確かに悪くない。……だが島の連中をそのままにしていくのは、いささか気に喰わんな」
そんなものは些事だ、オリジナルの高槻ならばそう判断したかもしれない。しかし、強く醜い感情だけが、複製を繰り返すうちに際立っていったのだろう。三人は一様に頷いた。
「確かに、そもそもの元凶は、連中がロクに踊らなかったせいだからな」
「少なくとも里村を倒し、連中の誰よりも優秀である事を爺どもに見せつけねば、どうにも気が収まらんな」
「そして直後に爺どもすら打ち落とし、俺達が最も優秀である事を、組織の下っ端どもに見せつけてやれば、大手を振って帰れるというものだ」
明らかに反省の無さと自己顕示欲、虚栄心の強さを窺わせる発言だが、やはり全員が同時に頷く。
「俺達三人の能力はほぼ同等だ。恐らく里村に殺られたクズどもより、はるかに優れているだろう」
「そして無線を使えば、連携は完璧になる」
なんの根拠も無い予測と裏腹に、間違いなく有効であろう、マイクとヘッドホンが一体になった無線機を配る。
「更に言えば、俺にはこれがある」
一人が手に持ったそれは、水瀬秋子が持つものと同じレーダーであった。
今は、何も映っていない。ここにいる高槻達は、発信機を保持していないからだ。たとえ彼らが何者かの位置を知る事があっても、他人に位置を知られる事は無い。
「俺達の優位は、絶対だ」

「俺達は無敵だ」
「クズどもに死をッ！」
「爺どもに死をッ！」
「「死をッ！」」
導かぬ灯台の隠し扉を抜け再び地上に現れた三人は、自らの発言と能力に酔っていた。怪しく光る眼光は、まさしく狂者のそれであった。
神を信じず。
人を信じず。
ただ自らのみを信じて、三匹の狂犬は、その濁った瞳をぎらつかせていた。

452　朱の鳥が鳴く頃に　～少年～

「……ここかな？」
少年は蝉丸たちと別れたあと、彼らが来た方向を逆に辿り続けていた。もちろんその道筋が正確である保証などはどこにも無かったが、幸運にも少年はそれらしきものを見つけるに至った。
「しかし……、ねえ」
腕組みをして、足をちょこんと交差して、少年は思わず首をかしげてそう呟いた。地下の駆動音とやらは微妙にも聞こえてこなかったからだ。だが、そこに対しての好奇心は尽きない。確かにもし秘密基地のようなものがあるとすれば、そこは非常に妥当な気がしてならなかった。――埋まっているのだ、その建物のようなものは。
「直接地下に建造したのか。それにしたってこんな風に不自然に地面に出っ張っているというのは釈然としないな。……しかしこれなら、確かに秘密基地というのも意外と的を射ているかもしれない」
その場所は島の北部、スタート地点のホールから割と近い場所にあった。もちろん、その配置がどのような意味を持っていようかなど、少年には考え付くはずも無かった。ぼうっと立っていても仕方が無いので、少年はとりあえずその周辺を散策してみた。

すると幾分もしないうちに〝それ〟は見つかってしまった。
「……ここから入れそうだ。まさか、入り口だなんてことは無い……よね？」
少年は再び面食らったような表情をした。何回かまぶたをパチパチと開け閉めして、目の前にあるものが本物であることを確かめた。なんというか、それはまるで地下鉄の構内への入り口を模したかのような姿をしていた。ただ一点、不自然に床から土に埋まって、本来あるはずだったかもしれない空間を小さく小さく塞いでることを除いて。
「狭い……けど、ここしかないか」
諦めたような顔で少年は息を吐いた。光が届かない闇の向こう側に、何か希望があるというのなら、それは飛び込む価値があるというものだ。意を決して少年はまず地面にうつぶせになる。しゃがんだ程度ではとてもじゃないが入ることの出来ないほど隙間は低い。まず頭をそっと通し、続いて左肩を前に出してみる。——大丈夫、いけそうだ。一旦立ち上がって鞄を近くに置き捨てると、少年は本を片手にそこに侵入を始めた。
地面代わりに空間を埋め尽くした土の感触は、ひんやりとしてどこか気持ちよかった。もしここにいるのが他の誰かだったら、その不自然な暗闇と土に不気味な恐怖を覚えていたかもしれない。しかし少年にはそれがどこか懐かしく、安心を覚えるようなそんな不思議な光景に感じた。はいずったままの前進を続ける中で、段々と空間が広がっていることに気づいたのも束の間、閉ざされた視界は不意に一気に広がった。
「うっ、うわあああああ!!」
どしゃっ、と盛大な音を立てて、終端の土だまりとともに少年は落下した。多少高度が下がっていたとはいえ、まだ高さは十分にあった。なんとか受身は取れたが、いきなりのことに少年は驚いていた。高さは十分にあることを確認して恐る恐る立ち上が

るも、足元に落としていた本につまづいて膝をつくくらいに動揺が現れていた。
　そこもまた、闇に閉ざされた空間だった。外からの光はこれまでの細い通路に阻まれているし、中には光源らしきものが見当たらない。迂闊には動けなかった。少年はとりあえずその場に息を潜めた。随分と埃っぽい部屋だと一瞬思ったが、その原因は自分が落下してきたことだと気づいて嘆息した。ああ僕に梟の目があればなぁ、なんて思ってもしょうがないが、思わずにはどうもいられなかった。無駄に力ばかりあるよりは、そういうものの方が何かと役立つ気がした。
「……ハズレだったかな」
　少年はぼそっと呟く。呟いたところで何も変わらないことは重々分かっている。それでも、何らかの情報が手に入るかと少なからず期待していただけに、それなりに落胆した。
　無音の時間は続いた。どれだけの時間が経ったのかもう分からなくなっていた。規則的に続く自身の呼吸が余計に自分を惑わした。いつかもこんなことがあっただろうか。何も無いところで只管（ひたすら）に闇を見続けた、孤独だけを同居人にずっと座り込んでいた……そんな頃が。少年は感触を頼りに拾い上げた本をそっと頬に押し当てた。土と同じくらいには冷たかった。
　いつしか闇になれた目が、まるで突貫作業で開けられたかのごとき不自然な通路を見出した。目標を見つけた少年はすぐさま立ち上がり、そのままそこを前進した。屋根の低い通路だったが、進むごとに地面が微妙に高くなっていくことはすぐに分かった。そうして扉にぶち当たった。罠の可能性が頭をよぎったが、意を決して少年は扉に手をかけ、引いた。
ギ……ギイイイィィィィ……。
　さびた蝶番が耳障りな音を響かせる。密閉されたはずのここではありえない不自然な反響に、少年は肩を震わせた。扉の先には空間が広がっていた。岩

盤を直接くりぬいて出来たのか、それとも最初からそのような空洞があったのか、それは分からない。少年の震えは依然止まらない。それは潰えたかも知れなかった希望がひょっこりと顔を出したから。そう、少年の耳は遠くかすかに聞こえる駆動音を捉えていた。

453　朱の鳥が鳴く頃に　～郁未～

　数刻の休憩を経て再び郁未は歩き出した。見た目はひどくぼろぼろだが、歩けないほど体力気力が激減しているわけではなかった。ただ一つ心配があるとすれば、さっきの休憩でとうとう食料が尽きてしまったということだ。せめて歩けるうちに食料が見つかるといい、と彼女は思った。まだ辺りは暗い。時計なんて持っていないが、朝が始まっていないことははっきりしていた。少年は……どこまで行ってしまったんだろう？　先の見えない不安に心を震わせながら、長い長い森を彼女は黙々と歩き続けた。
　暗い視界が続く。だが、ある時ある場所で郁未はあるものに目を留めた――と言うより留めさせられた。鞄だ。食料が残っている可能性に胸を躍らせて郁未は鞄を漁ろうとする。そこに一瞬の逡巡。そして、すぐに分かった。
「……このにおい」
　あの懐かしい同居人の匂い。すぐさま辺りを見回すも、それに応える者はいない。無音だった。風の揺らぎも、木々のざわめきすらも無い。……郁未はゆっくりと、仄かな期待に緩んでしまった頬を下げていった。
「どこに、いるの」
　呟いて、俯く。郁未は途方に暮れていた。不可視の残滓に混じった懐かしさがどうしようもなく胸に堪えた。寂しさには慣れていたはずなのに、それは単なる思い込みだったのかも知れないと弱気になる。鞄に手をつけるのは止めた。多分彼は許してくれる

だろうけど、もしそうしたことがばれたら、私はひどく恥ずかしい思いをするに違いない、そう思ったから。せむかたなくなって不意に立ち上がる。なんとなく気持ちが落ち着いてしまって、これ以上歩く気にはなれなかった。手近な木に寄りかかって、遅い睡眠をとることにする。これからあと何回眠ることができるだろう、おぼろげにそんなことを想像してみたが何の感慨も浮かばなかった。眠りには予想より早く落ちた。

夢は、見なかった。

……まぶしい。なんだろう、これは？

薄く目を開くと光が差し込んでくる。そう、太陽がもう昇っている。二、三度瞬きを繰り返してその異常に気づく。光が遮られている。陽光の元に、黒い影を纏った誰かがいる。いや、その人は影になっていなくても、最初から黒を纏っていた。彼が私に気づく。そして振り向いて、まるで日常の繰り返しを演じるかのように――

「おはよう、郁未」

――朝焼けのさわやかさを、変わらないその微笑みに乗せて、少年は言った。淡く光を照り返す銀髪も、体を包む黒い衣装も、全身に紅い雫を散らして。

454　いろんな意味で負けるな御堂！

雑木林の小さなくぼみ……それは自然の塹壕であった。

「なんで……なんで入らないのよぉ……ふみゅ～ん」

大庭詠美（十一番）はそんな寝言を言いながら二匹の騎士と共にすやすやと眠っていた。それを眺めていた御堂（八十九番）は呆れ顔で彼女の握りしめているマガジンを取り上げた。

「ったく、世話が焼けるぜ……」

ボヤきながら紙箱に詰まった弾丸を手に取り、マガジンに手際よく装填した。
「ホレ、いっちょあがりだ」
弾を入れ終えたマガジンを、そっと詠美の手元へ戻した。
「う、ん……」
詠美はそんな事には気付かず、熟睡している。
今まで、ワガママばかりわめき散らしている詠美しか見た事が無かった御堂には、彼女の寝顔が新鮮に見えた。
「しっかし、こいつ……黙ってりゃあ結構可愛いじゃねぇか……」
つい、彼女の表情を凝視してしまう。ショートパンツからフトモモがちらりと見えて実に艶めかしい。意識して見た事が無かったが、胸もふくらんでいる。
「う……」
不覚にも欲望がムラムラと湧き上がってきた。無理もない。健康な男であったら誰もが感じる感情である。
しかし、御堂は動揺していた。そんなことは己のプライドが許さなかったのだ。
(落ち着け！　落ち着くんだ御堂！　たかが小娘に何を欲情してんだ⁉　変態か⁉)
しかし、心とは裏腹に、視線は無防備な少女へ注がれている。見れば見るほど魅力的な肢体だ。
(いかん！　雑念を払え！　雑念を……そうだ、作戦だ！　これからの作戦を考えるんだ！　まず、フトモモ……違う！　か、柏木とかいう女を探すんだ！　それから……岩山へ行って……あのスカした眼鏡の白衣野郎をぶっ潰してやる！　……って、柏木って何処にいるんだ？　……情報……まずは情報を得るのが先決だな！　情報、情報、情熱……情事……)
「んんっ……ふぅ……」
タイミング良く、詠美の口からセクシーな声が漏れる。

つぅ……
と、同時に御堂の鼻からも鼻血が滴る。
「いかん！　いかんいかんいかんいかんいかーーーん!!」
バチーン!!　バチーン！　バチーン！
野獣は己の頬に喝をいれ、ようやく落ち着いた。
彼は気付いていなかったが、彼の骨折は大声が出せるまでに癒えていた。
「ん……あっ、朝だぁ」
朝日を見据えて、詠美がつぶやく。
「やっと目醒ましやがったか……ったく、どれだけ俺が我慢したと思ってやがんだ」
「へ？　アンタ、何をガマンしたの？」
「し、知るか！　こっち見るな!!」
御堂は慌ててそっぽを向いた。
「何よぉ、変な奴ぅ～……あぁっ！　ちょっと見て見て！　いつの間にか弾が入ってる！」
彼女はそう言うと、御堂が弾丸を補充したマガジンをブンブン振りながらはしゃいだ。
「寝てる間に出来ちゃうなんて、あたしってやっぱり天才？　ホラホラァ、アンタも見習いなさいよっ！」
「……詠美、お前……ずっと寝てろ」
「ちょっと、それってどういう意味ぃ？」
「そのまんまの意味だ。ハァ……一瞬でも欲情した俺が馬鹿だったよ」
「浴場？　お風呂に入ったの？」
「もう知らん」
朝食は『サバの味噌煮』缶詰だ。
御堂はいつものナイフで二人十二匹分の缶の封を切る。
「ねぇ、毎回魚なんて、飽きない？」
「しょうがねぇだろ、これしか無えんだから」
我慢しろ、といった態度で御堂が答える。しかしワガママ詠美も食い下がる。
「あるじゃない、ホラ♪」
と、詠美の視線の先には……『白桃』通称・風邪

の特効薬である。
「これは昼の分だ、今はダメだ」
「ヤダ。今食べたいの！」
「これ食ったらお前の昼飯が無くなるんだぞ？　分かってんのか？」
「いいのっ！　こみパの女帝はそんな小さいことなんか気にもとめないのよ！」
「はいはい、分かった、分かりましたよ」
根負けした御堂は詠美の指示通り、桃缶を開けた。
「ほらよお姫様」
「うふふふふ……これよこれっ！」
嬉しそうに桃缶を眺める詠美。
しかし、そんな緩やかな朝の空気は一瞬にして凍りついた。異変にいち早く気付いたのはぴろとポテトであった。
「にゃにゃ？」
「ぴこぴこっ⁉」
動物達の野性の直感が危険だと知らせたのだ。
「‼」
続いて御堂も、迫り来るとてつもない威圧感を感じ取り、体全体に悪寒が走った。
「いっただきま――――」
「伏せろ！」
がばっ！
「ちょっ――もがっ⁉」
とっさに御堂は詠美の頭を押さえつけ、口を塞ぐ。
桃缶は地に落ち、土が果肉にへばり付く。
「あたしの桃缶……」
「シッ！　声を出すな！　……かなりヤバいのがおいでなすったぜ……」
「あたしの桃缶……」
ザッ！　ザッ！　ザッ！　ザッ！
そこへ現れたのは背中に愛娘の亡骸を背負った水瀬秋子（九十番）であった。

桃缶　死亡
【残り一つ】

455　大いなる誤解

ばさばさばさ……。
羽音を響かせ、白鳩が頭上を越えて行く。一見すると爽やかそうなイメージを感じさせ、明るさを増していく空をバックにして、鳩が飛び去っていく。詩子は鳩を見送りながら、しょぼつく目を瞬きし、ほぐしていた。
（……衰えたものね）
まるで手練の職人が嘆くように、首を振り振り考える。
（茜ある所に詩子ちゃんあり、と言われたあたしとした事が……）
ちなみに、実際言ったのは本人であって、誰かに言われたわけではない。
見晴台で発見したものの、詩子は茜に遭遇する事ができなかった。さんざん彷徨った挙句に、どうにか掴みかけた尻尾を離してしまっていたようだった。
（どうにも釈然としないわ……ひょっとして、あたしが茜を発見する能力って封印されちゃってるのかしら？）
しまいに自分を超能力者扱いしはじめる詩子だったが、それでも諦めずに探索を続けている。基本的に、茜が無意味に悪路を選ぶ可能性は低い。何かの障害でもない限り、てくてくと平地を歩いていくのが彼女らしい、そう判断して駆けずり回ったのだが……発見できなかった。
ある程度移動し、手ごろな木を発見しては登ってみる。周辺を見渡して見当をつけ、再度走る。
それを、もう何度繰り返しただろうか？
（ったく、猿じゃないんだから……）
十数本目になるであろう木に登りながら詩子はぼやく。
しかし、今回は当たりだった。その視界の中、遥

か遠くに求めるものを発見したのだ。木々の割れ目の更に先、わずかに姿を現した小さな建物――ステンドグラスの窓と、鐘がある――すなわち教会に吸い寄せられるように歩いていく、亜麻色の髪をした少女を。
教会で休憩でもするのだろうか？　今駆け出せば、きっと追いつけるはず。そう自分を励まして、詩子は木から飛び降りた。会ってそれからどうする、というビジョンは全くなかった。
それでも、会わなければ何も始まらないから。詩子は躊躇うことなく木々を抜け、颯爽と駆けて行った。
（茜ある所に詩子ちゃんあり、よ）

「はあー……」
祐一が盛大に溜息をついたのは、疲労のためもあるのだが、むしろ安心したためであった。いろいろ勝手な予測はしていたものの、繭の変身前（？）は祐一の予測を遥かに上回る、見事なまでの子供っぷりで手を焼かせた。
叫ぶ、泣く、うろつく、何を言ってるんだか意味不明。嬉しい時も悲しい時も、怒れる時もみゅーみゅー叫ぶのである。
そして久々に静かになったと思えば……寝てしまっていた。変身後（？）は変身前の記憶があったようなのだが、変身が解けると変身中の記憶は役に立たないのだろうか、祐一に懐くのさえ時間を要した。……変身中も懐いていた、という表現は相応しくなかったが。
（このクソガキが！）
無理矢理きのこを食わせようと試みて、ものの見事にがぶりと噛まれたあとを苦々しく見つめ、考える。
正直言って、今の状態は危険だ。危険を危険と認識しない人間が、安全でいられるわけがない。いく

ら噛まれようと、やはりきのこを食わせない事には、お互いの命に関わる。
（いっそ、今のうちに食わせちまうか……）
そんなことを考えていた祐一のシャツを、繭がぎゅっと掴んで引っ張る。
「みゅー……さみしいよ……」
夢でも見てるのだろうか、苦しそうに悲しそうに顔を歪める。
「繭……」
思わず怒りを解いて、繭の髪を整えてやる祐一。
「こーへー、七瀬のおねえちゃん……」
悪夢だろうか？　うなされている。見ていて心配になるほど、辛そうだ。反転して以来、保護者意識が芽生えたのか、祐一はうなされている繭の頭を撫でながら、じっと見守る。
「みゅー……」
「あー、もう、仕方ねえ奴だな」
シャツがのびのびになってきたが、諦めと共に許していた。こっちのほうが可愛げあるかもな、などと蹴られそうな感想を漏らし、ひとり苦笑する。
そして——好きにしろ、と思った瞬間を見計らうように。繭は叫び、掴んだ手をぐっと握りなおした。
「みゅーーーーー！」
「痛てててててて！　肉を掴むな！　肉を！」
すぱーん、と。頭をはたく音と、二人の絶叫が鳴り響く。
「こんのクソガキが！」
「みゅーーーーーーーーーーーーーーー!!」

ふ……と目を開ける。無意識のフィルタを透して、声が聞こえる。ばさばさと、藍色の空を白い何かが切り裂いていく。
（あれ……？）
なつみは、寝てしまっていた。ひとり身を潜め、いつ来るとも知れぬ仇を待ち続けるうちに緊張は萎

え、その身を沈めんばかりに溢れた疲労の毒沼に、どっぷりと身を沈めていたのだろう。
待ち伏せを狙ったために、発見されにくい場所に潜んでいたのは、この上なく幸いだった。この不注意な休息のおかげで、頭はまだ霞がかかったようだが、身体はスッキリしている。
彼女はぷるぷると首を振り、意識を強引に覚醒させた。
(そうだ、今の声。あれはなんだろう?)
トカレフを片手に、くるりと振り返ると。
泣き喚く少女が突進してきていた。
「みゅーーーーー！　やだよー！」
「待ちやがれクソガキ！」
年端も行かぬ少女を、怒りの表情で追いかける少年が、すぐ後から迫っていた。
まるで満員電車の中で痴漢扱いされた、冴えないサラリーマンとキレた女子中学生のような、ここで引いたらあとがないとでもいうような、切羽詰った印象を受ける二人。
「な⁉　ととと、止まりなさいっ！」
混乱したなつみは、事態を収めるために銃を構え、慌てて立ち上がるが——遅かった。
「うわわっ！　みゅー！」
「きゃあっ！」
驚いた少女は、そのままなつみに突っ込んでしまったのである。
「うお！」
踏みとどまった少年が、一番早く状況を理解した。
「済まん！　俺達は誰かを傷つけようって意志はないんだ！　とにかく、そのガキを捕まえてくれ！　そいつ自身の命に関わるんだ！　頼む！」
「え？　え？　ええ？」
混乱の中の命令は、全てに優先される場合が、まままある。なつみはもつれ合いながらも、どうにか少女を捕獲する事に成功した。
「はあー……」

再び安堵のためいきをつく祐一。彼はなつみの視線に気が付くと、武器を——見かけは水鉄砲なのだが——置いて両手を上げ、事ここにいたった概要を説明する。
「俺は相沢祐一。そいつは椎名繭。二人して女の子を探してるんだが、ちょっとした心の問題で、朝から激しくマラソンするはめになったんだ」
なつみは心の問題って何よ、と思ったが、みゅーみゅー喚いてもがく少女を見ると、なんとなく理解できたような気がした。理解の光を感じた祐一は、更に言葉を重ねる。
「鞄を開けて、きのこを……いや、薬みたいなもんなんだが……食わせてもいいか？」
「構わないけど……嫌がってるみたいじゃない。ホントにまともな薬？　じゃなくてきのこ？　なの？　それともいまの、笑うところ？」
「いや……これ以上ないくらい真剣だ。そんで全然まともじゃないんだが……ああくそ、説明すると長くなるが、やっぱり暴れて危険なんだ。だから絶対に、その手を離さないでいてくれるか？」
だから絶対に、その手をはなさないで。
組み合わせによっては、ちょっと艶のある美しい台詞だったが、少しも納得のいく説明にはなっていなかった。しかし彼の真摯な態度だけは、なつみをもってしても疑う余地がなく、ただうなずくことしか出来なかった。

規則正しい呼吸と共に、幾千本の木々を背後に流しただろう。詩子は目指す道のりの、半分以上を走破していた。自らの健脚に、ときどきちょっと惚れ惚れしてみたり、あともうひと頑張りね、と自分を励ましたりしながら、速度を上げようとしたその時。人の気配を感じて、立ち止まった。
（ちゃ、ちゃんと押さえててくれよ！）
（そんなに簡単に言わないでよ、暴れて大変なんだ

から！）
（みゅ、みゅーーー!!）
話す声からすると、どうやら三人だ。男一人に、女が二人。年上の女が、年下の女の子を押さえつけているらしい。
そして男の声は――祐一だろうか？
なんだか穏やかでない会話に眉をひそめ、耳を澄ます詩子。
（ジジー）
ファスナーの音。
ええ!?　と詩子は身を硬くする。
（だ、出すぞ！　しっかり押さえてろよ！）
（解ってるから！　早くやっちゃってよ！）
（やだ、いやだよ、みゅー！）
ちょ、ちょ、ちょっとちょっと！　何やってんのよ祐一!?
詩子は顔を赤らめて、柄にもなく動揺した。
（きのこを食わせるだけだ、暴れるんじゃねえってのー！）
（みゅー！　やだよ、おいしくないんだもん！）
（早くしてってば！）
き……きのこってアンタ……詩子の頭の中は、真っ白になっていった。いや若干キノコ模様だったが。
（口を開け！　突っ込んじまえば何とかなる！）
（う、うん、噛まれないように、気をつけて！）
（みゅ、みゅーーーー！）
……認めたくない。
確かに祐一は、とんでもなくロクデナシかもしれない。それでも、こんな事をする奴だとは思えなかった。思えなかったが――放ってはおけない。
決意を胸に、詩子はたっぷり助走をつけ、声のする方へ向かって跳躍し、叫んだ。
「この、ド外道がァーーーーーーーーーーー!!」
強烈無比な、詩子ちゃんキック。それは狙い違わず、祐一の後頭部に炸裂した。
――大いなる、誤解と共に。

「……迷惑、かけたわね」
後頭部にこさえた巨大なタンコブから盛大に湯気を出して、ずっぽりと地面に顔を埋めている祐一に向かい、怜悧な声が放たれる。少しだけ顔が赤いのだが、祐一以外には判別できないだろう。
なつみと詩子は、ぽかんと口を開けて放心していた。
『え、えーと……』
一瞬、静寂が一帯を支配する。
そんな中でむくり、とゾンビのように祐一は起き上がり、怒りに燃える目で詩子を睨みつける。そして後頭部から、しゅうしゅうと湯気を立てたまま、重々しく口を開く。
「……で、どういう了見なんだ？」
その声を聞き、跳ねるように詩子は答える。
「そ、そうよ！　茜よ！　今なら追いつくわ！　走るのよ！」
追及を避けるためだろうか、必要以上に慌てて、詩子はまくしたてた。
「な、なに？」
「なんですって!?」
驚く二人を制して、詩子が畳み掛ける。
「いいから！　早く！　とにかく走るのよ！」
詩子が真っ先に駆け出し、それを追うように祐一と繭が走る。少し離れて、なつみも駆け出した。釣られるように遅れて駆け出したその一人が、三人と相反する意志を暗く胸に秘めているなどと考える者は、一人として存在しなかった。
何故ならば。本人ですら、その名に仇を重ねる事はなかったのだから。

456　幕間

「(・∀・)……」
闘いは接近しての乱打戦へと移った。私は蝉丸の一挙手一投足から目を離すことが出来ないでいた。

そう、なんというか……あまりこの島っぽくない戦いに私は浸っていた。なんとなくこういうノリは性に合うのだ。

「(･∀･)……」

……おかしい。なにかおかしい、と言うか強すぎ!? なんで蝉丸の相手してあんなに優位っぽいの？ うちのおじいちゃんと同じくらいの歳に見えるのに。ぜんぜん、ぜんぜん……。こんなに違うものなのかなぁ……。蝉丸すっごく強いのに、なんだかちょっと押され気味。御堂さんや光岡さんと戦ったときみたいだ……。やっぱり剣を使った戦いのほうが得意なのかな、蝉丸……？

　月代は無言で騒ぎ立てる。

　ふと、両腕にずっしり重い感触を残す日本刀に目を移す。長くて、それでいて切れ味が良さそう。思わず鞘から刃を出してみる。ぎらりと光を照り返す。綺麗……。だけどそれはあまりにも危うすぎる美しさで……。剣を握る。目の前に闘う者が二人いる。無防備な背中が見える。剣を鞘から抜く。重い、でも両手で抱えればどうにかなる。重さに任せてそれを振り下ろす。剣は見事にその人の背中を切り裂く。一体それは蝉丸か老人かは分からぬままに……

　――ハッ？ い、意識があっちの世界に逝ってたみたい……。ブルブルブルブル！ 頭を思いっきり振った。一瞬取り付かれた思考は、ずいぶんと物騒なものだった。……正直、恐かった。

　闘いに目を戻す。今目にしている光景が、不思議とやたら親しげに感じる。殴り合いなんて野蛮だと思う。でも、これはそんなところの話じゃなくて……。私を、何故か熱くする。生臭いはずの血の匂いが嫌じゃない。単なる命の奪い合いでない、高い次元で互いの技と力をかけて凌ぎあう、その闘いの為に為される闘いの純粋さに、私は心を奪われていた。闘いの中に身を置く者の喜びみたいなものが、その波動が、私にも伝わってきているような気がした。

私の目に映った彼らの表情は、苦しそうでもあり、恐そうでもあり、だが同時に満足気で、そして輝いて見えた。

457　天を衝く剛拳

眼球を突き刺す陽光が闘いに華を添えていた。その凝縮された輝きは、まさに俺たちのこの瞬間の姿そのものだったはずだ。たとえ一瞬だとしても、空を駆け抜ける一筋の流れ星のように。

「フンッッ！」

鋭い呼気とともに繰り出された老人の正拳を外手刀で受け流す。だが次の瞬間、老人は反対の腕で掌底突きを放つ。俺の顎を狙って突き上げだ。掠っただけでも脳に衝撃が来かねない。俺は寸前に交差法気味にしゃがみ込む。体勢は悪くない。重心をより低く落とし、そこから老人の腹を目掛けてそのまま乱打を見舞う。一発……二発……三発。バシバシバシイイィッッ！　老人の強靭な腹筋を痛めつける。だが攻撃されっぱなしの老人でもなかった。バスンッッ!!　しゃがみこんで小さくなっていた俺の体を、老人の蹴りが一気に吹き飛ばす。今度は老人も追撃に余念がない。そこから俺に向けてすかさず後ろ蹴りを出す。俺にも痛がっている余裕は無い。一時的な無呼吸運動。すぐにヘッドスプリングで後方に跳びずさり、そこから大振りの回し蹴りを老人のがら空きの背中に放つ。

当たった、だがまた点をずらされる。頚椎を狙ったはずがうまくいかなかった。これでは見た目どおりのダメージは期待できないだろう。そこから再びの接近。老人の体躯はなるほど巨体だが、その分懐も大きい。要するに常人より入りやすいのだ、そこに。もっとも老人とてただの人間ではない。広い分という訳でもないだろうが、彼の間合い自体も広い。研ぎ澄まされたセンサーが俺の攻撃に即座に反応する。後の先を取る事が出来る範囲がとにかく広い。

だからそれを無効化するためにはひたすら接近するより他に無い。
一分が永遠に思えるほど長く感じるなんてことは戦闘において珍しくない。どれだけの数の拳打掌打を叩き込んだのか。打っても打っても老人は堪えない。まさに化け物だ。特異能力を使われたわけではないが、まさに強化兵顔負けの戦闘能力だ。本当の有効打に成り得そうだったものは全て防ぐか避けられ、常にカウンターを狙っている。この次元の闘い、一発の有効打が致命傷になる。手数を並べる戦法は所詮虚実の虚に過ぎなかった。
間合いに入ると同時に、左フックを仕掛ける。フッ！　という鋭い呼気が老人の口から漏れる。奴は俺の左フックに左の肘で合わせてきた。老人の振りの方が速い！　拳を粉砕される恐怖に今度は俺が自ら点をずらす。だが老人はその動きすら利用してそこから即座に横蹴りへとつなぐ。
「くあっ⁉」
それは俺の顎にヒットした。結構な勢いで吹き飛ばされる！　だが俺もただでは倒れられない。衝撃の瞬間に老人の脛を爪先で打った。
「ぐっ⁉」
盛大な音を立てて地に叩き伏せられる。それを尻目に老人の姿を見つめる。予想通り、痛みだけは十分だったようだと、一瞬の空中で俺は思った。攻撃に集中していたせいで受身を取る余裕も無く、あえなく俺は土の地面に擦り付けられた。凄まじい摩擦が生じる。土が焼け、皮膚もまた焼ける。……それはどこか懐かしい、戦場の匂い。
俺は立ち上がる。そしてもう何度目か――回数など忘れた――になるが、再び構えを取り直す。俺の本気の証明、前羽の構え。今更、守備一辺倒なことを狙いにしているのでは無い。これは溜めだ。全力の一撃への布石だ。一方、老人は武蔵坊弁慶よろしく仁王立ちをしている。気が高まっていく。渾身の一撃が次の時に放たれる。そんなことが予感として

分かった。研ぎ澄まされていく感覚、強化兵の業として、日中ではその力を十二分に発揮できない。それなのに自分の何かがさらに高まっていく。精神か、それとも肉体か。武人の血が仙命樹のそれをも凌駕したというのか？　俺は笑う。誰にも分からないほどに、微かに笑う。

沈黙。

「でりゃあああぁぁぁぁ!!」
老人が飛んだ！　必殺の飛び蹴り、最初の時に放たれたそれとは勢いも気迫も威力も段違いだ。まるで大地を二つに割りかねない、それほどまでの威圧。避ける？　そんなことは考えない。それは所詮その場凌ぎの案だ。今この瞬間に俺が取るべき手段、それは——。
蝉丸は完全な左半身になり、全ての関節に溜めを作った。——奇しくも、先の源四郎と同じように。
そこにあるのは『全力の一撃には全力の一撃を以って応えるのみ！』というシンプルな思考だけ。
空を貫く源四郎の裂脚。水面のごとく静かにある蝉丸。二つの影が交差する。時間がゆっくりと流れ出す。それはまるで死に際の走馬灯。差し出された前腕を削りぬくかのように、角度を持った源四郎の蹴り足が空を滑る。瞬間、カッと蝉丸の目が見開く。全身のばねが稼動し、源四郎の蹴りを相殺するべく、稲妻のごとき超高速の右の拳が炸裂する。

最後の瞬間、残された影は唯一つ。雄雄しく振りあがったその左腕は、まさしく天を衝いていた。

458　企む三人彷徨う二人

例えば、鳥のように。
空から大地を見下ろしたなら、大きな三角形をつくるように、等速で歩く三人組を見ることができる

だろう。高槻06がレーダーで位置確認をし、機関銃で援護。01が斜め前を行き、02が更に先行する。基本的能力に大差がないだけに、持ち物だけが彼らの位置関係を決定する要因となった。もし同じ装備だったなら、協力体制すら危うかったかもしれない。環境の違いによる装備差が、幸運にも——他の参加者には不運なのだが——今の状態を作り上げているのだった。

《マスターモールド、ベレッタ、聞こえるか？……レーダー範囲内に二人入ったぞ》

結局彼らは各人の得物の社名で呼び合うことにした。他に見分けようはないからだ。

《ステアー、名前はわかるか？》

高槻06——レーダーを持っていた高槻だが、今はステアーと呼ばれる——は今まで参加者の動向を管理していたため、レーダーに映る数字と実際の名前の関連を、ほぼ把握している。

《当然だ。おっと……これは懐かしいな、名倉由依だぞ。それにもう一人は……なんと、巳間晴香だ》

巳間晴香。

名倉由依よりも高槻達にとっては脅威であり、かつ面白味のある相手。そして三人の高槻達の一人は既に遭遇し、脅し、騙した相手である。

いやらしい笑みを浮かべて、マスターモールドが提案する。

《ステアー、ベレッタ、俺に考えがある。実はだな……》

例えば、鳥のように。

空から大地を見下ろしたなら、鰐の顎に自ら迷い込む、小魚のような二人組を見ることができるだろう。

由依は晴香の背中を見つめて、重い足を引き摺るように歩いていた。

耕一さんや七瀬さん、初音ちゃん達と別れた当初

は、いつもの晴香さんだった。
『由依、しばらく会わないうちに歩くの速くなったねえ』
『そうですかー？　えへへ、晴香さんに誉められるなんて、ちょっと嬉しいですねー』
『貧乳なんだから、それくらい速くて当然だけどね』
　いつものやりとり。
『貧乳貧乳言わないで下さい！　これでも少しは……』
『視認できないうちは、いくら大きくなっても貧乳なのよ？』
『ひ、酷いです……』
　オチまでいつも通りだけど。この島に来て、やっと安心して楽しく話せる相手だった。
　――けれど。
　あの放送以来、晴香さんは人が変わってしまったように寡黙になった。

　……神岸あかりさん。
　それは高槻によって人質にとられたという、晴香さんの仲間。皆で相談し、人質作戦に何らかの偽装があると結論したのだが……このタイミングでの死亡発表は、結論を揺るがすものとなった。
　その後、高槻の放逐が告げられた。
　晴香さんのもう一人の仲間、保科智子さん。彼女も本当に捕らえられていたのならば、高槻の失脚によって、釈放されるのだろうか？　それとも、高槻の命令は生きたままなのか？
　わからない。
　何も、わからない。
　今は暗い空。
　やがては朝の明るさに包まれるだろうけれど。
　私たちのこころは。
　いつまでも、闇の中を彷徨うままだった。

歓喜の放送だった。これは間違いなく勝利の放送だった。七瀬彰はその瞬間、握り拳を高く天に突き上げたくなる衝動さえ感じた。まだ完全勝利というわけではない、終焉という歓喜の言葉を叫ぶにはまだ早すぎる。それでもこの部分的勝利は彰に雄叫びをあげさせるほどの強大な意味を持っていた。

爆弾は解除したんじゃない。解除させられたんだ。彰は自然に口元を歪めて嘲笑う。爆弾がなくなった今、脱出をしようと思えば簡単に出来る。最早ゲームはゲームとして機能しない筈だ。彰は走る。こうなれば、あとは狂人となってしまってもうまともには戻れない人間から他の参加者を守ればいいだけだ。由綺や冬弥、初音、そしてありとあらゆる参加者たちをそういった狂気の脅威から守りきるのだ。自分には幸いに強力な武器がある。彰は走る。走る。走る。

ひとつ気になったことがある。先の放送の中で、高槻がゲームの一参加者に堕ちた、とあった。彰が疑問に思っているのは勿論彼が参加者に堕ちた事ではなく、彼が生きている事の方だった。

確かに自分は彼を殺した筈だ。このサブマシンガンで原型も無いほどにその顔を潰しきった筈だった。あれは一種の影武者のようなものだったのだろうか？　それともあの銃弾で奴は死ななかったのか？　判らない。ここまでの情報では判別の仕様が無い。彰は走る。狂人となった者以外はこのゲームを続ける意志はないだろうが、高槻だけは別だ。殺人を厭わない外道である高槻を止めることが今の自分にとっての一番の問題だ。彰は走る。走る。走る。

痛む足を引きずりながら森を抜ける。少し移動するのにもひどく時間を食ってしまう。痛覚が徐々に戻ってきていて、神経に捻じ込まれた痛みが精神まで啄ばむ。知り合いは何処だ。脅えている参加者は

何処だ。もう戦わなくていいのだ。彰は呟きながら走る。意識が朦朧としているような気がする。
　眼前には海が広がっていて、朝陽が融けるほどに眩しくて、それでも彰は走るのを止めない。森の外側を駆ける。駆ける。駆ける。

　初音は何処にいるのだろう、と思う。
　恐らくこのゲームに参加した人間の中で最年少で、一番力の無い少女。そして、この島で一番長く自分と共に過ごした少女。震えていた自分に勇気を与え、泣いていた自分を慰めてくれた少女。
　出会ったばかりの素性も知らないやつのために、自分のために泣いてくれた少女なのだ。
　あの優しい子を死なせるわけにはいかなかった。

　朝陽が眩しくて、朝陽が眩しくて、――朝日が眩しすぎて、立ち眩みに似た昂揚に彰の身体が沈む。
　彰の影が陽に融ける。水平線の彼方から昇る白い光が、朝の訪れを告げると同時に、何かの終わりを告げているように彰は感じる。足を止めることなく彰は走る。走る。走る。
　この光を浴びながら彰は感じる。
　自分は今、紛れも無い現実の中にいる。現実とは何かといえばただの言葉で、自分はいつもそんな言葉の幻の中に、陽炎のように立っていたのだと思う。現実なんてものを無理矢理認識しようとした瞬間に陽炎は消えて、そこには涙の一粒も残らない。残るのは日常の残滓だけだ。日常の残滓が彰の手のひらの上で暴れている。
　自分にとっての日常とは。
　決まっている。美咲さん、はるか、冬弥、由綺。彼らと過ごした時間こそが自分にとっての日常だった。彼らと過ごしていた大学生活は波乱こそ多くは無かったけれども、安らぎだけはあったと思う。
　日常を失うというのがどういうことか、彰は考える。それはすごく悲しいことだった。

日常はふたつの要素から成り立っている。それは今と未来。今こうある日常が、未来もきっとこうやって続いていくだろうという展望。それこそが日常を優しくて暖かなものにしていた。
　この先、自分の家に戻れたとしても、これまでの日常は戻らない。美咲さんもはるかもいないのだ。どんな日常がこれから続いていくのか。想像も出来ないいしたくもない。続かない物語に残るのは寂寥と思い出。思い出は血の色に染まり寂寥は赤い思い出を凍えさせていく。
　例えばあの柏木初音の日常だって実は既に壊されきっているかもしれない。自分や柏木耕一や彼女の姉妹が初音を守りきったとして、彼女が未来へと続いていた筈の日常に戻れるわけが無い。
　どうすればいいのだろう、と思う。
　彰は思考を停止させる。今は何も考えるな。走れ。走って初音を危険から救い出せ。救い出してからそういうことは考えろ。まだ自分たちは勝利したわけじゃない。走れ。この曖昧模糊とした世界で自分の身体を走る電撃のような痛みだけがリアルだ。思考は思考でしかない。ずっと後でも思考は出来るのだ。
デイパックの中から最後のペットボトルを取り出し、少し残った水をごくごくと飲み干す。喉が多少潤うが、しかし頭のふらつきは依然治らない。やはり根本的に血が足りないのだろう。水では血の代わりにはならない。ちゃんとした食事を摂らなければ。けれど止まっている時間はない。初音を見つけて保護した後に食事をすればいい。ボトルを投げ捨て、彰が再び走り出そうと右足を踏み出したそのとき、不思議な音が聞こえてきた。

「――っ♪」

　声。歌声だと思う。
　彰は顔を上げる。ふらつく視界の先には何も見えない、だが確かに男の声が聞こえた。歌声のように

も聞こえたが定かではない、彰は声が聞こえたと思われる方向に走る、森の方か？
彰は走り、茂みの中でざわつく音が聞こえたのを確認すると立ち止まり、息を殺してサブマシンガンを握り締める。二秒の間をおいて、音を立てた彼らの姿が目に入った。
少女の顔が最初に茂みから現れ、次にその後ろから、自分に似た顔立ちの、学生服の少年が現れた。
時間が停止する。
少年は彰の顔を見つめて固まり、少女は彰の手のサブマシンガンを見つめて固まり、そして彰は全然違うことに悩んで固まっていた。
名前が浮かばない。
子供の頃はしょっちゅう一緒に遊んでいたが、歳を重ねるにつれて遊ぶことが少なくなった従兄弟。顔立ちがすごく似ていたため、周りからは本当の兄弟の様に扱われた昔のこと。自分は末っ子だったので弟が出来たと喜んでこいつを連れまわしたものだ。
名前だけが浮かばない。頭を打ちすぎたせいで自分の脳味噌の中の思い出を司る中枢が全部吹っ飛んだんじゃないかと思う。可愛がってた弟分だろ七瀬彰。名前を忘れるなんてひどいぞ。
勿論、先に思い出してくれたのは、自分に比べれば若干はマシな顔色をしていたあっちだった。
「彰、兄ちゃん？」
その声で思い出した。陰気っぽいくせに何処か甘えた感じの声。ああ、そうだ。
「祐介」
自分の脳味噌はまだイカれきってはいないらしい。

460　てのひらをたいように

朝陽が木々の間から差し込んできて、天野美汐は少しけだるそうな顔で空を見上げる。雲は少ないくせにやけに白い空で、自分の住んでいる町で一番綺麗なあの場所に少しだけ似た、儚い空色だと思う。

「大丈夫ですか？　長瀬さん」
　声を掛ける。言うまでも無いけれど、身体を起こして小さく伸びをする学生服の少年――長瀬祐介に向けての言葉だった。
　一時間ほどの仮眠を摂った後でも祐介の顔色はまだ優れず、疲れが肌の色に顕れている。これまでこの島で極度の緊張に耐えてきて、さらに美汐の疑心暗鬼から来た行動によって、彼は自殺未遂にまで追い込まれてしまっていた。そのときの怪我は、後一歩で彼を死に至らせるほどだった。体力の損耗に加えて首の怪我。こんな狂った状況ならばこれだけで死に至るには充分だったかもしれない。観月マナという少女がいなければ本当に危なかっただろう。
　しかし祐介は、その微妙な顔色でにこりと笑う。美汐は小さく息を吐く。完調とまでは言い難いが、それでも笑顔に余裕が見える。眠ったお陰で多少体力も戻ったのだろう。それなりに精気が戻った笑顔で、美汐は少しだけ安心する。
「うん。――ごめんね、少し休ませて貰っちゃった」
　済まなそうに祐介はそう言う。彼の後ろから白く差す太陽の光に目が眩む。美汐は小さく息を吐くと微笑んで「いえ」と応える。そう言ってもなお申し訳なさそうな顔を崩さないまま祐介は呟く、
「――天野さんは大丈夫なの？　休まなくて」
　頷く。疲れていないと言っては嘘になるが、それでも倒れるほどではない。実のところ先程まで警戒しつつも半分寝ていたような状態だった。ほんの僅かなりとも体力は回復したように思う。それにこれ以上彼の足手まといになりたくはなかった。
　天野美汐はこの島に来てから、殆ど笑っていなかったように思う。笑うことがつらくて、笑ってしまったら何かを失ってしまうような、そんな錯覚さえ覚えていた。口元だけで微笑むことはあった。けれどそれ以上に笑うことは出来なかった。
　けれど、美汐は今、確かに笑った。

自分が余裕のある笑顔を見せれば、長瀬祐介が少し は安心してくれるのではないかと思ったからだ。上手く笑えたかは判らないけれども、
「長瀬さん、大丈夫なら行きましょうか？　私は大丈夫ですから。ちょうど良い頃合いですし」
長瀬祐介の表情から、自分が多少はマシに笑えたのだと判って、未汐は少しだけ嬉しくなる。
「うん。――そうだね、何処に行けばいいかも判らないけど……取り敢えず色々探してみよう。僕らに出来ることを考えながらさ」
先に立ち上がった長瀬祐介が差し出した手を取って、天野美汐も立ち上がる。そのままふたりは手を繋ぎ、ゆっくりと歩き出す。

美汐はふと、自分の少し前を歩く祐介から何か呟き声が漏れていることに気づく。何だろう。耳を澄ます。理解。殆ど聴こえないような声ではあるが、長瀬祐介は何やら歌を口ずさんでいるのだ。
「長瀬、さん？」
「――……ッ？　な、なに？」
「歌、唄ってました？」
途端に顔を真っ赤にする。間違いない。長瀬祐介は何やら歌を口ずさんでいたのだ。未汐は少しだけおかしくなる。
「……。うん。ほ、ほら、歌を唄ってるとさ、少しだけ元気が出るかな、と思ってさ」
しどろもどろに説明をする祐介。何故かすごく楽しい気持ちになったので、未汐は更に追及することにする。
「何の歌、唄ってたんですか？」
祐介は口ごもる。何だかやけに恥ずかしそうだった。自分は最近の歌の流行にはあまり詳しくないのだが、それほど恥ずかしがるような歌が最近は多いのだろうか。そういえば最近、コンビニかどこかで佐賀について熱く唄っている歌を聞いたが、もしかしたらその類なのかも。そんな風に美汐が考えてな

がら彼の顔を覗き込むと、祐介は、
覚悟を決めたような顔をしていた。
イヤな予感がした。

「てーのひらをたいようにー♪　透かしてみーれば
ー♪　真ーっ赤に燃えー立つー♪　僕の血潮ー♪」

大声だった。言うほどの大声ではないけれど、今までの祐介の大人しげな様子からは想像も出来ない大きな声だった。顔を真っ赤にして、少し音の外れたメロディが森の中を流れた。彼が歌ったのは小学生の頃自分も唄ったことのある歌で、少しだけ懐かしくなる。そして、こんな懐かしい歌を大声で唄って、恥ずかしさを紛らわそうとした祐介のことが少しおかしかった。

くすりと笑うと、祐介は「やっちまった」という他には言いがたい複雑な顔をして、次の瞬間には顔ばかりでなく耳や手まで真っ赤にする。

「――はははは、早く行こうっ、この歌を聴いて誰かやってくるかもしれないからっ」

思う。ああ、この人はやっぱりすごくいい人だ。

美汐は祐介の手をぎゅっと握り、早足で歩く祐介の後ろについていく。祐介が少し間を空けて握り返してきて、美汐は少しだけ身体と心が温くなる。

(そういえば、血潮と美汐は語感的に似ています)

――ふと美汐は、そんなくだらない事を考えた。こんなくだらないことを考えるべきではなかった。だが考えてしまっては遅い。妄想の雷が頭を走る。

僕のみしおー。

倒れそうになる。何を考えているんだろう私は。

馬鹿。私は馬鹿だ。必死になってどこかおかしくなっている自分の脳味噌を心底から馬鹿にしても、馬鹿な妄想は馬鹿なだけに止まらない。この妄想は最早特急列車だった。新幹線だった。大阪―東京間をひた走る新幹線だった。確か停車駅は三つだったと

思う。京都、名古屋、新横浜だ。一番近い京都にすらまだ着かない。
僕の、美汐？　天野さん、何を……っ
長瀬さんの美汐。
（――京都はまだですかっ）
そうですよ、私は長瀬さんの美汐です。長瀬さんがもう好きにしちゃっていい天野美汐です。
（――京都はまだですかっっ）
天野さん……い、良いの？　僕なんかに好きにされちゃって。僕はこう見えても変態プレイばっかりする駄目人間なんだよ？　変なところに突っ込んだり変な服を着せたり痛くて熱いことをするかもしれないよ？
（――京都はまだですかっっっ！）
どんな変態プレイでもいいです。私は何でも受け入れますから。だけど、一つだけお願い。今は、美汐って呼んでください、……祐介さんっ。
判ったよ……美汐ちゃん！
（――京都はっっっっ!!）
祐介さんっ、その、でも、出来たら、優しく、お願いします……私、初めてだから……私、胸小さいし、それに、可愛くないから、その、そそられないかも、しれないですけど……っ
（――止めてっっ！　止めてっっっ!!）
そんなことないよ。すごく可愛いしすごく魅力的な胸だと思うよ。……ふふ、めちゃくちゃに可愛がってあげるからね？　腰を悪くしちゃうくらいずったぼろのぼろぼろにね？
あう……っ
冗談だよ。優しく、優しく、痛くないようにしてあげるからね？　ふふ、ふふふ……
――京都着。
私はアホかもしれない。
自分でも判るくらい顔が真っ赤になっていた。どうしてこの、命を守ることすら危ない場所でこんな

馬鹿げた妄想が出来るのだ。気づくと祐介の手を強く強く握り締めていたようで、何事かと思った祐介が振り返っている。
「どうしたの？」
「なんでもないです」
　なんでもないんです。もう京都に着いたんです。
美汐は早足で祐介の前に出る。もうこれ以上このアホ面を長瀬祐介に見られたくなかった。

　自分って意外とアホなんだなあと思う。鼻歌を聴かれたのが恥ずかしかったからって、反対に大声で唄ってどうするんだ。逆に恥ずかしいじゃないか。長瀬祐介は自分の駄目さ加減に呆れながら、未だに顔に熱を覚えたまま歩いていた。
　森をもうすぐ抜ける。抜けた先には海が見えるだろう。朝陽が昇り始めた水平線はどんな美しさなのだろう、と考えて恥ずかしさを紛らわせようと思う。
　勿論考えることは他にもある。
　体内の爆弾は解除されて爆発しなくなった。そして代わりにあの高槻という男が野に放たれ、マーダーとして自分の命を奪おうとする。先ほど、確かにそのように放送された。思う。これはけして殺し合いを加速させるためには有効に働かない放送だと思った。この放送を聞いた参加者は、これ以上戦おうとするのだろうか？　――するのだろうか。自分には判らない。常識で考えればＮＯだ。だが、――どうなのだろうか。もうこの放送を聞く前に狂い切ってしまった人がいるのだろうか。
　どうすればいいのだろうか、と祐介は思う。
先に美汐と取り決めをした。誰か、殺し合いに狂っていない人を見つけたら、自分たちに交戦の意志はないことを告げて話を聞こう。これからどうすべきか、どうやって逃げるか。自分たちは所詮ガキで、まともな案を立てるにはあまりに知恵が足りない。
誰か、知恵のある、頭の良い人を、
　そこで異変に気づく。

先から自分の手を引いて前を歩いていた天野美汐の足が止まる。どうしたの、という声を出す前に、自分たちのすぐ傍に他人の気配が近づいていたことに気づく。気配が姿を現す。祐介の目にも入る。無機質な色のサブマシンガン、血に汚れた顔と服、鼻を突く硝煙と鉄の匂い。

誰が見てもやばい、と思う外見をした男だった。少なくとも自分の前に立つ天野未汐は、目の前の男が血に狂った殺人鬼に違いないだろうと考えていると思う。手を通して震えが伝わってくる。死への恐怖だ。こんなにあっさり死ぬことになるなんて、想像も出来なかった。そんな風なことを考えているのかもしれない。

けれど、自分は違った。

祐介は目の前の男の顔に釘付けになっている。知り合いの顔だった。すべての知り合いが死に尽くした筈のこの島で、今自分の目の前には紛れも無い知った顔がある。呆然とした顔だった。あちらも自分の顔を見て戸惑っているのだと思う。

「彰、兄ちゃん？」

すぐに名前を思い出すことが出来た。自分と似た作りの顔立ち。血で汚れてはいるけれど、黒目の大きな優しい顔。読書家で、見かけによらず変な知識ばっかり持っていた、大好きだった従兄弟。

「祐介」

すごく、懐かしい声がした。

461　騙し騙されて

真実がどうなっているのか。いくら考えたって、判る筈はなかったけれど。それでも、あたしの頭は、捕われた二人の仲間のことで一杯だった。

皆で相談した結果、人質作戦そのものに疑念を抱き、そして反攻を試みるために、あたしは仲間を探した。けれど、見つかった仲間は由依ひとり。そして、あかりは殺されてしまった。もし次の放送で智

子の名が流れたならば、あたしの決断は誤りだったと認めざるを得ない。そうだ。あかりを殺したのは、高槻からの警告だったのかもしれない。もちろん人質が偽装で、あかりはどこかで他の誰かに殺された可能性もあるが、どうしても高槻の顔が脳裏から離れない。

現在、高槻は何らかの理由で放逐されている。

……智子はどうなったのだろう？　放送では、智子のことには一切触れていなかった。捕われていること自体知らないのかもしれないし、やはり全ては偽装であり、捕われてなどいなかったのかもしれない。

少しだけ由依と相談したが、やはり考えたのは同じようなことで、結論も同じようなものだった。

――わからない。

答えは、高槻だけが知っている。

大海原のように波立つ草原の中で、あたし達は高槻を発見した。手ごろな岩にだらしなく腰掛け、拳銃片手にこちらを眺めている。

いつものように、唇の端を片方だけ引き上げて。

あたし達が来るのを知っていたかのように、高槻は立っていた。

「おっと、そこまでだあ」

高槻が拳銃を構えて、制止する。

この距離では、抵抗のしようがない。あたし達は素直に停止した。

あたしの武器は刀、由依はダイナマイト。近距離まで密着するか、こちらが先に発見するかしない限りは、勝ち目のない組み合わせだった。

「二人揃って散歩とは、随分余裕だな？」

「そういうアンタは、捨てられ落ちぶれ余裕の欠片もないようね」

ふざけた台詞に辛辣な言葉を返したが、高槻はどこ吹く風といった表情だ。

「ハハハ！　相変わらず気の強い、いい女だなC―

219ッ!?」
「その呼び方やめなさい！　あたしには巳間晴香という名前があるわ！」
　そう言って一歩前に――斜め前に、出る。
　由依が半ば隠れるように、怒りのジェスチャーで大袈裟に手を広げる。
（晴香さん……）
　うしろで由依がカチリとライターをつけ、声をかける。ダイナマイトの着火用に、空き家から持ち出したものだ。
（……届かないけど、目くらましくらいにはなると思います……）
　あたしは高槻に判らない程度に頷き、小声で返す。
（……智子の行方が知りたいわ。それまで待ってて）
（……はい）
　大丈夫、うまく隠せている。高槻は気が付かない。だから相変わらず得意げな表情のまま、にやけた口を開く。
「ま、そう怒るな。お前にいい情報をくれてやろうと思って待ってたんだ」
「いい情報？」
「そうだ、気になっているんだろう？」
「……何のことよ」
　身を硬くして睨みつけるあたしの視線に、おどけた表情で高槻が返す。
「保科智子な、次の放送前に死ぬぞ」
「!?」
　来た。この話題を待っていた。
　演技だけではなく、素で何も口に出せなかったが、いい呼び水になったらしく、高槻は調子にのって続ける。
「今の俺はこのザマだが、俺の命令自体はまだ生きている。神岸あかりを殺したのも、俺じゃあない。俺の命令を受けた、愚直なまでに真面目な部下が、眉一つ動かさずに殺したのさ！」

その前に美味しくいただいたのは、この俺だがな、といやらしく笑う。
「た……高槻っ！」
「ハハハハハ！　悔しいか!?　悔しいだろうッ!?
だが俺も悔しいッ！　あとの楽しみに取っておいた保科を、食わずにいたのが悔しいぞッ!!」
小躍りして、狂ったように笑う高槻。
いや、こいつが狂っているのは元からだ。
（……いくわよ、由依）
（……はい）
「……高槻！」
「どうした、は・る・か？」
挑発のためか、わざと名前を強調して呼ぶ。
だが、もう気にはならない。殺すだけだ。
「……ゲスな言葉は、もうたくさんよ！」
あたしの頭上を越えて、ダイナマイトがふんわりと弧を描き飛んでいく。
間もなく起こるであろう爆風と応射を避けるため、身をかがめ草原に姿を隠しながら、あたし達は走った。
高槻を倒し、銃を奪い、智子を救出する。それは決して不可能なことじゃないはずだ。
でも……何かひとつ、忘れていないだろうか？
致命的な、何かを。

462　discovery

結界の待つ神社目指して出発したスフィー一行であったが、相変わらず神社の詳しい場所は分からず(家の中に地図がないか探してみたものの無駄だった)、昨日と同様行っては戻り、行っては戻りを繰り返しながら進んでいた。
「ところで、神社ってどんな感じなの？」
「……」
「そう、やけに古くて、ちょっと押しただけで壊れそうな感じの……」

言い終わらない内に、視界の中からスフィーが消えた。
「……え？」
突然の出来事に結花たちがびっくりしていると、下の方から「あいたた……」と声がする。
道端の斜面を注意深く降りてみたら、そこには水たまりにはまったスフィーがいた。
「もう、足下をよく見てないから！　ここが谷底だったらどうするのよ」
「……ごめんなさい」
ばつの悪そうな顔をするスフィー。
「……」
「そうね、無事そうでよかった」
「でも、服濡れちゃった」
「しょうがないわね。服が乾くまで休憩」
結局、三人はスフィーの服が乾くまで一休み、ということになった。
スフィーは服を脱ぐのを嫌がったのだが、結局上着だけを木に引っかけ、荷物の方は鞄から引っぱり出して、虫干しのように乾かした。
もちろん荷物の中には、例の魔術書もどきもある。
しばらくして、生乾きになった所で荷物をしまい始めた結花が、その魔術書もどきの乾き具合を見ようと本をパラパラめくっていた時、ページの一部が不自然にふやけていたのを見つけた。
よく見ると、ページの端が二枚に割れている。
紙が破れないようにゆっくり分けていくと、今までなかった文章が目に留まった。
〈七十一番　長谷部彩：とても物静かな性格。漫画自体は上手いが、テーマがマイナーなため売り上げは良くない〉
「これって……」
結花はすぐさまスフィーと芹香を呼び寄せた。
それから、三人がかりで全てのページを割く作業が始まった。
紙の中に隠されたページには、このゲームに参加

した百人分の顔写真、名前とプロフィール、さらに特殊能力を持つ人はその能力の種類まで書かれていた。
「ふぁ〜、これってすごいよ」
「……」
しかし、中身はそれだけではなかった。
本の最後には「ＳＴＡＦＦ」と書かれたページもあった。そこには、三人が知っている名前が書かれていたのだ。
「長瀬源之助って……、あの長瀬さん？　どうしてスタッフなんかやってる訳？」
「……」
「えっ、芹香さんも……」
思わぬ展開に、三人はただ困惑するばかり。
とりあえず三人で話を突き合わせながら、死者の名前に線を引いていく。
結花は生存者のデータを見ながら、
「う〜ん、鬼の力とか不可視の力とか書かれても……。なんか結界に関係のありそうな特殊能力ってないのかなぁ」
と、強気で鳴らす結花にしては珍しく考え込んでいた。
「それに、長瀬さんがスタッフだなんて……。なんだか訳がわからなくなってきた」
「私もだよ」
スフィーと二人して悩んでいる所へ、
「……」
芹香が話しかけてきた。そして本をパラパラとめくって、「三十三番　国崎往人」と書かれたページを指さした。
「……」
「法術、かぁ」
「法術ってなに？」
他の二人はよくわかってないようだった。
芹香が一通り説明して、
「あ〜、そういう事かぁ」

「……」
「でも、この人がどこにいるのかもわからないし、むやみに探すのはかえって危険だと思うけど」
「……」
「うん。あくまで向こうからやってきた場合、ね」
「……」
「スフィーはもう大丈夫？」
「オッケー」
「それじゃ出発ね。あ、斜面を登るときは注意するのよ、スフィー」
「は〜い」

斜面を登るスフィーたちの頭上数千メートル。
浮遊物体の中で、その一部始終を手元の小さいモニターで見ていた老人がいた。
「ほほう、ようやく気が付きましたか。ただ遅きに失した感じもしますが」
その老人——長瀬源之助は小さな笑みを浮かべつつ、
「ま、儂からのささやかなプレゼント、といった所ですかな」
静かにつぶやいた。
参加者百人に渡された武器や道具は、基本的にはアトランダムに配られたものだ。
しかし、一部の人間に特定の品物を渡させる権限くらいは源之助にあった。そこで源之助は参加者の名簿をスフィーに託すことにしたのだ。もちろん名簿は極秘扱いだから、それなりの細工を施しておいた訳だが。
「さてこの名簿をどう使うか、お手並み拝見ですのう。ホッホッホッ……」
思わず笑いがこぼれた源之助に、フランク長瀬が、
「源之助殿、何か可笑しい出来事でもあったのですか？」
そう尋ねたので、
「いやいや、年寄りの戯れじゃよ」

と答えつつ、モニターの画像を切り替えた。結界の待つ神社へ向かうスフィー・結花・芹香。

一行がいつになったら神社にたどり着けるか、まだ誰にもわからない。

463　忘れていた事実

まず光。

そして爆発音。

爆風。

遅れて降り注ぐ、大量の土砂。

予測していたとは言え、その規模の大きさに驚きながら、わたし達は走った。迂回しながら、高槻のいた岩を目指す。高槻にとっては予想外の爆発だったのだろう、大きく遅れて応射する音が聞こえる。煙る視界の中に、岩を背にした高槻が微かに見える。

晴香さんが先行する。能力が制限されていても、なお常人では追いつけない速度を発揮し高槻に迫る。普通の人間では、あの状態から銃を持った相手に勝つことはできない。

だけど晴香さんは違う。それを忘れていた、高槻の負けだ。岩の裏側に回りこみ、距離を一気に詰め抜刀する。そしてくるりと岩を半周したとき、高槻は斬られているだろう。

わたしは九割九分の確信を持って、結果を待った。

そのとき、声がした。

「うっ！」

聞きなれた声。

誰よりも聞きなれた、わたしの、声。

わたしの、声？

あれ？　どうして？

理由は、左脚に突き立った短い矢。

脚に？　矢？

なんで？　どこから？

振り向いた射線の向こうに立っていたのは……高槻だった。

今、まさに斬りかかろうとしたその時。あたしは、由依の声を聞いた。何故か脚に矢が突き立っているのを見て、思い出した。忘れていた、有り得ぬ事実を。

——高槻が、二人いる事を。

それを知ると同時にスタンガンで気絶させられ、あたしは忘れてしまっていた。正しく言えば、混乱の中で記憶に留めておけなかったのだけれど。

見ればクロスボウを構えた、もう一人の高槻が狙いをつけている。斬り上げようとした姿のまま、あたしは動けなかった。

由依が崩れる。まるで左足が無くなったかのように、前のめりにカクンと倒れてしまう。

「あ、あれ？　れ？」

軽く痙攣しながら、ままならぬ身体を悶えさせる。地面に顔を擦り付けたまま、ひゅーひゅーと狭窄した呼吸音を響かせる。

「ハハハハハ！　そこまでだなあ！」

目の前の高槻が、ぬかりなく距離をとりながら笑う。

「矢には毒が塗ってある。もはや動けん！　どこでもう一発ぶち込めば、窒息死は免れんぞ！」

遠くから、もう一人の高槻が叫ぶ。

——あたし達は、敗北した。

「さて。ここからが、本題だ」

油断なく拳銃を構え、高槻が言う。悔しい。悔しいが、今となっては聞くことしかできなかった。

「名倉由依を助けたければ……」

僅かに明るさを増した空を指差し、もうすぐ朝がくることを示す。

「……次の放送までに、一人殺せ」

「くっ！　……まだそんな事を！」

「気に喰わんか？　なんなら、今ここで殺しても構わんぞ？　ハハハッ！」

「死体を弄ぶのも悪くないからな、ハハハッ！」

二人の高槻が次々に笑う。
そのゲスな笑い。どちらも間違いなく高槻だった。
あたしは不快さに表情を曇らせる。
そのとき。
誰もが発言を予想していなかった由依が顔を上げ、押し出すように話し始めた。

「……晴香、さん」
なかば麻痺したまま、ゆっくりと言葉を並べる。
泣いていた。
「晴香さん、逃げて、下さい」
それを受けて、高槻達が嘲る。
「ハハハ！　いくらこいつが速くとも二人同時にかわせるものか！」
「お笑い種だな！　こいつが逃げれば、お前も死ぬんだぞ！」
そうだ、逃げることなどできるわけがない。
それでも由依は、構わず続ける。
「あたし、晴香さん達に、出会えて……」
ちらり、と何かが光ったように見えた。
気のせいかな、とぼんやり思った。
「本当に、良かったと……」
一瞬、何だろうと考えた時には手遅れだった。
考えるまでもなかったはずだった。
「思って、います……」
地面から溢れるように、光が漏れる。
そうだ。
あの光がもたらす結果は、これしかなかったはずだ。最後に見えたのは、跳ね上がる由依のシルエットだったと思う。

全てのダイナマイトが誘爆した混乱の中、あたしは全速力で駆け出した。
土砂と銃弾と手榴弾の雨の中、どうにか森の中まで逃げこめたのは、奇跡だったのかもしれない。
木々を抜け、建物を見つけて裏口から侵入する。空

間が広いほど飛び道具が有利になるから、遮蔽物は多い方が良い。
そう思って入り込んだそこは、教会だった。
椅子に腰掛け、土まみれの髪を整えなおす。一息ついて、お馴染みの彫像に尋ねてみた。
「……友達が死んで、涙も出ないのは許されると思うかしら？」
答は返ってこない。
期待もしていなかった。
ただ、高槻が憎い。
脱出より、生存より。
あかりと、由依の仇をとることを。
高槻を殺すことを、あたしは誓っていた。
……そしてその時こそ、二人のために泣こうと思った。

六十六番　名倉由依　死亡
【残り34人】

464　これまで、そしてこれから

夜明けが近いのか、東の空が徐々に赤く染まっていく。
その光に背を向けて、彼女は歩く。
ゆっくりと、しかし確実に。

――鹿沼葉子にとって、彼女の第一印象は決して良いものとは言えなかった。
自分にとって絶対であるFARGOに、入信しておきながら不快感を見せる少女。
それは、これまで積み上げてきた「鹿沼葉子」という存在自体を否定することであったから。
同じAランクの一員。しかし、葉子にとって彼女は忌み嫌う存在でしかなかった。
そんな彼女が、ある日葉子に手渡したもの。
小さな、キーチェーンの携帯ゲーム。

その中には、葉子が遠い昔に置き忘れた、日常の欠片が詰まっていたのかもしれない。
だからこれも、葉子にとっては不快感を覚える代物でしかなかった。
だけど、どんな物であっても、誰かから物を贈られる、という行為自体が久しぶりで、葉子はどうしてもそのゲームが捨てられなかった。
次の日。携帯ゲームの感想を訊ねてくる彼女に、葉子は素っ気無く「捨てました」と答えた。
そう言うと彼女は、そっか、と小さく呟いて、取り繕うようにあはは、と笑った。
葉子の脳裏には、彼女が一瞬だけ見せた、残念そうな表情がいつまでも残った。

その夜、葉子は部屋の隅に置かれた携帯ゲームを手に取った。彼女があんな顔をするから悪いんだ、と言い訳して。
電源を入れる。チープな電子音。単純なゲーム。
しかし葉子にはすべてが新鮮だった。
ボタンが磨り減り、電池が切れかかるまで遊び倒してから、何食わぬ顔で彼女に返した。
彼女は少し驚いたような表情を浮かべてから、嬉しそうに微笑んだ。

彼女は葉子の知らないことを、沢山知っていた。
毎日、食事時のほんの僅かな時間。彼女は葉子の知らない様々なことについて説明した。一緒にゲームセンターという所へ行こう、とも約束した。
ただただ、訓練を繰り返すだけの毎日の中で、彼女と話す時間は、葉子にとって新鮮な楽しみであり、心安らぐひと時でもあった。

そんな毎日の終焉は、突然にやってきた。
このゲームの開催によって——

誰に言うでもなく、葉子は呟く。

「郁未さんの話……もっと聴いてみたいですね」
人にはそれぞれ、相応しい死に場所がある、と葉子は考える。
そして、自分や郁未、他の参加者達の死に場所はここではない、とも。
だが、ＦＡＲＧＯの主にはその慈悲が無かった。
そのことに、葉子は失望した。
（……もしかしたら、ずっと前から気づいていたのかもしれませんね。このＦＡＲＧＯという組織の実態に）
だが、葉子の居場所はＦＡＲＧＯにしか無かった。
この世に残ったたった一人の肉親、母をその手で殺めたあの日から。
（でも、今は違います）
郁未という存在が葉子を変えた。彼女によって、葉子は「外の世界」を知りたいという意思を持ち、自分の体で、広い世界を感じたいと思ったのだ。
（だから……）
死ぬわけにはいかない、と葉子は思った。
死なせるわけにはいかない、とも。
そして、それを達成するための一番の障害と成り得る者は――
「高槻」
彼の厭らしい笑みが葉子の脳裏に蘇る。
彼の悪知恵は決して軽視できるものではない。何より、クローンが何人いるかも分かっていないのだ。あまり泳がせると、いずれ厄介なことになるだろう。早急に対処する必要がある。
だが、今の葉子は武器と呼べるような物を、何一つ持っていなかった。
少年から受け取った反射兵器が一枚、あるにはあるが、基本的には防御用のモノ。
不可視の力も、この状況ではせいぜい常人より多少はマシ、といった程度。
（……彼に槍を折られたのが悔やまれます）

それも後の祭。
とにかく今の葉子には武器がない。武器がないならないなりの戦い方もあるとはいえ、それにも限界がある。
「まずは、武器ですね……」
そう呟くと、葉子は住宅街のほうへと歩き出す。
これから作られる、自分の思い出のため。
これまで作られた、郁未の、皆の思い出のため。

人にはそれぞれ、相応しい死に場所がある、と葉子は考える。
ならば、高槻に相応しい死に場所は、今この場所しかない、とも。

465　血塗られた花嫁

祐一はどこにいるんだろう？
祐一はどこで私を待っているんだろう？
会いたいよ……祐一。早く会って、そして。
結婚式を、挙げよう。
祐一と一緒に、お母さんも待っているよね。
そして私と祐一が「結婚する」ってお母さんに言ったら。お母さんはにっこり微笑んで、「了承」って言ってくれるよね。
ああ、会いたいよ祐一。
早くはやく。けっこんしきを、あげよう。

虚ろな目で歩く水瀬秋子（九十番）を、御堂（八十九番）と大庭詠美（十一番）が、近くの雑木林から息を殺してじっと見つめていた。
無理矢理地面に這い蹲らされて、御堂に不満を漏らそうとした詠美だったが、その人物のあまりの姿にあんぐりと口を開けて見送るしかなかった。
「何アレ……あの人がおんぶしてるのって……死体？」
「喋るな」

御堂は詠美にそう言い放つと、秋子をじっと見送る。

『大した戦闘能力は持ってないみてぇだ。だが、既に精神がイカれてやがる』

ああいう手合いは、戦闘時には案外厄介なシロモノと化す。……いろんな意味で。

倒せない敵ではない。が、傷が癒えぬ今は無理をする必要もない。そう御堂は判断するとやり過ごすことに決めた。

それに、背負ってる死体。雰囲気（とは言っても、既にその顔は判別できるものではない。詠美が卒倒しなかったのは、ある意味立派だと御堂は思う）から見て、あの女の関係者だろう。

恐らく、妹か娘。そう考えると御堂にある感情が生まれてしまう。それを御堂は認めたくなかった。

『ちっ、全く。この島に来てからどうかしちまってるぜ俺はよぉ。……倒す相手の都合を考えちまうなんてよ』

「……ねぇ、ねぇ」

つんつん、と詠美が肘で御堂をつっつく。御堂は秋子から目を逸らさずに聞き返す。

「なんだ？　静かにしろと言っただろうが」

「でも、猫、あっち行っちゃったよ？」

「!?」

慌てて見ると、そこにいるのはぶるぶると震えているポテトだけ。

ぴろは――懐かしい水瀬家の匂いを嗅いだのか、秋子の元へ走って行った。

「あ、ねこ」

ぴろを見た秋子は、ぱあっと顔を輝かせる。

「ねこー、ねこー」

おいでおいで、と秋子は手招きをする。それを見たぴろは、突然ぴたりと立ち止まった。

「あ、ぴろだ」

と、秋子はやっと気づいたのか、猫の顔をじっと

見つめて、にっこりと笑う。
「一緒に来てくれるの？　私と、祐一。二人の結婚式を祝ってくれるんだね」
ぴくん、とぴろが跳ねた。
「さ、いくよ。いっしょにゆういちにあいにいこうよ」
しゃがみこんで、ぴろに手を差し伸べる秋子。はずみで、背中のソレがずるりと落ちそうになった。

「どーするのよ？」
「ほっとく。あの猫はあの女の飼い猫だったらしい。飼い主の元に戻っただけだ」
詠美の問いに、あっさりと御堂は言う。
「でも、あの猫、嫌がってるみたいだよ」
「見りゃわかる。懐かしくなって行ったはいいが、近づいたらバケモノでした、ってか」
ち、と舌打ちをする。全くあのバカ猫は、迷惑ばっかり掛けやがる。

「よう。アンタ、何してるんだ？」
ぴろと秋子のにらめっこ。それに終止符を打ったのは御堂のその声だった。
詠美にじっとしてろと言い含めて、秋子の前に姿を見せたのだ。
鋭い視線を秋子に投げかけながら。そして、右手の武器の感触を確かめながら。
「ん？」
すっと、秋子が御堂を見る。そして、にこりと笑った。
『ちっ。マジでイっちまってやがるな。このバカ猫、面倒かけんじゃやねぇ！』
御堂は一人ごちながら、秋子の武装を確認する。
──死体を背負ってるためか、武器は手にしてないようだ。ひょっとしたらポケットに何か隠し持ってるかもしれないが、死体を下ろして構えるまで時間がかかるはず。……俺の方が、有利だ。
「さがしてるんだよ、ゆういちを。ゆういちと、け

っこんするの」
「ほう、ここでか？」
「うん。だって、七年も待ったんだよ。もう私、待てないよ」
「で、その猫はどうするんだ？」
「ぴろ？　ぴろは、祝福してくれるの。私と、祐一の結婚を」
　にゃーにゃーと鳴く猫においでおいでしながら、秋子は続ける。
「おじさんも、祝福してくれる？　私と、祐一の結婚」

「で、なんでお前もついてくるんだ？　じっとしてろと言っただろうが」
「あ、アンタはあたしのしたぼくなんだからね！　勝手にどっか行っちゃダメなんだから！」
「へいへい、わかりましたよ。ったく、危険に自分から身を突っ込むなんて馬鹿だな」
　かちん。
「何よ！　アンタだって同じでしょぉっ！　このばかばかばかあっ！」
「わめくな。……全く、その通りなんだからよ」
『私、祐一を探してるんだ。一緒に探して、そして私と祐一の結婚式に参加してくれないかな？　ほら、祝福してくれるほうが、私も嬉しいし。大丈夫。祐一もお母さんもきっと了承してくれるよ』
　水瀬名雪と名乗る、女性の申し出。しばし考えた後、御堂は、
「そうだな。一生に一度の晴れ舞台だもんな。拝めるなら見てみたいもんだぜ」
　と、参加を決めた。
　そうして今、秋子を先頭にして、御堂と詠美、そしてぴろとポテトが後を追う格好で一向は林の中を進む。

「んで、どうするの？　この人が言ってる、ゆういち、って人を捜すの？」
「さあな」
「何、投げやりになってんのよ。ついてくって決めたのはアンタでしょ⁉」
「ただの気まぐれだ」
　そうは言ってみたが、御堂はどうしてこんな酔狂なことをしてるのか正直見当がつかなくなっていた。
　身の安全のため？　馬鹿か。だったらじっとしていた方がいい。
　この女を利用するため？　確かに、先程の施設を再襲撃するのであれば別のアプローチが必要だろう。だが、この女が何の役に立つ？　せいぜいが弾除けじゃねぇか。
　じゃあ、なんで俺はこんなことをしている？
　――と、ひとつ思い当たる節があった。が、御堂はそれを認めたくなかった。
『ちっ、そんなワケがあるか。そうだ、ただの酔狂だ。暇つぶしにこの女の行く末を見てやるだけさ』
　その女性は、にこやかに笑って振り返った。
「わぁ、いっぱい。きっと祐一も喜んでくれるよ」
　ただ。その原因であろうソレ。
　背中に背負ってる死体のことについては、ついぞ問い正すことは出来なかった。

466　天使の導き

　時間にして十分も経っただろうか。
　戦いは最終局面を迎えていた。
　均衡したせめぎあい。
　両者、まともに話すことすらままならない。
　互角だった。
「ひひはへんにひろ〜〜〜‼」
「はんたほほ〜〜〜‼」

両者とも頬が良く伸びる。
唐突に始まった二人の乱闘は、頬の引っ張り合いで膠着している。
『ぷはっ』
お互いの手が離され、勢い余ってしりもちをつく。
「あはは……、あはははははは！」
梓の笑い声。
「ふふふ、ふふ……」
千鶴の笑い声。
仰向けに寝転がり、天井を見つめる二つの笑顔。
笑いは徐々に収まっていき、やがて理性が戻って来る。
不意に千鶴の目から落ちる雫。
「――楓」
「千鶴姉……」
放送で告げられた妹の名前。
この島で初めて失われた彼女たちの家族。

梓は涙を流す千鶴の様子を伺う。楓の死を知ったときの千鶴の錯乱した様子はまだ記憶に新しい。
千鶴の心は決して弱くない。
だが、なんでも一人で抱え込んで、その重圧に押し潰されそうになってしまいがちだ。
そして、楓は死んでしまった。その責任は全て自分にあると思い詰めてしまうのが千鶴だった。
「あのとき……。なんで一緒にいかなかったの……」
梓に『あのとき』が何時なのかわからない。
ただ、おそらく楓と会った時のことだろうと察しはついた。
千鶴が心に抱いているものが『後悔』だということも。

――ガン！――

千鶴の顔の横。床を梓が殴る。
「千鶴姉!!」

初めてかもしれない。こんな弱々しい姉の態度。
「わたしはいつだってそう……。肝心のところで判断を間違えるの……」
梓には意味がわからない。
「耕一さんの時はとり返しがついたけど……。今回はとり返しなんてつかないのよ……」
(耕一？)
わからない。

——ガン！——

梓の剛拳が再び床を叩く。
「なんだかよくわかんないけど！　千鶴姉‼　後悔なんてしてたって何も始まらないんだよ！　これから初音だって探さなくっちゃいけない！　もう楓のことは……、かえでのことは……」
考えないなんてできない。可愛い妹が死んだというのに。
(くそ！　くそ‼　くそ！！！)
自分だって泣きたい。泣いてしまいたい。楓のことを失った悲しみの感情にこの身を委ねてしまいたい。
けど、今はまだそうする訳にはいかなかった。
死神が舞うこの島で、泣き喚いている時間などないのだ。
今こうしている間にも、もう一人の妹。初音も危機と遭遇しているかもしれない。

「うぐぅ……」
「あゆちゃん？」
梓が振り向くとそこには泣きそうな顔のあゆ。
「あ、あゆちゃん。ごめんなさいね。一人にして」
千鶴が涙をふき取り、笑顔で言う。
立ちあがった千鶴にあゆが小走りで近寄る。

——ぼむっ——

そのまま千鶴に抱きついた。
「うぐぅ……。鼻ぶつけた……。
じゃなくって、あのね。ボク思うんだ……」
梓は思った。
(あゆちゃんがいてくれて。本当に良かった……)

467　俺のこの手は汚れているけど

桜井あさひの一件から数時間の時が流れていた。
大泣きしていた観鈴は泣き疲れたのだろうか、今やすでにぐっすりと眠りの中に落ちていた。
「かわいい寝顔や」
観鈴の頬を優しく撫でて晴子は呟く。
「なぁ、居候」
「なんだ?」
「うちもちょっと寝てええか?」
国崎往人は苦笑して、
「好きにすればいいさ」
「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらうで」
神尾晴子はごろりと地面に寝転がった。
「そうや、ひとつ言うておかなならんことがある」
国崎往人は晴子のほうにちらと視線を移す。
「うちにな……」
語り始めた表は真剣そのもの。その雰囲気に飲まれ、自然と国崎往人の表情も真剣になる。
「悪戯すんなや?」
神尾晴子は表情を崩して、歳相応では無い笑みを顔いっぱいに広げた。
「せんわっ!」
「国崎さんは冷たいなぁ……女のすんなはしてもえってことなのに」
「適当なことを言うな! 絶対せんっ、死んでもせ

んっ！」
「そうかぁ国崎さんはロリコンやったかぁ」
「いじいじと地面の砂をいじるなっ！」
「そういや観鈴をなんだか嫌らしい目で見とったもんなぁ……」
「見ていないぞ。断じて、絶対、観鈴をそんな目では一度も見ていない！」
「冗談や。何そんなに真剣になっとんねん」
言って、神尾晴子は瞼を閉じる。
「そろそろ寝るわ」
「好きにしろ」
国崎往人は投げやりだった。
「おやすみ」
仲良く二人寄って寝静まった観鈴と晴子。
同じタイミングで寝息を立てているのが、見ていてとても微笑ましかった。
（親子……か）
本当の親子では無くても、ここまでひとつになることが出来る。
それは、過去の記憶。
仰向けになり空を見上げると、母親と旅をしていた頃と変わらない空がそこにあった。
ピンク色の空に雲が流れていて、小鳥のさえずりが聞こえて。
そんな朝の空。
それがここでは何か異様に感じた。
そして、それがとても残酷でもあるとも……。
（こんな空を見せられたら、いつもの日常に戻る希望がどこかにあると思ってしまうじゃないか……）
国崎往人はぎゅっと拳を握りしめる。
観鈴と晴子にはこの空をあの町で、安らげるあの家で見せてやりたい。俺の汚れた手で、それが出来るのだろうか。わからないけれど……精一杯努力はしてみよう。
心の中でそう誓った。

その瞬間のこと。
ぐらりと、目の前が歪んだ。
自分が真っ直ぐ立っているのか判らない。
(なんだ……これ……？)
ヤバイと思った時にはもう遅かった。
国崎往人は地面に向かって倒れ込んでいた。

468　闇の声

「嘘吐けよ。本当は一人で生きたいくせに」
耳元で何かが囁く。
「お前にはそんなこと無理なんだよ、判ってるんだろ、国崎往人？」
「違う！」
「何が違うんだ？」
「俺には守らなければならない人が居る」
目の前に居る、大きな黒色の生物。
それは大きく翼を広げ、目を大きく見開いた。
「守らなければいけないだってそんなのお前には無理だよ、無理」
「無理じゃない、俺には力がある！」
「そうだね、今まで何人も殺してきた力があるね。その力で人を守るためにまた人を殺すのかい。何人も何人も殺していくのかい。それが君の守るってことなのかい？」
「五月蝿い、黙れ！」
「君は守るべきものはあるということを盾に人を殺したいだけなんだろう？　自分の中で殺しを正当化する為に守るだけなんだろう？」
「違う！」
「違わないさ」
「違う！　違う！　違う！」
「何度言っても変わらないさ、君は……」
……パァァァンッ……。
国崎往人のデザートイーグルから発射された弾が、その黒色の生物を撃ち抜いていた。

「ほら、また殺した。これからもそうやって、お前は殺し続けるんだ、殺し続けるんだよ！　あはは、あははははははははははははははははっ！」

469　命の炎　〜鈴の音〜

「ふふふ、お姉ちゃん」
甘えるような声で佳乃ちゃんがセンセイに近づく。この場にとっても不釣合いな声。だけど、佳乃ちゃんの表情はもっと声に合っていなかった。
私は、何も言えずにただ二人の悲しき再会を見守るしかできなかった。
「ごめん……もう、いいよ」
ゴシゴシと腕の包帯で乱暴に顔を拭うと、佳乃ちゃんは今度こそ、笑った。
私も、佳乃ちゃんも……もう全部傷ついていた。
「……ん……」
短く、そう答える。

私達、もうボロボロだった。
格好も、心も。
鏡を見たらお互い卒倒しちゃうんだろう……とか思ってたりする。血と、泥で彩られた衣類、同じくマーブル状に変化してしまっている包帯。
私の首にはひどく腫れあがってしまった紫色（だと思う）の痣。さらに体中のあちこちがひどく痛む。たぶん打撲症。木々に打ち付けられた体が、筋肉痛のように悲鳴をあげていた。

それ以上に、私達はあまりにひどい現実を目のあたりにしてきた。泣いても叫んでも、願っても、祈っても……変わらなかった現実。
目にうつる景色は、私達を包んでくれてる大自然はこんなにも穏やかなのに……
いつもと何も変わらなかったはずなのに。
ここ二、三日の記憶は、まるで出来の悪い、だけどどこか心に残る映画のフィルムのようで。ひどく

つまらない。だけど、こんなにも痛くて、悲しい。
だけど、泣き言は言いたくない。
佳乃ちゃんも、矢が刺さっていた左腕が力なくだらりと下がっている。
ついさっきからだ。無理して動かしてしまってたせいかもしれない。
もしかしたら動かないのかもしれない。
なにも言ってくれないけど……心配させたくないってことかな。
だから、弱音は絶対に吐きたくなかった。
そして私達は歩きはじめた。前を向いて。
(こんなクソシナリオ……私達で変えてやるんだからっ！)
「行こうっ！　佳乃ちゃん……」
「うんっ！」
私達、手を取り合って歩く。
もうこれ以上、悲劇が起こらないように願って。

チリン……
風の音にまぎれて、どこかで鈴の音が鳴った気がした。

470　命の炎　～現実～

「往人くんに会いたい」
佳乃ちゃんが唐突にそう切り出した。
「往人くん？」
「えっと……国崎往人くん……この島にいる、私とお姉ちゃんの友達だよ」
はにかんだように笑う佳乃ちゃん、今までのどの表情とも違う。
「好きなの？　その人のこと……？」
「えっ……違う、違うよぉ」
必死で否定する佳乃ちゃんの言葉に力はなかった。
「……だけど……一番信用したい友達……」

「そっか……」
私は女心に、やっぱり好きなんだな……って思うことにした。
その人の事は知らないけど……佳乃ちゃんの心を奪った騎士様、私も信頼してあげたい。
「でも、どこにいるか分からないね……」
「きっと会えるよっ」
「ど、どうして？」
「信じてるから……かな？」
また、照れたように笑った。
「往人くんなら『こんなゲームは俺がぶち壊してやるっ！』とか言ってたくましく生きてると思う。だから……生きてさえいればきっと会えるはずだよぉ」
底抜けに明るい声。空元気なのかもしれないけど、私まで元気にさせてくれる。
そんな声だった。
「じゃあ、探索の一番の目的は往人さんを探す……これで行こっか？」
「うん！　じゃあ、脱出へ向けて……しゅっぱつしんこ～!!」
えいえいお～と言わんばかりに右手を振り上げながら佳乃ちゃんが歩く。
ちょっとだけ苦笑い。うらやましいな。
佳乃ちゃんに想われるその知らない誰かも。
藤井さんに想われるお姉ちゃんも。
そして、今はもう還らないあの人を想っていた少し前の私も。
少しだけ、うらやましかった。
現実はいつも唐突で……
『私は医者だ。しかも腕のいい医者だ。患者の嘘くらい見抜けないようではな』
『マナ君、逃げろっ』

今ある現実はあまりにつらくて……

『今、自分がどういう状態に置かれてるかわかってるの？　今度会う時に私があなたを殺さない保証は何もないのよ？』

『俺が……弱かったんだよ』

しっかりと目の前の出来事を理解することもできず、悲しみに暮れても時は過ぎていって……

『あなたは、その子よりも弱いのよ。肉親を失った子でも、生きようと決めたのね。それでもあなたは、死ぬの？』

私の気持ちはいつも、時の流れのなかに置いていかれていて……

『もう一人の方……とどめさしたほうがいいよね？』

『……由綺さんがそう……おっしゃるのならば……』

『……最低ね』

『ああ、だから俺は、こんな方法しか取れないんだ……』

ただ私は……みんなで笑いあっていられればよかったのに……

『早く連れてって！　このノロマッ!!』

『もうこれ以上由綺の手が汚れるのを見ていたくはなかったんだ。汚れるのは俺だけでいいと思ったんだよ』

『……君は、強いね』

私だけが……ただこの場所で流されるように生きてきた。

私は……強くなんか、ない。
だけど、これからは強くなろう……
いつの日か、心から笑えるように、と。
せめて、私達は精一杯生きていこう……
『私がやったことは……許されないかもしれないけど……本当は、死んじゃった方がいいのかもしれないけど……私、お姉ちゃん達の分まで生きたい。だから……生きていてもいいかな？』
そうすれば、センセイや藤井さん、みんな、きっと笑ってくれるって、思ってた……
パラララララララララララララッ!!
思ってたのに。

現実は私の思いを断ち切るかのようにそれを遮った。目の前の佳乃ちゃんが、マリオネットのように踊った。
赤い、血と共に。

471　命の炎　～そびえたつ洋館～

私達はただ走った。
まだ、追ってきている。
よろよろとしながら佳乃ちゃんをこの手で抱いて。
「どうしてっ!?」
呆然と見つめる中、森の向こうに一瞬だけ見えた影はたぶん弥生さん。藤井さん、お姉ちゃんと一緒に行動していた女の人。
「しっかり……してっ！」
走りながら、佳乃ちゃんに叫ぶ。
（う……ん……）

弱々しく、佳乃ちゃんが答えた。
だから走る、絶対に二人とも生きるんだからっ!!
佳乃ちゃんを抱く腕がぬるぬると滑る。
泣きたくなった、どうしてっ!?
よく状況がつかめなかった。佳乃ちゃんがいきなり撃たれて、倒れて、抱きかかえて——
ただひたすら逃げるように走った。
また、音が鳴った。私達に、生きることすら許さないような慈悲のない銃声が。
近くの地面が、木が、ビシビシッっと跳ねる。
(あそこっ……)
かすれた声で佳乃ちゃんが右手を指差す。
洋館……?
森の中、不気味に佇むソレはオカルトの小説の中にだけしか存在しないような建物だった。私は入り口を蹴破って中に転り込んだ。
助かるなら……私達が、佳乃ちゃんが助かるならどこだっていい。
躊躇なくそこへと入った。
ホールから真正面の扉を開けて突き進む。
食堂だろうか、真ん中に大きなテーブルが置かれていた。真白いテーブルクロスの上、燭台やマッチが乱雑に転がっている。
そんなものは今はどうでもいい。
安全な所で休みたい。
佳乃ちゃんを手当てしないとっ!!
私達はそこを走り抜けた。
床に真新しい鮮血が迸り、水たまりをつくった。
急がないと、佳乃ちゃんがっ!!
ダダダッ!!
階段を駆け上がって二階へ。
そのうちの一つのドアを開けて中へと入る。
生活感のない部屋、何もおかれていないドレッサーと、白いシーツが申し訳程度に引かれているベッ

ドだけが存在する小部屋。
「ここにっ……」
佳乃ちゃんをそのベッドに寝かせる、みるみるうちにシーツが赤く染まった。
「し、止血しなきゃっ!!」
センセイの救急箱を乱暴に開いて、中身をあさる。
こんなときどうすればいいのっ!?
何も浮かばない、何も考えられない。
包帯……アルコール、ピンセット……メス……何をすればいいの……？
（待って……）
佳乃ちゃんがゆっくりと箱の中から瓶を取り出す。
「なに……？」
消毒用アルコール。
それを開けて、ベッドへとぶちまけた。
「佳乃ちゃんっ!?　一体何を……」
（お姉ちゃんのバッグ……開いてっ……!!）
「え……う、うん!!」

ただ言われるがままにソレを開く。
「ろ、ロープ!?」
長いロープ。先端に三叉の鉤爪がくくられた一本のロープ。
（窓から……垂らして……）
「えっ!?」
窓を開け放ち、下を見る。
ぐらっっと景色が揺れる……ような気がした。
二階の窓なのに地面が遠い。切り立った崖に面して、洋館はそびえ立ってたんだ。
（ここから……逃げないと……）
「だ、だけどっ!!」
弱々しい佳乃ちゃんの声に振り向く。
佳乃ちゃんがすぐ背後までやってきていた。
「だめだよっ、寝てないとっ!!　はやく手当てしないと……」
（ほら、血……べっとりついてるから……ここにいることがバレちゃうから……）

見れば、部屋の入り口から、ベッドから、佳乃ちゃんの足元から……血の跡が続いてる。たぶん、洋館の中、ずっと続いてるかもしれない。
「だったらなおさらっ！」
(ここから……降りてから……手当てすれば大丈夫だよぉ……)
口調と裏腹に、苦しそうな声。
「で、でもっ！」
(はやくっ……ここにあの人が来ちゃうよ!!)
佳乃ちゃんが私の手からロープを奪って窓の淵に鉤爪を引っ掛ける。
(はやく……先に降りて……)
「だったら佳乃ちゃんが先にっ……」
(ほら……私……怪我してるから……先に降りてくれないと……滑って落ちて死んじゃうかもしれないから……)
カツカツッ!!
階下で、足音が響く。
(はやくしなくちゃ……)
ロープを、まるで取り落としたかのように崖へと放る。
ぎりぎりで、崖下までロープが届いた。
(先に……はやくしないとふたりとも助からないから……)
私の背中を軽く押す。
「……」
足音が近づいてくる気がする。
「分かった……すぐに……来てよっ!!」
私は意を決して、荷物を外に放り投げると、私自身も窓の外に身を躍らせた。
恐かったし、佳乃ちゃんを助けなきゃいけないっていう気持ちが私を躊躇させたけど……それでもあそこで言い合ってたら二人とも死んじゃう。
私は急いで下まで降りた。
風に体が揺れて、手の平が縄ですりむけて……何度も落ちそうになりながらも急いで下まで。

「降りたよっ！　次は佳乃ちゃんがっ!!」
上を向いた私に見えたのは、ロープを投げ捨てる佳乃ちゃんの姿だった。

「どうしてっ！　どうしてよぉ！」
呆然と、私はその光景を見ていた。
――わたしはもう、助からないから……こんな方法しか思いつかなかったんだ――
佳乃ちゃんの口がそう動いたように見えて。
「そんなことないっ!!　私はっ！」
落ちてきたロープを拾って、振り回す。
「今行くから……だからっ！」
遥か上方の窓に向かって縄を放る、だけど、途中の崖に当たって、小さな土の欠片と共に落ちてくるだけ。
「すぐ行くからっ!!　待っててっ!!」
もう一回投げる。
だけど結果は同じ。崖の半分位のところに縄の先端が当たるだけ。
――ごめんね、マナちゃん――
最後に、そう口が動いて、佳乃ちゃんは家の中へと消えた。

472　命の炎　～盛る灯～

だんだんと大きくなる足音、忍ばせているのだろうが、他に音のないこの世界ではいやにはっきりと聞こえた。
（ごめんね……マナちゃん……）
揺らぐ景色の中、その場にへたり込む。
（私……きっとまた夜になったらマナちゃんを殺そうとしてしまうかもしれないから）
マナをこの手にかけたあの時……東の空が紫色に染まったあの時、もう一人の自分の支配力が弱まった。そのおかげで、もう大切な人を失わずにすんだ。
だけど、また、夜になったら……

（ごめんね、もう一人の私……ごめんね、お姉ちゃん。聞こえてる？　私、行くね……）

右腕のバンダナを、――――解き放った。

（私、魔法、使えるよ。とびっきりの魔法）

先程ぶちまけたアルコールの瓶に残った液体を黄色いバンダナに染み込ませる。

（往人くんに、もう一度……会いたかったな……）

このままでは、崖下にいるマナも命も危ないだろう。

だから、マナを守る魔法。

――私の最初で最後の……魔法……マナちゃんを……守るんだ――

震える手でマッチを擦る。

下の食堂で拾っておいたマッチ。

小さな明りが部屋に点った。

ボッ……

カツカツカツ……

部屋の前まで来た足音と、ほぼ同時にバンダナが炎で輝いた。

一瞬の静寂――

そして。

パラララララララッ！

扉の向こうから無数の銃声。

「…………！」

何かの未知の衝撃に、佳乃の体が壁際まで吹き飛んだ。

バンッ!!

いくつもの穴の開いた扉がゆっくりと部屋の内側へ倒れた。機関銃を構え、立っている女、全身凶器と化していた弥生の姿だった。

「……」

もう一度、佳乃へと銃口を向ける。

ぐったりと壁際で頭を垂れている佳乃の手には激しく燃えさかるバンダナが握られていた。
「バイ……バイ……殺し屋一号さん……」
「……!!」
ソレが宙へと舞った。
パララッ!!
もう一度、短く銃声。佳乃の体がもう一度だけ、跳ねた。

ボッ!!
宙を舞ったソレがふわっと舞い降りたのはアルコールがたっぷりと染み込んだベッドの上。
燃えて、盛る。
「くっ……」
弥生がそれを確認すると、部屋から後ずさる。
そして佳乃をもう一度見たが、もう動いてはいなかった。
「……!!」

一瞬の躊躇——佳乃を連れ出すか否か。
(何をバカな……もう死んでいるのに……それに殺したのは私。このような感情はナンセンスです……でも)
憐憫の視線を佳乃に向ける。
視線こそ佳乃に向けられたものだったが、その向こうに弥生の姿があったような気がした。
無意識の中にあった罪が、そうさせた。

既に部屋は炎で包まれていた。炎の向こうで佳乃の姿が陽炎で揺らぐ。
もう入ることも叶わない。
(また、殺したのですね、私は)
ここにいなかったもう一人の少女、マナのことも気にはなったが、ここを脱出するほかはない。
「げほっ!!」
激しい煙の中、弥生がようやく外に脱出したときにはもう、炎が洋館全体を覆い尽くしていた。

灰色の煙が天高く上る。佳乃が放った炎、命の炎。明るくなっていく東の空よりも赤く輝く。それは悲しくも美しかった。
「マナさんも……この中にいるのでしょうか……」
呆然とその炎を見つめた。弥生の瞳の中にその炎が揺らめく。
(私は……これからもずっと罪を重ねていくのですね……)
少しの間それに見入った後、そこから離れた。
もう明け方とはいえ、闇の中これだけの炎が燃え盛れば、誰かがここに来ないとも限らない。
これ以上、ここに留まるわけにもいかなかった。
(また新しい休憩場所を探さなければなりませんね……)
あと、どれだけ罪を重ねればいいのだろうか。
無意識の内に――何かの感情がこみ上げた。
気がついたら、血が滲むほどに拳を強く握り締めていた。

三十一番　霧島佳乃　死亡
【残り33人】

473　命の炎　～生きるということ～

「佳乃ちゃん……!!」
銃声が響く。
それでも私はロープを投げ続けた。あきらめたくなかったから。だけど、私の力だと、あの窓までロープは届かなくって。
崖をまた三叉の鉤爪がえぐった。
「佳乃ちゃん……!!」
幾度ロープを放ったんだろう。
焦げ臭い匂い。
それに気づいた瞬間、館を勢いよく炎が走りぬけた。

「そんな……佳乃ちゃん……」
あまりに圧倒的なその炎の威力は、私のその行動を止めるのに充分だった。
私はゆっくりと崖から離れてその燃える館を見つめた。
「生きていこうよって……一緒に脱出しようって……言ったのに……往人さんに会いたいって……言ったのに……ばか佳乃っ!!」
どんどん大事な人が消えていく、私だけをこの過酷な現実に置き去りにして。
「私にどうしてほしいわけっ!!」
まだ見えない、雲の上、空の向こうへ叫んだ。
「私は殺したくないっ！　死にたくないっ!!　ただみんなで笑いあいたいっ！　生きていきたいって思うだけっ!!　なのにどうして……」
なじった。誰にでもなく。
憎むべき相手なんか、いない。分からない。
だけど……このやるせない私の心はどうすればいいのっ!?
どうしようもないその現実に、私はあまりに無力で。気がついたら、私は血が滲むほどに拳を強く握り締めていた。
（私……負けない……負けたくない……）
――生きてさえいればきっと会えるはずだよぉ
佳乃ちゃんの言葉を……きよみさんやセンセイを思い出す。
「往人さん……だったっけ……」
もういない、佳乃ちゃんに向けてそう問いかける。
「私が探す……ね」
やっぱり私に出来ることはそれだけだから。
センセイの荷物にロープをしまって。
流した涙も、はりさけそうな思いも、私の心の奥にしまって。

「もう、行くね……バイバイ、佳乃ちゃん」
冷たい女って思われるかもしれないけど、それでもいい。後ろ髪ひかれそうな中、私は立ち上がる。心の中のみんなが、笑ってくれるなら……それでいい。
こんなクソシナリオ変えてやる。
絶対に生きて帰るんだ。ハッピーエンドにしてみせるんだから。
でも、私の心に本当のハッピーエンドなんてもう……来そうもなかった。

474　道中、ふと思うこと

正直俺はあいつを見直してたんだよ。
奴と闘ったのはたしか季節が五つ程も前。何度も向かってきては俺に倒される。そのたびに立ち上がってきた。
弱っちい奴だ、なんて思ってたんだがね。
まあ、そんな奴でも、俺に向かってくる根性だけは認めてやったつもりだけどな。終生のライバル……そんな風に思われるのは心外だが。
――いや、ほんとのところはどう思ってるか知んないけどな。
爺いが倒れて、その相棒の女の命がやばくなった時……躊躇せずに突っ込んでやったさ（こう見えてもフェミニストなんだよ、俺はな）。
あいつはただ横で震えていて……情けない奴……とか思ったね。
腕に思いっきり体当たりしてやった。
あの素っ頓狂なロボットの顔……傑作だったぜ。
だけどな、やっぱウエイト差ってのがあると俺もツライんだよな。女を無視して、こっちに銃を向けられたとき……俺ももう駄目か……とか思ったよ。

『死』というまぎれもない事実が近づいてきたとき……俺もさすがに震えた。
逃げなきゃ……と思っても体が動かなかった。
そんな時だよ、あいつが突っ込んできたのは。
「にゃあ〜っ!!」
弱っちい猫畜生のくせに、ロボットの顔にへばりついてよ……その後はまあ――おほん――俺らが敵うはずもなくてな……殺されなかっただけでも幸いか。
ほんと、少しだけ見直したんだよ、あいつは、俺と、女の危機を救ったんだからな。
(本当はなんで胸を撃ちぬかれたはずの爺いが生きてたのか……のほうが気になってるんだけどな)
さっきもそうだ。爺いと女、そして俺が震え上がっていた時、あいつは躊躇せず飛び出した。
「ねこーねこー」
その世にも恐ろしい姿をした女があいつを手招きする。いや、そりゃああいつは猫だしな。だけどねこって呼ばれてむかつかないのかね……
俺が「いぬー、いぬー」なんて呼ばれたら蹴り殺してしまいそうだぜ。
まあ、あの女は絶対に蹴れないけどな……恐いから。
まあ、そんなわけであいつを見直したんだけど……それもさっきまでの話。
――まあ、やっぱ駄目だわ、あいつ。
結局、あいつは今も俺の横で震えている。
なんでも一時期飼われてた時の水瀬秋子っていう家主(一番えらい人のことらしい)なんだとよ。
どうにも様子が変らしくてな……自分をその娘の名雪だって言い張ってるらしい。
(ちなみに、その秋子って奴が背負ってる、頭が割れたピーナッツみたいになってる奴が水瀬名雪らしいな。つーか、それを見ただけで様子が変だって気づくだろ? 普通……)

やっぱ猫畜生にゃその程度が限界なのかねぇ……そのうちこいつ命落とすぞ、いや、マジで。おかげで死刑台に向かう囚人みたいにその女に同行させられてるんだよな……こいつのせいで。
俺らまで殺されたらたまったもんじゃないよ、まったく。自己防衛の意味も含めて、このクソ猫に言ってやったさ。
「ぴっこり」

（があぁっ、うるせえんだよさっきから……この毛玉っ‼　静かにしてろっ‼）
なんだ、爺いでも前の女が恐いのか……そんなに声をひそめてさ……それにしてもがみがみうるせえ爺いだな……カルシウム足んねえんじゃねえのか？
ちゃんと食えよ、老い先短いんだからな、爺い。
あんま怒鳴ると踊るぞ、こんちくしょう……
「ぴっこ……ぴっこ……♪」
（だからうるせぇっ‼）
ち、俺の踊りを理解できないとは……多少腕は立つようだがまだまだだな、爺い。
ほんとはあの女から逃げろって本能が騒いでたけど（騒がなくても逃げたいよ、ずっと背中から血が滴ってんだぜ。気の弱い奴ならそんな後姿を見ただけで卒倒するね）しょうがないからついて行ってやるか。この爺いも、相棒の女も、横で震えているこいつも……俺がいなきゃ心細いだろうしな。

475　舞い降りる白

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
羽音が、礼拝堂に響き渡る。
少し早い朝ごはんを食べる、あたしの周りは真っ白だった。雪のように白い鳩たちが、開いた天窓から次々と舞い降りてくる。ひょっとしたらこの教会

には元々人がいて、毎朝エサでも与えていたのかもしれないなと思った。半ば照らし上げるように地平線から放射される光は、ステンドグラスを透し、天井へ虹のような色彩を投げかける。場所が場所だけに、神々しいのは当然だ。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
気まぐれで、おこぼれをねだる鳩たちにパンくずを放った。わっと集まる鳥たち。その様子を眺めていると、高槻達の追撃を警戒して尖りきっていた気持ちがゆるむのを感じる。
由依が居たならどんな反応をしたのだろう。ふとそんなことを思ってしまい、喪失感に胸が詰まりそうになる。
のどかな光景に気を緩めすぎていたのかもしれない。ふと、顔を上げると、そのまま視線は釘付けになった。

何時からいたのだろう。まるで空気のように気配なく、静かに。後光を浴びて、亜麻色の三つ編みを垂らした少女が立っていた。
「……鳩、ですか」
その表情からは、何も読み取れない。
よく今まで生き残れたな、と思うほど気迫の感じられない少女の、特に意味のない質問に、あたしは何の捻りもなく応える。
「うん、すごいでしょ」
白鳩は尽きることを知らないように、今も次々と降りてくる。あまりの多さに最初のパンを諦め、全てエサにすることに決めた。
「あんたも、やる？」
パンを大雑把に分割し、半分差し出しながら誘ってみる。
「……いえ。見ているだけで、十分です」
ノリの悪い娘だ。
「鳩、嫌い？」

「……いえ。わたしは、嫌いじゃありません」
じゃあいいじゃない、とパンを投げ渡す。
彼女は拳銃を手にしたまま、器用に受け取る。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
夢のように、礼拝堂が白く染まっていく。
違和感が、あった。なぜか彼女の周りに、鳩は寄り付かない。
なんとなく、あたしも気付いていた。彼女の振り撒く臭いに、鳩は恐れを抱いている。
それは、死の臭いだ。
「……たくさん、殺しましたから」
ぽつり、と彼女が口にする。
なるほど——嫌いなのは彼女の方ではなく、鳩の方だ。そういう意味で先ほど「わたしは、嫌いじゃありません」と言ったのだ。
自らの穢れを自覚していなければ、できない発言だった。

ばさばさばさ。
ばさばさばさ。
地面を埋め尽くした鳩たちが、椅子まで上がってくる。
「……今も、殺してきました。少し変な人ですけれど。とても、とてもやさしい人でした」
あたしに向かって言ってるような、独り言のような。それとも、神にでも語りかけでもしているようなな。
「そう」
殺人自体に関しては、特に驚かなかった。
この島で殺人を犯すことを否定したまま生きている人間などまだ残っているのだろうか。あたしだって敵を殺すことに躊躇はない。利己的な動機の殺人ですら、この狂った島では正しい行いなのだ。
「どうして、殺したの？」

だから、尋ねてみた。
「……生き残るために。去ってしまった彼を、待ち続けるために。そのために、殺しました。……たくさん、殺しました」
　抑揚のない彼女の声から、ほんの僅かに苦渋の響きを感じることができる。
「……じゃあ、どうしてあたしを殺さないの？」
　聞かないわけにはいかなかった。

　ばさばさばさ。
　ばさばさばさ。
　虚しく羽音が響き渡る。

　季節はずれの雪の中、彼女とあたしは戦っている。氷原の悪寒を背負って、あたしは彼女と戦っている。人知れぬ悲しみを抱いて、彼女は彼女自身と戦っている。
　決着は、まるで見えなかった。
　そもそも決着なんてものが、あるのかどうかさえ解らなかった。

476　あなただけは　～蜘蛛の巣より～

――わずかばかり、時は遡って――

　ちりん、と鈴が鳴った。
　微睡（まどろ）みがちだった弥生の意識が、とたんに現実へと呼び戻される。
　横に倒していた上体を素早く起こし、鈴の鳴った方角を特定する。
　続いて体のそばに寄せてあった荷物を抱え、迎撃の体制を整える。
　そうして弥生は木々の陰に身を隠しながら、音の発生源の方を数瞬、目を凝らすようにして見た。
（近づいてくる者の気配はない……）
　つまり、網にかかった獲物はその蜘蛛の巣の外辺

を通過し、そのままどこかに立ち去ろうとしているということになる。
（これ以上、自らの手で罪のないはずの人を殺めるのは気が重いこと。そして、できれば私のあずかり知らぬところで潰しあってくれれば、と思っていたのもまた事実です……。が、私の張った罠を、無防備に通過していく人間がいるのなら。こちらのリスクを最低限に参加者の数を減らすことができるのなら……）
弥生は、静かに立ち上がった。
そして、なるべく音を立てないように、且つ、できるだけ素早く、鈴の反応があった方角に脚を進めたのだった。

間合いを詰めた弥生がその視界に納めたのは、あろう事かあの観月マナだった。
それにもう一人の少女が伴われているが、それはこの際どうでもいいことだった。
殺すことになるのなら、と思っていた対象が今、目の前にいる。
（マナさん、あなたさえいなければ。あなただけは私の手で……っ！）
その思いは、弥生自身の弱さの裏返しなのか。
それとも目標を失った弥生が作りだした歪んだ蜃気楼なのか？
瞬間、弥生は衝動的に機関銃の引き金を引いていた。
……的を絞ることすら、満足にできずに。

477　歪む世界

鐘が鳴る。鳩が飛び立つ。広場を埋めた群集の祝福が――聞こえる。
そう。聞こえたのだ。水瀬秋子の耳には。
突然、秋子は歩みを止めた。そして、

「……祐一？　そう。そこにいるんだ」
と、呟いて笑みを浮かべる。後ろについていた二人は何事かと顔を見合わせる。
「ねぇ、聞こえたよね？」
振り返り、御堂たちに秋子は問いかける。詠美はすぐさま御堂の背中に隠れると、ぎゅっとその服の裾を握る。
「何がだ？　何も聞こえねぇが」
「うそ」
きっ、と秋子の目に光が宿る。
「聞こえたもん。祐一がここで待ってる、って声が。祝福の鐘の音が。祝ってくれる、みんなの声が」
おいおい。と御堂は内心で舌打ちをする。やっぱついて行くという俺の判断は間違ってたのか？
「で、どこから聞こえたんだ？」
「決まってるよ」
唇の端を歪めて笑う。
「結婚式は、教会でやるんだよ」
ふふ、と笑い声を漏らす。だが、この辺りからはその教会とやらがどこにあるのかわからない。
木の陰に隠れて見えないのかもしれないが、それにしては秋子が聞こえたという鐘の音を御堂は聞くことが出来なかった。
おいおい、俺の耳がどうかしちまったのか？　と背中の詠美を見ると、詠美もふるふると首を振る。
こいつにも聞こえないらしい。と、いうことは恐らく幻聴か。
突然、秋子はうろたえる。そしてぶつぶつと繰り返した。
「どうしよう、早く行かなくちゃ。みんなが待ってる。お母さんが、祐一が待ってる。待ってる。待ってる……」
と、意を決してどこかへ秋子が駆け出――そうとするが、背中のソレが重いのかなかなかスピードが出なかった。
「……」

すと、と立ち止まると……秋子は憎々しげに吐き出した。
「……これ、邪魔……っ！」
どすん、と鈍い音がしてソレは地面に落ちた。そして身軽になった彼女は今度こそ走り出す。
——それは綺麗なフォームだった。そう、それは彼女の娘。陸上部に所属していた水瀬名雪の走る姿のように。
「……!?」
地面に落ちたソレを見た詠美はひゅっと息を呑む。そしてやおら両手で口を押さえると——林の奥へ逃げ込んだ。
ち、と舌打ちをしながら御堂は秋子が走って行く様を見やる。そしてデイパックから未開封のペットボトルを取り出すと、
「ほれ。こいつで口でもすすげ」
と、嗚咽し、しゃくり上げる詠美の方へひょいと投げた。
「……」
ふみゅーん、と力無い声がして地面で二、三度跳ねたペットボトルを詠美が拾い上げる。
うっうっ、と泣きながらもうがいをしているようだ。
改めて御堂はその死体を冷静に観察する。致命傷は——確認するまでもない。
原型を留めていないその顔の傷だろう。あまりに酷い死に様に、御堂は思わずため息を漏らす。
「一応、弔ってやるか。強化兵が弔いたぁ、笑えねぇ冗談だな。坂神が見たら何と言うだろうな……けっ」
ひょいと抱えあげて、近くの木陰に横たわらせる。血がほとんど流れ出たためか、その身体は驚く程軽かった。
目を閉じてやろうかとも思ったが、目がどこにあるのか判別しにくかったので諦める。

その代わり、両手を胸のところで合わせてやる。
――と、御堂の指が何か硬いものに触れた。
「？」
罰当たりかもな、と御堂はふと思ったがとりあえず利用できるものは何でも利用するのが戦場の鉄則だ。御堂は名雪の胸ポケットからそれを抜き出す。
と、その正体は冊子だった。役に立ちそうも無いと判断し、戻してやろうとぱらぱらとページをめくって――御堂の顔が歪む。
「おいおい、これは……と、いうことは」
「ねぇ、したぼく？」
突然の詠美の声に、御堂はその冊子を懐にしまうと振り返る。
「あの、その……し、死体をどこか別のところに……」
と、そこまで言ってまた思い出したのか、うっ、と口を押さえるとふみゅーんとまた身を隠す。
「あー、弔っておいたから出て来い」
やれやれ、と御堂は頭を掻いた。
「全く。最初にあの死体を見たときは案外平然としていた癖によぉ」
「だ、だってだって！　あの時は顔を伏せてて、しかも髪で顔が隠れてたから……うっ」
「あー、悪かった悪かった。だからもう吐くんじゃねぇぞ」
詠美は口をハンカチで押さえ、潤んだ目で御堂を睨み付けると、吐き捨てるように叫んだ。
「むかつくむかつくちょおむかつくーっ！　なによ。なによなによなによぉっ！」
「へいへい、すみませんでした。……おい、こいつをどう思う？」
怒り心頭の詠美に、御堂は先程名雪のポケットから抜き取った物を突きつける。
「何、これ？　……がくせいてちょお？」
詠美はその学生手帳を片手で受け取ると、ぱらぱ

らとめくろうとして——表紙を開いたところで止まる。
「……え？」
そこには、のほほんとした少女の顔写真とその氏名らしきものが載っていた。
「ねぇ、この『みなせなゆき』って名前、さっきの女の人の名前じゃないの？」
「確かに、そう言ってたよな」
「でも、この写真はあの人と違うよ。……ふんいきは似ていると思うけど」
「そうだな。この写真の女は……あの死体だ」
「そ、それって……どういうこと？」
ちょっと推理マンガみたいだ、華麗な探偵詠美ちゃんさまとそのしたぼく。——なんて思いつつ詠美は御堂に先を促す。
「あの女が名前を偽ってるってこった」
「な、なんでそんなことを？」
「さぁな」
御堂は詠美の質問を軽く流すと、秋子が走り去った方へ歩み始める。詠美も慌てて後を追う。
「……或いは、そう思い込んでるのかも知れねぇな」
「思い込む……？」
御堂はそこで立ち止まると、詠美の方へ向き直り静かに言った。
「いいか、これ以上あの女に関わるとロクなことが無いと思う。それはお前も感じたよな？」
うんうん、と詠美は頷く。と、言うか既にしている。華麗なクイーン詠美ちゃんさま、胃の中のモノを全てリバース。
「このままあの後を追うか、それとも別の行動を取るか。好きな方を選べ」
「あ、アンタはどうするのよ？」
御堂は、へっと笑うと詠美の頭を軽く小突いた。むっとして御堂を睨み付ける詠美。
「お前の意見に従ってやる」

「ふみゅ？」
ぽかん、と口を開ける詠美。
「俺はお前の下僕なんだろ？　今回は言うこと聞いてやるって言ってるんだよ」
詠美は『信じられない』という疑惑の目を御堂に向ける。
「不満そうだな。わかった、じゃあここでおさらばだ」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
背を向ける御堂を慌てて引き止める御堂。
「どっちだ？」
「わ、わかったわよ！　えっと、えっと……今決めるから待ちなさいよね！」
しばしの時間、詠美は思考してそして御堂の方へ向き直り言った。
「決めた！」
ふふん、と胸を反らしながらの詠美の提案に、御堂は「わかった」と頷くと行動を開始する。

「行くぞ」
こくりと頷く詠美と、にゃあとぴこと鳴く獣たち。
御堂はこういうのも悪かぁねぇな、と思い……そしてぶんぶんと首を振る。
ちっ、全くどうかしちまってるぜ俺はよぉ。——だが……さっきは俺の判断でこんな目になっちまった。
じゃあ今度は別の方法を試して見るってのが筋だろう？　だから、今度はこの女に決めさせた。
これでまたヤバい目に遭ったなら……そうだな、今度はあの獣たちにでも決めてもらうか？
御堂は幾分身体が軽くなっているのを感じた。まだ傷は完全には癒えていないが、これで十分だ。
坂神とやりあうのでも無ければ。
——そう。幾分生まれた余裕が、御堂にこんな酔狂な真似をさせた理由かもしれなかった。

478

鳥

額に手を当てたらべとりと汗が掌についた。
相当汗を掻いていたみたいだ。
「往人さん、すごくうなされてた。大丈夫？」
観鈴は俺の汗をハンカチで拭いてくれた。
「あぁ、大丈夫だ」
国崎往人は地面から顔をあげた。
その瞬間のこと、国崎往人は無意識のうちに腰につけていたデザートイーグルを引き抜き、目の前のそれに向かって照準を定めていた。
「えっ、えっ!?　往人さんっ!?」
観鈴の声ではっと自分を取り戻し、デザートイーグルを地面に向けた。
観鈴の肩にはさっき夢にでてきた、黒色の生物、鳥がいたのだった。
「なんなんだ、その鳥は」
「カラスさん」
観鈴は即答する。
「それは観たら判る。そいつはなんでお前の肩に乗ってるんだと訊いているんだ」
「さっきここにバッサバッサバッサと飛んできて」
観鈴は両手でバッサバッサと鳥の飛ぶ真似をした。
「そしてね、私の近くに降りたの。こっちにおいでって手招きしたらこっちにきて、それから……」
「もういい」
そう言って往人は、朝食の用意を始めた。
「朝飯は、鳥肉か……」
そうポツリと呟くと、観鈴の肩に乗っていた鳥はバッサバッサとどこかに飛んで行ってしまった。
「あーあ、いっちゃった……」
「そうだな」
「往人さんがあんな意地悪言うから……。ひどい……」
観鈴は涙を浮かべる。

（夢がどうこうという問題じゃない。そもそも烏ってのは不吉なんだ）
「いいから、晴子を起こして来い。朝食にするぞ」
「もう、多分昼食の時間」
空を見上げると、太陽は高くあがっていた。

479　気持ちは灰色

朝と夜の境界。
奇妙に薄明るい光を浴びて、立ち止まる人影が一つ。教会の天窓へ吸い寄せられるように、限りなく群がる鳩たちを見上げ、少なからず驚きながら歩き出す。
最初に教会へ辿りついたのは、詩子だった。喜びと不安を胸に、息を切らせて中を窺う。
（うわ、すご……）
埋め尽くさんばかりの白鳩に囲まれて、二人の少女が座っていた。中ほどの席に、見知らぬ少女。そして最後尾にいるのは……
（茜……！）
声をかけようとしたそのとき、二人の会話が耳に飛び込んだ。

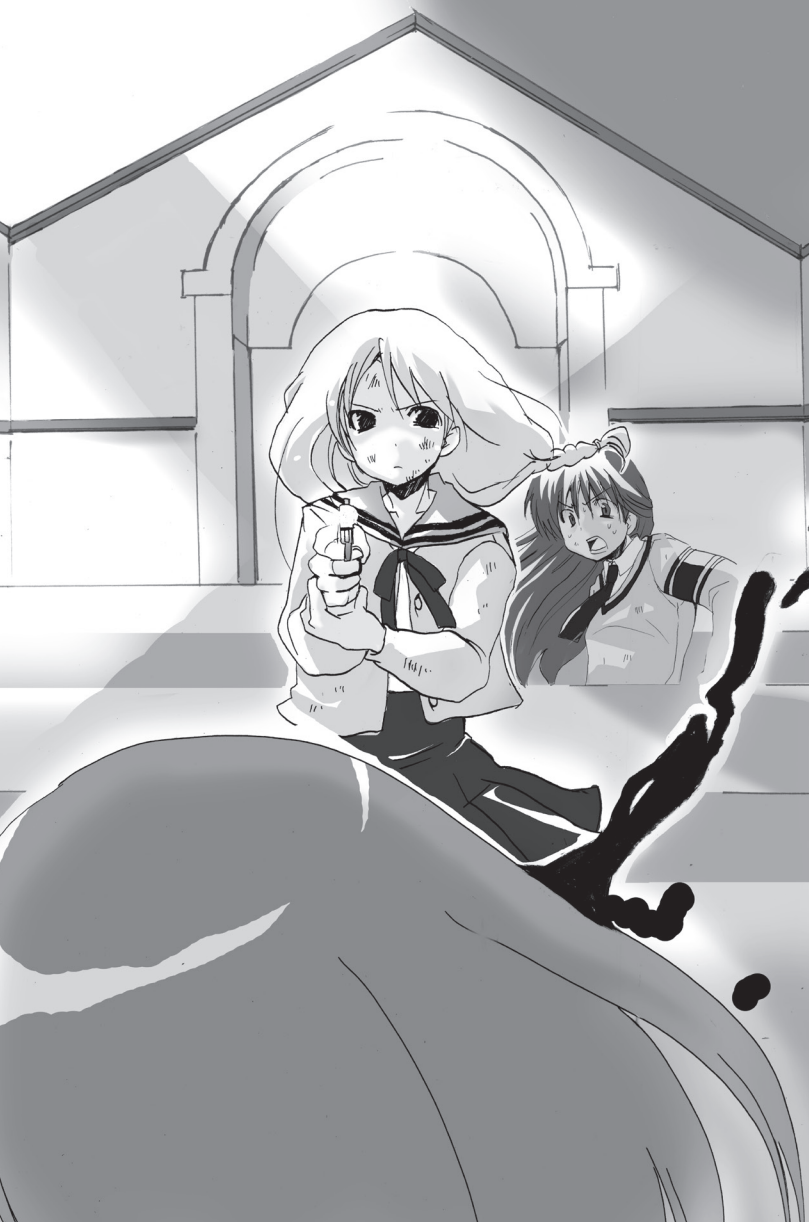
『どうして、殺したの？』
茜に対する問いかけ。
それは、詩子自身も知りたかったこと。開きかけた口を再び閉じて、荒い息を整えながら、羽音に紛れる会話に耳を澄ます。
『……生き残るために。去ってしまった彼を、待ち続けるために。そのために、殺しました。……たくさん、殺しました』
それを聞いても、不思議と驚かなかった。
待ち続ける茜の姿を、一番長く見守っていたのは詩子だった。誰を待っているのかも、茜の思いの強さも知っている。
しかし一方で、茜を待ち続ける自分がいて、今で

は茜を追う人間がいることも知っている。だから、詩子の茜に対する気持ちは、複雑だ。待ち続ける茜を応援する気持ちと、不満に思う気持ちが、混在している。茜が殺人すら辞さない強い意志をもって、彼を待ち続けていたことは理解できても、その行為に白黒をつけることはできない。
『……じゃあ、どうしてあたしを殺さないの？』
息を飲む。
引き金を引く意志に等しい、危険な問いかけ。曖昧さを許さぬ、強い言葉が茜を追い詰める。
『……わかりません』
茜が俯き、答える。
『……全員殺してでも生き残る、そう思って最初の一人を刺したとき。わたしは狂っていたのかもしれません』
祈るように拳銃を抱え、言葉を連ねる。
問いかけた少女は、黙って茜を見つめている。
『本当に全員殺すなんてことができるかどうか、全く自信はありませんでした』
茜が、ゆっくりと席から立ち上がる。
『そんな中でわたしは、待ち続けようとする自分を否定する自分がいることを、知ってしまいました』
拳銃を手にしながら組んでいた両手を、だらりと降ろす。
『そして、それを後押しする二人の存在が……わたしを苦しめるのです。待ち続けたわたしの過去と、待ち続けるわたしの未来を守るために、その二人を殺せるものだろうかと……それればかり考えていました』
鳩達が入り込んだ天窓を見上げて、搾り出すように言う。
苦悩の深さが茜を饒舌にしていたが、遂に言葉を切った。
一瞬の、空白があった。
問い掛けた少女が茜から目を離して、ちらりと詩

子を見、再び視線を戻す。
――議論の時間は、お終いだ。そう言っているようだった。
『それで？　どうするの？』
『はい……決めました』
茜がくるりと振り返るのと同時に、問い掛けていた少女が座席の上に立ち上がる。続いて砂塵を舞い上げるように、鳩が飛び上がる。茜の腕が上がる。引き金を絞る。全てがスローモーションのように、緩慢に見える。
そして銃声が、轟いた。
『……わたしは、生き方を変えることは出来ません』
失われていく意識と視界の中で。
茜が泣いているのが見えた。
綺麗な涙だな、と。
倒れながら、詩子は思った。

祐一の声が聞こえたような気がしたが。
もはや、届かなかった。

480　くそったれたゲーム

「はあ……俺達って貧乏くじだよな……」
「まあ、そうだな」
男が二人、溜息。
森の中に存在する木の小屋、施設というにも馬鹿馬鹿しいその小さな拠点の守備。ＦＡＲＧＯ教団から狩り出されて三日目、すでに勤務態度もなげやりになりつつある。
鈴木は、この任務の為に買いだめておいたセブンスターの箱から一本煙草を取り出す。
「おまえ、ヘビースモーカーだよな……」
「そうか？　まあ、こんな任務についたんじゃ吸いたくもなるぜ……田中、お前も吸うか？」
「いや、いい。煙は駄目なんだよ。前に一度試した

けど俺には向かないな。それに……彼女が嫌がるんだよな……煙臭いのをさ」
「それ、当てつけか？」
「そうかもな、お前もいいかげんやめとけよ、体に毒だぜ」
「やめられないんだよ、これぱっかりはな。お前も酒はやめられないだろ？」
「まあ……な」
このような辺境の場所の守備。
大事な何かがあるわけでもないのに、何の意味があるのだろうか。それ以上に、このゲームに何の意味があるのだろうか。
だが、ＦＡＲＧＯ教団の命令とあらば従わないわけにもいかなかった。
はっきり言って、この任務は異常だ。
ただでさえ、人殺しのゲームなんて気分がいいものじゃない。ＦＡＲＧＯの中じゃあの高槻のように心から楽しんでいる者も多いようだが、この鈴木、田中、そして中で仮眠中の佐藤は違う。
所属している教団の関係上、口に出しては言えないが。
（こんなゲームクソ食らえなんだよ）
その思いは、大部分のゲーム参加者とあまり大差なかった。
「高槻の奴、いい気味だな……」
「そうだな……まあ、あんな奴でも少しは同情するけどな……まだ生きてんのかな……」
高槻の真の狙いも知らないまま、そう話す。
この辺境の地の守備に、なんの意味があるのか
——実は意味などない。
彼らをこの地に送り込んだのは実はＦＡＲＧＯではなく高槻の命令である。高槻にとって、気に食わない奴等を死の舞台へと送り込む。単純に、それだけだった。

巳間良祐もまた、そんな犠牲者の一人だったが

――

「なあ、ここだけの話、ＦＡＲＧＯってどう思う？」

「イカレてる……という答えでも期待してるのか？……分からない……というのが本当の所だな」

まだ入りたての下っ端である鈴木達は、まだＦＡＲＧＯの本当の姿を知らない。不可視の力がどんなものかも、中で行われている陵辱の宴も。

それでも、ＦＡＲＧＯは異常だ……位には感じ取ることが出来た。

「だが、間違っても自分の彼女を教団に入れる気にはならないな」

田中が胸からペンダントを取り、開ける。

「……それは……ロケットか？　女物じゃねぇか？」

「そう言うなって……一応彼女からの贈り物なんだよ。もうすぐか……楽しみだな……」

「そういえばそうだったな」

たしか、田中はこの任務がなければ今頃は彼女と式を挙げていたはずだ。

「ちょっと予定が延びたけど……楽しみだよ」

この腐れたゲームが終われば……

「結婚か、うらやましいな」

「どうなんだろうな……いろいろ縛られて大変そうだけどな」

「そういうセリフは鼻の下をのばしたまま言うもんじゃないぜ」

「ん？　ははは……」

ロケットを開け、中の写真を見ながら田中が笑った。

女性が幸せそうに微笑んでいる。

絶世の美女……とはとてもいえないが、本当に幸せそうなその表情が写真の中にあった。

「やっぱさ、うらやましぃよ。彼女にそんな表情をさせられるお前が……さ」
その幸せな表情は、どんな絶世の美女よりも美しく感じられた。
「鈴木、そろそろ交代の時間だろ？　少し寝とけよ、ついでに佐藤も起こしてきてくれ」
「ん……じゃあ、寝かせてもらうわ……」
二人は気づかなかった。ずっと前から復讐に身を焦がせ、物陰から機会を伺う者がいることを。

ぎぃっ……
きしむ小屋の扉を開けて、中へと滑りこむ。
「まったく……ほんとに何もねえとこだよな……なにが悲しくてこんなところで……おい、佐藤、時間だぞ、起きろー」
何もない部屋、隅に薪用の木材が積まれているだけの殺風景な小屋。
その横で床にごろ寝している佐藤を揺さぶった。
「なんだ……もう時間か……」
眠そうな目と、だらしのない無精髭をこすりながらむくりと起き上がる。
「どーでもいいが……お前、髭伸びるの早いな」
「ほっとけ……」
そのときだった。
パラララッ、パラララララッ！
ダン！　ダン!!
パラララッ!!
すぐ外で、銃撃の音。
「な、なんだっ!?」
佐藤が傍らにおいてあったショットガンを手に立ち上がる。ポンプアクション式のそれを構えながら扉の外を見やる。
何の音も聞こえない。
「さっきの音……田中だった……!!」
鈴木もまた支給されたグロッグを手に、扉へと近づく。今の銃撃戦に田中に支給されたオートマチッ

ク拳銃、ブローニングの音が混じっていた。
「田中っ‼」
イヤな予感を振り払うように扉の外をうかがう。
動く者はいない、そう、動く者は。
「たな……か……？」
動かぬ者が、一人いた。
「たなかっ！」
ピクリとも動かない田中の周りに染みだす大量の紅の血。
「田中ーーっ！」
――何倒れてんだよ……帰ったら挙式が楽しみだっていってたじゃねぇかよっ！
「待て、鈴木っ！」
佐藤の静止の声も、手を振りほどいて飛び出す。
（田中っ……彼女と……幸せになるんじゃなかったのかよっ！）
パラララッ‼
飛び出した瞬間、鈴木の世界が暗転した。

鈴木の手から離れたグロッグがカラカラと地面をすべり、田中の体に当たって止まる。
一瞬でその銃は血に飲まれた。
「くそっ！　くそっ‼」
ドンッ！
ショットガンが火を吹く。
パララララッ‼
小屋の扉の向こう、林の奥から銃声が飛んだ。幾つもの銃弾が小屋の木の壁を、扉を穿つ。パラパラと小さな木片が佐藤の頭の上に降り注いだ。
「なんだってんだ、ちくしょうっ‼」
銃声が途切れたと同時に、扉の影からショットガンを放つ。
ドン！
「誰だ、畜生っ！」
クソ食らえゲームの参加者かっ？　佐藤は深呼吸しながら相手を慎重に探る。
パラララッ‼

「くっ！」
だが、扉の影から顔を出すこともままならない。
ドンッ!!
また、狙いを定めることすらできないまま一発。
「くそっ！」
また、弾丸が小屋を無差別に襲った。
開け放たれた扉から銃弾が中にまで侵入して、小屋を微かに揺らす。
「ちくしょう、ちくしょう、このままじゃ済まさねえぞっ!!」
鈴木と田中、二人の盟友が、一瞬で沈んだ事実。
憎しみが、佐藤の心を覆い尽くす。
ドンッ!!　――再度、ショットガンが火を吹いた。

音がやんだ。――倒したのか？
散弾が、命中したのかもしれない。
だが、油断は禁物だ……
些細な音も聞き逃さないようにしながら、慎重に扉から顔を出す。
動く者はいない――はずだった。
「ううっ……」
「す、鈴木っ!!」
鈴木のうめき声、鈴木の体が、細かく震えていた。
ドンッ！
もう一度、敵がいたと思われる場所にショットガンを放つ。
動きはない。
ドンッ！
……さらに、あたりに何発かの散弾を浴びせる……が、やはり変化はない。
(倒したのか……)
変化がないことを確かめてから、佐藤はゆっくりと鈴木に近づいた。
「大丈夫かっ!!」
鈴木の手を取る。
「だめだっ……にげろっ……」

「鈴木っ！」
「木の……上っ……」
「………!?」
ドシュッ……！
風を切る音、肉に刃が突き刺さる音。オートボウガンの矢だった。
「がはっ……」
佐藤の体が、崩れ落ちる。
「さ、さとうっ！」
追い討ちをかけるように、佐藤の頭にさらに矢が突き刺さった。
(なんでだ……畜生……田中や佐藤が……なぜ死ななければならないっ!!)
目の前に現れた女を憎々しげに睨む。
「主催側の人間ですね……このような場所で何をしているのですか？」
華麗に地面に降り立ち、木の根元に置いてあった機関銃を手に取る。
「知るかよっ!!」
本当に、なんで俺達はこんな所にいるのか……
「……」
女は田中、鈴木、そして佐藤に支給されたそれぞれの武器を手に取ると、
「ここで死ねれば幸せでしょう？」
新たに手にとった拳銃を鈴木へと向ける。血で濡れた、拳銃を。
「悪魔めっ……」
どこを撃たれていたのか分からないが、すでに鈴木の体は動かない。
撃たれたら、それで終わりだ。
「悪魔……？　そうかもしれませんね。ですが……」
ゆっくりと鈴木に歩み寄る女。
「あなた達もでしょう？」
冷たい微笑み。
「あなた達が作ったルール無用のゲーム……どんな

行動をとっても非難される筋合いはないはずです。たとえそれが人道からはずれていても……ね」
「こんなゲーム知ったことかっ……」
「あなた方の事情など私も知りませんわ」
「なん……だとっ？」
「このゲーム自体、参加者の都合など考えてもいないでしょう……？　あなたが一体どういう事情でこのゲームに参加しているかは知りませんが……」
バンッ!!
「ぐあっ！」
「あなた方を殺すことにはためらいありません」
鈴木の胸から鮮血が溢れる。
「ここで死んだほうが幸せかもしれませんよ。もしも私が生き残れば……どんな手段を使っても……」
さらに、三発、銃声が響いた。
「必ずあなたたちを追いつめるつもりですから。ゲームに関わった者全員、死よりも残酷な方法で」
（かはっ……）

鈴木の意識が遠のいていく。
「それが……私がこのゲームで選んだ道ですから」
或いは、ゲームが終わった後ですね……と、女が笑う。
「もう守りたいものは何もありません。私もまた、死んだ方が幸せなのかも知れませんが……」
女が、立ち去る。
「私のすべてを奪ったあなた方だけは……私は決して許しませんから」

このゲームの管理者達はすべて罪。そうかもしれない。
この女はすべてを失い、そして憎み、罪なき参加者を殺してでも生き残ろうというのか……
すべては俺達に復讐する為に。
冷たい機械のような女だったが……その背中は泣いているように見えた。

まったく、クソったれゲームだよな、田中ぁ……
鈴木が最期に思ったのは、そんなことだった。

481　異端

「――――――ぬぅっ⁉」
突然に源四郎は目覚めた。これは……先ほどまで戦っていたはずの自分は……、そういぶかしむ。何故自分は倒れている。何故自分はここにいる。ゆっくりと源四郎は上半身を起こす。
「……気づいたか」
ゆっくりと源四郎はその声がした方向へ顔を向ける。それはもちろん先ほどまで自分が立ち会っていた相手、坂神蝉丸だった。彼の顔を見て源四郎は穏やかに悟った。自分が敗北したという事実を。
蝉丸を見ると、大きく左腕の辺りが裂けている。
「……派手にやられたものだな」
「あんたにやられたのだがな」
蝉丸は失笑した。――あの瞬間、老人の得意としていた見切りのお株を奪う寸前の判断が成功した。源四郎に着地をさせるわけには行かなかった。そこから遠心力たっぷりの後ろ廻し蹴りのコンビネーションがあるからだ。まず突き出した左腕をガードレール代わりにして、半身の溜めを全開にして右フックを老人の胸に打った。
「――いい突きだった。しかしそれが本丸ではなかったのだな」
そう、渾身の一撃でもまだ足りない。源四郎の敗北を決定付けた驚愕の二撃目がそこにあった。狙いは源四郎の顎部、飛び蹴りをいなす為だけに見えていた左腕の奇襲だった。その運動のベクトルは飛び蹴りの軌道の正に真逆、死角から飛び出したアッパーカットが見事に源四郎の意識を消失させた。
「まあ、無傷とはいかなかったが」
勝負を決めた一瞬の攻防は、ダメージだけなら蝉

丸の方が重かった。見事源四郎を討ち取った後、彼は一瞬の残身の後そのまましゃがみ込んだ。踏み込んだときに脇腹に蹴りが届いてしまっていたのだ。正になりふり構わぬ攻撃だった。

「いかに負傷が大きかろうと、戦場においては戦闘不能になるべからず。……青年、貴様の勝ちだ」

　源四郎は得心したような表情でそう言った。

「全盛期の頃のあんたと闘って見たかったものだ」

「小僧が！　今の貴様の実力では相手にもならんわ」

「そうか」

「そうじゃ……ふわっはっはっは」

　思わず口を衝いて出た蝉丸の軽口に、思わず源四郎は敗者らしくない本音で答えた。両者の顔に笑みが浮かんだ。そこに穏やかな空気が流れた。

「(・∀・)おじいさん……」

　月代は源四郎に近づくと、びくびくした様子で言った。

「ん、なんじゃ嬢ちゃん？　……そうか。わしが怖いか。それも仕方ないかの」

　ほんの少しだけトーンの落ちた口調に、慌てて月代は口を開いた。

「(・∀・)ぜっ、全然そんなこと無いよ！　蝉丸と喧嘩してるのはちょっと恐かったかも知れないけど。でも、なんかやってるうちにおじいさんも蝉丸も凄い楽しそうな顔になってるんだもん。あんな顔する人に悪い人はいないしそれに……」

「……それに？」

　源四郎は腰を低くし、自分よりも遥かに低いところにある月代の顔を覗き込むようにして聞いた。

「(・∀・)……目が、透き通ってる」

　月代は満面の笑みでそう言った。脇のほうで蝉丸が笑っていた。源四郎はきょとん、とした表情になったが、少しすると声をあげて笑い出した。

「ふはは……、そうか。ありがとうな、嬢ちゃん」

　月代の瞳に灯った光が源四郎にはとてもまぶしく

感じられた。どこか懐かしい、天真爛漫な瞳の色。
そう、綾香お嬢さ――
「(･∀･)ん、なんか言った？」
「ん？　何も言っておらんぞ。ふぁっふぁっふぁ！」
大声で笑いながら源四郎は月代の頭をなでた。ごつごつとして無骨な指に似合わない、優しげな動きだった。
「やぁん、ちょっと、やめてよぉ」
月代はそんなことを言って反抗する、しかしその表情には本心から嫌がっている様子はなかった。源四郎はその様子を見つめながら……ほんの少しの憂いと懐かしさを吐き出した。
「礼を言いたい」
蝉丸の呼びかけに、そっと源四郎は振り返った。
「忘れていたことが、思い出させたような気がする」
蝉丸の瞳が真っ直ぐ源四郎を映している。
「……そうか、よかったのぉ」
それを見て、源四郎は微笑しながらそう言った。
「――いけませんなぁ、そんなことでは」
ダァンッ！
ダァンッ!!
銃声が、二発。……一つは蝉丸の肩、そしてもう一つは月代の眉間を。
「なん……だ……と？」
「おおっとぉ、狙いがずれてしまいました。貴方を狙ったつもりでしたが」
やけに鼻につく嗄れ声が響いた一瞬後、森の奥から発砲した男が姿を現した。――その男は長瀬源三郎。
「長瀬の名の下に、一片の土もつけることはならない。そのことについてはどんな例外であっても認めるわけにはいきませんなぁ」
白い硝煙を漂わせる拳銃は、彼が長年慣れ親しんできた愛銃だった。

「そう、例えあなたであってもそれは変わらない。本来なら粛清ものですが……、同じ粛清するのなら、その事実そのものを消してしまえばいい」
「貴様ッッ!!」
蝉丸は呪いを込めた視線でそのアナーキーな狙撃手を睨んだ。月代はうつ伏せに倒れたまま……もう、動かない。
「まだ生きてたんですかぁ？　うざったいですねぇ」
ダァンッ！
「がっ……！」
だるそうな口調であった。それと裏腹に彼の手際は冷酷なほどに鮮やかだった。すかさず放たれた銃弾は、蝉丸の顔を目掛けられていた。だが、必殺であったその軌道を本能的に蝉丸は避けることが出来た。もっともその銃弾は彼の僧帽筋の辺りを貫いてはいたが。
「……まだ生きていらっしゃいますか。私、こう見えて倹約家でしてね。色んな無駄を省くように心がけてるんですよ」
淡々と語りだす源三郎。その話はどこか現実離れした口調に思える。
「ま、あれですね。要するに無駄が嫌いなんですよ。だから無駄弾も嫌いなんですねぇ。そちらのお嬢さんのようにあっさり死んでくれれば、弾も節約できるしあなたも苦しまずにすむ。――何より、私が楽です。ほら、いいことずくめじゃないですか？」
「貴様ァアアアアッッ！」
「あぁハイハイ、今殺して差し上げますね」
チャキッと音を立てて、源三郎の拳銃が再び蝉丸のほうを向いた。
――気付いていただろうか？　月代の傍にいたはずの源四郎がいつの間にか彼の視界から消えていることに。彼の背後に、冷徹な風貌の巨躯が立っていることに。
「……そこまでにしてもらおうか」

凍るような冷たい声が、源三郎の耳を通り抜けた。
「私を監視していたのか？」
「……基本的にね、困るんですよ。勝手な行動は」
源三郎は応えた。声だけならばそこに動揺してい
る様子などは微塵も見られなかった。
「私が好きでやっていることだ、誰にも文句は出さ
せん」
「で、その始末がこれだ。結局あなたがやったこと
は私たちにとっては不利益でしかなかった。予想外
の要因に引き起こされる予想外の事象など最悪です
よ。我々のような立場の人間にとっては」
「……我々はゲームに極力干渉しないのではなかっ
たのか？」
「自らその原則を破っておられて何をおっしゃるん
です？　おかげで私がこっちにまわされる羽目にな
ったんですよ。まあ、それでも汚点を残されるより
はマシですがね」
「人道すら……忘れたか」
「世迷言は後でゆっくり聞きましょう」
源三郎は、躊躇無く引き金を引いた。だが、それ
より速く――。
「ぐがぁっ⁉」
源四郎の拳が、源三郎を樹木に吹き飛ばしていた。
「おのれ、……源之助」
苦虫を潰すように、苦い顔で源四郎は呟いた。だ
が、彼に感傷に浸る間など無かった。
ドギュウウゥン‼
銃弾が、源四郎の右肩を貫く。
「ぐぅ⁉」
吹っ飛ばされたはずの源三郎が、まるで何事かも
無かったように発砲したのだ。――いや、何事も無
かったどころの話ではない。この俊敏性は普通の人
間、単なる警察官のそれを遥かに凌駕している。
「源之助殿の意向を知らなかったとは言いますまい
な、老⁉」
高らかに源三郎は叫んだ。

「ならばあなたも所詮は異端！　この場で私が処分して差し上げましょう！」
そして、再び発砲する。だが、それを見切れない源四郎でもなく――。
「抜かせ小童が！　貴様は勝負を汚してくれた。その罪の重さ、身を以って知らせてくれるわ！」
弾丸を回避して、源四郎は一気に間合いを詰めるべく駆け出した。
「ちぃっ！」
残弾は一発、不利を悟った源三郎は、一旦森の奥へと逃亡する。ほんの少し時間が稼げれば、銃弾などすぐに補充できるからだ。そして同じように、源四郎も追って森に入っていった。
「く……そっ……」
そして後には、銃弾を受けて傷ついた蝉丸と月代だけが残された。今の源四郎に、彼らを省みる余裕は無かった――。

482　葉子さんのデンジャークッキング

穏やかな朝霧に包まれる住宅街……のなかの一軒の民家に、鹿沼葉子は居た。
高槻を討つための下準備、武器調達のためだ。
（……芳しくありませんね）
所詮、民家は民家。殺傷能力抜群の拳銃や、切れ味鋭い日本刀など置いてあるわけも無く。
（使えそうな物といえば……これくらいでしょうか）
台所の戸棚に一本だけ仕舞われていた包丁。
庭先の物置のなかに立てかけられていた箒。
包丁ではリーチが無く、
箒の柄では殺傷能力に劣る。
と、いうわけで。
（……まあ、些か不安ではありますが）
箒の柄の先に包丁を縛り付けた、即席槍が完成し

た。

……何かしら達成感を得ると、自然に腹が空くものである。

勿論それはＦＡＲＧＯ屈指の能力者である彼女も例外ではない。

世間一般で言う朝餉の時間にはやや早いが、夜じゅう動き回っていたというのも影響した。

そういった諸々の事情があって、葉子のお腹は、ぐう、と音を立てた。

葉子は慌てた。

念入りに辺りを見回す。

(……誰かに聞かれた、ということは……ないですよね)

誰も居ない事を確認し、ほっ、と胸を撫で下ろす。

こんな醜態、他人に見せるわけにはいかないからだ。

しかし、お腹が空いているという事態が解決したわけではない。

ここに至り葉子は、ひとつ決心をする事となる。

(朝食を……作りましょう)

だが、一般常識が年齢一桁台のところから欠如してしまっている葉子にとってガスコンロを扱う、という行為は危険そのもの。

……というか、元栓を捻るという行為が思いつかず、火を点けられなかった。

どうせ作るなら一から、とひそかに野望を抱いていた葉子だったが、仕方なくレトルト食品を探すことにした。

だがそれも、元々この家には無かったのか、はたまた他の参加者が持ち去ったか美味しく頂いた後なのか、なかなか見つからない。

それでも葉子は諦めなかった。それはまさに執念

としか言い表しようがない。
そして、その執念は実を結んだ。
（……パックの……白米？）
レンジでチンして調理するタイプの、何の変哲も無い白米。
だが、食べ物である。葉子が今何よりも望んでいた、食べ物である。
（これなら何とか……えぇと）
パッケージに記された指示に従って、まずは点線まで、ぺりぺりとフィルムを剥がす。
（次、は）
調理法には、『電子レンジに入れて◯分加熱せよ』とある。
（電子レンジ……）
蘇る遠い日の微かな記憶。確か母が使っていた四角い箱のようなもの。
ぐるりと台所を見回すと、その記憶に大分近い物体が目に入った。
（これ……ですよね）
恐る恐るパックをセットし、ボタンを押す。
ぶーん、と、低い起動音が響く。どうやら間違っていなかったようだ、と、葉子はほっとした。
出来上がるまでのほんの僅かな時間。ソファーに腰を下ろし、葉子は考える。
（家事とは、大変なものですね……）
実際に葉子がやった事といえば、単にパックのご飯をレンジにかけただけなのだが、何分慣れぬ作業。葉子は激しく疲労していた。
（生きて帰ったあと、私もこういうことを簡単にこなすことが出来るようになるのでしょうか……）
たったこれだけの事でここまで苦労することになるとは、まさか葉子も思っては居なかった。
自分は何も知らないのだ、と痛感する。
やはり自分は、世の中の色んなことを学んでいかなくてはいけないんだ、と改めて思う葉子であった。

チン、と音が鳴り、低い起動音が消える。
(出来上がった、ということでしょうか)
レンジのドアを開くと、白米が湯気を上げていた。
朝食。
白米を上品に口に運びながら、ふと、ある三人のことを思い出した。
(確か、折原さんに長森さん、七瀬さん……でしたか)
絶望的な状況下において、固い絆で結ばれた三人。
一緒に話した時間はごく僅かであったけれど、彼女らの目は、この状況下においても希望に満ちていた。
……だけど。
出会ったその瞬間から、人は別れに向かって進んでゆく。
時間は有限で、命はひとつきり。
出会いと別れはふたつでひとつ。永遠というものは、この世には存在しない。
葉子も放送を聴いていた以上、長森瑞佳が命を落としたことは知っている。
三人の絆は深かった。その分だけ、別れは大きな傷を残す。
残された二人は、今、どんな心境で居るだろうか。
(喪失を糧にして、再び前を向くことが出来るか)
それとも、
(心を閉ざし、深い闇の中にその身を沈めるか……)
母という、この世でただ一人の存在を殺めた、彼女自身のように。
あの日から葉子は、自分独りで生きてきた、と思い込んでいた。
誰にも頼らず、独りで、自分が強い人間だと信じこんで。
だけど、それは、嘘。

心を閉ざして、ＦＡＲＧＯと言う組織に寄りかかってやっと心の平穏が得られるような人間の、何処が強いと言うのだろうか？

ただ、強がっていただけだったのだ。ずっと。

（それに気付かせてくれたのも、郁未さん……貴方です）

だからこそ、いずれ彼女の前に立ち塞がるであろう高槻は、討たねばならないのだ。

気がつくと、箸はパックの底を引っかいていた。考え事をしていても、箸は止まっていなかった。

「………」

お腹はまだ食べたりない、何かよこせと主張している。

勿論葉子の目的は高槻を討つ事である。今の武器でそれが叶わぬなら、せめてもっと強力な武器を探しにいかなくてはならない。

だが、本能にはやはり逆らえない。

（まだ何か食べ物……あるでしょうか）

腹が減っては戦は出来ぬ、といった言い訳じみた諺が葉子の頭の中を駆け巡った。

冷蔵庫のドアを開く。何も見当たらない、が、今の葉子は必死だった。

そして遂に、見つけにくい場所にひっそりと隠れていた卵を見つけた。

だが、生である。

（生卵を飲むというのは、ちょっと……）

どうしたものか、と悩むこと、暫し。

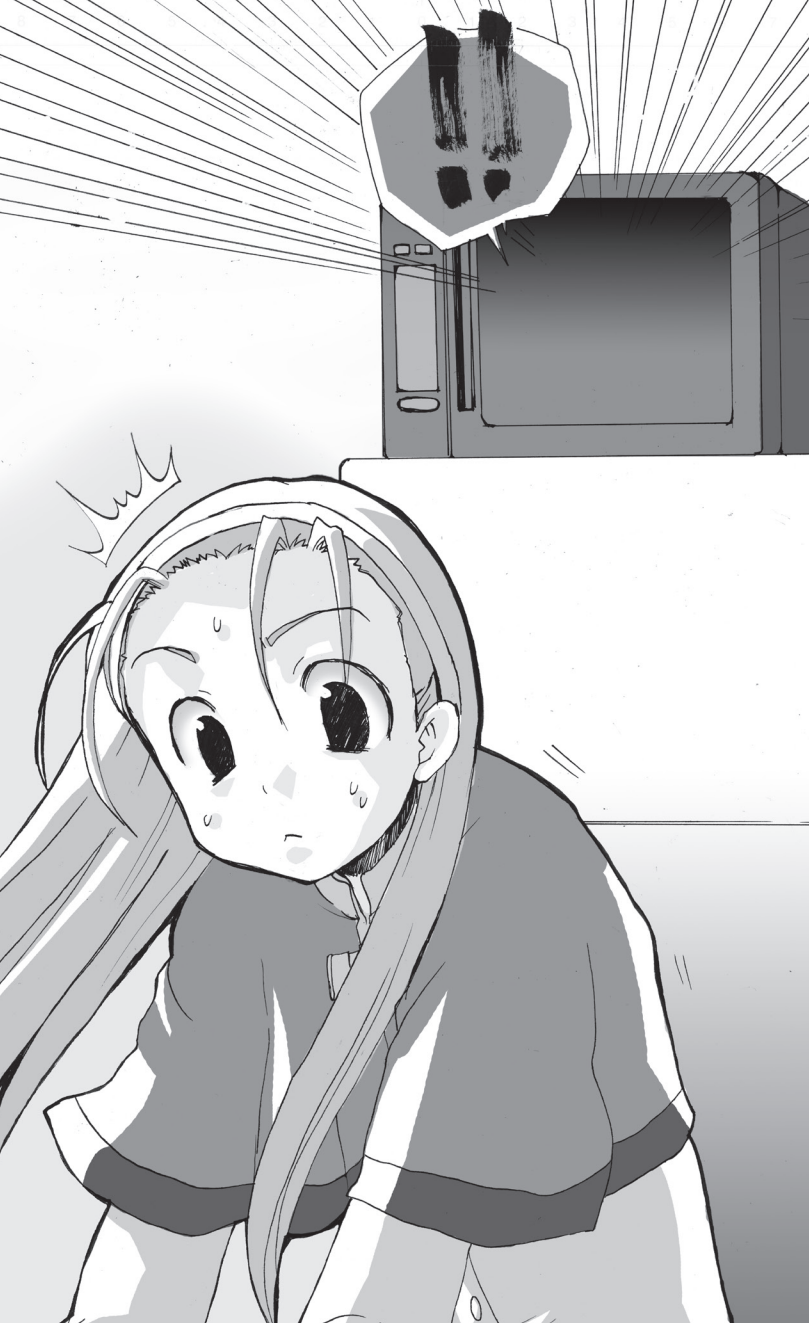
（……ゆで卵を作りましょう）

イケナイことを、思い立ってしまった。

生卵を電子レンジにセット。ボタンをプッシュ。

加熱開始。

あと数分で久方振りにゆで卵が味わえる、と、葉子の心は弾んだ。

その瞬間、

卵はレンジの中で、景気よく爆ぜた。
「…………」
何が起こったのか、葉子には理解できない。
たっぷり五分は呆然と立ち尽くしたあと、その卵がもう食せる状態ではないということを、漸く理解する。
「……安物の電子レンジを使ったのが、間違いでした」
それ自体が間違いなのだが、今の葉子にとって電子レンジは夢を奪う魔の箱でしかなかった。
結局卵は破裂、電子レンジの中はぐちゃぐちゃ、残ったのは半端な空腹感。
葉子はがくりと肩を落とし、民家を後にした。
※生卵を隙間無くアルミホイルで包み、水の入ったコップに浸し加熱すれば、レンジでもゆで卵が作れるそうです。やけどには気をつけて。

483　月代よサラバ!?

「月代!!」
蝉丸が月代に駆け寄る。
二人の長瀬が視界から消えて、やっと彼女の元に辿り着くことができた。
「月代！　月代！」
「(･∀･)せみ……ま……る」
仮面のせいで表情が読み取れないが、かなりぐったりとしている。
蝉丸の手には赤い液体。
「(･∀･)蝉丸は……生きて……」
振り絞るような声。
「月代！　俺の嫁になるんじゃなかったのか!?　こんなところで死ぬんじゃない!!」
蝉丸は月代を抱きしめ言った。目からは涙があふれていた。

「(・∀・)あはは……。お嫁さんに……なりたかったよ……」
「嫁にしてやる！　だから死ぬな‼」
月代の体から力が抜けた。支える意識の無い体は……。重い。
「月代ーーーーーーーーーーーーーーーー‼」
「ん？」
血が流れていない。
良く見れば眉間に銃弾が命中したはずなのに血が流れていないではないか。
蝉丸の手の血は……。蝉丸の肩からのものだ。
胸に抱いていた月代の頭を少し放し、顔をのぞきこむ。
(なんだ？　表情が変わってるぞ)
(ﾟ∀ﾟ)

どちらにしろ月代の額からは血が出ていない。
どうやらこの仮面。蝉丸が思っていたよりもずっと丈夫にできているようだ。
弾が当たったのが原因と思われる跡程度しかない。
「(ﾟ∀ﾟ)アヒャ」
「⁉」
月代が目を開いた。のだろうと蝉丸は推理した。なにせ本当の表情は見えない。
「(ﾟ∀ﾟ)アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ‼」
勢い良く立ちあがったかと思うと蝉丸の周りをぴょんぴょんと跳ねまわっている。
「月代？」
「(ﾟ∀ﾟ)アヒャヒャ　蝉丸のお嫁さんだぁ！　今度こそちゃんと約束したぜ〜！」
(き……汚い……)
蝉丸の率直な感想だ。死にかけていたのは芝居だったらしい。月代はこんな汚い手を使うような子だったか？

というか口調もなんか変だ。いやそんなことより、
「月代。ほら、あれだ。なんというかお前が死にかけていると思ったから勇気付けるためにだな……」
「(ﾟ∀ﾟ)アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ　男に二言はねーよなあ〜〜。アヒャヒャヒャ!!」
　——ボカッ!!——
(あ……)
思わず殴ってしまった蝉丸。
たんこぶ付きの月代が地面に倒れ伏す。
(ん?　また表情が変わってる……なんなんだこの仮面は……)

(;´Д`)

484　僕たちの失敗——砂の果実

「か、母さん……」
　そう力無く呟くと、「ワザの二号」北川潤（二十九番）はマウスを放り投げて虚空を見上げた。解析に行き詰まったので、OSに入っていたゲームをちくちくやっていたのだが、体力と気力を根こそぎもっていかれそうになってやめたのである。
　ソリティアはペケが二十回出たところであきらめた。ハーツはどう頑張っても三回に一回はスペードのクイーンをねじ込まれてしまうし、マインスイーパは腹の爆弾ともずくを思い出してしまうからさくっと放棄し、フリーセルにいたってはルールを知らない。OSのヘルプに頼ることは北川のプライドが許さないからこれも打ち捨てた。スパイダーソリティアやピンボールは論外だ。
　一方「チカラの一号」宮内レミィ（九十四番）はもずく発掘後、もっといろいろ見てまわりたいと言って店内のどこぞへ姿を消したまま帰ってこない。フロンティア精神に溢れるヤンキーの心理は、北川にはいささか理解しかねるものがあったが、ペリー

以来、幽玄ジャップはルイジアナママに連戦連敗を重ねてきたこともあって、もはやどうこう言うことはあきらめていた。
　仕方なしに北川は再び解析に戻ることにした。全てのCDが揃っていない今、それは風車に向かって突っ込むドンキホーテのようなものであったけれど、何もしないよりはマシだろう。ひっそりとした室内には北川がキーを叩くカタカタという音が不規則に響くだけだった。
　そして遅々として進まない解析にそろそろ匙を投げようかと思ったとき。
「ワーーッ！」
「うぉっ、母さん！」
　突然レミィに思い切り肩を叩かれ、仰天した北川は重ねて親類に援助を乞う羽目になった。ぜえぜえと振り切れそうな動悸を鎮めながら、彼はヤンキーのリメンバーパールハーバーの恐ろしさを実感した。やはり竹槍でスーパーフォートレスには勝てない。
「またまたイイモノ見つけてきましたヨー！　このお店最高ネ！　見て見てー！」
　レミィは北川の前に麦藁帽子を突き出して思い切りはしゃいだ。それはつばの大きな麦藁帽子で、つばの縁の藁が寝起きの髪みたいにほつれていた。
「か、母さん……」
　彼女は麦藁帽子をかぶると、その場でくるりと一回転した。綻びはじめたセーラー服と新品の麦藁帽子のミスマッチが返って新鮮なものに映った。
「エヘヘー、いいでショー！　麦藁帽子ダヨー。似合いますかジューン！」
「か、母さん……」
　いまだ米軍の本土上陸のショックが抜けきらない北川。お構いなしに喜ぶレミィ。
「小さい頃にネ、まだニホンにいたときにちょうどこんな麦藁帽子持ってたの。とてもお気に入りで毎日かぶってまシタ」
　北川は幼少期のレミィの姿形を想像しようとした

が、胸部のあたりで早々に挫折した。
「家族でハイキングに行ったときもその帽子をかぶっていったの。でもその時谷沿いの道を歩いてたら、急にぴゅうって強い風が吹いて」
レミィは「ぴゅう」と言いながら手を回した。
「帽子が飛ばされて、谷底に落ちちゃったの」
「災難だったな」
「とても悲しかったデス。後でDadが同じような麦藁帽子を三つも買ってくれたけど、その代わりにはならなかった。だからわかるの。なんとなくわかるの」
「何が？」
「これじゃなくちゃ駄目ってものはあるの。何でもそう」
声のトーンが落ち、消え入りそうになって、北川は耳をそばだてた。
「でもね、どれもこれもアタシにはどうしようもないものばっかりだった」
レミィはそう言って目線を下にずらした。ノートパソコンの画面はさっきから手つかずのまま、今はスクリーンセーバーに切り替わって、羽の生えたトースターたちが黒い画面を所狭しと飛び回っていた。
「ヒロユキは」
レミィは急に顔をぱっと上げた。
「ヒロユキとアタシはネ……！」
「ヒロユキ」とレミィは幼なじみで毎日一緒に遊んでいたこと。だけど父親の仕事の事情で遠く離ればなれになってしまったこと。その時にビンに二人の約束を書いた紙を詰めて木の下に埋めたこと。高校生になって帰国できたときに偶然再会できたこと。レミィはまくしたてるように一気にしゃべった。
北川は「ふうん」と相槌を打つだけだった。別に素っ気なくあしらったわけではない、彼にはレミィが同情や慰めを欲して言葉を紡いでるのではないということをわかっていた。

「ヒロユキはアタシにニホンの事、たくさん教えてくれたんだヨ。だからアタシ、頑張った。ヒロユキのいるニホン大好きになれるようにいっぱいいっぱい頑張ったの。ヒロユキのおかげで、アタシスティツとニホンが母国になったんだヨ」
「二つの母国、ってやつか」
声がかすれてきた。水が欲しい。何故だか、北川はたまらなく喉が渇いてきた。
「だからネ、ヒロユキには本当に感謝してるの」
レミィはうつむき、麦藁帽子の大きなつばが彼女の表情を隠した。
「本当に……アタシはヒロユキに……」
ヒロユキ。彼女の口から何度も何度もでてくる男の名前。北川の知らないその男は、やはり知らない女の子と絡み合うように抱き合ったまま、微笑みを浮かべて死んでいた。レミィが「ヒロユキ」の事を語る時、彼女はものすごく満ち足りた顔になる。とても嬉しそうに微笑みながら喋る。

「だけどネ、麦藁帽子もヒロユキも」
不意にレミィの腕が北川の頭に回されて抱きしめられた。とくん、とくんと響く生命の息吹に包まれて、北川は何も言わずにゆっくりと目を閉じた。
「おんなじだった。本当にほしいなと思ったものは手に入らなかった。一番欲しいものが手に入ったためしなんてない。いつだって……」
北川の頭を抱きしめていた腕が震えだし、頬やうなじに熱い雫を感じても、彼はずっと目を瞑ったままでいた。
「いつだって、アタシから飛んでいって消えちゃうの」
ちくりちくり。少し、ほんの少しずつ胸が痛みだした。それが何であるのか、北川はわからなかった。ただ心のどこかに目に見えないくらいに小さな棘が引っかかって、なかなか抜けてくれないまま次第に大きくなって北川を引き裂こうとするのだった。

485　喪失の黒

あの教会の中で。ひとつの目標が、もうすぐ達成される。
悪夢の中を這い回った記憶を、全て浄化する時が、目前に迫っている。遠い夢をかなえる寸前のような感動が、そこにある。
——このとき私達は、疑うことなくそう思っていた。
「おい詩子！　待てって！」
先頭を行く少女、詩子はどんどん距離を開けていく。
「ああ、くそ。繭！　悪いが先に行くぞ！」
痺れを切らした祐一はスピードを上げ、みるみる小さくなっていった。
まだ教会までは距離があるというのに、私は既に息を切らせていた。たとえ脆弱だった心がきのこの奇跡で強くなっても、身体までは強くならない。非力さに呆れ、うなだれる。
ほどなく私が衝突してしまった相手——私を羽交い絞めにして、きのこ摂取に協力してくれた（？）少女、なつみさん——に追いつかれる。
「繭ちゃん、大丈夫？」
「残念ながら、あんまり、です」
息も切れ切れに答える。情けない。情けないが、走れないのだから仕方がない。
私の変貌ぶりに対応できないでいるなつみさんと、肩を並べて歩き始める。
ひとしきり私の変貌に驚いた後、なつみさんが本題に切り込む。
「茜さん、って言ってたけど……」

「ええ……祐一が、ずうっと探しつづけていた、相手、らしいの」
　息を整えながら、大きく引き離されてしまった祐一の背中を見つめ、言葉を交わす。
「照れ臭いらしくって、あんまり、教えて、くれなかったけど……髪が長くって、これくらいの三つ編みにしてて、マイペースな人なんだって」
　私は身振りを加えて説明する。
　実際見たわけでもないので、不正確この上ないのだが、だいたいそんなもんだろう。そんな気楽な説明の反応は、不釣合いな驚愕の表情だった。
「亜麻色の……三つ編みの……？」
　これ以上ないくらいに目を見開いて、なつみさんは呟く。どうして、そんなに驚くの？　亜麻色？　私、そんなこと言ったかしら？
　一瞬だけ疑問が脳裏をよぎるが、流してしまった。
　そう……後から考えれば、それは警告だったのだ。けれど記憶を遡れば、祐一がそんな事を言っていたのを、確かに覚えていたから。
　覚えていたから、私は素直に答えた。
「ええ、そうよ」
　それが〝正しい間違い〟だったとも知らずに。
　スイッチを、入れてしまったのだ。

　……スイッチの音は、銃声だった。
　その轟音に目を逸らした私は、なつみさんが振り上げた銃に後頭部を強打され、急速に視界を暗転させていった。
「ごめん。ここから先は、あなたの見るべき世界じゃないわ」
　そんな台詞を聞きながら、外界への扉は閉じてしまった。
　自らの心さえままならず。
　身体もままならず。
　私は喪失の予感に、涙も流さず泣いた。

詩子が胸を押さえて、膝をつく。俺は再び全速力で疾走する。
「詩子！」
そのままばたりと後に倒れそうな詩子を、即座に抱え込む。支えきれなかった頭だけが、かくんと後に倒れ、目が合った。
いや、合ったと思ったのは俺だけだった。
「か……は……」
あらぬ方に視線を固定したまま、押さえた胸の苦痛にうめく。ままならぬ呼吸の苦しみが、喉から漏れて赤く滴る。
「あんた……狂ってるわ……」
教会の中から、声がする。
銃を持った手をだらりと下ろした茜と、鞘に収めた日本刀を手に椅子の上に立つ少女。彼女は今にも抜刀しそうな姿のまま、固まっていた。
いや、震えていた。
「その娘が、あんたの言う〝二人〟の内の一人なら……保証してあげる。間違いなく、狂ってる」
「……言っておいたはずです。最初のとき、既に狂っていたかもしれないと」
制するように彼女を睨み、そして静かに視線を滑らせて。
俺を、見た。
泣いていた。
「茜……」
「……祐一……」
出会いの喜びなんてものは、儚い希望だった。
ときおり無力に傾く詩子の身体を抱きしめて、俺は搾り出すように尋ねる。
「駄目……なのか？　……俺達では、届かないのか？」
茜は何も答えない。
「俺達は、茜、お前を愛しているよ。それでも……それでも、お前には、届かないのか……」
茜は俺の一言一言に鞭打たれるように、いちいち

身を竦める。
誰も動かない空白があって。
漸く、茜が再び視線を上げる。
わななかせながら、ゆっくりと口を開く。
「……私が待たなければ。誰が彼を待つというのでしょう。……私が、待ち続けなければ。今までの私は、何だったのでしょう」
目を瞑ると、ぽたぽたと大きな雫が落ちていった。
「……私は……私は、あなたの事……」
苦悩の表情で、言葉を紡ぐ。
「……嫌い、です」
半分の嘘と。
半分の真実をこめて。
茜は銃を持った腕を振り上げた。
俺は、動けなかった。

だめだ。

撃たせるな。
だめだ。
撃たせては、だめだ！
最後の一言を発した時、必ずこの娘は撃つ。
例えあたしが憎まれても。
これ以上、仲間を殺させていいはずがない。
あかりや、由依の顔が目に浮かぶ。
撃たせては、だめだ！

事情はさっぱり解らなかったけれど。
間違いなくそこにある悲劇を前に、震える身体を無理矢理引き絞りながら、彼女の言葉を聞いていた。
『……私は、あなたの事……』
愛の告白のような、その言葉を聞きながら。
あたしは弾丸のように飛び出した。
『……嫌い、です』
閃光のように、長椅子の背もたれを駆け抜けて。
驚く白鳩達を、砂塵のように巻き上げて。

七色の光の尾を引き、抜刀した。
虹のように弧を描いて。
喪失の黒き闇を断ち切るべく。
あたしは、振り下ろした。

486　儚き魂の円舞

——それを止めたのは何だったのだろう？

「——」
「——」

空白。
全てが止まった瞬間。
晴香の刃は茜の腕の上に。
茜の銃は、その矛先を祐一の顔へ。
だが、それ以上動く事は無い。
「どうして……」

ようやく、静寂を破ったのは茜の声。
震えた声。微かで、消え入りそうな。
「どうして……貴方は、笑ってるんですかっ……！」
そう。
祐一は、目の前に立った死神に笑いかけていた。
その腕に、詩子の身体を抱えて。
——晴香がその刃を止めたのは、無感情だった彼女の顔に、はっきりとした驚愕の表情が現れたからだった。
あと一歩遅かったら、その腕が飛んでいた事だろう。
「……何て言ったらいいんだろうな？」
祐一が返す。
朧気な笑顔で。
だけど、今にも泣きそうな顔で。
「なんか、酷く、お前が可哀想だと思ったんだ。哀れだって……」
「…………」

「そしたらな。何かもう、どうしようもないって感じになったんだ――諦めちまったのかな。詩子と約束したのに――」
祐一は、ゆっくりと詩子を床に下ろした。
血が教会の床を深紅に染める。祐一は、詩子の髪を、そっと撫でた。
――もう、長くない。

「いいぜ」
立ち上がるや否や、祐一は呟いた。
「俺の命、お前にやるよ」
「……！」
再び、驚愕。
思いも寄らぬ言葉。
それは晴香も同じだった。
「あんた、何言ってんの!?」
「俺は、俺のやる事は、茜を〝救う〟事だ。詩子と約束したんだ――でも、それも、出来なかった。なら、俺の居る意味は無い筈だ。そうだろ？」
「だからって……！」
晴香の刀が、刃を返す。
それは明らかに茜の首を捉えていた――茜は、それでも動かない。
目の前に立つ人しか、見えていなかった。
「邪魔、しないでくれ」
ようやっと放たれた、はっきりと、明確な意志の込められた台詞。
しかしそれは、明らかな拒絶。
無言、しかし、痛々しい表情で晴香は、刀を納めた。
再び祐一の顔が茜を見た。
「――そうだ、最後に一つ言っておきたいんだ」
「…………」
茜の返事は無い。
しかし、銃弾が放たれる事が無いということは、

まだ幾ばくかの猶予を与えるということか。
祐一は、そう思う事にした。思いたかった。
「お前が俺を嫌いでもいい――俺は、お前の事が。好きだったよ」
茜の眼から光が消えた。
しかし、銃口は微かに震えるばかりであった。
答えは無い。当たり前か、と祐一は僅かに残念に思った。
――結局、最後の最後も振られちまったなぁ……
「――さぁ」
目を閉じる。
もう、未練は無い。
「やってくれ」
そして。

487　哀

とことこと走る影。教会に向けて。

ピコッ……ピコッ……人物探知機の一点が強く輝く。映し出された番号が一つに集まり、強い光を放つ。
その一点の番号、『001』――相沢祐一。
（祐一が……待ってるよ、みんなが……待ってるよ）
祝福の鐘が、またすぐ耳元で聞こえた気がした。
（ずっと待ってたんだから……ずっと……祐一を……あの日から…………――？　……あれっ？）

だが、彼女の思考がそこで停止する。
七年前のあの冬からずっと――その名雪の思いが、それが分からないでいた。
（どうしてだろう……思い出せない……とっても大事なことだったのに……私と、祐一の大切な思い出……）
祐一のこと、祐一との思い出のこと。
その部分が、ナイフで綺麗に切り取られたかのよ

うに。
それは名雪だけが知っていた心の真実。
疑問に思いながらも、彼女は強く思い描いた。これからの幸せな日々を。
(はやく祐一に会いたいな……そして美しい教会で結婚式を挙げるんだ。それでお母さんや子供達と一緒にあの家でずっと幸せに暮らすんだ。それが私と……祐一と……お母さんの願いだから)
走った。もうひと頑張りだから。
(でも、どうして悲しいんだろう……幸せなはずなのに……これから祐一と一緒に幸せの欠片を探していけるはずなのに)
頬を伝うのは、輝く汗、たった今溢れ出た涙。
そして、額から、後頭部から流れてきた血。
頭から、背中から、べったりとこびりついている血。先程まで背負っていた、知らない人の血。
(どうして悲しいんだろう……泣いちゃだめだよ……祐一に笑われちゃうよっ！ 祐一の前ではずっと笑っていたいのに！)
だけど、涙がとまることはなかった。

488 魂の導き手

——初めて出会った時。
それからどれくらい経ったんだろう？ まさかこんな形で出会うとは思いも寄らなかったけどな。
…………。
もし。
もしも、こんな状況じゃなくて。
普通の生活の中で、全くの偶然で、再会出来たなら……いや、再会出来たとして。
想いは伝わっただろうか？
——多分、無理だろうな。
ああ。
悔しいよな。

でも、もう、どうしようもない話だ――。
笑い出したい衝動に駆られた。
目は瞑ったままだったが、もしかしたら笑みを浮かべたかもしれない。
どっちだっていい。
どうせ、次の瞬間にはミンチだろうしな。
さぁ。
早く撃ってくれよ、茜。
いい加減立ってるのも疲れたからさ。
引き金を引くんだ――。

――。

不意に、予感めいたモノ。
がしゃっ、という何かが落ちる音。
――ゆっくりと、目を開いた。

――あの人は、目を閉じています。

隣に居た人は、刀を引いてくれました。
――でも、撃ったら、多分私は死ぬんでしょうね。
隣の人に、切り裂かれて。
…………。
あの人は。
目の前で、私が引き金を引くのを待っています。
だから、私は、狙いを定めて――。
その人の眉間に銃口を向けて――。

ああ……。
指が、動きません。
どうして。
私は、詩子を撃ちました。
そうすれば、甘えを捨てられると思ったから。
出来なければ――あそこには帰れない。
だから、撃ちました。
だから。
祐一も、撃てると思ったんです。

……お願い。
動いて下さい。
動いて下さい！
動いてッ！

――茜の指は、引き金を引く直前で止まっていた。
内心の葛藤とは裏腹に、その指は震えも、何も無かった。本能が、無意識の内に――その行為を、完全に、拒否していたとも言えよう。

……ああ。
もう、ダメですね、私……。
ふふ。
自分の不甲斐なさに、笑えてしまいます。
そんなに、この人が大事だったんでしょうか？
……よく分かりませんが、そうなんでしょうね。

そうして。

茜の手の中にあった銃が、落ちた。
哀しき殺人鬼が、今、少女に戻る。

489　zoo director

するすると樹の上から下りてくる御堂を見ながら、詠美はなんとなくサルを思い浮かべた。
「おかえり、したぼく。どう？　あった？」
驚くべき身のこなしで殆ど音を立てずに地面に下り立つと、御堂は「まぁな」とぶっきらぼうに言った。
「この方向だな。そんなに離れてはいねぇ」
「こっちって言うと……あの人が走って行った方角とちょっとずれてるね」
御堂の指差した方と、秋子が去った方を見比べて詠美は言った。
「教会なんてシロモノがあるかどうか眉唾だったん

だがよ。本当にあるとはな」
「あるとわかった以上、もう行くしかないよね」
『教会を探す』という、詠美の提案は彼女にしてはなかなかまともなものだった。
　秋子が走り去ってから随分時間が経ったし、彼女の後を追って探すよりは彼女の目的地を探す方が、遭遇する確率が高い。
　——まぁ、再会してからどうするかは、詠美は考えてなかったのだが。

「まぁ、あんな目立つ場所に行くのは危険なんだがよ」
「でもでも、あの人が気になるでしょ。それにこれも、渡さないといけないと思うし」
「まぁな」
「あたしが決めていいって言ったんだから、文句を言わないの」
　名雪の学生手帳をひらひらさせながら詠美が言う。御堂の提案で、この生徒手帳を遺品として持って来ることにしたのだ。彼女と再会する目的として。
「しかし、上から目的地を探すたぁ、お前にしては上出来な考えじゃないか。褒めてやるぜ」
　詠美のアイディアに感心する御堂のその言葉に、詠美はふふん、と胸をぐっと反らす。
「あったりまえでしょ。この同人界の女帝、クイーン詠美ちゃんさまには、まだまだすっごいアイディアがたくさんあるんだからっ！」
「……そこまで大した考えでもねぇんだけどよ」

「それで、だ」
　そこで御堂が話を打ち切る。
「そこの死にそうな毛糸玉はどうした？」
「知らないわよ。さっき、そこの林から……」
　と、身動きの取れないポテトの横を指差して、
「その白い蛇が飛び出してきて、なんか睨み合ってたんだけど」

「蛇が毛糸玉に襲い掛かってやられちまったと」
「うん」
やれやれ、と御堂は白蛇をポテトから引き剥がす。自由になったポテトはぴこぴこと呻くと、ふらふらと地面に倒れこんだ。それを見ていたぴろがにゃあ、と鳴いた。

「それで、さぁ」
捕まえた白蛇と睨めっこしている御堂に、詠美が声をかける。
「したぼくの肩でさっきからばっさばっさしてる鳥はどうしたの？」
「知るか。さっき、木の上から教会を探してたら……」
「ばっさばっさとどこかから飛んできたと」
「ああ」
あんた、動物に好かれる変な匂いでも出してるんじゃないの？　と詠美は言うと、蛇は怖かったので取り敢えず二歩ばかし御堂から離れた。
「毛糸玉、猫、白蛇、鳥、そしてガキ。……隠密行動なんてとれやしねぇじゃねぇか」
「ガキってなによ。したぼくのくせに」
ため息を吐く御堂に、詠美は言い返す。御堂はそれを無視すると、幾分声を低くして言った。
「さて、お前ら。覚悟はいいな」
ぴこ、みゃー、しゅるしゅる、ばっさばっさ、何よ覚悟って？
「わからねぇならいい。……行くぞ」
そう言うと、御堂は駆け出す。強化兵の勘が告げた予感。ふん、上等じゃねぇかと、その予感を振り払うと一路教会を目指す。
――そこで待つものを、まだ知らずに。

490　きずな。

　この瞬間は確かに時間が止まっていたと思う。自分――長瀬祐介も、自分の手を握る天野美汐も、そして自分の目の前の七瀬彰も。
　やっと時間が動き出す。血の色で汚れた従兄の顔と服を見て祐介は唾を飲み込む。状況確認だ。硝煙の匂いのする彰の身体。血と泥で汚れきった顔。記憶にあるよりもずっと虚ろな黒い瞳。身体の至るところを走る大きな傷。特に目を引くのは右足の甲。正確にはそれは甲ではなくなっている。というのは足の甲があるべき場所には何も無いのだ。痛々しい傷痕を残して右足の甲が吹き飛んでいる。
　満身創痍とは、こういうことを言うのだと思う。
　どうして彰はここまで傷ついたのだろう。決まっている。彼の右手のサブマシンガンと硝煙の匂いで判るだろう。彼は支給された武器を使って戦って戦って人を殺して人に殺されかけて、こうしてここまで生き抜いてきたに決まっているのだ。
　人を、殺したのか。あの優しかった七瀬彰が。大好きだった七瀬彰が。――甘えを捨てろ。誰だって狂気に陥る可能性はあるのだ。あの優しかった七瀬彰だって例外ではない。自分や美汐だって狂いかけた時間が確かにあったのだ。
　祐介は美汐の前に立つ。右手で美汐を庇い、左手をポケットに突っ込んでピアノ線を握り締める。サブマシンガン相手に出来ることなんてたかがしれているが自分が守らなければ美汐は死ぬ。せめて盾に、
「大丈夫、僕はやる気にはなってない」
　びくり、と自分の身体が震えたのが判った。
「この怪我とかは、そうだな、うん、まあ、説明すると長くなるんだけど……ゲームの参加者を殺したわけじゃない。信じて欲しい」
　七瀬彰は唐突に言うとサブマシンガンから手を離す。肩に背負っていたデイパックの中にサブマシン

ガンを放ると、彰はゆっくりと笑う。その笑顔が懐かしくて、祐介は自分の身体から力が抜けていくのが判った。美汐の方を見遣ると、それでもやはり警戒心は完全には解かれていないようだった。彰は苦笑している。祐介はそんな二人の顔を見比べて、どうしたらいいのだろうか、と思う。彰がどれだけ信頼できる人間かを説いたところで、簡単に第一印象が拭えるとは思えなかった。

「海が近いし、朝陽でも観に行こうか？」

自分が色々と思索していると、彰がふとそう提案した。自分や美汐の返事も聞かず彰はすぐ傍に見える砂浜に向けて歩いていく。祐介は美汐と顔を見合わせる。まだ何か躊躇を感じている美汐の手を取り、祐介は彼女を引っ張って彰の後に続く。

光。

見渡す限り広がる空と海に白の輝きが満ちていて、白い砂浜と相俟って、祐介の目にはそこがまるで光しかない天国のように見えた。美汐を見遣ると、彼女も同じように、世界に呆けているように見えた。

「で、君たちは二人で何をしてるの？」

唐突な言葉ではっとする。紛れもなく光に見惚れていた自分たちに向けられた言葉だった。その黒目がちの目には冗談の気持ちのかけらもない。祐介は戸惑う。自分は割と長い時間この従兄と遊んだ記憶があるが、こんな目をする彰を見るのは初めてだった。祐介は応えられない。

「この島では例え愛するふたりであっても殺し合いをしなくちゃならない。そういうルールだろ。絶対に一人しか生き残れないんだ」

心が圧迫される。氷のように冷たい言葉が、先程まで自分と美汐にあった希望の暖を奪っていく。自分も美汐も応えられない。彰が肩を竦めて意地悪く笑い、馬鹿にするような目で自分たちを見る。心の中で祐介は小さく深呼吸をして命からがら答える、

「——なんとか、脱出したいと思ってる」

「どうやって？　ここから脱出出来るような考えが浮かんでるの？　これから浮かぶツテは？」
　潰されると思った。反論くらい出来るだろ。先程放送があった、考えろ。唇を噛む、落ち着け、冷静に体内の爆弾は解除されているのだから脱出が出来る可能性はある。やっとの思いで口にする、
「もう、お腹の中の爆弾は爆発しないんだから——逃げようと思えば、泳いでだって逃げられる筈だ」
「それが本当だという証拠は？　あの放送がブラフだという可能性は。それにこの島は何処にある。何処にあるかもわからない島からどっちに向けて何千キロ、何万キロ泳いだら日本に帰れるの？　ねえ祐介、本気で言ってるの？　そんな幼稚な考えをさ」
「それは、」
「見通しが甘すぎるよ。こんなところで叔父さん達は自分の身も鑑みずにこんな企画を行ってるんだよ？　それを「参加者逃亡」なんていう中途半端な形で終わらせると思う？　なあ。もう一度訊くよ。祐介はちゃんと考えてる？」
「——っ」
「昔からそうだったよ。いつも真面目そうな顔してる癖に、実際は何も考えていないんだ」
　潰された。三つ年上の従兄は蛇蠍のように厳しくて冷たい口調で自分を潰していく。自分と美汐が微かに抱いていた希望を悪鬼のように潰していく。唇を噛む。美汐が自分の手を強く握る。振り返るまでもなく、美汐が七瀬彰に強い視線をぶつけていることが判った。
「——ごめんね。別に虐めるつもりはないんだよ」
　急に口調を和らげて、彰は笑う。あまりに唐突に優しい口調になったので、祐介は逆に少し警戒心を抱いてしまう。彰は続ける。
「ただ、どうも祐介が甘い見通しをしてるようだったからさ。一応釘を刺しておこうと思ったんだ」
　言うと彰は砂浜に座り、座りなよ、と呼びかける。言われるままに自分たちは座る。右手に触れる粒子

の細かい砂は柔らかかった。
「――祐介は今のところ無力だよな。大した武器も持っていないみたいだし、命を賭けて戦う覚悟だって出来ていない」
彰は淡々と言った。祐介は反論も出来ず、右手で砂を噛む。
「でもさ。――お前には『希望』はあると思うんだ」
彰はそう続けた。
「お前も知っての通り、僕だって大した力は無い。たまたま上手く立ち回って武器を手に入れて、ある出来事が起こって死ぬ覚悟も出来た。僕だってただそれだけの、ちっぽけな奴だ。そんな僕でもこのゲームの管理者に一泡吹かせることが出来た。そして、きっと僕より強い武器と強い覚悟を持っている人はたくさんいる。それならば、僕やその人たちが頑張れば、管理者を完全に潰せるかもしれない」
理解。つまりこの七瀬彰の傷は、管理者に「一泡吹かせた」ためについた傷なのだ。彰は続ける。
淡々とした口調で、悲しみも苦しみも痛みも無い、淡々とした口調で、彰は呟く。

「僕には希望が無くて、祐介にはある。
だから僕は、命を賭けられる」

意味がわからなかった。
「命を賭けるのは僕みたいに希望の無い奴だけで充分なんだ。僕たちに任せろ。お前は今は、脱出のことなんて考えるな。下手を打って死ぬな。管理者が壊滅するまではただ生き続けろ。希望がある奴が死ぬのはすごくイヤだ」
「……希望？」
「お前にはその娘を守るっていう希望がある」
彰はにやり、と笑ってそう言う。
「守りたいんだよね？　その娘を」
悪戯っ子のような笑みで、それは紛れも無く昔と

変わらないままの七瀬彰のものだった。周りの大人たちには愛想良く笑っているくせに、年下の自分にだけはこういう笑顔を時たま見せた。
「管理者を潰すのは僕に任せて。僕は有志を集めるなりして反乱を起こして、この戦いに幕を降ろしてやる。このつまらない狂想曲はそれでもう終わりさ。——僕はすぐ出発する。急がなくちゃ。君らだけに構ってちゃ反乱だって起こせない」
「彰、兄ちゃん？」
美汐の方を見遣って彰は言う、
「君たちとは別行動を取るよ。全てが終わったら放送施設なりを使って伝える。もし反乱を起こす前に、他に希望を持って生き抜いている奴らを見つけたら、君らを探して連れて行って、安全な場所にいさせてあげる。だからちゃんと生きていてくれな」
「そんなっ！」
祐介は叫ぶ。自分は確かに薄弱で、この娘——天野美汐ひとりを守るのが精一杯かもしれないけれど、だからって何もせずに彼女を守ってだけいろ、と言うのか？　従兄が命を賭けて戦おうとしているというのに！
「僕だって戦う！　僕らを戦いに巻き込んだ叔父さん達と戦って、」
「黙れ、ばか！」
声が出なくなる。彰が自分の襟元を掴み、半ば怒りに似た顔で自分を睨む。
「祐介。何か勘違いしてるよ？　あのさ、希望を守るのと命を賭けるのとどっちが大変なのかわかってる？　この自分の命を守ることすら危うい場所で、希望を守ることがどれだけ難しいか！」
続ける、
「わかってるの？　ばか」
半ば泣きそうな顔で彰はそう言う。それだけで祐介の半端な決意は打ち砕かれた。自分には希望がない、と呟いた七瀬彰のその言葉の意味を考えて、祐介はもう、何も言えなくなってしまった。

「――爆弾がもう爆発しない、ってのは真実だよ。僕が吹かせた泡ってのは、爆弾管制の装置を破壊したことなんだよ」
沈黙を嫌うように彰はそう言った。
「今ならそれこそ泳いでだってこの島から離れることは出来る。だが、離れただけで何が出来るわけじゃない。完全に管理者を撃滅しなくちゃ、本当に生き残ることなんて出来ないんだ。勿論、僕が高槻を、叔父さん達を殺しきる事なんて出来ないかもしれない。有志がどれだけ集まるかも判らないし、血に狂ってしまってもう戻れないような奴もいるかもしれない」
「それなら、」
彰は手を広げ、
「それでも、僕は祐介に生き残って欲しいと思っている。僕は、出来る限り多くの人間に生き残って欲しいよ。もしも僕が失敗したら、その時お前が行けばいい。そうしなくちゃその娘を守れないんだしね。だけど、僕の死亡放送が流れるまでは無謀なことはしないで欲しいんだ」
彰は、少しだけ躊躇するような表情を見せたかと思うと、優しく笑ってこう言った。
「僕には、お前が眩しく見えた。その女の子と二人でいるところが、すごく眩しく見えた。あの長瀬祐介が歌まで唄ってた。恥ずかしがり屋のお前が、多分その娘を元気付けるために、歌を唄っていたんだ」
太陽のような笑顔で。
「僕には、君らみたいなカップルが、すごくよさそうに見えたんだよ」
彰は朝陽を浴びながら、白い世界の中そう言った。眩しそうにてのひらを太陽にかざし、朝陽が昇り始めるのを細目で見つめながら、――彰はそう言った。
「きっとお前なら最後までその娘を守りきれると僕は信じてる。バカだけどお前は優しい奴だからね。僕には守るべきものがない。だからお前より身軽

だ」
　彰は言ってすくと立ち上がる。自分と美汐に背を向けて、まっすぐな足取りで歩き出す。
「絶対に、希望の火を守りきって」
　彰は言い残し、ゆっくりと立ち去ろうとするが、はたと立ち止まる。立ち止まるというのは正確ではなく、止められたのだ。止めたのは今までずっと黙ったままだった天野美汐だった。
「彰さん」
「えっと、君は」
「天野美汐です」
　明瞭な口調で美汐は名を告げる。先程見られた脅えや敵意はまるでない。
「――何かな？」
「私はこの島で、大切な友達を失って、希望をかき消されました。幸いに武器もあった。他の人を殺して、誰かの手か、あるいは自分の手で死のうと思いました。――けれど、長瀬さんと一緒に時間を過ごして、少しだけ、生きていたいと思うようになりました」
　美汐の背に光が差していると思った。遅々として昇る太陽が、天野美汐と七瀬彰を照らしている。
「あなたには、もう、この世界の何処にも希望はありませんか？」
　彰ははっとした顔で天野美汐の目を見つめる。まっすぐな光に気圧された顔で、彰は立ち尽くす。
「――ある。希望はあるんだ、本当は」
　彰は、腹の中に溜まっていた言葉を吐き出す。
「島に来る前からの友達もまだ生きてる筈だ。そして、この島で出会った女の子、柏木初音。彼らが、僕に遺された最後の希望だと思う。反乱の有志を集める前に、せめて初音ちゃんだけでも保護したい」
「――そうですか」
「彼らが生きているかは判らないから希望としちゃ

すごく微かなものだ。でもまだ本当は、希望と呼べるものはあるんだ。――初音ちゃんは栗色の髪のくせっ毛の小学生くらいの女の子だ。もし会うことがあったら、」

「判りました」

天野美汐はまっすぐに笑う。

「命を賭けることと命を捨てることは違います。だから――絶対に生き残ってください」

「――うん。生き残る。僕は生き残るよ」

「あなたが誰かの希望の火になっているかもしれないんですから」

祐介は二人のやりとりを見つめながら考える。

生き残ること。希望の火を守ること。僕は確かに無力だ。無力だけれど、それでも、新たに生まれた希望の火はここまで根絶やさずに守って来れたのだ。守ろうと思う。自分の世界に遺された最後の希望を。

彰は思い出したようにベルトに挿していた拳銃を引き抜くと、祐介に近づいてそれを渡す。

「武器だ。希望の火を消そうとする奴が現れたなら、それで守るんだ」

彰はそれを最後に背を向けて歩き出す。祐介と美汐はその後ろ姿を見つめながら、希望の火を絶やさずに生きていこうと誓う。昇り始めた朝陽が、海と砂浜とふたりを照らす。

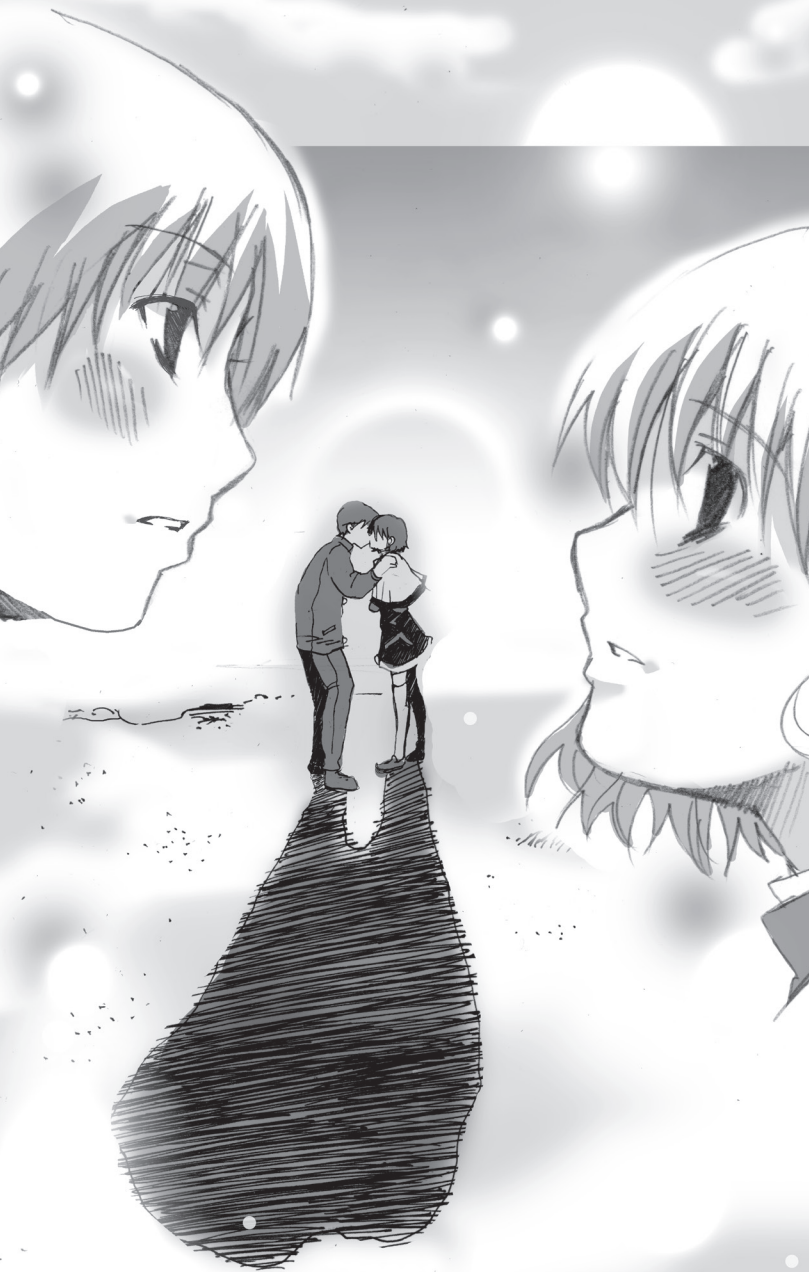
491 Sweet berry Kiss

遠く広がる青の海を見ながら、二人は、朝陽が照らしている自分たちを想った。どうしようもなく美しい空。輝く海。白い砂浜。きらめく世界。流れる雲と風の中、景色だけは変わらずにある。

もう朝はやってきた。

――――――――希望の光は二人の手の中にある。

「――ずっと、言いたかった。言うべきだったね」
勇気を振り絞り、祐介は囁く。
「君が好きなんだ。――天野さん」
「私も、ずっと言いたかったです。遅すぎました」
勇気を振り絞り、美汐も囁く。
「私も、好きです、――長瀬さん」

朝陽の前で二人は唇を重ねる。触れるだけの、親が子供にするような、優しいキスだった。甘い香りに酔いしれて、ふたりは泣きそうにまでなる。指を絡め、もう二度とこの手を離さないでいたいと願う。
距離のない世界で生きていこうと思った。陳腐な言葉でも充分だった。生きていくのにはそれで充分。
七瀬彰は今、命を賭けて戦おうと今まで以上に強く思っている。きっかけは、その二人が手を繋いで、歩いているのを見たからだった。二人の笑顔と長瀬祐介の歌声を聞いて、憑物が落ちたとまで思った。
自分は揺れていた。日常とは何だ？　考えていても解らなかった答え。もう何処に帰っても、ある筈のないものだと思っていた。ならば、何のために自分は戦ったのだろう。いっそ、あの施設の中で死んでしまえば楽になれたのかも知れない。勝手な英雄幻想を抱いて、自分のおかげで多くの人間が日常に戻れる、そう幻想して死ねた方がまだましだった。
幻想と気づいてからは、ただ苦しいだけだった。自分がしたことは、日常に戻るためには何の役にも立たなかったのではないか、と。
けれど、その認識を改めなければいけない。
それぞれに傷を負った二人。けれど、その傷を補い合うかのように連れ添う二人。だから彰はそこでやっと判った。
この世界のすべてはきっと日常で溢れているんだ。
この戦いで、皆、傷つきすぎた。忘れられないほどの傷を負った。けれど、死ななければ、生きてさ

えいれば、きっと帰れるのだ、何処かにある日常に。

だから僕は戦うのだ。それだけのために戦える。命を賭けて。貧乏くじを引くことは慣れている。僕のすべての命を使って、反抗し続けてやろう、と思う。

天野美汐の最後の問いかけに、自分は嘘を吐いた。それだけじゃない。自分はふたりとの会話の中でたくさん嘘を吐いた。自分はもう限界だった。血の足りない頭と身体では反乱を起こすことなど無理だし、生き残ることなど夢の彼方だ。

それでも生き残る、と嘘を吐いた。反乱を起こすとごまかした。彼らの希望の火を少しでも強く燃やすためについた、口からのでまかせだった。

せめて反乱を起こす有志を集めたい。彼らふたりを、そして希望の火を抱いて生き抜いている多くの人たちを守るために。彰は足を引きずりながら歩く。

初音に、もう一度だけ逢いたかった、と思う。日常を奪われた少女に、新たな日常を与えてやりたかった。もしかしたら、天野美汐が言うように、自分が彼女の希望の火になれたかもしれないのだ。

ああ、もう一度、逢いたかった。

柏木耕一に預けたときからなんとなく判ってはいた。もう逢える運命ではないんだな、と。最初は、父性本能というのだろうか、守りたいとだけ思っていただけなのに。何なんだろうな、この感情は。まさか恋でもしてるって言うんだろうか。馬鹿げてるよな、小学生に横恋慕って。馬鹿というかロリコンだな。

薄く笑う。まだ笑うことができる余裕があるか。まあ何だって良い。恋をしてると思っている間は幸せだ。美咲さんに恋をしていた時だってすごくすごく幸せだったんだ。

ふらつく頭で彰が歩き、歩き、歩いた、その時だった。

自分らしくない変な行動を取っていたせいで、運命がおかしな方向に捩れてしまっていたらしい。

今前方に何やら気配を感じたのだが、これは錯覚だろうか？　目の前にやたら小柄な人影が見えるのだが、これも錯覚だろうか？

多分、錯覚ではないと思う。

それならば、自分の運命は割と幸せに満ちているのかもしれない、と彰は思った。

彰は、目の前に現れた小さな影を見つけて小さく息を吐く。紛れもなく安堵の溜息で、今以上に安堵した息をこの島で吐いた記憶がない。マシンガンに殺されそうになって命からがら逃げた時よりも深い深い安堵を覚えている自分がいる。

こちらを見て少女は目を丸くする。割と距離があるのにその表情までがはっきり見える。

まったく、これから戦おうってのに覚悟が鈍るような登場するなよ。思いながら気付くと自分は目を拭う。無様なことに涙が頬を伝っていた。生きていた。本当に良かった、

——初音ちゃん。

だが、そこで彰の意識の城は崩れていく。

初音が駆けてくる音も聞こえない。眠い、眠い。

492　停滞

ＥＬＰＯＤがその地下仮設ドックに停泊していたのは全くの偶然だった。本来、高槻の降船さえ済めば即座に陸地を離れるはずだった。原因は自律修復の範囲外の故障であったが詳細は不明、乗艦していた技師が直接修復に携わることになった。小型潜水艦ＥＬＰＯＤはその性質上指揮系統が集中されており、デリケートな扱いを要する機構が満載であった。

バックグラウンドで修理が展開する一方、長瀬の傭兵の一人らしき男が通信を行っていた。

「――いずれ、その艦を陸地につけておくのはまずい。早急に退避することを期待する」
「了解」
「――高槻は」
「既に。ルートについては爆破済みです」
「――ならばよい。よろしく頼む」
「はっ」
　まもなく通信は切れた。男は通信機を閉じると無表情に振り向いた。そこには同じような格好の男が三人立っていた。
「作戦に変更は無し、艦制御復旧まで態勢を維持する」
「了解」
　そう返事をして彼らは自分の持ち場へと帰っていった。通信を行っていた隊長格の男はその様子を見ながら一抹の不安に心を震わせていた。虫の知らせというにはやや漠然としていたが、それは高槻に追随して地上に兵隊が上ったことで戦力低下したということもその原因の一つであったかもしれない。
　自律修復を走らせるために艦の動力に火が入っている。辺りは静寂だった。ごんごんと重くのしかかるように響く駆動音を除いては。
　遠く、彼方から艦を見つめる瞳が在った。全身を黒で包み込んだ小さな影は微動だにせずその場に在ったが、しばらくすると前進を始めた。足音は聞こえない。呼吸音すらも掻き消える。少年は、深く静かに忍び寄る。

493　侵攻

　ドックを内包する球状空間は広いが、外部への通路は概ね三方に限定されていた。その先からさらに枝分かれし、その繰り返しが迷路のような構造を生み出していた。故に最終防衛線は自ずと最初の三口だけとなる。今回の場合もそれは変わらない。配置はそれぞれに歩哨を置く形となった。

だが、気付くはずが無い。すでにドックに部外者が侵入していようなどと。
「………………」
ドック後方右側の口に配置されていた傭兵は不思議な焦燥にとらわれていた。視界にも耳にも主だった変化は感じられないが、何か違和感があるような気がしてならない。戦士の勘が彼を縛り続けている。直立不動、ただ只管に通路を睨み続ける。……それが致命的だった。気配を殺して忍び寄った少年が、事もあろうに肩越しにその兵士の耳元に息を吹きかけた。
「ふっ」
「!!」
そこは鍛え抜かれた傭兵、このような事態にも声を上げることは無かった。だが今回に限りそれもまた仇となった。声を上げていれば誰か仲間が気付いたかもしれない。瞬間に振り向く。だが振り向いたところには少年の姿は無い。——下だ。にっ、と口元だけで笑うと、少年はすかさず傭兵のボディに打撃する。二発、三発。衝撃にあとずさる傭兵、しかし攻撃を受けつつも銃撃で反撃を狙う。
……彼は気付いていただろうか。自分より大分背の低い少年が、耳元に口を持っていくためにあるものを踏み台にしていたことを。そう、少年の足元には分厚い本が。
「ふっ！」
鋭い呼気とともに少年はそれを蹴り上げた。サッカーボールよろしく本は傭兵の顔面を直撃した。男はまたも声すら上げずに倒れた。時間差で蹴り上げた本が倒れた男の上に落ちた。
「おー……いぢぢ、流石にちょっと痛かったな……」
片足で一本立ちして蹴り足の爪先を静々とさすった。すぐに立ち直ると、男から本と銃を取り上げて自分で装備した。少し重い。それに音が立ちそうだ。流石にマシンガンはやめたほうがいいだろうかと少

年は一瞬悩む。悩んだ末に、マシンガンは湖面に沈めることに決定した。置いていくと、万が一この傭兵が目覚めたときにまずい。
「さて、と」
一応これで後門の伏兵は排除したことになるのかな。そう思って少年は潜水艦の方角に目をやる。本丸は、あっちだ。

494　一瞬の出来事

――ダン!!――
教会の扉付近で大きな音がした。それが一瞬の始まり。
ようやく収束し始めた混乱の渦。それに向かって駆け出す影がひとつ。手には拳銃。
(亜麻色の……三つ編みの……)
低い姿勢。疾風のごとく駆けるなつみ。その瞳にうつるのは亜麻色。
「なつみちゃん!?」
祐一の目が、まだ名しか知らぬ少女を捉えた。何が起ころうとしているのかも分からず反射的に名前を呼んだ。
なつみ以外、誰もが状況を把握していない。いいや、ある意味なつみも状況を把握できていないと言える。茜の心の動きを知れば、行動は別のものになったかもしれない。
「店長さんを殺された怨み！『居場所』を奪われた怨み！」
茜の反応が遅れた。祐一とのやりとりで緊張感が消えていたこともあるが、それ以上に『居場所』というセリフに体が硬直した。
駆けながらの発砲。素人では当たるのは奇跡といえるだろう。
だが奇跡は起こった。
哀しき殺人鬼。いや哀しき少女の鮮血が舞った。衝撃を受け、茜の体が後方に跳ねる。そして倒れ

た。
「なつみぃぃ!!」
祐一が激昂し、硫酸銃を抜く。
しかしそれより早く。なつみは銃を突きつけた。
自分のこめかみに。

(!?)
訳が分からなかった。誰一人としてなつみの行動の意味が分からなかった。
「もう私には『居場所』が無いの」
なつみの声はなんというか。普通だ。日常の声だ。
表情は泣き笑い。
「もう生きていても仕方ないのよ」

生きていても仕方ない?
ふざけないでよ!
この島には生きていたくても生き続けられなかった人がたくさんいるというのに。
由依だって生きたかったはずだ。
水鉄砲を構えている男にしたってそう。
『――さぁやってくれ』
ああ! どいつもこいつも!!
無駄に死ぬんじゃないわよ!!

晴香は○・一秒で考えた。多少の混乱もあったが。
「あんたたち! いいかげんにっっ!!」
なつみの指が動いた。

だが……。銃声は響かなかった。

495　笑うということ

「あっちのほうだな」
大きなシーツを肩の安全ピンでとめて羽織った、さながら砂漠の旅人のような格好の柏木耕一の言葉を聞いて、七瀬留美は視線を合わせる。

……シーツの中がどんな姿かは、九割の確信をもちながらも、想像にお任せする。
　七瀬は再び遠くを見て、耕一に尋ねる。
「耕一さんは、どう思う？」
「うーん……留美ちゃんの言うとおりじゃないかな。彼女の行く先々で荒事が起きるという意見に、疑問を挟む余地はないと思う」
「じゃあ、こっちはハズレね」
　耕一は頷き、朝露を蹴散らして前方を歩き始める。墓場の朝露は、一段と寒々しかった。二人はあまり話す事もなく、森に入る。
　僅かな風を捉えて、七瀬の短い髪がそよそよと流れる。たぶん他の誰も気が付かない寒気を首筋に感じ、七瀬は小さく震える。軽さにとまどいを感じながら、頭を左右に振ってみる。
　誰もが注目した、あの長い髪は、お別れの餞別に置いてきてしまった。もちろん後悔はしていない。
（ただ、寒いだけ）
　そう思って、一人、小さく笑う。
　そのとき、前を行く耕一が再び立ち止まったことに気が付いた。
「どうしたの？」
「いや……ハズレというのは、早とちりだったみたいだ」
　森を抜けたはるか遠く。そこに見える人影。
　あのクセ毛を、見間違う筈はない。
「大当たり、だったみたいだぞ」
　頷いて、ふたりで笑った。
　笑えるというのは、幸せなことだ。
　笑い合えるのは、これ以上なく幸せなことだ。

《やれやれ、だぜ》
《まさか、あそこで自爆とはなあ》
《追い詰めすぎたのは、失敗だったかも知れんな》
　この殺戮の王国で交わされる会話としては、特に

異常のない三人の会話だが。
会話の主たちに問題がある。同じ顔が、三つだ。
そして、無線越しの会話である。更に、そのどれもが高槻を名乗っていたため、今では武器の社名が通り名だ。
《しかし、あれは判断に迷ったな》
《腐っても鯛だ、下手に追えば斬られるだろう》
《確かに、あの時は焦ったぞ》
巳間晴香との戦闘。
晴香は高槻が放送を使って、他の参加者に始末するよう煽った相手の一人。その個人戦闘力は侮れない。
深追いしなかったのは、そういう事だ。
どちらにせよ、彼らは所持したレーダーで相手を先に発見できる。こまめに索敵すれば、まず間違いなく不意打ちできる立場にあるのだ。
《ちょっと待て……この先に、二人居るぞ》
さっそくレーダーを見ていた高槻――ステアーと呼ばれる――が報告する。
《何者だ？》
《021と068、柏木初音と七瀬彰の二人……いや、逆からもう一人。022――鹿沼葉子だ》
《ステアー、まとめて囲めるか？》
《ベレッタ、もう少し大きく迂回してみろ。それで何とかなると思う》
《じゃあそれで。常に報告を忘れるなよ》
三人は唇の端を上げて、更に大きく散開する。
全ての笑いが幸せに繋がるわけではないと、証明するかのように。
彼らはいやらしく笑っていた。

496　**途切れる、糸**

最後まで生き残る為には、殺すしかない。
驚くほど理性的に、その選択肢を採った。それ以

外の道なんて考えもしなかった。他人のことを思いやるほど優しい人間には、私はついになれなかったらしい。

だから邪魔になる人間も、敵（かたき）と狙ってきた者も、管理者さえも殺した。

一度でも感情に動かされてしまえばおしまいだと知っていたから、相沢祐一を遠ざけた。

それが正しい選択だった。

私の世界を守れる道だった。

のに。

澪も浩平も死なせたのに詩子も撃ったのに覚悟を決めたのに。

この期に及んで好きだった、なんて。

馬鹿みたいだ。

貴方の知り合いを血にまみれさせたのも私なんだから、貴方は私を憎めばいい。大切な日常を奪った女だと逆上すれば。負の感情をぶつけてくれれば「お互い様です」とばかりに殺せた。

容赦なく、返り討ちに出来た。

貴方なんかあのまま見知らぬ誰かに殺されてしまえば良かった。

そうすれば今まで通り無感動にああ、そうかと受け止められたのに。

二度と掻き乱されずに、冷静に在れたのに。

嫌いだ。

貴方なんて嫌い。

みんな嫌い。

あのひと以外はみんな嫌い。

いなくなってしまえばいい。相沢祐一なんて、知らない。

ふたりでいられれば他は要らない。

いらない。

497　雨のまぼろし

雨が降っている。白くか細い糸。
暗鬱な気分を誘う湿った空気。
それは帰りを待つ頼りない私の希望に似ている。
けれどいつか雨は上がるから。
重たい雲は消えて、七色の虹がかかる。
澄んだ青空を映す水たまりを飛び越えることだってできる。
ピンクの傘を閉じる日は必ず来る。
そう、やまない雨はないから。

……重たい空気を吸って、視線をあげた。傘も持たず立ち止まっているのは、見慣れた制服の少女。
この場合、挨拶くらいはしておくべきだろうか。

「おは」
「おはようございます、なの」
言い終わるより前に、私の時間は止まった。
真っ赤に染まった制服で、はっきりと明るい声で、
「もう返り血に慣れたの？」
無邪気な笑顔を満面に、彼女はそう言った。

「あのね」
なんですか。
「あなたは誰も信じてないの」
……そうですね、信じません。
「親友ともクラスメイトとも一緒に助かろうとは思わなかったの」
クラスが同じだけで信用できるなら、こんなゲーム成り立ちませんよね。

「助けようとは思わなかったの」
　足手まといを作って見殺しにするよりはマシだと思いますけど。
「ひとり空き地で待つことを選んだの」
　いけませんか。
「殺して殺して殺して殺して殺して殺して生き残るの」
　いけませんか。
「今さらエゴイストだなんて責めないの」
　だって、私しかいないんです。
「みんなおんなじなの」
　いいえ。私だけなんです。
　私以外の誰にも、あの人を殺すことは出来ないんです。
　神さまに誓ったっていい。
「だけどね」
　まだ何か言いたいんですか。
「友人たちをその手に掛けたあなたが」
　何を言ったって、今さら同情したりなんかしませ
ん。
「誰も信頼できないあなたが」
　無条件の信頼なんて、迷惑なだけなんです。
「……どうやって『あのひと』を呼び戻せるの？」
　澪は饒舌だった。
　悪意のない、故にどこまでも言葉と不似合いな表情を、片時も変えずに、声を紡いでいた。
　私は一歩も動かない。
　空き地から動けない。
「結局は自分の想いに酔いたいだけなの」
　助けたいだけです。
「一途なフリをして目を逸らしているだけなの」
　あなたよりあのひとを助けたいんです。
「還ってくるはずないの」

いいえ。
私が覚えていれば、まだ望みはあるんです。
だからこの世界の全てが死に絶えようと――私は死ねない。

「だってあなたは、もう人を殺すことそのものに」
「心をまるごと奪われてるの！」

分かっている。
この澪は罪悪感が生み出した私の欠片だ。
これ以上言わないでと絶叫する私と、どこまでも揺るがない私がいた。二人に別れてしまった気分。
いや、もう何人なのかさえ分からない。
……気づけば、握りしめたピンクの傘は銃に変わっている。
心底彼女を黙らせたいと思った。正体は分かっている。私だ。
さあ最後に私は私を殺さなくてはいけない。

祐一たちに囚われる私を。今まで通りの日常を夢見る弱い私を。
この舞台で生き残るにふさわしい私に生まれ変わる為に、

撃つ。

『……あのひとの名前、まだ覚えてるの？』

それ以上口をきかないように。

当たり前だ、一秒だって忘れたことなんかない。
この島で極限状態に追い込まれてからずっと、おまじないのように名前を呼び続けてきた。
それだけで少し、心が落ち着いた。
それだけで生きる意味がある気がしてた。
みんなは寄り添おうとするけれど、そんなの成り行きの偽物だ。あなたたちは知らないだろうけれど、

記憶がない、ということは、いない、ということと一緒なのだ。だからこの島にいないひとと、えいえんに生きるひとと共に生き残ろうとするならば、つまりそのひとは私以外に味方はいないのだ。
詩子も祐一も、あの思い出を忘れたならもう敵だ。ごめんなさい。しかたないんです。
全員を助けるなんてバカみたいな夢にすがって狂うなんて嫌なんです。
私はもう選んだんです。
だからみんな、ごめんなさい。
私は全部覚えていますから、恨んでくれて構いませんから、どうか私より先に死んでください。

と、不意に、

「……『居場所』を奪われた怨み！」

くるり、と思考が反転した。
目の前には短髪の少女。
頭に二発、心臓に二発、とどめにもう一発、間違いなく撃ち殺したはずの澪の姿がない。
ああいやだ、別の人と入れ替わるなんて。
ねえ、そんなの卑怯ですよ、澪——

『……あのひとの名前、まだ覚えてるの？』

あのひと。
待ち人。
消えてしまったヒト。
それ以上の情報は、私に与えられない。

「……え？」

真っ白な現実。なにもない現実。
色の無かったそれが赤く染まる。

ユメのカケラを集めても、結局は誰も救えやしない。
——現実（うてない）の私は、呆気ないほどに弱い。

498　侵蝕開始

ＣＰＵの作動音。聞き慣れた音——消えた。
画面が完全に消えたのを確認すると、北川はノートパソコンから電源ケーブルを抜いて、丁寧に鞄へと押し込んだ。
これは、彼の一筋の希望。何も出来ない、自分の、たった一つの鍵。
——ふざけるのも、ここまでだよな。
ゆらりと、立ち上がる。
「ジュン……？」
レミィの声。怯えたような声だ。
北川の顔に、剣呑な雰囲気は感じられない。しかし、常にあった、持ち続けていた筈の明るさは、薄い。その様子に、レミィは多少ながらも〝引いている〟様子だった。
「そろそろ出よう。ここにずっと居て、もずくパーティー開いてても意味無いだろ」
「ウーン、確かにもずくばっかり食べるのも飽きたネ」
「そうじゃない」
笑いには乗らない。
「俺達には、探さねばならぬ物がある」
「探さなきゃならないモン？」
「うむ、これだ。見たまえ」
そう言って取り出したのは、二枚のＣＤ。
「1/4、2/4……とかって話、しただろ？」
「ウン」
「俺の華麗なる推理によれば、だ。こいつは合計五か六枚あるはずなんだ。1/4～4/4で四枚、そしてこの無地のＣＤ。もう一枚くらいあるかもしれない。

中身はこの島の秘密に関わること……だと思う」
ウンウン、とレミィが頷く。それを横目に見つつ、
「結局、手持ちのCDだけじゃ解析は無理だったた
――俺の得意分野じゃないしな。だから、今から探しに行こうかと思――」
「ナルホド、強奪ネ！」
「はっ？」
レミィの台詞に、北川が頓狂な顔を見せた。
「……だって、その二枚の内の一つもヒロユキが持ってたんでショ？」
ヒロユキ――の辺りで、レミィの表情が一瞬翳る。
だが、それも一瞬。
「だよなぁ――とすりゃ、強奪するしか無いのか？」
――強奪。
北川の必要とするのはCDだけだ。
荷物ごと奪う必要は無い。
だが――

――CDだけ、そう簡単に手に入るわけがない。
……恐らくは、相手は怪しむ。いきなりCDをくれと言ったところで、そう簡単に手に入るものか。
それだけではない。もし、持っていた相手が『ゲームに乗っていた』としたら？
……言うまでもない。相手は、自分達を殺しに襲いかかってくる。
殺す。
殺す。
――戦うってのか？ この俺が？ はは、まさかの冗談だろ……？
「ジュン……？」
「ん？」
気付けば、レミィの顔がすぐ下にあった。心配げな表情。元々、北川とレミィの背は同程度だ。丁度、下から覗き込むような体勢となっていた。
「顔、青いヨ……？ 大丈夫？」

「――」
――ああ、そうさ。
大丈夫。
何とかなる。
なにも、みんなゲームに乗ってるわけじゃないだろ？　大丈夫、大丈夫、ダイジョーブ。心配いらない！
「うむ、もずくパワー全開だぜ！」
そう言って、北川は親指を立て、爽やかな笑顔を魅せた。
精一杯の、演技。
何とかして、自分を奮い立たせた。そうでもしなければ、へたり込んでしまいそうだったから。
――恐い。
恐いんだ。
じわじわと――北川の精神を、恐怖が蝕みつつある。

499　MOTHER

教室のざわめき。
教師が黒板にチョークで文字を書く音。
遮断機から鳴り響く警告音に犬の鳴き声。
カチカチと時を刻む時計の音。
すべてがとても懐かしいものだ。
ここに来て何日になるのだろうか。
曜日を知る必要もなく、時間を知る必要もない。
ただ、生きること。
それだけが目標だった。

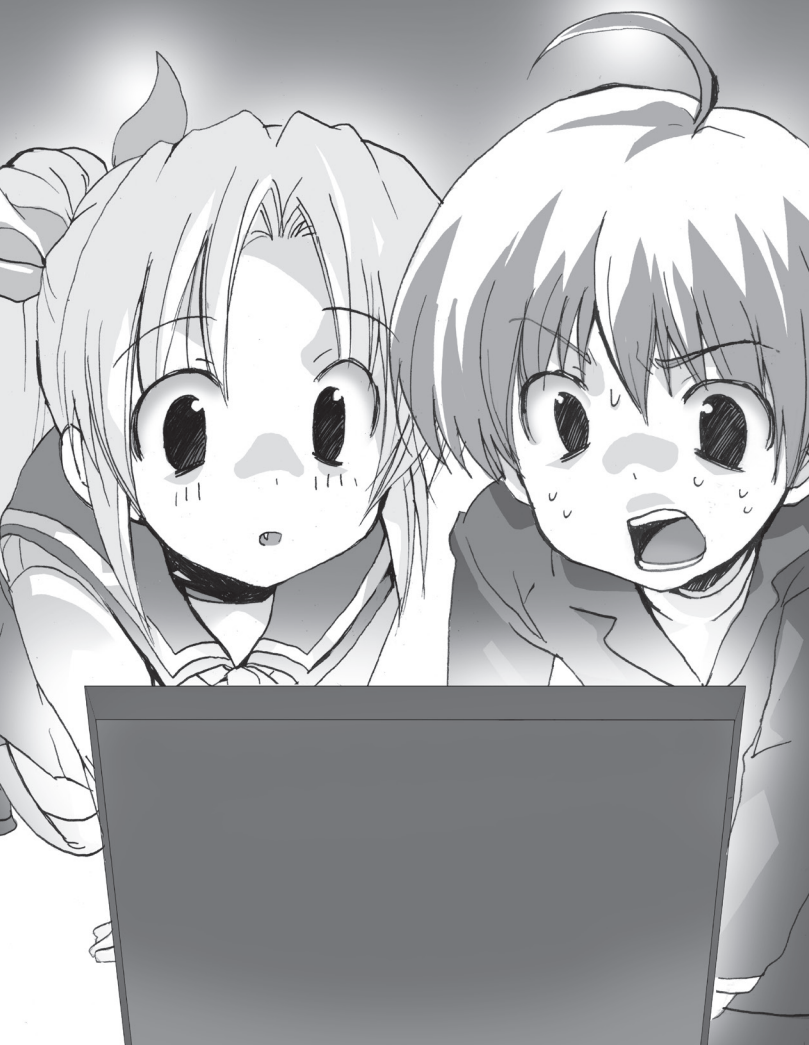
その割には結構気楽にやってきたよな。
北川は空を見上げる。
そこにあるのは雲と、どこまでも広い空。
これは、何処にいても代わらない。
それだけに空を見ていると落ち着く。

「少し、寝ていいか？」
体力はすでに限界に来ていた。
これからの効率をあげるために、少しの仮眠は必要だろう。
「うん、いいよ」
レミィはにっこりと笑う。
ゆっくりと北川は目を瞑った。
その直後のこと、
「ちょっとパソコン触ってみていい？　気になるところがあるノ」
耳元にレミィの吐息がかかる。
「いいけど、あまり長いこと使うなよ。バッテリ切れたら大変だからな」
目を瞑ったまま、北川は答えた。
「判ってる、だいじょーぶヨ」
カタカタと響く、キーボードの音。
それが少し気になって、なかなか寝付けなかった。
しかし、体はだんだんと睡魔が支配し始める。

北川は、深い睡眠の中へと落ち始めていた。
そんな時のこと。
「やった！」
レミィの大きな声が鼓膜を激しく揺らす。
「ねぇ見て、ジュン、みて!!」
「……そんなに大きな声を出されたら、寝られない。少し落ち着いてくれ」
北川は体を起こして大騒ぎするレミィに向けて言ったのだが、その声はレミィに届いていないようだった。
レミィは北川にノートパソコンを押し付け、また大きな声で叫ぶ。
「いいから見てヨ、これ！」
そのときのレミィはサンタクロースを信じているような、純粋な輝きを放っていた。
北川はディスプレイに目をやると同時に視界に飛び込んでくる雲の壁紙。
そして次に検索ウインドウ。

そこに打ち込まれた検索ワードは、
『にこにこぷん』
そして、表示されているファイルはひとつ。
『(にこにこぷん) おかあさんといっしょ.mov』
「ちょっと待て。お前そんなににこにこぷんが気になっていたのかよ！　そんなにそんなにおかあさんといっしょが見たかったのかよ！」
「ジュンがこれを見てない人間は死ぬだの無知だのユダだのブルータスだって言うんだもん！」
「それはなんだ、所謂ひとつのジョークみたいなものなんだが……」
「とにかく、レッツビギンヨ！」
レミィは勢いよく『(にこにこぷん) おかあさんといっしょ.mov』をダブルクリック！　HDDはカタカタと音を立てて、ムービーファイルを読み込んでいた。
その音が止まると同時、ディスプレイ一杯に二人の人間の姿が映し出される。その二人は服を身につけていない。生まれたままの姿だった。
スピーカから流れ出る音は、普段ならばスピーカからではなく、ヘッドホンから聞こえるもの。
「母さんっ、母さんっ！」
若い男が何度もそう連呼しながら、ふたまわりほど歳の離れた女と肌を合わせていた。
「あん、もう……お父さんそっくりで、強引……なんだから……」
若い男はどうやら設定上その女の息子らしい。
「って……なんだよ、これ⁉」
北川は声をあげた。
それが何かはもうわかっているというのに。
そう、それはまさしく男の宝、エロムービーだ。
このパソコンの持ち主が敢えてこのファイルを自分でHDDに入れて名前をおかあさんといっしょとし、他の人間の目からファイルを隠そうとしていたのか、それとも本当におかあさんといっしょが見たくてP2Pソフトなどを利用しダウンロードしたの

だが、それが悪意を持つ第三者の嫌がらせでおかあさんといっしょと名付けられたエロムービーを偶然落としてしまったのかは判らない。だがどっちにしろ、それはエロムービー以外の何物でもないのだ。
「もう、イッちゃうよ、母さん、もう僕、僕！」
ムービーは容赦なく、半ば思考停止ぎみの北川の横で再生されつづけていた。
「これがおかあさんといっしょ……」
顔を赤らめながらも、レミィはディスプレイをじっと見つめていた。
「そんなわけあるかぁぁぁっ！」
北川は我に戻り、ＰＣの電源ボタンを押して、マシンの電源を落とす。
「ジュン、なにするの！」
レミィは怒って、再度電源ボタンを押した。
「あれを見ないと人じゃないんでしょ？　あれが大人の階段を一歩昇ることになるんでショ⁉」
「確かに大人の階段は一歩昇るかもしれんが、お前にはまだ早いッ！」
やっとるやつはやっとるだろーけどな！
「あれ？」
レミィは間の抜けた声をあげた。
「マシンの電源はついてるけど、ＨＤＤを読み込まないヨ？」
「なんだって⁉」
パソコンのディスプレイには黒い画面が映っていた。それは確かＢＩＯＳの状態であるという。続いてＯＳが立ち上がるはずなのだが、画面はまったくといって動かない。
「もしかして、壊れたノ？」
レミィが呟く。
北川は呆然とディスプレイを見ていた。
睡魔なんて何時の間にか何処かに飛んでいってしまっていた。
パソコン、壊れたのか？
……マジで？

500　日常との決別

ジャキッ……

いつでも引き金を引けるようにしながら崩れかけたドアを機関銃で押し開く。

「やはり……誰もいませんね……」

荒れはれた喫茶店、いや、喫茶店であったもの。先のにぎやかな雰囲気を知っている弥生にとっては凄惨な廃墟と感じられる。

「ここにいるわけがないですね」

篠塚弥生（四十七番）はそんな言葉とは裏腹に意外そうな顔で店内を眺めた。

水瀬秋子はここにはもういない。

戦闘態勢を解かないままに店内を一通り調べまわす。

やはり、人影はない。

――私はここから動く意志は残念ながら無いのよ。

かつての秋子の言葉。だが、ここにはもういない。あの時喫茶店にいた面子はもう秋子を除いて死んでしまった。

ならば、ここに敵が押し入ったのか……？　そして皆殺しにした――

（そんなわけありませんね）

死体どころか血痕のひとつもないここで戦闘が行われたとは考えにくい。

――ちなみに一体、男の死体が奥の部屋に安置されているが、それは弥生も知るところだった――

つまり、ここを秋子達が移動するまでは少なくとも戦闘は行われていない……ということになる。

（ならば、どうして水瀬さんは動いたのか……）

カウンターの奥へと入り、コーヒーをドリップする。約三人分のコーヒーを。

もはや喫茶店とはとても呼べない寂れた店内に、

香ばしい匂いが漂った。動きやすいように荷物を整理しながら思案を巡らせるが、すぐにそれを断ち切った。
(根拠のない憶測など並べても意味がありませんね)

今の弥生が知りたいことは実はあまり多くない。
危険人物。
誰が闘いなれているのか、誰がゲームに乗っているのか。そして誰が生き残っているのか。
それらを相手にする時が、一番危険だからだ。
弥生が最後まで生き残った場合、それらと交戦する可能性が一番高い。
最後まで残っている者が戦闘もロクにできない烏合の衆と考える方が愚かなものだ。
「そういえばもう一人ここにいましたね……確か国崎往人さん……でしたね」
弥生とほぼ入れ違いに出て行った青年の名と、顔を思い浮かべた。
秋子以外に、生き残ってる喫茶店にいた者。
まだ名前は呼ばれていない。彼が今何をしているかは知らないが、お互い生きていれば必ず会えるはずだ。
恐らくは殺し合いの中で。
あまり派手に動くべきではない。確実に、仕留められるときにだけ動けばいい。
それが生き残るために弥生が選んだ道だった。
現在複数で群れて行動している人間は決して少なくはないだろう。
喫茶店での秋子達がそうであったように。森の中で闘った、女性とは思えない程力強いお下げの少女達がそうであったように。闇討ちで倒したカップルがそうであったように。毒を受けた少女と、その少女を守ろうと爆死した悲しい二人がそうであったように。マナと、炎の中で息絶えた少女がそうであったように。そして、弥生と守りたかった二人が……

そうであったように。
多人数相手に真正面から戦いを挑むのは分が悪い。
(負けるわけにはいかないのですから)
それでも、弥生はここ、喫茶店へと足を運んでいた。
誰も知りえることはなかったが、本当の敵にも宣戦布告を果たした。あとは進むだけだ。ただ、最後の決心がまだ足りない。
弥生の心はまだ冬弥、由綺と共にあったから。
危険を承知で喫茶店へとやってきた理由はそこにあった。
出来上がったコーヒーをそれぞれ三つカップに注ぐ。一つは弥生の分、一つは由綺の分、そして最後に冬弥の分。そしてわざわざカウンターの表側へと回りこんでから席へと座る。
「恐れ入ります」
まるでそこに喫茶店のマスターがいるかのように頭を軽く垂れる。
周りから見れば滑稽であったかもしれない。
だが、それでも弥生は日常を演じる。確かに存在したその日常を。
ささやかな日常の幸せが、今弥生の中に去来する。
今はただ一つの形見となってしまった彼女のニードルガンと、冬弥の特殊警棒を取り出した。
(私なりの……けじめですわ)
手のつけられていないコーヒーカップの前へと、それぞれ一つずつ置いて。
「そろそろ時間ですね……」
残ったコーヒーを喉へと流し込む。それはいつもよりとても苦い。
「――さようなら」
軽く会釈。直動的な動作で踵を返すとそのまま喫茶店の扉をくぐった。
もう壊れてしまった喫茶店に、冬弥と由綺、そして弥生が望んだ、還らない日常を置き去りにして。

後には空のカップ、そして未だ湯気が立ち昇る二つのカップの前に寄り添うように置かれたニードルガンと特殊警棒だけが残されていた。

501　弔い

がちっ。
冷たい鉄の音。
結局、なつみの頭を銃弾が貫く事は無かった。
僅かに遅れて、風の如く駆け付けた晴香の蹴りが飛ぶ。正確に腕を狙ったそれは、なつみの銃を教会の壁に吹き飛ばす。衝撃に持っていかれた腕が、なつみの身体を床に転ばせた。
「――――」
なつみの顔は、呆然としたものだった。
何が起こったか分からない、という顔ではない。
何故、どうして、といった顔か。
死ねる筈だった。
復讐を果たし、今、まさに、「自分の居場所」をまた取り戻す筈だった。
しかし。
「弾切れ、ね――まぁ、随分良いタイミングじゃない？」
皮肉げな晴香の声。無反応。
「自殺なんて止めろって、お告げなんじゃないの？　誰だか知らないけど、まぁ、良い店長さんよね」
「わ、私は――」
「うるさいわね」
辛うじて開いた口を、晴香が閉ざす。
その目に浮かぶのは怒り。侮蔑。
「あんたも、あいつも、ぐだぐだぐだぐだ殺せだの何だの勝手な事ばっか言って……。いい加減、反吐が出るわ」
なつみの顎を掴む。
長椅子の横から引きずり出すと、晴香はそれを無理矢理立たせた。

……が、すぐ崩れ落ちる。ちっ、という舌打ちの音。

「復讐だか何だか知らないけど、折角残った命を大切にしようって気があるの？　死にたくない人達だって一杯死んでるのに？　ふざけんじゃないわよっ！」

教会中に響き渡る、怒号。

晴香の前にへたり込んだなつみが、ようやく、びくりと身を震わせた。

「誰かのお陰で生き残ったなら――生き残ってほしかった人がいたなら。その人の分まで、生きてやる。それが礼儀でしょ。それを、殺して、奪って――挙げ句には放棄。店長さんが泣いてるわ」

「――だったら、どうしろって言うの？」

立ち上がる。

睨み付ける。

火花が散った――ように見えた。

「『居場所』も無い。生きる意味も無くなったのに。それなのに、生きろって言うの？」

「無いなら、探せばいいじゃない」

「……ありっこ無いわよ！」

「探そうともしないで、無いだなんてよく分かるわね。あんた、不可視の力でも使えるの？　それが、放棄してるって言ってんのよ。分かってないわね」

「――っ！」

激昂。

右手を、血が滲む程に握ると晴香の胸ぐらを掴み上げた――もはや、相手の手に握られた刀の存在すら、忘れていた。

だが、結局。

その拳が放たれる事も無く。

なつみは、再び、その場にへたり込んだ。

右手の内からぽたりと、赤い雫が落ちた。

502　第七回定時放送　そして一つの疑問

「おはよう、諸君。これから定時放送を行う。

十一番　大庭詠美
十四番　折原浩平
十七番　柏木梓
二十番　柏木千鶴
三十一番　霧島佳乃
六十一番　月宮あゆ
六十六番　名倉由依
七十八番　保科智子
八十二番　マルチ

以上だ。
残りわずかとなってきたので、生存者発表も行う。

一番　相沢祐一
三番　天沢郁未
五番　天野美汐
九番　江藤結花
十九番　柏木耕一
二十一番　柏木初音
二十二番　鹿沼葉子
二十三番　神尾晴子
二十四番　神尾観鈴
二十九番　北川潤
三十三番　国崎往人
三十七番　来栖川芹香
四十番　坂神蝉丸
四十三番　里村茜
四十六番　椎名繭
四十七番　篠塚弥生
四十八番　少年
五十番　スフィー

六十四番　長瀬祐介
六十八番　七瀬彰
六十九番　七瀬留美
七十九番　牧部なつみ
八十三番　三井寺月代
八十八番　観月マナ
八十九番　御堂
九十番　　水瀬秋子
九十二番　巳間晴香
九十四番　宮内レミィ
九十九番　柚木詩子

それでは、諸君らの健闘を祈る」

御堂と詠美は、思わず顔を見合わせる。
呼ばれるはずのない名前。

「どうして、お前が死んでいる？」
　この時点では、まだ、二人は気付いていなかった。
先程詠美が嘔吐した際に、爆弾が吐き出されていたことに。その爆弾が、実は発信機を兼ねていたことに。

503　断罪

柏木初音。それがわたしの名前。わたしは今、一人で彷徨い歩いている。
　わたしは怖かった。悪意と殺戮が渦巻くこの島でわたしは今ひとりぼっちだったから。
　頼れる人達はいた。何よりも信頼できる家族。お姉ちゃん達と耕一お兄ちゃん。けど、わたしは逃げ出してしまった。
　恐かったから。自分のせいで大切な人達を傷つけるのが。わたしの中に居るもうひとりの自分。その意識に囚われると、暗くて悲しい衝動が込み上げて

きて、破壊的な衝動に身を任せてしまいそうになる。そんな不安定な自分が誰かといれば、その相手を傷つけてしまうかもしれない。

　自分のせいで誰かが傷ついてしまうなんて耐えられない。だから、私は繋がりを拒絶した。

　千鶴お姉ちゃんを梓お姉ちゃんを耕一お兄ちゃんを七瀬お姉ちゃんを彰お兄ちゃんを傷つけたくない。絶対に傷つけたくない。わたしの為に誰かを傷つけるなんて、信じられる人を傷つけるなんて嫌だった。傷つけて、大切なひとを失ってしまうのなんて死んでも嫌だった。

　でも、わたしは同時にどうしようもなく子供だった。無力で、無能で、ばかで、一人では何も出来ないやつだった。その上、すごく怖がりだった。

　一人は嫌だった。

　いつ殺されるかもわからない場所で、一人でいるなんて耐えられなかった。矛盾している。わたしはどうしようもなく矛盾している。矛盾の螺旋に落ち込んでいる。

　一人は嫌だった。

　心が痛かった。もう矛盾に耐え切れなくなっているのだと思う。自分はこんなに歪んだ矛盾の中で笑っていられるほど強くなかった。

　楽しかった日々はもう粉々で見る影もなかった。楓お姉ちゃんは死んだ。もうどこに帰っても会うことが出来ないのだ。それこそ私が死なない限り。

　死のうかと思う。

　もしかしたらもう、千鶴お姉ちゃんや梓お姉ちゃん、耕一お兄ちゃん、彰お兄ちゃんも死んでしまっているかもしれない。

だとしたら。

　今生きていることに、どんな意味があるのかと思う。

　死のうかと思う。

　わたしはただ生きていたいのではないのだ。淡々と続く穏やかで優しい日常の中で生きていたいのだ。

その日常が粉砕された今、生きていることにどんな意味があるというのだろう。
　楓お姉ちゃんの優しかった笑顔を思い出して、わたしは涙がこぼれそうになった。
　死のうかと思った。
　舌を噛んで死んでしまおうかと思う。もう歩くのも疲れた。一人でいることも疲れた。誰かを傷つけることにも疲れた。天国に行けば楓お姉ちゃんに会える。誰も傷つけなくてすむ世界にいける。
　――死んでしまおう。
　少しだけ後ろ向きの勇気が要るけれど、その勇気が今、わたしの心にはある。あれだけ生きて帰りたいと願っていたくせに、もうわたしの心には生きるために使う勇気はなくなっていた。
　次郎衛門になんてもう、会えなくてもいい、立ち止まり、目を閉じて、舌を少し出し、前歯を当て、力を込めようとしたその瞬間に、
　わたしの目に七瀬彰の姿が入った。
「彰、お兄ちゃん……？」
　声が漏れる。距離があるのに彰の表情までが判る。笑顔。間違いなく彰は微笑んでいて、微笑んだまま彰の身体は急速に崩れ落ちる。
　死にたいと思っていた気持ちが一瞬で消え去る。
「彰お兄ちゃんっ！」
　わたしは思わず駆け出している。矛盾のことも死にたい気持ちも忘れて、自分をずっと守ってくれていた青年にまっすぐ駆け寄る、
　――あなたが傍に行ったせいで、大切な彰お兄ちゃんは逆に傷つくかも知れないよ？
　――次郎衛門とあの青年、どっちが大事なの？
　走るわたしの心の中からそんな声が聞こえる。もう一人のわたしがわたしを止めようとする。矛盾が頭に浮かぶ。浮かぶ。逡巡、逡巡、
　叫ぶ。

「わたしは、絶対に傷つけない！　わたしは絶対に傷つけない！　わたしはもうひとりは嫌なんだっ！　だから、あなたは邪魔なの！　出てこないで！　わたしは柏木初音！　リネットじゃない！　どっちが大事とかじゃない！　わたしは！　わたしは大切な人を守るんだ！」

それでわたしの中の声は完全に途切れた。
わたしは、やっと柏木初音に戻った。

駆け寄る。俯せに倒れた彰の身体を必死に起こす。声を掛ける、

「お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ！」
額から血が流れているようだった。零れる血はわたしの服を赤く濡らす。倒れたときに頭を打ったのだろうか。構わず抱き寄せる、言葉にならない声で叫ぶ、お兄ちゃん死んじゃだめっ、そんな風に言いたかったのに声は嗚咽にしかならない。顔を覗き込み驚愕、活力の息吹からは程遠い乱れた息、あの優しかった微笑みを作る事すらままならない消耗具合。見れば身体はずたずたに傷ついている。白かった肌が白さを通り越して青くなっている。それでいて右手にはサブマシンガンをしっかり握っていて離そうとしない。

「彰お兄ちゃん！　しっかりして」
やっと出た言葉に彰が反応、
「眠い、眠い」
かすれきった声、
「彰お兄ちゃんっ！」
何とか、何とかしなくちゃ！　大切な人をこれ以上失いたくない！　街に、近くにある街の中には薬なんかがあるかも知れない！　ここからそれ程離れているわけではないと思う、急げ！
わたしは、自分よりずっと大きな身体の彰を担ぐ。彼はまだサブマシンガンを離さない。重い。重いけれど大丈夫大丈夫大丈夫！　わたしはわたしの意志

で今明瞭に行動している、疲れなど忘れろ！　大切な人をもう死なせない！　街までは一キロも無いはずだ。わたしは大きく深呼吸をすると森の中に入る、急げ、急げ急げ急げっ――

――その時だった。

七回目の定時放送が流れる。
わたしの心に大きな穴が開く。

504　混沌

心に混沌が満ちた。最後の一片だけ残されていた柏木耕一の中の秩序は粉々になって砕け散って、後には見る陰も無いカオスがあった。
すべては今流れた定時放送のせいだった。
七瀬留美と耕一は、柏木初音が森の中に進んでいくのを追うことさえも忘れて、その放送に耳を奪われて、死にそうになった。
耕一の目は混沌に充ちた。膝が折れる。頭痛で思考が壊れそうになる。朝露の輝く草に指を絡ませて、今の放送は間違いじゃないのかと、それでも疑う。

ちづるさん。あずさ。かえでちゃん……

柏木耕一が呟いた言葉の断片からは、そんな単語が辛うじて拾えた。
「ちくしょう」
――守れなかったのかよ。
「俺は、一体、何のために」
自分は無力だった。無力で無力で無力で無力だ。命に代えても守るのだと、そう思っていた人たちが自分にはいた。自分の従姉妹たち四人を、何があっても守るつもりでいた。力が制限されている中、女達を守ることが自分の使命だと思っていた。
失われた。

気づけばもう、自分の従姉妹四人のうち三人が逝ってしまっていた。自分が呆としている間にも時間は流れ、その流れた時間の渦が運命を巻き込んでしまったのだ。
「畜生！　畜生畜生畜生っっっ！　千鶴さんっ！　梓っ！　楓ちゃん！」
笑顔を思い出す。
淑やかで、いつも優しい笑みを見せてくれて、自分の精神を救ってくれた、大切な人。
活発で、いつも明るい笑い声を響かせながら、自分の心を励ましてくれた、大切な人。
無口だけど優しくて、自分の心をその湖のような深みの心で癒してくれた、大切な人。
「千鶴さんっ、梓っ、楓ちゃんっ！」
叫ぶ。咆哮に似た慟哭の声を上げて叫ぶ。何で自分は、三人を失わなければならない？　自分はそこまで救えないことをやってきたか？　自分が人を殺したからか？　どんな理由があれ、自分は人殺しだからか？　ああああああああああああああああああああああああああああ!!
地面に拳を叩きつける、四度殴ったところで血が噴出すが痛みすら感じない。もっと大きな痛みが身体と心とを走っていて、血が噴出したくらいでは痛みにもならないのだろう。
「耕一さんっ！」
七瀬留美の声がする。だが今は返事をするのも億劫だった。今は何が起こっても動ける気がしない。もう自分には希望の光は無いのだ。思う。希望の無くなった瞬間に人は抜け殻になり、動けなくなるものなのだ。耕一は心底、大切な友達二人を失ってもなお抵抗し続ける七瀬留美のことを尊敬しようと思う。
その七瀬留美が喚いている。
残念だが、自分は七瀬ほどには強くなかったようだった。頭が痛かった。もう寝てしまおうかと思う。

夢の中で眠ると現実に戻る、と誰かが言っていた。もしもこの殺し合い全てが夢だとすれば、今眠りにつけば元の世界に戻れるのかも、
「耕一さんっ！　聞いてっっ‼」
——そんな幻想を愛でている場合ではなかった。
「今、そこに、高槻がいてっ——初音ちゃんの行った方に向かったのっ！」
覚醒。
希望はまだ一片だけあった。思い出した。柏木姉妹は四姉妹だ。遅すぎる。自分は馬鹿か。自分から離れていってしまった柏木初音が無事に生きていて、今目と鼻の先にいる、
そして今、あの高槻に追われている、
立ち上がれ！
悲しみを忘れることなど出来るわけが無い。だが今は悲しみを抑えつけろ、走れ！　初音はすぐ傍だ、急げ急げ急げ急げっっ‼
千鶴さん梓楓ちゃん、必ず貴方たちの妹は守るから、絶対に絶対に絶対に守るからっ‼　少しだけ、少しだけでいいから待っていてくれ‼
耕一は何も言わずに立ち上がって身体を低くして走り出す。七瀬留美の走る速さを完全に無視した高速の移動だった。地面を踏み鳴らす音、あまり状態の良くない土の上なので足が沈み込んでしまいそうになる。足を取られる、転びそうになるが全身の筋肉をフル稼働して無理矢理に体勢を立て直してすぐ走り出す、その勢いのまま森の中に飛び込む、飛び込んで少しだけ立ち止まって叫ぶ、
「何処だ、初音ちゃんっ！　返事をしてっ！」
息を切らせて追いついた七瀬留美も叫ぶ、
「初音ちゃーんっ！　返事をしてっ！」
七瀬留美が叫んだ瞬間だった。
木々の間で何かが破裂したと思った。爆弾か何かじゃないかと思う。残響。耳が潰れるかと思う。銃声だと理解するのに一秒。残響から距離を測る。それほど離れてはいないと思う。狼狽、まさか高槻が

初音ちゃんを撃った音か！　耕一は目を閉じて息を吸って冷静さを取り戻そうと一秒間息を止めてその後に集中、銃声の聴こえた方に初音はいるんだと考えろ、しっかりと定めろ！
「あっちだっ！」
指を差し走り出そうとした次の瞬間、
耳の裏辺りで同じような炸裂の音がした。
「うあっ！」
叫び声。高い声で七瀬は鳴いた。残響。耕一は振り返り、七瀬の脹脛（ふくらはぎ）の辺りから血が弾けていることに目を奪われる。
「大丈夫かっ！」
「な、なんとかっ」
七瀬は苦しそうな顔で頷く。銃弾はまだ一発だけ、足以外に撃たれた場所はないようだ。
「敵襲……っ⁉」
耕一は舌を打つ、なんでこう切羽詰った事態に敵襲があるっ！　参加者同士の戦いをこれ以上続ける意味はあんのかよっ！　銃弾が飛んできた方に七瀬は目を遣っている、耕一も同じように目を遣り、目を疑った。
七瀬は確かに高槻は初音を追って森の中に入っていった、と言った。
ならば何故、今目の前に高槻がいる？

505　生命の歌

お姉ちゃん達が死んだ。みんな死んだ。涙がこぼれた。絶望に打ち拉がれた。膝が崩れてへたり込んだ。
——普通の子供なら動けなくなって当たり前の衝撃を受けている筈の柏木初音は、それでも五秒ほどの放心の後には膝を起こして涙を拭って、七瀬彰を背負いなおすと、早足で動き始めている。
「泣くのは、もう少し後でも良いよね」
泣いていては出来ないこともある。悲しむことは

後でも出来るが後悔だけはしたくない。息を切らせながら、魂が折れそうになりながらも初音は動く。街まできっともう少しだ、頑張れ、
その瞬間鼓膜が弾けたと思った。銃声だと理解するのに二秒、初音は驚いて振り向く、
「おおおお！　こんな子供がここまで生き残るとはまったくもって予想外だったああ！」
高槻が立っている。右手に銃を持った高槻が嫌な顔で笑っている。
今度こそ魂が折れそうになる。顔から血の気が引いていく。身体が震える、無意識のうちに後ずさる、意味が無いことはわかっているのに、高槻から少しでも離れようとする。
「まったく、このゲームに参加していた奴らはこんな子供も殺せないようなヘタレばっかりだったのかあ！」
拳銃が向けられる。そして自分は何も持たない。
高槻は男で大人、自分は女で子供。
——勝敗は明白だった。
それでも七瀬彰を死なせたくないと思う。
初音は息を吸い、吐き、目を閉じて祈って目を開き、開いた目で真っ直ぐ高槻を見つめる。
ここで脅えているだけではそれこそ魂まで折れてしまう。目だけでも、奴に屈しないでいようと思う。考えろ。考えろ、どうしたらこの場を逃げ出せるか！　武器は。武器はないのか。
自分の目を見て少し眉を顰めた高槻は、しかし次の瞬間には愉快げに笑う。
「よおし、オレだって別に鬼じゃなあい！」
高槻は笑う。笑って、そして宣言する。
「一分間だけ待ってやるぅ！　その間にここから逃げるなりすればいいっ！」
遊ばれていると思った。絶対的な強者の余裕だ。
初音は唇を噛み震える身体を押さえる。しかし好機、

この余裕は油断となり得るかもしれない。
「お前が背を向けたところから一分間のカウントを始めるぞっ！」
　初音は高槻を睨んだまま少しずつ後ずさり、二十メートル離れたと思ったところで背を向けて走り出す。一分でどれだけ走れるか。
「ちょっと待てぇ！」
　高槻が叫ぶ。思わず立ち止まって振り返る、
「その背中に担いだ男はそこに置いていけぇ！」
ふざけるな、と思う。
「嫌だ！　この人を置いていくことなんて絶対に出来ない!!」
　初音は顔に熱が昇っていることを自覚。今やこの人は自分の希望の火なのだ。
　高槻が不愉快そうに叫ぶ。
「重くないのかあ！」
　別に彰を嬲り者にしようというわけではなく、ただ単に忠告がしたかっただけのようだった。

「重くないっ!!」
「……まあ、好きにすればいいっ！　一分を測り始めるぞっ」
　初音は今度こそ駆け出す。走れ！
　スピードが出ない。一分間というのは短すぎる。息が乱れる。身体はそれほど疲れていないのに肺が痛い。身体よりむしろ心が疲れているのだと思う。心が圧迫される。もっと速く走らないと自分ばかりか彰が殺される。急げ、街まではあと何分走れば着くんだっ！
　走りながら思う。どう見積もっても一分は経ったと思う。一分で自分はどれだけあいつを突き放せたのだろう。逃げ切れたわけが無い。足を止めては駄目だ。街まではあと少し。街に着いたらまだそれでも何かあいつに対抗する手段があるはずだ。
　身体が揺れた。
　バランスが崩れる。残響。呻き声。

思いも寄らぬ所から拳銃の音が聞こえた、どうして、まさか別の襲撃者がやってきたのか、
そんな風に考えながらどうして身体が揺れたのか考えて、すぐに初音は顔面が蒼白になる。自分にはまったく痛みがない。それで身体が揺れた、つまり彰の身体のどこかに銃弾が命中したんだ。ということは先の呻き声は彰の、
そこまで考えてバランスが完全に崩れ、初音は彰もろとも泥の中に突っ伏すことになる。顔から泥に突っ込んで一瞬息が止まる。顔を上げて彰を探す。自分のすぐ横で彰が目を閉じて倒れている。顔色は遂に青を通り越して白くなっていた。死人だといってても何ら差し支えは無いと思うほど白い。何かを言おうとするが泥が口の中に入って上手く喋れない。泥を吐き口を拭い彰に縋る。今は喋れる。けれど声にならない。しっかりして、と言おうと思ったのだ。言おうとしたのに震える唇が邪魔をする。

「そんなどろどろに汚れていちゃあ可愛らしい顔が台無しだああ！」
そんな高槻の声も初音の邪魔をした。一分間相当の距離は離していたのに、何故こんな近くにいるのだろう。気づく。騙されていたに決まっている。あいつは初めから待つつもりなんて無くて、希望を持たせるようなことを言って自分を弄んだのだ。
「いやあ、本当に可愛い女の子じゃないかああ！」
悔しかった。武器があるなら自分はあいつを真っ先に殺すというのに。
気づく。
武器ならあるじゃないか。自分のすぐ傍らにサブマシンガンがある。七瀬彰が未だ手から離さない鈍色の兵器。
「オレの趣味にぴったりだああああああ！」
初音は息を吸って間隔を取る、高槻が油断する瞬間を見つけるんだ。
「楽しませてもらおうかああああああああっ!!」

高槻が高笑い、
初音はその瞬間を見逃さない。彰の手からサブマシンガンを奪い構えて高槻に向けて迷わずに引き金を引く——
その前に、高槻の右手から放たれた銃弾が初音の手からサブマシンガンを弾き飛ばしていた。
「うああっ！」
マシンガンは遠くに転がる。ハンマーで殴られたような痛みが右手に走る。直接銃弾が身体に当たったわけではないにせよ、間接的に銃の威力が右手に伝わった。重い痛みだった。
「——見かけによらず気高いのもポイントが高いな。こんな子供がここまで生き残ってこれたのは、この強さがあったからかもしれんなあ」
高槻は肩を竦めてくっくっと笑う。
「まあいい。もう抵抗も出来まい。可愛らしくて気高い少女を犯す——いいな、すごくいいなあ！」
言葉の意味を理解。身体から力が抜ける。恐怖で心も顔も歪む。死ぬより怖かった。心臓の音。早鐘のように打つ心臓、後ずさり、駄目だ、いやだ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！
「いやっ！　来ないで！　誰か助けてえ！」
「呼んでも誰も来ないぞっ！　正義の味方などこの世界にはいないのだっ！　少なくともこの島にはいないのだああああああああっ！」
初音は自分の肩に高槻の手が置かれ、その醜悪な顔が自分の顔に近づいてきて、舌を噛んで死のうかとまで一瞬本気で思う。
千鶴お姉ちゃん、梓お姉ちゃん、楓お姉ちゃん、耕一お兄ちゃん、助けて。誰か、誰か。
初音の願いで奇跡が起こる。
助けを呼ぶ声が、無慈悲な筈の神様に届く。
強く土を踏む音がした。
「正義の味方なんていませんけれど。
——悪の敵はいます」

柏木初音も高槻も気づかなかった。その女の人が自分のすぐ傍にまで来ていたことに。
亜麻色というよりは、黄金色に近い色の、長くて美しい髪。大きく輝く眼。右手に拳銃、左手には槍のようなものを持っている。
何より目を引くのは、その立ち姿だった。初音はこれまでの人生の中で、ここまで颯爽とした佇まいで立つ人を見たことが無かった。
「――鹿沼葉子か」
高槻が不愉快そうに笑う。
「ええ。あなたたち悪の敵です」

506　戦士の歌

「今、小学生の女の子を追っているんだよオレ達は。鹿沼葉子。お前も参加しないか？　ん？」
下品な笑顔で高槻が言う言葉に吐き気を覚えながら、鹿沼葉子は結構ですと首を振る。
「あと三十秒ほどしたらその女の子を追うのさ。ははは。楽しい追いかけっこだな」
――空腹に耐えて歩いていた自分がたまたま見つけた高槻は、こんな風に妄想しながら笑っていた。本当に野に放たれたのだな、と思う。
「お前もちゃんと殺してるか？　ジョーカーとして無慈悲に残酷に殺しまくっているかあ？」
――いい加減、不愉快になってくる。
「さて。そろそろ追いかけようと思うんだが……その前にな」
拳銃を構える。自分の額に向けられている。
「放送を聞いただろうが、オレもこれからはジョーカーでこの島の全ての人間をぶっ殺さなければいかん。そしてお前も例外ではない」
ベレッタという名前の拳銃が、鹿沼葉子の命を狙って黒く光っている。
「オレのクローンが後二体いる。三人で森を包囲してるって訳だ。全員が全員優秀だからなあ。鬼のよ

うな強さだろうな」
笑い、自分が右手に力を込めたことに気づくと尚高らかに笑い、
「その右手の槍でオレと戦うかあ？　ん？　制限された不可視の力でどこまで拳銃に対抗できるかな？」
言うと同時に発砲。
言うまでも無いが、当たらなかった。
「なっ！」
しゃがみこみその姿勢のままで身体を高槻の背後にもぐりこませ、高槻が振り向こうとするその瞬間を狙って槍の柄の部分で首元を殴る。それで高槻の意識は完全に潰される。
「――いけませんね」
少女は三十秒離れた。そして、高槻のクローンが森の中を包囲している。倒れた高槻から拳銃を奪うと葉子は走り出す。その少女が危ない。
自分はジョーカーだ。勿論それは参加者に対しての意味ではなく、自分を飼いならしていると勘違いしているＦＡＲＧＯと企画者に対してのジョーカーだ。

507　安堵＆焦燥

――おはよう、諸君。これから定時放送を行う
学校内まで流れてきた死亡者放送。
本来なら悲しむべきもの。
実際、何人もの人間が亡くなっているのだ。
心の底から喜ぶことなんてできやしない。
それでも……いや、悲しいからこそ、出来る限り全身で喜びを表現した。
「やったよ！　私らの死亡放送流れたよ！」
「うっ、うぐぅ!?」
むりやりあゆを引き寄せて喜びをぶつける。
パシパシ……グッグッ……！

「うぐぅ……手がひりひりする……」
「そう言うなって、千鶴姉の勘は当たってたってわけだ」
――残りわずかとなってきたことなので、生存者発表も行う
その声と重なって、今度は生き残りの参加者の名前が呼び出された。
三人の知り合いの名前も読み上げられる。
本来なら喜ぶべきこと。
だが……
「いけない……」
千鶴の顔に安堵の表情が浮かんでいたのもつかの間。
「耕一さん達は……私達が生きてることを知りません……！」
その事実は、あゆと、梓の顔を曇らせるには充分だった。
「すぐに伝えに行かなきゃ……」
耕一や、初音の悲しむ顔が手にとるように分かる。もしも自分達が耕一の立場なら同じように思うはずだ。
楓を失った悲劇……それを再び味あわせてしまったこと。
「どうして忘れてたんだ、私達はっ！」
たとえ偽りの放送であっても、何も知らない耕一達の事を思うと強く胸が痛んだ。
「私が行きます。これは、提案した私の責任だから……」
千鶴が、スクッと立ち上がる。
初音の居場所は分からない、だが、耕一達は未だ怪我で小屋に寝ているはずだ。
「ちょっ……千鶴姉!?」
「もしかしたらまだ耕一さん達はあそこにいるかも

しれません。ですが、今の放送を聞いたら……たとえどんな怪我を負っていても動くはずです。耕一さんは、そんな人ですから」
「だったらみんなで行けばいいだろ？」
「……私達は死んでいます、体面上では。見つかるわけにはいかないでしょう？　私一人の方が安全です」
「だけど……千鶴姉！」
「あゆちゃんもいるのに？　……危険を犯すのは私だけで充分だから」
「千鶴ね――」
「すぐに帰ってくるから。できれば耕一さん達も連れて……ね？　その後すぐに初音も探さないとね。……でも、もしも私が二時間経っても戻って来なかったら……梓、その時は自分の思う通りに行動して」
そして、梓に有無を言わせず千鶴は教室を飛び出していった。

「バカだよ……千鶴姉……」
梓が呟く。
「いつもいつも、自分だけ責任を背負って……バカッ……」
すぐに追いたかったが……梓には出来なかった。
確かに、全員で動くのはあまり得策じゃない。ただ耕一達に会いに行くだけなのだから容易なはず……。
それでも……
「外には殺人鬼がいるかもしれないんだぜ……どうして自分だけ……」
感情はそうはいかなかった。
「うぐぅ……たぶんボクのせいだよね……ボクが足出まといだから……」
「あゆのせいじゃないよ……」
梓があゆの頭を優しく撫でてやる。
「うぐ……」
くすぐったそうにあゆが目を細めた。
（絶対に帰って来てくれよ、千鶴姉っ！）

二時間経っても戻って来なかったら……あってはならないことを強く祈りながら、撫で続けた。
千鶴は駆ける。影から影へ。
(どうして私はこんなことに気付かなかったのかしら……ごめんね、初音……耕一さん)
後悔してもしきれない。
しかも、初音に限ってはどこにいるのかも分からないままだ。
早く安心させたい、早く伝えてあげたい。
(私は……私達は……生きてますっ！)
見つからないように、かつ全速力で木々の間を駆ける。耕一や七瀬と別れた小屋へ。
もちろん千鶴はまだ知らない、そこに浩平の死体があること、そして放送が流れるずっと前から耕一達がそこにいないということを。

508　最悪の遭遇

二人は小躍りするように、先行していった。呆れて物も言えない。
柏木初音、鹿沼葉子というエサに釣られて、立てた作戦さえ忘れて駆け出していった。爺どもに馬鹿にされるのもやむなし、と思うほど愚かしい。
(……最悪、だな)
まあ聞いてくれ……元々の作戦は、こうだ。
まずベレッタが囮として、相手の視界に姿を見せる。そちらに注目した相手の死角から、俺がボウガンで狙撃する。ステアーはレーダーで位置を確認しながら随時情報を提供し、もしもの時はＡＵＧで二人を援護する。
基本は多勢で少数を罠にかけ、互いに援護するということだ。この作戦は既に巳間晴香と名倉由依の

二人に試して、ほぼ成功している（誤差はあったが、安全性の高さは証明された）。
ところが、だ。
要のステアーが離れて先行するという事は、援護もなく、情報もなく、ただ三人がそこに居るだけなのだ。
（……烏合の衆って奴だ）
溜息をついて、一人残ったマスターモールドはボルトのケースを取り出す。ステアーの情報をアテにして、矢は装填していなかったのだが、今ではそうもいかない。
注意深く、毒矢を取り出そうとした、その時。最悪の相手が走ってくるのを発見してしまった。
（か……柏木耕一だと⁉　復活しているのか！）
鬼の雄体。
結界の束縛さえ引きちぎり、凄まじいまでの強さを見せつけたという、恐怖の鬼が駆け込んでくる。
マスターモールドは慌てて懐の拳銃——ニューナンブM60、こんな名前で呼ばれたくなかったので黙っていた——を取り出す。
そのまま震える手で発砲した。

パン、パン！

「あぐっ！」
恐怖のために弾は逸れ、女に当たる。
あの女は誰だろうか？　いや、問題になるのは柏木耕一だ。女は後でゆっくり始末すればいい。
急いで藪の中を移動しようとしたそのとき、僅かな隙間から偶然目が合ってしまった。
鬼が叫ぶ。
「た——高槻⁉　あそこだ！　敵は高槻だ！」
「なんですって⁉」
ふん、キサマに驚かれる筋合いはないぞ、と若干落ち着きを取り戻し、発砲する。今度こそ、外しはしない。

パン、パン！

鬼の素早い移動に一発目は外れ、なんとか二発目を命中させる。肩から掛けたシーツの中央付近に穴が開く。鬼がうめく。

「ぐっ！」

膝をつく。

（よし！）

手応えに勇気を得て、更に撃ちこむ。

「死ぬがいいッ！」

パン――

何がおきたか、解らなかった。

一発、発砲したものの外れた。

手を強打され狙いを外し、銃を取り落としていた。

いつのまにか、女が鉄パイプをひっさげて突進していたのだ。

こんな女が参加していたか？　こんな凶暴そうな女が――いたか？

「女！　キサマ何者だあッ！」

ナイフを引き抜いて応戦しようとしたが、これも叩き落とされる。即座に拾おうとしたそれを、女は慣れた仕草で蹴り飛ばす。

「なめないでよ？　七瀬なのよ、あたし」

ああ、そう言えば。

やたら凶暴な女子高生が参加していると、聞いた事があったな。

追い詰められながら、マスターモールドは思った。

（……最悪、だな）

509　戦友との再会　～御堂～

「――それでは、諸君らの健闘を祈る……ブツッ」

放送が終わり。

御堂と詠美は顔を見合わせる。
「お前、生きてるよな？」
「あたし、死んでないよね？　どうして呼ばれてるの？」
詠美はきょとんとした表情で聞いた。
「知るか。お前、何か恨まれるようなことでもしたんじゃないのか？」
冗談半分で御堂が言う。
「し、知らないわよぉ！　きっとこれは何かの間違いなのよっ！　そうよ！　そうだわ！　ホント勘違いにも程があるわよっ！」
「いや、放送は確実だ。間違いなんかねぇよ」
「むっかぁ〜〜〜！　あたしの推理にケチつける気？　じゃあ何であたしは生きてんのよっ!!」
自分の推理を一蹴されてしまったエセ探偵・詠美ちゃん様のブーイングの嵐が吹き荒れる。
「知るか、俺もそれが不思議でならん。だいたい生死の判断をどうやってしているかも分かんねぇからな」
キュピーン！
詠美ちゃん様の頭脳がフル回転！
一瞬で答えを弾き出した！
「そんなのかぁ〜んたんよっ！　誰かがあたし達を見張ってんのよっ！」
「そんな奴らの気配はしねぇな」
ガクーン……
今日の詠美ちゃん様の頭脳は不調らしい（いつも不調だが）。
「だいたい見張るも何も、見失っちまえばそれでお終いだろうが。発信機か何かありゃあ話は別だが……発信機？　そうかっ！」
御堂は急に立ち止まった。
彼の背中に追突する詠美。鼻を押さえながら抗議する。
「ちょっ、ちょっとぉ〜〜〜！　急に止まんないでよぉ〜!!　鼻ぶつけちゃったじゃない……」

「……お前、あそこで吐いたとき、腹の中のモン全部吐き出しちまったのか？」
詠美は（いきなり何言ってんのよ、バカじゃないの？）と、言おうと思ったが、御堂の眼がマジだったので正直に答えることにした。
「え？　あ、うん。ぜんぶ吐いちゃったわよ？　それがどうしたの？」
「ゲロん中に金属が無かったか？　よく思い出してみろ」
詠美はよく思い出した。サケ、サバの味噌煮……胃液、そして丸い球体。
「金属？　ああ、あったわよ、銀色の丸い……」
「なるほどな、やっぱりか……。体内爆弾の起爆装置は解除されたんだな。しかしうかつだった、発信機と生死判定装置もセットだったとは。……だが、こりゃあひょっとするとひょっとするかもな」
一人で納得している御堂を見て、何となくちょおむかつく詠美ちゃん様。
「ちょっとぉ！　あたしにも教えなさいよぉ！」
「いいだろう、教えてやる。まず、俺達がこの島に連れてこられた時に、管理側の奴らが参加者全員の胃袋の中に『爆弾・発信機・生死判定装置』が一体化したシロモノを入れやがったんだ。もし、奴らに逆らったり、装置を吐き出そうとしたら、ドカンだ」
「え？　あたし……それ、吐いちゃったよ？　なんで爆発しなかったの？」
「そう、そこがミソだ。高槻って奴が主催から降ろされた時、ゲームを面白くするために奴らは爆弾の起爆装置を切りやがったんだ。つまり吐き出しても爆発しなくなった訳だ。だが、奴らすっかり発信機と生死判定装置の存在を忘れてやがった。おかげでお前は水瀬名雪の傍らで死亡扱いになっている、ってなわけだ。どうだ？　わかったか？」
「え？　さっぱり。もう一回お願い」
「……だからな――――」

「……と、いうわけだ。……分かった……よな？」
御堂はゼーハー言いながら四回目の説明を終えた。
「なるほどね☆　謎はぜんぶとけた！」
詠美はくるりと一回転し、ビシィ！　と指差し、
「つまり、あたしは奴らの目をかれーにあざむいたルパン的そんざいなわけねっ！　真っ赤なぁ〜♪バラはぁ〜♪……」
(さっきから何を聞いていたんだお前は……俺の苦労を一行にまとめやがって……)
御堂の肩にどっと疲れがのしかかった。
その時だった！
茂みから何者かが転がり落ちてきた。
ガサガサッ！　バキバキバキィ‼　ドカッ！
茂みから現れたのは二人の男女だった。
「お前は……！」
御堂は二人の……異様な姿に驚愕した。
「ね、ねぇ、この人達。アンタの知り合い……なの？」
謎の男と詠美の目が合う。男は彼女に軽く会釈した。
「あぁ、知ってるぜ……五十年以上も前からな」

510　ツミビト

オモチャのような銃。
しかしその実体は、濃硫酸を相手に振り掛ける残虐な兵器。その銃口の先で、今、晴香が、なつみの銃を蹴り飛ばしていた。
――それどころじゃない。そうだ、茜だ。
振り向くと、白い床の上で茜が悶えている姿が見えた。
床が、紅い。
「茜ッ！」
駆ける。
床の上に跳ねた血が、ステンドグラスから差し込む光を浴びて禍々しい輝きを見せている。

——鮮血だ。
祐一が側に駆け付けると、茜が左肩を押さえているのが分かった。既にどす黒い色に染まっていた肩口を、鮮血の紅がさらに新しい色を上から付け加える。
　血の勢いが強い。早く、早く治療をしなければ。
——包帯……くそっ、そんなもの、あるわけ無い！
　水鉄砲を放り捨てる。無いのなら、作ればいい。幸い、祐一の制服の袖は長い。それを切りさえすれば！　咄嗟に、茜の腰に差された短刀を取り出そうとして——それを、茜の、血みどろの右手が払った。
　弱々しく。
「ほっ……ほっといて、下さい」
　絞り出すような、声。
　拒絶の意志。
「何言ってんだ……？　ほっといたら、死んじまうだろっ！」
「……いいんです、死んでも」
　脂汗の浮いた顔が、ふっ、と静まった。
　痛みが治まったわけではあるまい。右手が押さえ続けている左肩の傷は、未だ血を吹き出し続けている。
「——色んな人を、殺して、きたんです。ただ、生き残ろうとしてた、だけの、人を」
「……」
「それに、私は——詩子を、撃ったんです。無二の、親友を……撃ったんです……！」
　唇を、噛む。弱った力は、噛み切る事も無い。
　倒れた茜からは、倒れ伏した詩子の姿が見えない——見えない事を、酷く、辛く感じた。
　泣きそうだった。
「……。私は、償うべきです……みんなに。詩子に。それに……貴方に」
「それが……それで、死んでもいいって言うのかっ……？」

「――はい」
事も無げに、答えた。

がすっ。
何かが、固い何かに刺さる音。
振り返ると、ちょうど祐一の隣に一本の刀が刺さっていた。
「――人の話くらい聞いてなさいよ。相も変わらず、泣き言ばっかかり抜かして……！」
刀の先。
へたり込んだ少女の前に立った晴香が――全身に怒りを漲らせて、立っていた。
足取りも荒く近づくと、茜を挟んだ祐一の反対側に立つ。見下ろすような視線。込められた、侮蔑。
「そこのヘタレ男――それで袖でも切って、こいつの肩でも縛っておくのね。……私は、こいつに、話があるわ」
軽く、蹴り上げる。傷に響いたか、茜が、苦悶の声を上げた。
「何しやがっ……！」
「うるさいッ!!」
一喝。
ステンドグラスを叩き割らんばかりの怒号が、祐一の抗議の声を掻き消した。
一瞬の間。息を吐き出した。
「……あんた、死にたいのね？」
唐突な問い。
「……はい」
額に脂汗を浮かべつつ、やはり事も無げに茜は答えた。その潔さに、晴香はさらに顔をしかめる――片膝を付くと、茜の頭を持ち上げ、顔に近づけた。
こう言った。
「なら、あんたのやる事は一つね――生きるのよ」

511　戦友との再会　～蝉丸～

「月代、大丈夫か？」

蝉丸は心配そうに月代の顔をのぞきこんだ。

「(;ﾟДﾟ)ん……蝉丸たん……ハァハァ」

月代は異常なほど息が荒かった……

（まさか、仙命樹の催淫効果か⁉）

とも蝉丸は考えたが、よくよく考えてみれば、自分の血など月代には一滴もついていない。

「月代、どうしたのだ？　熱でもあるのか？」

月代の首筋に触れてみる、脈は正常だ。熱もない。

……あえて言うなら言動が異常だった。

「(;ﾟДﾟ)ハァハァ……蝉丸たんが私のウナジを……も、萌えーーーー！」

「モエ？」

意味不明なことを口走りながら月代はすっくと立ち上がった。

（もしや、この仮面が月代を操っているのか？　だとしたら何とかせねば……）

蝉丸は月代……いや、仮面に詰め寄った。

「仮面、いますぐ月代を操るのをやめろ！」

月代の肩を抱き、蝉丸は言い放った。凡人ならすくみ上がってしまうほどの迫力だ。

「(;ﾟДﾟ)何を言ってるの？　私は月代だよ？　このお面は私の正直な欲望をさらけだしてるだけなんだよ。それにしても、怒る蝉丸も、も、萌えーーーー！」

「む」

手の打ちようが無かった。月代は操られてなどいない……それればかりか、己の欲望……つまり正直な気持ちを出しているだけだったのだ。

「(;ﾟДﾟ)ここから無事に出れたら蝉丸たんと結婚……したい……結婚……ハァハァ」

「……」

「(;ﾟДﾟ)結婚したら……新婚旅行どこに行こうかな……ハァハァ」

ウフフフフ
アハハハハ

「……」
「(;´Д`)子供は何人がいいかな？　二人？　三人？
……蝉丸たんて、ヤパーリ激しいのかな？　ハァハァ」
遠くから足音が聞こえた。足音の数は……二人。
「……月代、誰か来るぞ」
「(;´Д`)え？」
ガサガサッ！
月代を抱えた蝉丸はすぐさま近くの茂みに隠れた。
しばらくすると何かをしゃべりながら男女が歩いてきた。一人は見覚えのある顔だった。
（ついに来たか、奴とは出会いたくなかったが……
何とも奇怪ないでたちだな……）
――――――御堂！（と、猫と毛玉と白ヘビと鳥類）
もう一人は分からない。十七～八歳ほどの若い女だ。
（あの女……御堂に殺されずにここまで……一体何者だ？）
二人の会話が聞こえる。
（よく聞こえんが、爆弾……体内の爆弾は……吐き出しても……？　……るぱん？　何だそれは？　外国人の名か？）
ルパンのテーマソングに反応したのか、後ろの月代も歌い出した。
「(;´Д`)あいつのぉ～くちびるぅ～♪　やさしくぅ～抱きしめて～♪　くれとぉ～ね～だる♪　蝉丸たん！　抱きしめてっ！」
月代は蝉丸の雄大な背中にタックルをかまし、そのままぎゅうっと、抱きしめた。
「月代!?　よせ！　御堂に見つかるっ！」
時既に遅し。蝉丸はバランスを崩し、月代と共に……
ガサガサッ！　バキバキバキィ！　ドカッ！
御堂達の前へ転がり込んだ。
「お前は……！」

くんずほぐれつの二人を見て当然驚く御堂……不思議と蝉丸の頬が赤くなる。
「ね、ねぇ、この人達……アンタの知り合い……なの？」
名も知らぬ少女はこちらを警戒している。目が合ったので蝉丸は会釈で返す。
「あぁ、知ってるぜ……五十年以上も前からな」
何故か御堂の表情は『敵意』ではなく、『なつかしさ』があらわれていた。

512 罪滅ぼし

「人を殺した罪は、消えないのよ。過去の過ちは、ずっと後になっても、永遠に自分を苛み続ける。確かに、死ぬってことでその苦しみから解放されるかもしれない。だけど、そんなのただの逃げでしかないわ。自分がやった罪から、逃げようとしてるだけ。無責任なのよ、あんたは」
「――」
「あんたも、そこのヘタレも、あいつも。命を、軽く見てる。あんた達、最低だわ。人を殺したとか、そんなの関係無い。沢山人が死んだ中で、自分達は生きているっていうのに、それなのに。命はいらなくなったからってポイって使い捨てしていいものだとでも思ってるの？　うざったい――反吐が出るわ」
祐一が、袖を裂く音。
布がきつく縛られ、ぎゅっ、という音を立てる。その度に、茜の顔は苦悶の表情を見せた。無理もない。
――その中で、晴香の声は、淡々と響いていた。無論、後ろのなつみにも聞こえている事であろう。
「あの、詩子とかいう娘だけじゃない。みんなそう。生き残ろうとして、頑張ってきた。何かしようとして、頑張ってきた。その上に、あたし達はいるのよ――無駄に死ぬなんて、それこそ死者への冒涜だわ。

あんた達、死んでまで罪を重ねる気なの？」
――由依。
自分を守る為に、死んだ仲間。
いや、由依だけじゃない。
一緒に戦ってきた、仲間の死があって、今、私が此処にいる。
ここにいる者達は皆それぞれの大切な者を犠牲にして此処にいるはずだ。だから、誰かがその命を無駄にするのを見過ごすわけにはいかない。
その誰かが、どれだけ辛くても。その誰かの為に死んだ、他の誰かに報いる為にも。
「……」
茜は、逃れるように目を逸らす。
「少しでも、償う気があるのなら。……がむしゃらに、生きなさい。精一杯、戦って。それで、死になさい。そしたら、私も褒めてやるわ――地獄でね」
「……生きて、いいんですか？」
か細い声。
精一杯の問い掛け。
祐一も、その問いに顔を上げた。
「誰も許可なんてしないわ」
さらりと流す。
二人は、やや、驚いた顔を見せた。
晴香は続ける。
「生きる権利なんて、誰にもあるのよ。あんたなりに、生き残りなさい。――それが、あんたの殺した人への、せめてもの罪滅ぼしよ」
「……」
布が縛られる音。
完全にとはいかなくても、きつく縛られた布が、血の流出を止めた。

生きる権利は、渡された。

513　運の尽き

東の空からゆっくりと朝日が目の前の道を照らす。その中で、スフィー、結花、芹香の三人は黙々と山道を歩いていた。相変わらず神社は見つからない。無論、往人にも出会えていない。

そんな時だった。

山道を曲がった先、二、三十メートルの所に人影を見た。

女性のようだ。服は血に染まり、鬼気迫る表情。手には機関銃を持ち、さらに服のベルトには別の銃身がのぞいている。

先頭を歩いていた結花は、とりあえず後ろの二人を手で制した。その瞬間、いきなり銃声が響くと、結花たちの頭上を弾道が通り抜けていった。

曲がり角から結花達が出てきた時、篠塚弥生も少なからず動揺していた。

単独行動の弥生にとっては、待ち伏せをするなどして、なるべく自分に有利な状況を作り出して戦うのが基本戦術である。出会い頭で複数の敵と遭遇するような状況は完全に想定外だった。

それでも弥生は、すかさず機関銃を構え引き金を引く。

しかし運の悪いことは重なるもの。機関銃は数発発射されただけで、あとは空撃ちの音を響かせるだけだった。

やむなく弥生は機関銃を放り投げ、ベルトから別の銃を抜いた。銃を構えた時、弥生にはまだ一呼吸出来るほどの余裕があった。そして、引き金を引く。

「タタタタッ」と発射音が響く。弥生はその軽すぎる音に違和感を感じるが、その正体に気付くほどの余裕は無い。

（捕らえた！）

だが、その直後、弥生は右脚に激しい痛みを覚え、引き金を引いたまま地面に突っ伏した。

何が起こったのか、すぐには理解できなかった。捕らえたはずの相手を見ると、痛がってはいるものの出血している様子はない。
弥生は、手元に転がる弾を見て激しく後悔した。彼女が手にした銃はエアガンだったのだ。

銃口が自分を狙っていることを認識した結花は、一瞬死を覚悟したが、実際に飛んできたのはプラスチックの弾丸。
痛みは覚えるものの、我慢できないほどじゃない。
結花は銃を取り出し襲撃者に向けて放つ。
弾は敵のふくらはぎ付近に命中した。女性の長身が地面に頽(くずお)れる。
「大丈夫？」
「こっちは大丈夫」
スフィーの返事を聞くと、結花は銃を構えたままゆっくり前に進んだ。向こうはさっきの銃を捨て、新しい銃を構え直そうとしていた。

「もう撃つのはやめて！」
説得するかのように、結花が叫ぶ。
相手の銃弾に屈した弥生は、それでも反撃の機会をうかがっていた。ベルトに差したもう一丁の銃――グロッグ17を取り出そうと、ゆっくり手を伸ばす。相手は少しずつこちらに近づいてくる。「もう撃つのはやめて！」と叫びながら。
（……私には、こうするしか生きる術がないんです）
ようやくグロッグを掴んだ右手を結花に向け、引き金に指をかけた。だが、発射しようとした瞬間、脚の痛みが再び弥生のターゲットを狂わせる。
グロッグから発せられた銃弾は結花を逸れ、後方にいたスフィーの前で砂煙を上げた。
「ス、スフィーになんて事するのよ！」
反射的に引き金を引いてしまう結花。

もう一度、結花のデザートイーグルが火を噴く。
再び放たれた銃弾は、弥生の右肩を文字通り砕いた。

右肩を打ち抜かれた瞬間、弥生は自分の中で決定的な何かが失われたことを悟った。
(こんなところで、私は、私は……)
体の力が抜ける。目の前に血の流れが見える。
左手で銃を取り、構え直そうとするものの、手が言う事を聞かない。
それどころか、弥生は自分の体を支えられず、仰向けにどうと倒れた。
「終わり……ですね……」
弥生は、絞り出すような声でつぶやいた。
(どこで、歯車が狂いだしたんでしょう……)
一瞬脳裏に浮かんだのは、昨晩男女二人を撲殺した現場。あのとき手に入れた鞄の中に、エアガンが入っていたなんて……。

「ちょっと、まだ生きてる⁉」
結花が、弥生を抱き起こす。湧き出す血液が結花の体を赤く染める。もう助からないであろうことは一目瞭然だった。
「……どうして、あなたは人を殺すの？」
「……そうすることしか、私には残されていないからです」
弥生は、静かに語りだした。
「……私の大切な人は、もう全員死んでしまいました。私には守るべき人も、守りたい人もいません」
「……」
「だから、私は決めたんです。最後の一人になって、生きてこの島を出ようと。……今となっては、もう無理のようですけど」
弥生は前方を見遣りつつ、
「スフィーさん……でしたか。あなたには、あなたのことを必要としてくれている、守るべき人がいるじゃないですか……」

「……そうね。私も大切な人をここで何人も失ったわ。わたしには、スフィー達がいたから、あなたのようにはならなかったけど、みんながいなかったらどうなっていたかわからないわね……」
その時、二人のやりとりを遮るかのように、放送の声が辺りに響いた。
『おはよう、諸君。これから定時放送を行う』
死んだ者の名前、生きている者の名前。
次々と読み上げられる名前を、一同は黙って聞いていた。
「あの中に、私が殺した人の名前もありました」
弥生が口を開く。
「あなたは、何人殺したの？」
「忘れました……それほどまでに私は人を殺してきたのです。今は、その報いかもしれませんね」
薄れ行く意識の中で、弥生の脳裏にあの二人の顔が浮かぶ。
（……由綺さん、藤井さん。こんなに早く、そちらへ行けるとは思いませんでした）
「……あなたは……生きてください。勝手なお願いですが……それが……私を殺した人間に対する私の我が儘です……」
そう言い残し、弥生は事切れた。
後には、結花の嗚咽の声だけが響いていた。
「私……殺してしまった……」
泣いている結花の元へ、スフィーと芹香が歩み寄る。
「この人、マネージャーさんだって。名簿にそう書いてた。普通の人なのに、ここまで変わっちゃうんだね……」
「私、わたし、どうすればいいの？　この人みたいに、最後の一人になるまで殺し合いするの？」
「そんなはずないよ！　結花、落ち着いて！」
「……」
スフィーと芹香二人の言葉で結花は落ち着きを取り戻す。

「……みんな、ごめん、心配かけて。私はもう大丈夫……」
もう涙は流れていなかった。腕で涙を拭い去り、顔を上げて話し出す。
「この人が言ってたよね。私には守るべき人がいるじゃないかって」
「……それって、私たちのこと？」
結花は小さく頷いた。
「私たち、何があっても一緒にいよう。リアンや綾香さんだってそう願ってるんじゃないかな」
「……」
「うん」
「じゃ、指切りしよう」
そういって指を出そうとした時、
「でも、三人同時に指切りできないよ？」
スフィーの言葉に、結花は思わず吹き出した。
「あっ、そうだね」
結花はスフィーと、その後に芹香と指切りをして、三人の絆を誓い合った。
しばらくして、結花が歩き出そうとした時、
「……」
芹香が結花の裾を引っ張る。
「？」
「……」
「武器？　もういいわ。あまりたくさん持ってても仕方ないし」
「……（ふるふる）」
芹香の懸念は、このまま武器を残しておくと誰かに使われる、という事だった。
「……そうね」
結花は、弥生の手元に落ちていたグロッグ17を拾い上げ、
「スフィー、これ持ってなさい」
と手渡した。
残りの武器は鞄にまとめて、そばの茂みに穴を掘

って埋めた。他の誰にも見つからないように。
そして、三人は歩き出した。結界の待つ神社に向かって。

四十七番　篠塚弥生　死亡
【残り32人】

514　天使の微笑み

ずっと張りつめていた緊張の糸が途切れ、今までの体と心の疲れが出たのだろう。
茜はそのまま、意識を失った。
「……う……い、ち……？」
詩子が呼び掛ける。
「詩子、どうした？」
自分でも不思議なくらい穏やかな声が出る。
この少女はもう虫の息なのに、もうすぐ死んでしまうのに。
だから、最期には泣き声なんかじゃなく、穏やかな声で。
そう思った。涙は、後に取っておけばいい。
「……あ……か……ね。だい、じょう……ぶ？」
「おかげさまでな」
手をとる。既に冷たくなりつつあった。
「あかねを……」
「茜を、どうした？」
「……てを……にぎら、せ……て……？」
「あぁ、わかった」
気を失っている茜の手を取り、詩子に握らせる。
詩子は瞳を閉じて、笑っていた。
ただ、笑っていた。
満面の笑顔。それはまるで、天使のようで。
かえって、これから訪れる悲しみを、より大きくしているようだった。
「……あはは。あり、がとう……。あかね……あかね……」

最期に何かをつぶやく。
その声は小さく、晴香やなつみには届いていなかった。
祐一には、聞こえた。
思う、茜にも届いていて欲しいと。
「詩子……」
涙が溢れ出る。
最期まで、最期まで、我慢していられた。
笑顔でいられた。
「……詩子……」
眠っている茜が、呟く。
その頬にも、涙が一筋流れていた。
どんな夢を見ているのだろう。
せめて今だけは、幸せな夢を見させてあげて下さい。
たとえ目覚めた現実が残酷でも、せめて、今だけは。

祭壇の十字架に、祈る。
神の祝福は訪れるのだろうか。
それは誰にも、わからない。

九十九番　柚木詩子　死亡
【残り31人】

515　血塗られた微笑み

「……強い子ね」
沈黙を破ったのは晴香の一言だった。
床に刺した剣を抜き、言った。
「あなたも見習いなさい？」
「あぁ、そうするよ……」
晴香は決して祐一に顔を見せようとはしなかった。
(泣いてる……まさかな？)
続いて床に捨てた硫酸銃を拾い、いまだ呆然としているなつみに向かい言った。

「悪いけど、茜は絶対に殺させない。絶対にだ」
それは、決意。
自分に、茜に、そして——詩子に。
強くなる。茜を守り、そして生き抜くくらいに。
「ようやくまともなことも言えるようになったじゃないの。あなたは、どうするの？」
晴香がなつみに問う。
「……私は……」
なつみが何かを言いかけた——その瞬間だった。

放送が、聞こえた。
死んだ人間の名前を読み上げる、あの放送だ。
詩子の名前はなかった。だがそれよりも——

「……あゆ？」
確かにあった。月宮あゆ、と。
何人も、祐一の知り合いは死んでいた。
名雪も、美坂姉妹も、舞も佐祐理も。
真琴にいたっては、自分の目の前で死んだのだ。
そして今、まっすぐに自分の想いを貫き、死んでいった親友がいる。その上更に、現実は重くのしかかろうとしているのか。
目の前が真っ暗になりそうだった。
今に沈んでいきそうだった。
「!?」
それを結果的に救ったのは、突如教会に溢れた気配。おおよそ、教会という場所には似つかわしくない空気。

——殺気だった。

「許さない……。あの二人まで……許さない!!」
殺気の主——晴香が叫ぶ。
祐一もなつみもその空気に完全に飲まれ、一言も声を出せずにいた。
保科智子、マルチ、そして神岸あかり。

僅かな時間しか共にすごさなかったが、それでも彼女達は友人だった。いや、親友だった。

高槻との会話を思い出す。

結局何もできなかったのだ、何も。刀をきつく握りしめる。噛み締めた唇から血が滴る。

地獄の底まで、高槻を追い詰める。

この世の全ての苦しみを、奴等に味あわせる。

そうと決まれば、こんな所にいつまでもいる場合ではない。

ドアに向かって、走る。

祐一の声が背に聞こえるが、晴香には届かなかった。

ドアが開く。

開けたのは晴香ではなかった。

現れた女の異様な眼の輝きを捉え、思わず晴香は足を止めてしまった。

それだけの狂気が、その瞳にはあった。

「祐一〜、ようやく見つけたよ〜」

女が、言った。

明るい声で、血に汚れきった姿で。

「なゆ……き？」

祐一は呆然とつぶやく。

何かが間違っていた。

あんなに背が高かっただろうか？

あんな髪型だっただろうか？

「うん、そうだよ〜」

何かが、間違っていた。

目の前の光景がうまく認識できなかった。

天使の去った教会に、

血塗られた微笑みが舞い降りた。

516　戦乙女

激痛。
痛みで、崩れ落ちそうになる。しかし、それ以上の闘志が彼女を、七瀬留美を奮い立たせていた。
――瑞佳、折原。
仲間達は、次々と殺されていった。
失った痛み。それに比べれば――この程度。
鉄パイプを、握り直す。
目の前の高槻は、冷や汗を浮かべている。少女の思わぬ反撃に、驚愕し、畏れを抱いていた。
もはや彼女の頭の中に「乙女らしく」という概念は消え失せようとしていた。いや、たった一つだけ「乙女」の概念に当てはまるものがあるかもしれない。
それは――

（小娘のくせに、生意気な……！）
マスターモールドと呼ばれる高槻は、全身を襲う寒気と格闘していた。ボウガンを握ろうとする手が、おぼつかない。……そこで気が付いた。
矢を装填しておくのを忘れていた……これでは、この武器はただの鈍器にしかならない。つくづく、自分のタイミングの悪さに苛つくばかりであった。
(恐れている？　鬼ではなく、ただの女を……？くそったれ、なめやがって。殺してやる)
彼にあったのは威勢のみだ。
実際の所、マスターモールドには全く武器が無い。ナイフは、遠くに蹴りやられた。拳銃もだ。頼みの綱のボウガンも、矢のセットに時間が掛かってしまう。多分、そんなことをしている間に頭を砕かれる。じりじりと後退していく。ますます、武器が離れていく。
しかしそこで。
視界の内に、ゆっくりと身を起こす鬼の姿が見え

た。
(馬鹿な!?　確かに当たった筈……!)
その一瞬の狼狽を、七瀬は見逃さなかった。間合いを詰め、素早く頭部への打撃を繰り出す。
(そんな、女子供の打撃——!)
たった一撃では致命傷になりはしない。だが、獲物は鉄パイプだ。無事にすむとも思えない。
身を屈め、やり過ごす。
そこに目に入る、相手の足の怪我。
マスターモールドの口端が、にぃ、と笑みの形を象った。無理矢理な体勢からの蹴り。それは、的確に七瀬の傷口を抉った。
「あぐぁっ!」
これには、七瀬も崩れ落ちた。
(チャンスだ!)
今なら、脇を通り抜ける事が出来る。
鬼の声。女の脇を通り抜けた——銃までどれくらいだ?　そう遠くまでは飛んでいない筈……。
拳銃。己の希望。
それを掴むべく、マスターモールドは走った。
だが。
次の瞬間。耳に届く、怒号。
そして、空を切る音。
がすっ!
自分の頭が叩かれる音——マスターモールドは、何故か、それが遠くから聞こえてくるような錯覚に囚われた。
「あぐぁっ!」
思わず、声が出た。撃たれた傷が、衝撃で、血を吹き出す。今度こそ崩れ落ちた。
前を睨み付ける。高槻が、笑っている。
それは七瀬の底知れぬ怒りと闘志を燃え上がらせた。
——人の弱みを狙って叩くなんて……
「こんの……っ、ゲスがぁぁぁっ!」

およそ乙女とは似つかわしくない台詞。
それと同時に、立ち上がりつつ、身体の捻りを加えた鉄パイプの一撃を高槻の後頭部に見舞った。丁度裏拳に似た感じだ――が、その威力は数倍。鉄パイプは、その一瞬恐るべき『凶器』と化した。
がすっ！
クリーンヒット。衝撃に、高槻の身体が顔面から叩き付けられた――流石に起きあがってはこなかった。
ひょっとしたら、もう起きる事もないかもしれない。
反動を利用し、立ち上がる。脛の裏の傷は、未だに痛みの協奏曲を奏でている。
しかし彼女は立った。立っていた。
その後ろに在る、輝く太陽の光を浴びて。
――それを、どんな「乙女」に当てはめる？
即ち、「戦乙女」。

517 加速

少人数の配備は当然リスクが伴う。本来なら最低限でも二人ずつを配置したかった。高槻と一緒に上陸した人材が非常に惜しい。実際三人という人数はぎりぎりの配置だった。置くだけ置いただけで、どれだけ有事に対応できるのか不安なことこの上ない。もちろん各々がプロフェッショナルであることはよく分かっているが、実戦がどれだけ不如意であるかはそれを上回ってよく分かっている。どれだけ備えようとも完璧などありえない。……考えてみれば嫌な稼業についたものだ。しかしもう後悔しても遅いか、どうせ俺にはここしか居場所が無い。隊長はそんなことを思いながら見回りに入った。少ない数を補うための苦肉の策だった。侵入者などあるはずも無いが、用心に越したことは無い。ドックの北口か

ら順々に回って確認していく。
一箇所目を確認したところで、ふと手持ち無沙汰な右手に気付いた。そうか、煙草か。もう随分と呑んでいない。この作戦が開始する少し前からだ。作戦行動中に喫煙するなんてことはもってのほかだと分かっているが、焦燥に駆られてしょうがない頭を冷やすにはもってこいかもしれない。野戦服の胸内ポケットから一本、ライターと一緒に取り出す。ジッポじゃない。安っぽい百円ライターだ。なんだかんだ言っておきながら戦場にまで持ち込んでいるのだから未練がましいことこの上ない。もっとも、別に自分は禁煙しようとしているわけでもないのだからそう思いつめる必要も無い。人差し指でライターを挟み、薬指と中指で煙草を挟んで慣れた手つきで火を点ける。そのまま手の甲を向けて俺はフィルターに口を当てた。
白く煙が上がる。懐かしい味だった。

(火遊びは危ないですよ……っと)
少年はこっそりと死角を歩き続けていた。隊長を奇襲するには流石に各入口部に近すぎた、これでは援軍が来てしまう。傭兵部隊の方は無理をして叩く必要は無い。今回の最大の目標はなんといってもこの潜水艦の奪取だ。そのためには……
(まず中に入らないとね)
入り口は見たところ一箇所しかない。必然的に真ん中を歩くことになるがそれでは見つかってしまう。少年は好機を窺っていた。次の好機とは、傭兵隊長がドックの東方面の入り口へ見回りに行ったときだ。丁度隊長が煙草の吸殻を捨てたのを見計らって少年は南口方面から飛び出す。音を立てず、しかし可能な限り全速力で。
(これがあればこの島から抜け出せるかもしれないからね)
潜水艦はそのまま希望の形だった。仮に高槻を討つことができたとしても、仮にゲームの参加者全員

と和解できたとしても、ここはどことも知れない絶海の孤島。逃げ出す術が無い。そうだ、今自分はこの戦いの鍵を目前にしている。この機を逃せば次は無い。一人でも多くの皆を帰すという理想が、こんな自分の手によってでも叶うかもしれない。そう考えた時、過ぎったのは今まで出会った人々の顔だった。国崎往人、郁美ちゃん、詩子、相沢祐一、巳間、鹿沼葉子、……郁未。もう既に逝ってしまった人たちもいるし、百人の中のほんの一握りにしか過ぎないけれど、それでも、彼女たちだけでも守りたいと思った。そう考えてる自分が不思議な気もした。

見張りの目を盗みなんとか艦内に潜入することに成功すると、そのまま少年は全速でブリッジを捜査した。操作系さえ押さえてしまえばどうとでもなるという少々楽観的な思考で動いていたのだ。ブリッジは概ね先頭にあるものだが、艦体の大体は水に浸かっていたのでどちらが前方でどちらが後方なのかの区別がつかない。仕方なく少年は勘に任せて方向を選択した。といってもそんなに広い船体ではない。要はいかに先手をとって行動できるかということ、それのみに尽きた。そしてあっさりと目的地へは到達した。

「む……」

そこは確かにブリッジであった。小型艦に見合ったスペースではあったが、紛れも無く全艦を統帥するだけの機構が、いやそれ以上のものが詰め込まれているのが見て取れた。しかし少年はそんなことにとまどったわけではない。

(誰もいない……？)

予想外の事態だった。艦長格の人間の姿も無ければ補佐をするはずのオペレーターの姿も無い。しかし艦外に確認できたのは例の傭兵たちの姿だけ。まさか全員が船を降りたとでも言うのだろうか。ならば船をここに着けている理由は何か。いくら傭兵たちに警護させているとはいえ、リスクを考えれば艦を海に潜伏させているよりよほど危険性が高い。今

この瞬間に、自分が潜入しているように。
（ならば、何故）
　それらの可能性を圧してまで艦を停泊させている理由に少年は頭をめぐらす。考えうる理由は二つ。誰かの乗船を待っているか……あるいは、動きたくても動けないのか。そして極少数の警備とブリッジに誰もいない状況が指し示す結論は――
（故障、か）
　少年は心の中でそう結論付けた。彼らは一刻も早くこの場を離れたいはずだが、それが出来ないということは駆動系、または動力系の異常ということか。とりあえず少年はブリッジを眺める。落ち着いて考えてみれば自分は操縦方法を知らないわけで、必然的に知っている誰かから聞き出すなりやらせるなりしなくてはならない。傭兵の連中にそれが出来るかどうかは怪しい。――捕らえるなら、技術者だ。
　少年はブリッジに背を向けるとそのまま反対方向を目指す。艦後部が動力系だろうから、そこに誰かしらいる公算が高い。もうお馴染みとなった忍び足で接近する。後端のそれらしき部位にすぐ到達した。丁度地下の動力室へ連なる部屋だろう。少年は床に耳を当てて物音を探る。……しかし、それらしき作業音は何も無い。依然ごんごんとなり続けている動力音以外には。
（これは……本当に無人なのか）
　床に頭をつけるのを止めて立ち上がった少年は、思わず腕組みをして頭を振った。これでは流石に手の打ちようが無い……と思ったそのときだった。何か駆動音で無い、鈍い音が聞こえてきた。気付いた瞬間に少年は壁に耳をつける。二度、三度続く重たい金属音。これは――外か？
　少年は即座に入り口付近まで戻ると外をうかがった。勢い勇んで飛び出しては絶好の的になる可能性があった。大丈夫、まだ傭兵たちは戻ってきていない。しかし外へは出たくない。出来れば入り口付近で待ち伏せて艦内に引きずり込みたいが……果たし

てうまくいくものか。少年が逡巡している間に、ひたひたと言う水音が聞こえてきた。足音……そう水中で作業を行っていた人間が戻ってきた、そうに違いない。少年は身構え、その瞬間を待った。
「ふぅ………っ⁉」
スイムスーツを着た男は急に口を塞がれると、そこから圧倒的な力で壁に押し付けられた。壁から横滑りしていって、扉を押し切る形で隣の部屋へ入り込んだ。丁度入り口から死角になる方向だ。不意をつかれた男はなす術も無く動きを封じられた。
「手荒なマネはしたくない。大人しくこの艦の操縦法を教えるんだ。でなければ……」
少年は男の耳元に小声でそっと呟いた。
「殺すよ？」
動きを封じられた男は青ざめた顔をしながら、激しく顔を上下に振った。その様子を見た少年がゆっくりと口を押さえる手を緩めた。
「か……艦の操縦は、さほど難しいわけでは無いが、慣れて、いない人間にとっては」
「いいから教えるんだよ。……そうだな、君に運転してもらってもいいな」
「そんっ、んぐっ！」
「大きな声を出すな……どの道、君に選択肢は無いんだ。大人しく言うことを聞いておけ」
少年は緩めた左手の拘束を再び強めて凄んだ。男はうなずくことしかできなかった。
少年は拘束を男の後ろからに変えた。移動の為の措置だ。勢いでブリッジの反対側に入ってしまったので一旦出なくてはならなかった。男は大人しく少年に従った。だが、入り口付近まで行き付くと、突然立ち止まって何事かを言い出した。
「な、なあ。この服脱がせてくれねえかな。ブリッジは精密機械だらけだから、水気厳禁なんですよ」
少年は渋々承知した。確かに、この上故障が重なって艦が動かないなんて事態は困る。
「しょうがない、だが脱がすのは僕だ。勝手なこと

をされては困るからな」
　そう言って少年が男の服の襟元に手をかけたときだった。ドン、という轟音とともに、前にいた男のバランスが崩れた。生々しい弾痕が壁には残り、一撃で事切れた男の体が少年にもたれかかる。少年は即座に壁に身を隠す。すると外から何か声が聞こえてきた。
「煙がなぁ、そっちへ飛んだんだよ。特に意味も無いことだったんだが……こいつに救われたのか？」
　艦の外、入り口を望める場所に男はいた。白い煙をくゆらせた煙草を、拳銃を持った手の指に挟んで佇んでいる。マシンガンで無い理由は一つ、両手では煙草が持てなかったからだ。
「……何故、殺した」
　少年が物陰から問いかけた。
「機密保持だ」
　傭兵隊長がそう答えると同時に、潜水艦入口から飛び出してくる影があった。隊長は無表情に拳銃を向けると、躊躇も無く撃った。
「ぬぅ!?」
　隊長は驚愕に表情を引きつらせた。その物体は数発の銃弾を受けても動きを止めなかったからだ。……当然の話だ。それは既に人間では無かったのだから。隙間から覗く少年の顔は不敵な笑みを浮かべていた。
「ちぃっ」
　慌てて隊長は左肩にかけていたマシンガンに手を伸ばした。だがそれよりも少年の行動のほうが速かった。その状態から、盾にしていた死体を隊長めがけてぶん投げた。隊長は視界が塞がるが、お構いなしにそこからマシンガンを斉射した。まだ形を留めていたものが一気に欠片へと姿を変えていった。秒間十数発の弾丸の雨が止んだとき、目の前に立つ者は何も無かった。――少年の姿さえも。
「――ほらね、やっぱり火遊びは危なかったんですよ」

背後から聞こえる声に驚愕して振り向く暇すら無く、隊長はその動きを拘束された。脇と首を固められ、いつ絞め落とされてもおかしくない状態だった。ぎりぎりと服越しに締め上げられる感触がひどく気分悪く感じられた。こんな子供がっ……、そう隊長は心の中で毒を吐いた。だがその容貌に似つかわしくない豪力が、現実に自分を拘束しているのだ。
「さて……仕方ないからあなたに案内人を勤めてもらうしかないな」
ぞくっとするような囁き声だった。
が、突如その体勢のまま少年は向きを反対に変えた。……足音が聞こえたのだ。マシンガンの音を聞きつけた、残り二人の兵隊が接近してくる音だ。
「……いずれにしろ、これでお前は終わりだ」
「……黙れ」
少年は首を絞める力を本の少し強めた。それだけで男の呟きは止まった。
「隊長っ！」
駆けつけてきた二人はそのままある一定の位置で腰溜めに銃を構えた。その姿を見て隊長は苦しげに、且つ不敵ににやっと笑った。
「仕事です、失礼します！」
その掛け声が合図となった。寸前に少年は隊長の頸動脈を極めた。崩れ落ちる彼の体にマシンガンの弾丸が突き刺さる。——少年はその脇を潜りぬけ、発砲する二者へ全速で接近した。少年のその動きに二人が気付いたのと、少年が服の下から何かを取り出したのが同時だった。
「くそうっ！」
片方の傭兵が銃口を少年に向けた。相対する少年は、まるで剣術で言う突きを放つかのごとき低姿勢の構えをとる。
「くらえ！」
高速の銃弾が撃ちこまれる……寸前、少年はぺろっと舌を出した。
(これ、なーんだ)

少年が突きつけた剣の代わり、それはあらかじめ切り取っておいた反射兵器十数枚。接触の瞬間、耳障りな金属音を立てて薄っぺらい紙が吹き飛んでいった。そして、放たれた銃弾もまた、自らが放たれた方向へと帰っていった。

「が……!?」

銃弾は、自らの搭載されていた銃を区別することなく、等しく傭兵たちの方へ帰っていった。彼らは自分に何が起こったのかに気付く暇も無く、彼ら自身の銃弾に穿たれて倒れた。

「あぢぢ……」

少年は肩をさすりながらじたばたしていた。ホンの少しだけかすっていたようだ。

一息おいて辺りを見回す。見事に敵だった傭兵たちは沈黙している。

「皆殺し……しちゃったか」

そう言いかけた所で少年はあることに気付き、ごそごそと傭兵たちの体を探り出した。そしてホッとしたかのような表情で言った。

「防弾チョッキか……みんな考えることは一緒だよね」

そう苦笑した。それならば、二人の銃撃に晒された彼も生きているのかもしれない。少年は隊長の男の許へ寄っていった。首……確かに瞬間で極めたが、折れていなければ大丈夫だろう。そう思って調べようとした瞬間だった。失神していたはずの男がいきなり少年の胸倉を掴み上げた。少年ははっとしてその両腕を掴んだが、その不安げな力の無さに何か嫌な予感を覚えた。

「いい……気に……なるな……よ」

少年は呟く男の顔をじっと眺めると、きゅっと腕に力を入れながら言い返した。

「そうだね、いい気になるのはあなたから色々聞き出してからにするよ」

少年はにこっと笑顔を見せた。その瞬間、隊長の男は目をかっと見開いた。すると彼の口元が震えな

がら歪み……笑みを形作った。
「――――――――機密、保持だ」
掠れ声が響いた後に、ガキッと何かを噛み砕く音が聞こえた。
「!?」
少年は胸元を掴んでいた両手を切るとその勢いのまま後ろへ転がった。それと同時に、さっきまで目の前にいた男が爆発した。爆発した上半身部分が、鮮血のシャワーとなって少年に降り注ぐ。そして時間差で少年の後方、さらに遠くの通路で爆発がおきた。爆発元は、先ほどまで戦闘していた傭兵たち自身だった。
「連動……爆破……」
少年は絶句した。敵を討つためには自分の生存の放棄すら辞さない傭兵たちの振る舞いに、いかに自分がぬるま湯に浸かっていたか、甘いことを考えていたか思い知らされた気がした。この島の本質と少年自身の本質が所詮奪うことでしかないことを、改めて見せ付けられたような。
……できるのか、この手で人を助けるなんてことが。
朝日が出る頃には僕は地上へと復帰していた。行きと違って、どの道をどのように通って帰って来たのかを覚えていなかった。自失していたかもしれない、けれど生の実感はあった。曖昧な感触だったものが、はっきりとした形を持って僕の傍にいた。
――郁未がいた。

518　向夏

柏木初音の上着を半ば破りかけていた高槻は、しかし敵の来襲を確認するとゆったりとした様子で立ち上がる。亜麻色の髪の女性――鹿沼葉子を一瞥して口元を大きく歪めて言う、
「鹿沼葉子か。――久しぶりだなあ、おい」

「ええ、まったくですね。それにしても貴方にそんな趣味があるとは思いませんでした」
凛とした佇まいで鹿沼葉子は吐き捨てる。そして、
「――その娘から離れなさい」
拳銃を高槻に向ける。向けても高槻はにやにやとした嫌な笑みを崩さない。判っている。奴があんなに余裕綽々で笑っていられるのは、こんな拳銃など恐ろしくもないと言えるだけの装備をしているからなのだろう。
葉子がそんな風に考えるうちに高槻はゆっくりと手に持つ小銃を構える。
距離がある。自分の反射神経ならばこの距離があればなんとか致命傷を避けられる回避が出来るだろう。が、同じくこの距離では、拳銃などに慣れていない自分が奴を殺せるとは思えない。
思う。
制限されているとはいえ、それでも並の人間よりはずっと優れた運動能力が自分にはある。それならば速度と回避能力に任せた接近戦の方が余程楽に戦えるだろう。
葉子は拳銃をスカートのポケットに放る。そして左手に持った槍を両手で持ち構えて高槻を凝視する。その高槻は小銃を自分の頭に向けながら笑みを崩さない。
「そこの女の子！　私がこいつを殺しますから、あなたは早く逃げなさい！」
呼びかける。返答はない。高槻のすぐ後ろでがくがくと震えるばかりだった。気持ちは判る。強姦されそうになったショックは、女性にとってはある意味殺されかかるより恐ろしいのだ。
それでもその娘は気丈で、短い時間目を閉じたかと思うとゆっくりと自分たちから離れていく。
「余裕だなあっ、鹿沼葉子っ！」
「貴方こそ余裕ですね？　その娘を人質にでもすれば貴方にだって多少は勝機があったでしょうに」

言うと高槻は笑う。心底おかしそうに嘲笑う。
「わははっ！　貴様がこのオレ様に勝てるとでも、貴様はほんの一瞬でも思っていたのかああ！」
言葉には魂がある。
妙に自信に満ちた声で言う高槻に、葉子だって確かに何か不吉なものを感じたのだ。それでも葉子はその違和感に目を向けようとしなかった。
「もう貴方と話すのにも飽きました」
この槍で高槻の額に風穴を開けて、醜くて汚らしい声を永遠に封じてやろうと思った。
十五メートルは今の自分で一秒と少し。小銃の弾を回避するための左右への移動を含めても三秒でコトは終わる。
葉子は駆ける。あっという間に距離が縮まる、あと五歩で高槻を殺せる。なのに高槻の小銃の銃口は火を吹かない。嫌な予感がした。サイドステップを止めてまっすぐ高槻に向かう。あと一秒以内で奴を殺せばそれで仕舞いなのだ！
高槻はゆっくりと奇妙な装置を懐から出した。
そして一秒が経つ前に、その装置が作動する。

「――っ！」
重くなったと思った。いや、これは、錯覚じゃない、両手両足に枷が付けられたのかと思うほど苦しい。そればかりではなかった。まるで何時間も持久走した後のように喉と肺が痛い。そして箒と包丁で作ったこの槍が重く感じるほどに力が抜けていく。
「不可視の力を完全に抑える装置だ。貴様や天沢郁未を確実に殺るためにオレが開発した、なあ！」
高笑い。そしてゆっくりとした動作で高槻は銃口を自分に向ける。初めて殺されると思った。
重い槍を捨ててポケットの中の拳銃を手に取る。拳銃も重いが槍ほどではない。当たるかはわからないがそれでも撃たなければ、
小銃が火花を上げて音色を奏でる。

拳銃を構える暇も無い、葉子は殆ど転がるような体で銃弾を回避、自分のすぐ横で弾ける音、土が撥ねて葉子の顔にかかる、
「おらおらっ！　早く逃げるんだあああ！　そのままじゃあ死ぬぞおおおおおお！」
　ぱららららららららららららららららっ、機関銃が奏でる乾いた音、避ける。この体勢では間に合わないっ、足首を銃弾が掠める、激痛、呻き声を漏らしたら負けだ、自分に言い聞かせて必死に耐えるダメだダメだダメだ！　拳銃を握り締めてその硬さと冷たさで意識を保つ、だがダメだ、視界が翳(かす)む、自分の目はここまで悪かったのか。この拳銃であいつの何処を狙えば形勢逆転となるんだ、
　顔、そうだ、あいつの顔だけは無防備だ。奴のでかい頭を拳銃で打ち抜くのだ。思った瞬間に再びタイプライターの音と火花。鼓膜が破れたかと思う。ダメだ、この状態でまともに狙いをつけることなんて出来ない！　今は逃げろ、逃げろ、逃げろっ！
葉子は走る、転ぶような体で必死に弾丸を避ける、ぱららららら、足が痛い、だが耐えろ、足首から下は生まれたときからなかったんだと言い聞かせろ、動け！　動け動け動けっ！
「ふん。その拳銃でオレの頭を撃ち抜くつもりか？不可視の力もない貴様がそんな重い銃をまともに扱えるとでも思っているのか？」
　笑いながらまた引き金を引く、ぱららららららら、動けっ！　泥が跳ねる、片足を引きずりながら必死に回避、弾幕が途切れる一瞬を見切って身体を木々の間に飛び込ませ、大木の幹を盾にする。
「ちぃ」
　舌打ちの音。音が止む。これでしばらくは時間が稼げる、あいつが近づいてきたときに拳銃で頭を撃ち抜けばいいのだ。痛みを堪えて深呼吸、落ち着け。
　今までの自分の人生のことを思い出せ。苦しくてつらくて死にたくなることもあったが、天沢郁未という友達に会えて、少しは救われただろう、少なく

とも今は生きていたいだろう！
こんなところで死にたくないだろう！
「――ふん。まあいい。ヘッドギアをかぶればそれまでだからな」
声が聞こえて、葉子の落ち着きは一瞬で失われる。――木々の陰からちらりと高槻の姿を覗く。本当だった。あいつは頑丈そうなヘッドギアをかぶっている、そして小銃の弾丸を補充しているところだ。
冷静さが欠けてしまった。
今撃たなければ勝機がない、と思ってしまった。
葉子は木々の陰から拳銃を乱射。乱射、乱射。まるでわざと外しているかのように当たらない。そして数秒後には冷静さが尽きる音がする。
かちゃん。
「撃ちつくしてしまったかあ、鹿沼葉子！」
高槻の声が、憎いほどに葉子の胸に染み渡る。身体から最後に残された力までが抜けていく。自分の汗で温もりを持った拳銃がやけに重い。
小さく息を吐く。自分はもうすぐ殺される。何も出来なかった。高槻のひとりを殺すことも出来なかった。弱すぎる自分に反吐が出る。せめて高槻に襲われていた女の子が逃げられていればと思う。
そして冷静さが葉子の頭に戻る。
――それは生への執着からくる冷静ではなく、死への覚悟からくる冷静だった。
充分に幸せだった。あのＦＡＲＧＯでの日々で、天沢郁未に会えただけで充分幸せだったじゃないか。その上この地獄のような島の中で、あの少女と青年を救えた。――充分だ。
ゆっくりと葉子は木々の間から歩み出た。
「ようやく観念したかあぁ、鹿沼葉子おお！」
葉子は拳銃を遠くに放る。もう重いだけの鉄の塊だ。それを見て高槻は高く笑う。銃口をこちらに向けたまま高槻は高く笑う。
「――ええ」
「ぶっ殺す前に貴様を屈服させておきたいなあ。オ

レ達に逆らった貴様を、ぐちゃぐちゃに屈服させてやりたい」
「――強姦でもしますか？」
「いや。そんなことには飽き切ってる。そうだな、ストリップでもやってくれ」
反吐が出る。こんなところまできて、まだこいつはそんな煩悩に捕らわれているのか。葉子は小さく息を吐いて言う、
「高槻」
「なんだ？」
「私が、まともに考える脳味噌もないミジンコが発した、たまたま人間の言葉に聞こえなくもないそんな声に従うと思いますか？」
最後の捨て台詞だ。盛大にやってやれ。武器のひとつもない自分に最後に残されたのは言葉の暴力だ。
「――従わなければ、ぐちゃぐちゃに殺すぞ？」
「貴方みたいな単細胞生物に殺される前に、私は舌を噛んで死にますよ。殺されるならせめて人間の手にかかって死にたいですからね。脊椎動物未満の矮小なものに殺されるなんて、天国でお母さんも泣いてしまいます」
ヘッドギアの下で高槻の顔色が変わった。怒りで赤くなった顔で高槻はゆっくりと小銃を握りしめる。
「――ち。醒めた、醒めちまったっ！　もう良い。殺すわ、お前。ミジンコの手にかかって死ね」
「ふふ、ミジンコだって認めるんですね」
「――死ね」
（さよなら、郁未さん）
舌に歯を当て、死を覚悟した葉子の、
その思考に電撃が走る。
（まださよならじゃない！）
自分はここまで冷静さが欠けていたのか、自分にはまだ切り札があるじゃないか！　気取られるな、自分に切り札があることを知られるな、表情は最後

の瞬間まで笑顔だ、笑顔で作戦を隠しきれ。
服の下に最後の切り札がある。
あいつが引き金を引く最後の瞬間まで、それを腹の下に隠し切れ！　残りゼロコンマ秒まで隠し切れ、
「――その綺麗な顔を、見るも無残な潰れたトマトにしてやろう」
ありがたいことに高槻はどこを狙うかまで指定してくれた。いけると思った。
――自分の現在の運動能力で完全に扱えるか？
否。完全に扱えるわけがない。あの少年が言っていたような完全な手法で扱えるわけはない。
だが。
不完全でも充分。それでも充分切り札に成り得る。
そして、僅かの間をおいて引き金が引かれる。
葉子は最後の瞬間まで待ちつくし、そして、腹の中から奇跡のような迅速さで秘密兵器を取り出す。
顔の前にその秘密兵器を掲げたので、瞬間、あいつがどんな顔をしたかはわからなかった。
そして、
「反射兵器」が作動する。
炸裂する音。
銃弾の衝撃が葉子の両腕で暴れる。だが痛みはない。銃弾の一発も未だ葉子に命中していない。金属音が葉子の耳元で暴れるが暴れるだけで、少なくともここまでの二秒の間葉子にダメージはない。
反射兵器というからには完全に高槻の方に向かって飛んでいくものだと思っていたが、現在の自分ではそこまで上手くは扱えないようだ、弾丸はあらぬ方向に飛んでいく。だが充分、充分な壁だ！
距離は八メートル、走れ、走れ、走れっっ！　この近くに槍が落ちている筈だ、それを拾ってあいつの武装の中で唯一危険を晒している場所、
首元を狙って刺し殺すのだ！
「なっ――」
異様な状況に気付いた高槻が驚きの声を上げる。

遅い。やはりこいつはミジンコ以下の頭脳だ。走れ。槍を拾う、あと五メートル、狼狽した高槻が乱射する小銃、反射兵器にも限界が来て何発か貫通、あと四歩、それ以外にも反射兵器で守りきれなかった部分を銃弾がかすめる、あと三メートル、だがそのいずれも致命傷には至らない。肩口を焼く痛み、耐えろ、あと二歩、あと一メートル、

射程距離、

「はあああああっ！」

反射兵器を投げ捨て、槍を突き出した葉子の視界には、驚愕に歪む高槻の顔。

肉を突き破る手ごたえが確かにあった。

次の瞬間、マグマのように熱い赤が葉子の身体中をしとどに濡らす。噴水のように飛び出す生臭い血を、葉子は全身で受け止める。喉が潰れたからだろう、高槻からは断末魔の声さえ聞こえなかった。

「――はぁっ」

高槻の首を串刺しにしたところで、葉子の身体は動かなくなる。もう首から槍を抜く力もない。

勝った。力を完全に封じられた状態で、自分は高槻に完全に勝利した。

身体中を痛みが走るが、少なくとも死に至るような痛みはない。大丈夫だ。まだ生きている。こいつの持っていた小銃もある。ここから帰るという目標はなんとか為せるかもしれない。

葉子は小さく息を吐いて座り込み、

拳銃の炸裂する音をその耳で聞いた。

519　共生

炸裂音と同じ瞬間に痛みが葉子の腹を襲う。

「うあっ！」

呻き声が漏れてしまった。無様。くそ、落ち着け、冷静に。敵襲だ。明らかに悪意を持って銃弾が飛んできた。そして高槻のクローンがこの森を囲んでい

る。決まっている。別のクローンが自分を襲いにやってきたのだ。無様。不可視の力が制御されて脳味噌まで弱くなったのかと思う。こんなところで油断など出来る訳がなかったのに。
「油断したな、鹿沼葉子。さっきちゃんとオレを殺しておけばこんなことにはならなかったろうになあああああああ！」
先程自分が放った銃に弾丸を再装填したのだろう。振り向くと、少し離れたところで拳銃を構えて笑っている高槻がいた。失敗した。何が生き残れるかもしれない、だ。今度こそ死ぬ。完膚なきまでに死ぬ。痛みで意識が飛びそうになる。血がどくどくと流れている。
「殺してやろう」
ダメだ。もう力が、目が眩む、だが動かなければ、葉子が歯軋りをしてそれでも立ち上がろうとした、その時だった。少し高い声がして、葉子の意識を地獄から引っ張り戻す。何事だ、見る、
「お姉さんっ！」
先程逃げた筈の少女が拳銃を持って一人駆けてきている。あれだけ逃げろといったのに、馬鹿げているくらい似合わない拳銃を携えて自分を助けに戻ってきたのだ。
高槻が叫ぶ、
「おおおおお！　なんて可愛らしい少女だあ！」
そのまま心臓発作で死ねばいいと思うほど、ぐちゃぐちゃに汚れた目だった。そして一秒の躊躇もせず拳銃を少女に向け、その足元を狙って引き金を引く。轟音。少女の足から血が吹き出る。絶叫をあげて少女は倒れる。拳銃を取り落とし、撃たれたふくらはぎのあたりを押さえ、呻き声をあげ続ける。
「――鹿沼葉子。散々お前はオレらをバカにしてくれたな。裏切るわ、オレのクローンを殺すわ」
死んだ自分のクローンから小銃を取り、高槻はゆっくりと笑う。
「まあお前を犯し殺すことは最初から決めてるが、

その前に地獄を見せてやる」
——地獄？
「お前を助けにやってきたあの健気な女の子を、お前の目の前で犯して殺してやろう」
悪魔がいる、と葉子は思った。

優先順位の問題と思った。あの女の人の身のこなしは自分たちよりずっとすごくて、あそこにいてはむしろ足手まといになると思った。彼女は銃も持っていたし、何も出来ない自分たちを守りながらでは逆に危険なことになるかも知れない。
そういう理由付けをして柏木初音はあの場所を離れた。だが結局は、大切な人が刻一刻と悪い状況に陥っていることが何より気がかりだったのだろう。いわば他人のあの女の人に時間をかける暇があれば、自分の背の七瀬彰を早く安全な場所に連れて行って治療する、その方が優先するべきことだったのだ。
だから、自分がこうして戻ってきたことは、すごく間抜けなことなのかもしれないとも思った。
自分は馬鹿なのだと思う。
けれど、もう、どうしようもなく嫌なのだった。
初音の直感が告げる。あの人はきっと危険な目に晒されて、自分が戻らなければきっと死ぬ。自分が何を出来るかなど知らない。けれど、戻らなければあの人は死ぬと思った。彰のサブマシンガンはどこぞに取り落としたが、自分は拳銃を持っていたことを思い出した。
初音は、人づてに得た拳銃を持って、彰を木陰に置いて、こうして走って戻ってきたのだ。
もう嫌なのだった。
自分のことを守ってくれた人が死ぬことは。
彰はそれでもまだ少しは持つかもしれないが、あの女の人はそれこそ直接生命の危機に繋がっているのだ。
そこには微塵も優先順位はなかった。

案の定女の人は倒れていた。腹部から血を流して。
そして、高槻は多分とどめを刺そうと近寄っている。
自分の直感は正しかった。初音は大声を上げる。
「お姉さんっ！」
少しでもこちらに注意を引きつけるため。
――女からは悲しげな目線が送られ、次の瞬間に初音の右足は高槻の拳銃で撃ち抜かれた。
「あうっ‼」
何かの間違いのような激痛が初音の太股を襲う。撃たれた場所に熱が溢れて、身体中の熱がその一点に集まっているんじゃないのかとまで思う。痛すぎて何も出来ない。持ってきた拳銃は気づくと何処かに放ってしまっている。何しに戻ってきたんだ自分は！
痛みを堪えて顔を上げる。何やら女と話している高槻の姿、そして驚愕に歪む女の顔。
「可愛らしい少女だ、まったく健気だあ！　自分の身も顧みず見知らぬ女を助けに戻る、あああああ、最高だな！　最高にいい女になるぞ、君はっ！」
初音は女の顔で大体のことを悟ってしまう。
「生きて戻れればの話だがなあああああああっ！」
先程自分がされそうになったこと。
あの恐怖が、再び自分を襲うのだ。今度こそ自分を守るものはない。痛みさえ忘れて初音は叫ぶ、
「いやだっ！　やだ！　近づくなっ‼」
叫び声をあげることしか初音には出来ないし、その叫び声は高槻を喜ばせるだけだった。絶叫をあげる初音にじりじりと高槻が近づく。
動けない柏木初音に近づいて、高槻は横に座る。間近で見るとわかるが、頭がおかしくなりそうなくらい美しい少女だった。この時期の少女しか持ち得ない危うさを持った美しさ。恋人同士のように肩を抱く。嫌悪感からだろう、初音が絶叫する。
「離せっ！」
離すわけがなかった。服の上からその未熟な乳房

を撫で回す。乳首の感触。絶叫をあげて必死に抵抗、けれど所詮は少女の力だし、撃たれた痛みのせいでまともに力を出すことも出来ないだろう。もう辛抱がならなかった。

「やめてぇっ！」

高槻は力任せに服を破り、その薄い胸を露わにする。ブラジャーなど必要のないくらい薄く真っ白な胸元が、高槻の嫌らしい視線に晒される。お情けばかりにつけられたブラジャーをずらすと薄い桃色の乳首が露わになった。

「わははは、なんて可愛いんだぁ」

高槻は強引に初音を押し倒して、その口で初音の胸に吸い付いた。こりこりと固い乳首。未熟な少女の少し張った胸の感触。自分は完膚なきまでのロリコンだという自覚がある。この感触のためだけでも生きていて良かったと思う。

小さな乳首に吸い付く。左手でもう片方の乳首を弄り、右手でスカートの中を弄ぶ。小さな身体の初音は必死に足を閉じるが、所詮女の力。高槻は強引に股の間に手を突っ込む。柔らかな太腿。間に顔を突っ込んだり自分の滾るモノを突っ込んで擦りつけたいと思う。

「嫌だ、嫌だ！　やめて、やめてぇ！」

下着の上から指を這わせる。柔らかな秘部の感覚、視覚は出来ないがきっと素晴らしい色をしているだろう。初音から叫び声が消える。叫び声を出す元気すら失って、嗚咽に変わる。

「もうやだよお……っ！　誰か、誰か……っ」

そんな嗚咽も高槻を喜ばせるだけだった。下着をずらして直接花弁を愛撫する。嗚咽、だが手は止まらない。柔らかい。その花弁は頑なに指の侵入を閉ざしている。このきつそうなアソコにぶちこんだらどれほど気持ちがいいだろうか。想像するだけで射精しそうだった。

葉子は舌を噛んで死のうかとまで思っている。自

分が油断をしたせいで、少女が貞操の危機に晒されている。自分は最低の人間で、勿論地獄落ちになるのだと思った。いっそ死に逃げて、あの少女が遭遇するだろう惨劇から目を逸らしたかった。
それだけは出来ないと判っているけれど。そんなことを考えているくらいなら少しでも体力を回復させてあいつを殺す方法を考えるのだ。だが、そんなにすぐに体力が戻るものか？
ヘッドギアを外して少女の身体を蹂躙する高槻。自分にもう少し体力があれば、あいつを殺して少女を救い出すのだ。だが、今の葉子の身体にはもうあいつを一発殴る体力すら残されていなかった。
少女を救わなければ。這ってでも止めなければ。
そう思うのに身体が動かない。自分の弱さをこれほど呪ったのは初めてだった。声すら出すことが出来ない。武器もない。どうすればいいのだ。
悔しくて涙が出て、涙が流れる自分が死ぬほど無様だと思った。
眩暈がした。意識が途切れる、ダメだ、今目を閉じてしまったら、――くそっ！
――そのとき。
葉子は、うっすらと何かの影が動いたと思った。影は、ゆっくりとした動作で何かを拾い、
そこで葉子の意識が無様に消える。

それにしても全く濡れない。当然だ。小学生の女の子が愛撫されたところで濡れるわけがないのだ。しかしそれは、この少女が純潔であることの証であるとも言えよう。柔らかな肉を高槻は思う存分堪能する。吸い続ける乳首がやがて硬度を増してきた。
高槻は意地悪く初音に問う、
「おいおい、乳首が立ってきているぞおおお！　なんだかんだで感じているんじゃないかあああっ！」
そう言って顔を覗き込むと、初音は羞恥心で顔を真っ赤にしている。ひときわ抵抗が強くなる、
「いや！　離して！　離してえっっ！」

離すわけがなかった。
もう我慢ならなかった。微塵も濡れていない秘部に突っ込むのは最高のセックスだ。痛みを訴えて絶叫する少女の悲鳴を想像するだけで高槻のペニスは膨張する。
泣き喚く少女の顔を見て、その小さな口に自分のペニスを咥えさせたいと思ったが、流石に今咥えさせたら噛み切られるかもしれない。
後から、抵抗する気力を全部奪ってからでも遅くはあるまい。とにかくもう限界だ。自分のペニスは射精をしたがって暴れている。挿れた瞬間に射精してしまうかもしれない。ただでさえ処女なのだ、その花弁の締まりは想像以上のモノだろう。
「そろそろお前の処女をいただくぞっ！」
「……っ!! いやっ！ いやあっ！ いやあああ！助けて！ 耕一お兄ちゃん、彰お兄ちゃん、助けてえええええ！」
助けなど来るわけがないのに、と高槻は笑う。そしてチャックを下ろして、巨大に膨張したペニスを初音の秘部にあてがって、腰に力を入れ、至福の瞬間を味わえる運命に感謝して、

首が吹っ飛んだと思った。

何が起こった。脳味噌が弾けて頭蓋骨が吹っ飛ぶような痛みがあったが、辛うじて自分は生きている。初音から身体を離して高槻は振り返り、何事かと事態を確認する。
確認するまでもなかった。
自分を殺しに死神がやってきた。
「――死ね」
真っ赤な血で汚れきった顔。それはとても人のものには見えなかった。長い真っ黒な髪が、その顔の半分以上を覆い隠している。大きな黒目が、高槻を射抜くように睨み付けている。
高槻は、本当に心底、こいつを死神だと思った。

サブマシンガンを持った死神などいるわけがないのに、それが地獄からの使者にしか高槻には見えなかった。
髪の毛を掴まれ、サブマシンガンの銃口を口の中に突っ込まれる。――見開かれた真っ黒な目に睨まれて、高槻のペニスは恐怖で射精する。
理解。こいつは、
爆弾管制装置を単身で破壊した、
長瀬一族の末裔の、
「ひゃめろっ――」
一秒の躊躇もなかった。
口の中で爆発した銃弾は、真っ赤な血とともに後頭部を撃ち破り、ピンク色の脳味噌を弾けさせた。
顔の下半分が完全に弾け飛んで、噴出される赤は彰の顔と初音の身体を真っ赤に染めた。
高槻の運命はそこで終わった。
「――ごめんね、初音ちゃん」
「彰、お兄ちゃん」
勿論この声が、脳味噌の弾けた高槻に聞こえるわけもなかった。
初音の呼ぶ声が聞こえたのだ。助けて、と呼ぶ声が。殆ど死んでいた自分がこうして起きたのも、そのせいだ。高槻は死んだ。これで都合二回こいつを殺した。もうこれで初音は大丈夫だろう。
君を守れてよかった。そう呟いたつもりだが、果たして声になったかどうか。
七瀬彰は初音に笑顔を見せるとサブマシンガンを手から取り落とし、がくりと崩れ落ちる。そしてまた深い闇の中に落ちていく。
また初音の呼ぶ声が聞こえる。けれどさすがにもう返事は出来なかった。少しだけ寝かせてくれ。

520　疾駆

「……」

耕一は。
大きなシーツに穴を開け、片膝を付きつつ。
目の前の光景に呆然としていた。
高槻が、後頭部から血を噴出させながら倒れる。
顔面から地面に叩き付けられ、僅かに跳ねた後、そのまま動かなくなる。
倒れた高槻を見下ろしながら、七瀬は静かに陽光を浴びて立っていた。足を撃たれたように感じたのだが、遠目に見る限りとても足を負傷して立っているようには思えない。
その姿。恐ろしくも――美しい。
（――おいおい。冗談だろ……）
そこには、確かに戦士が居た。
耕一の出る幕は無かった。

パァァン！

「――っ！」

そこに響く、銃声。続く悲鳴。
耕一の耳が、森の奥から届いたそれを、確かに捉えた。
あの声は、間違いなく――
「！　初音ちゃん!?」
まずい。確か、高槻は二人居た。
その内の片方が、初音に襲いかかったとするならば――くそっ、こんな所でのんびりしてる場合じゃない！
「留美ちゃんっ！」
振り向けば、七瀬は、草むらに落ちたナイフを拾い上げていた。
顔を見合わせる――頷く。
「そいつを頼んだ。俺は――初音ちゃんを」
「……でも、こいつ、どうすんの？」
――見れば、高槻が草の中に顔を沈めて、痙攣を起こしていた。
どうしたものか？

「……好きにしてくれ」
それだけ言って、駆けだした。
――後ろで七瀬がどうしたか僅かばかりに気になったが、振り向く暇は無かった。

521 The Little Sister

初音は、一瞬、自分を助けようとしてくれた金髪の女性に目をやったが、それよりも優先すべき事項のために考えを切り替えた。
地に伏した彰に駆け寄り、その体を抱きかかえるようにして草むらまで動す。
背負ったときには気が付かなかったが、華奢な見た目からは想像できないほどに、彰は重かった。
しかし、初音にとってそんなことはどうでも良かった。
初音は彰の顔を見つめながら叫んだ。
「彰お兄ちゃん、死なないで！　お兄ちゃんが死んじゃったら、あたし、もう……。お姉ちゃん達はみんな死んじゃった。あたし、ひとりぼっちになっちゃうよっ！」
流れ落ちる初音の涙が、彰の顔を打った。
彰がゆっくりと、それに応えるように何度か瞬きをする。
「お兄ちゃん!!」
初音はうれしさのあまり、彰の顔をぎゅっと強く抱きしめた。
「は、初音ちゃん、苦しいよ……」
うっすらと目を開き、絶え絶えに言葉を吐き出す彰。
今度は慌てて体を離す初音。
「彰お兄ちゃん……」
彰が意識を取り戻したことで、初音は一瞬だけ安心した表情になった。
しかし、それもすぐに曇る。

姉たちの死を思いだしたのだろう。
　彰はゆっくりと息をしながら初音に言った。
「初音ちゃん……。君はまだ一人じゃない。君の大好きな耕一さんも、生きているはずだ。君はひとりぼっちじゃない……」
「でも！　もうお姉ちゃん達はみんな死んじゃったんだから。もう、あの頃には戻れないんだから。千鶴お姉ちゃんにも謝ってなかったのに、梓お姉ちゃんも、もう、私の相手をしてくれない。楓お姉ちゃんだって、みんな……。もう、みんな死んじゃったよ。私、もう、どうすればいいのか……。どうやったって私……。これからうまく生きてなんかいけない。あの頃に帰りたいよう……」
　初音ちゃんは声を殺すこともせずに泣き出した。
　目を薄く開けたままで、彰は初音を見つめる。
　今にも壊れてしまいそうな、そんな初音を愛しく思う。護ってやらなければ。今は、僕が……。彼女を護ってあげなくてはならない、と考える。
　彰は既に話すだけでも辛かったが、あえて体を動かし、左手で初音の肩を抱き、右手で頭を撫でるようにしながら、言葉を紡いだ。
「こうして初音ちゃんは生きてる。だから、日常に戻れるはずなんだ。初音ちゃんのお姉さん達も、きっとそれを望んでいるはずだ……僕の友人のはるかも、大切な人だった美咲さんも亡くなってしまった。僕も、僕の日常はもう何処にもなくなってしまったと勘違いしかけてた……」
　初音の頭を撫でる手は止めずに、呼吸を整える彰。
　初音は、彰の次の言葉を待っている。
　彰は美汐達に語った自分の言葉を思い出しながら、ゆっくりとそれを口に出す。
「けど、僕は思うんだ。確かに今まで僕らが思い描いてきた日常はもうこの手に還らない……。そう、だけどね、初音ちゃん。日常は、そこを日常なのだと思えば。きっと、そこが日常なんだよ。過去を切

り捨てろなんて言わない。でも、未来を思って生きていくことはそんなに悪い事じゃないんじゃないだろうか……。繰り返すことになるけど、初音ちゃんには耕一さんもいる。彼も初音ちゃんを心配していたよ……。まずは彼を安心させてあげるのも、良いかもしれない……。そして、今度彼を見つけたら、もう離れてはいけない……。これ以上、喪失の悲しみを味わうことの無いように……」

彰はどこかで見聞きした覚えのあるフレーズを思い浮かべた。

『愛し合う二人はいつも一緒、そいつが一番だ』

そして、自らの思い浮かべたそのフレーズを契機に、彰の思考は別の方向に走りだした。

（……嗚呼、僕も美咲さんともっと一緒にいたかった。冬弥と由綺は一緒に居ることができているのだろうか。初音ちゃんは耕一さんと再会できるのだろうか。祐介と美汐さんは、無事生き残ることができるだろうか。僕の代わりに、ゲームに終止符を打ってくれる人はいるのだろうか。それから、それから、それから……）

彰は再び、意識を保っているのも辛くなってきた。思考も真っ当に働かなくなって、とりとめが無くなってきている。

「ごめん、初音ちゃん……。本当は一緒に、耕一さんを探しに行きたいんだけど……。僕は、もう……。少しだけ、眠らせて……くれないかい……？」

言い終えるや、彰はすっと目を閉じた。

その表情は、人を安心させる彼独特のあの笑顔にも似ていて、けれども、どこか寂しげでもあった。いろいろと心残りがあるせいかもしれなかった。

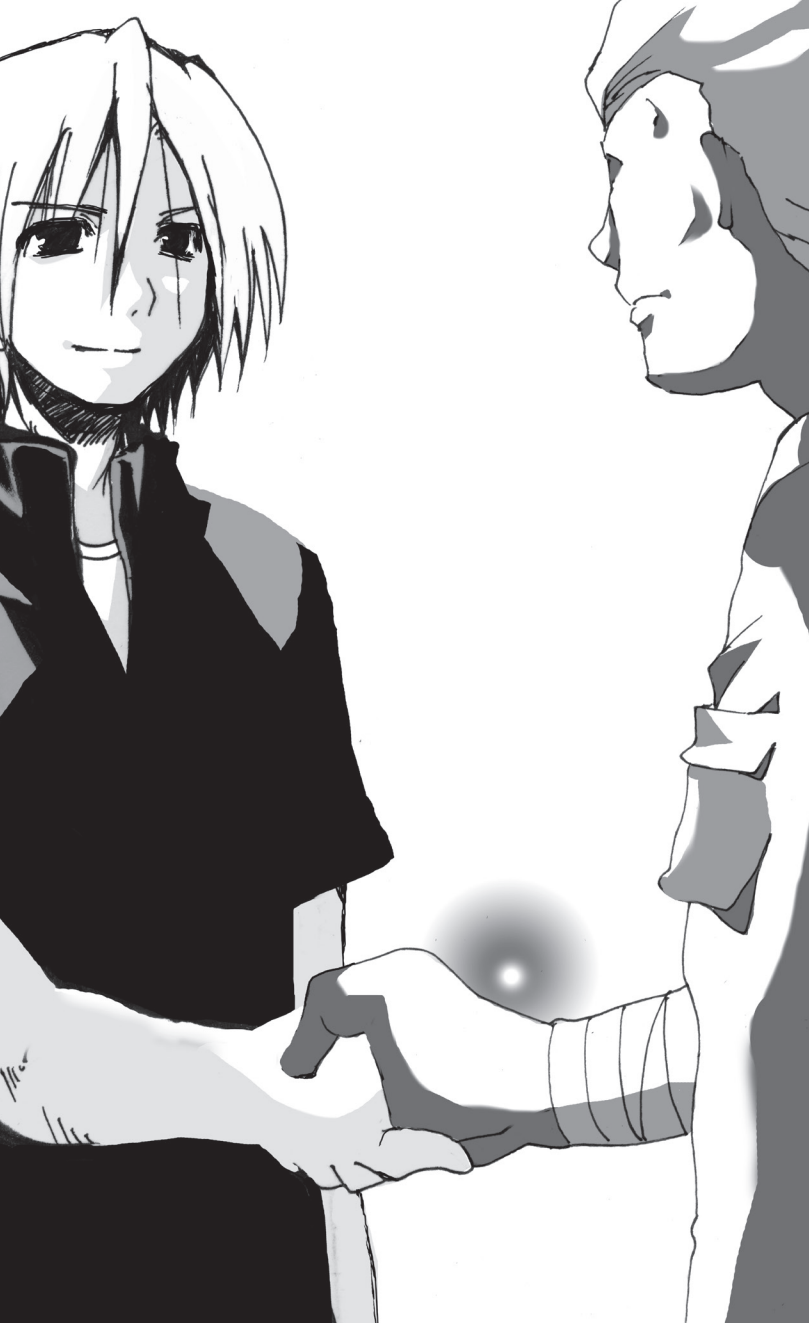
初音の頭にやられていた手も、また止まった。

目に涙をためながら、彰の言葉を黙って聞いていた初音の、感情の歯止めが利かなくなる。

「お兄ちゃんッ！　彰お兄ちゃーんッ!!」

彰の身体をかき抱くようにした初音の、絶叫が辺りに響き渡った。

522　最強タッグ誕生

「久しぶりだな」
御堂の表情に敵意が無いのを確認して、蝉丸はあたりさわりのない挨拶を投げかけた。
「ふん。さっさと起きあがれ。俺がお前を殺す気だったらどうする」
月代と絡み合って見下ろしながら御堂が答えた。
御堂の表情はあきれ顔。
「お前の表情を見れば敵意の無いことくらい分かる」
　そこで蝉丸は視線を詠美に移し、
「良い仲間を見つけたようだな」
御堂と詠美は「へ？」という表情。
蝉丸はしごく真面目な表情。
月代は(;´Д`)
「な！　なにをわけわかんねーこと言ってやがる!!」
「こいつはあたしのしたぼくよ!!」
「(;´Д`)蝉丸た〜ん、ハァハァ」
蝉丸は立ち上がり、ぱっぱっと土を払う。
まだ御堂と詠美がぎゃぎゃーわめいているが意に介していないようだ。
「まぁなんだ。御堂」
「ああ!?」
ゼーハーゼーハー……。御堂の息は荒い。
「その様子だと、お前達も主催者側と戦っているんだろう？　お前がいれば心強い」
　その言葉と同時に右手を差し出す。
「……。ケッ」
一瞬躊躇した御堂だったが、それに答えて手を差し出し握った。
　ここにこの島最強のタッグが誕生した。

そのまま蝉丸は御堂を抱き寄せる。
頬を赤らめうつむく御堂。蝉丸は彼のあごに手を当て、そっと上を向かせてあげる。
「友情の誓いといこうじゃないか……」
「おい……ちょ……」
蝉丸が顔を近寄せると、御堂はそのまぶたを閉じた。
二人の唇の距離が限界まで近寄り……。
「(;´Д`)なんて展開も萌、萌えー。でももっと可愛い男としてよ蝉丸た～ん。ハァハァ……」
『妄想を声に出すな!!』
御堂、詠美。そして蝉丸までもがつっこみを入れた。

523　インターミッション

朝焼けは去り、空気だけは穏やかな雰囲気の中、二人は寄り添って砂浜で海を眺めていた。
彰が去ってからすでにしばらく経ち、遠くの空でサイレンの音とともに定時放送が流れる。
祐介はそれを聴くともなしに聞いていた。

死者と生者を分けるその声の中に、もう上がることすらもない人達がいる。薄れていく存在は、みな、彼岸へと去ってしまった。声にしないともういないことになってしまう、大切な友達が、何人も何人も。
祐介は膝を抱えた。
(でも……、悪いけど今だけは、君たちのことを考えてはいられない)
ぎゅっ、と目を閉じる。
(だから、僕にはこのくらいのことしかできない)
祐介は、名も知らぬ死者達のために、よく知った死者達のために、祈った。
その行為は、彼の心を少しは楽にしていた。

長い黙祷を終え、祐介は眼を開く。
目を閉じる前よりも強くなった光が、祐介の網膜を心地よく刺激した。
「ああ……」
知らず、ため息が出る。
「どうかしたんですか？」
隣で、美汐が訊ねる。
「え……いや」
答える祐介の声は、どことなく空々しい。
何か考えているんじゃないですか？　という美汐の問いに、祐介はしぶしぶ答える。
「うん、ちょっとした作り話を考えてた」
「それは、どんな話だったんですか？」
美汐は、祐介の正面に回り、彼の目を見つめた。
その顔には、安らぎの表情が見て取れた。
「ここが、ここじゃなければなぁ、って」
「……」
「いや、わかってるよ。彰兄ちゃんの言う通り、ここが現実なんだから、ね」
「祐介、さん……」
でも、ただ『もしも』の話を考えただけで、こんなにも涙が溢れてくるのはなぜだったのだろう。
「もう、いいかげんに泣き止みませんか、祐介さん」
「……泣いてるんじゃなくて、涙が、勝手にさ」
そう言う祐介の両腕は、とめどない涙でびしょびしょに濡れている。
もちろん、顔のほうも酷い有様だ。
「ごめ……、ちょっと顔洗ってくる」
「え？」
祐介がてこてこと向かう先は、海辺。
「ちょ、ちょっと祐介さん、海水なんかで顔洗っち

や……」

美汐の懸命の制止にもかかわらず、長瀬祐介は無言の叫び声を上げた。

524　Kanon

「なゆ……き？」

声が静かに響いた。止まった時の中で。

誰もが動かなかった、動けなかった。異様な雰囲気に包まれて。

血塗られた赤き女性が、ゆっくりと近づいてくる。

気絶している茜はもちろん、意識のあるものもまた、体の動かし方を忘れてしまったかのように。

「……」

祐一の唇が、かすかに動いた。ただし、それはただ寒さに震えるような弱々しい童子のように。

そして、赤き女性が紡ぐ言葉。

——やっと……会えたね？——

「ずっと……好きだったんだよ……？」

無邪気な微笑み。

「……」

それを呆然と眺める晴香となつみ。

血塗られた女性の出現への萎縮、恐怖、驚愕、そういったものも含まれていたかもしれない。

だが、それ以上に——空白だった。

「七年前のあの時から……ずっと、待ってた。祐一のことを」

晴香の目の前を、気にした風もなく通り過ぎる。
晴香の目線だけが左から右へと流れた。
「祐一は、あの街が……私達の街が、そして私達が嫌いになったんだって思って……すごく悲しかった。だけど……戻って来てくれて本当に嬉しかったんだ」
ゆっくりと三人の前まで歩み寄って、止まった。
動くことができない茜と、
動けなかった祐一と、
もう動かない詩子と。
「祐一は、また、ここに帰ってきてくれたから……」
上から祐一の顔を覗き込む。あの日、駅前で再会したあの時のように。

祐一がいつか見た光景。
降りしきる雪の中の再会、七年ぶりに訪れたあの時の再会のように。
「……」
ゆっくりと震える唇が動いた。声は出なかった。
晴香の横を通り過ぎて、座り込んでいる祐一の前まで進みよって来る影。
「七年前のあの時から……ずっと、待ってた。祐一のことを」
どこか遠くに聞こえる言葉。
祐一にとって、この島での出来事はすべて夢のように感じられていた。
ひどく、悲しい夢物語。
それでも、茜の、そしてまだ暖かい詩子の手の温もりが伝えていた。
これが、現実だということを。

詩子と、そして……七年ぶりに訪れた街で出会った、大切な人達との物語は――

もう終わってしまったんだということに。

だから、今、起きていることこそが夢物語。

近づいてきた女性が、祐一の視界を遮った。

「祐一は、また、ここに帰ってきてくれたから……」

微笑んだ。あの日の名雪のように。

(まるで、あの時みたいだな……)

どことなく麻痺した頭の中で祐一は思う。再会の冬の日、雪で湿ったベンチで座ってたあの日の事を。

(結局、二時間も待たされたんだよな)

あの日の言葉が思い出される。

――雪、積もってるよ。

今は積もってなんかいない。

そして温かい缶コーヒーが渡されることもない。

「祐一、ずっと、ずっと好きだったんだよ……」

彼女の口から出る言葉。その想いが、伝わってくる。いつか聞いたセリフ、それは七年前の冬の日のこと。

――……これ……受け取ってもらえるかな？

あの日、差し出された雪うさぎ。

――春になって、夏が来て……秋が訪れて、またこの街に雪が降りはじめたとき、

思い出されるそのセピア色の光景。

――また、会いに来てくれるかな？

あの日の、繰り返し。

——わたし……ずっと言えなかったけど……祐一のこと……ずっと……

セピア色の思い出がだんだんと現実の色に染まって。

「好きだったよ」

最後の言葉。現実の彼女の言葉と重なる。

現実の彼女は、顔に大粒の涙と血をたたえて。

「……」

祐一が、茜と詩子の手を痛いほど強く握り締める。

ようやく、祐一が声をあげる——ゆっくりと、震えないように。

日常の中にいるかのように声の調子をおとす。

「なあ、俺の名前、まだ覚えてるか？」

今、彼女が自分の名前を言っていたのにもかかわらず、そう切り出した。

「うん、私の名前は？」

「………ああ……」

血と、涙で彩られている顔にはひどく不釣合いな満面の微笑み。

「……ゆういち」

「花子」

「違うよ～」

ただ滑稽な会話だけが辺りに響く。

「次郎」

「私、女の子……」

気付かないうちに祐一も涙を流していた。

祐一だけが知るそのセリフの意味に。

もう、こんななんでもないような……そしてそれでも幸せだったやりとりが、もう出来ないんだということに。

「もう、やめませんか……？」

祐一の声が震えた。

「わたしの名前……」

「もう、帰っては来ないんですよ……」

悲痛な声。ギュッと閉じた目から、大粒の涙がもう一度だけこぼれる。
「名前……」
食いしばった奥歯から血の味がする。
「もう、やめましょうよっ……」
絶叫、声が不自然に裏返った。
「なまえ……」
どうしたの？　というように彼女が祐一に顔を近づけた。
「もうやめよう――」
祐一の口から、彼女の名前が漏れた。
祐一と結婚したい。私の想い、お母さんの願い。
ずっと好きだったこの人に、自分の気持ちを伝えるんだ。
その事を考えるだけですごく嬉しくて、だけど、どこかですごく悲しくて。
心が壊れてしまいそうで。

だけど、祐一ならきっと私の心を守ってくれる、私を受け止めてくれる。
弱い、私を。
きっと好きだって、言ってくれる。祐一は応えてくれる。私が、こんなに愛した貴方だから、私が信じている人だから。
だけど、愛した人の口から漏れた言葉は
本当に愛していた人の口から漏れたその名前は、
崩れた。

525　忌避性

チ・チ・チ。
チュン、チュン。
「……」
……あれから、どれほど経ったのだろう。

既に太陽が顔を出しはじめていた。差し込む光の眩しさに怯み、帽子をずらしながらも、心の底まで照らしてくれるかのような、健康的な明るさに感謝の意をこめて、かるく拝する。
小脇に抱えたリストを、再び開こうとして考え直す。社を求めて何度となく繰り返された会話を、終わりなく続ける二人が、とっくに興味を失ったリスト。既に暗記するほどに精読していた。
普段、何も考えてないように思われがちだが。
来栖川芹香の頭脳は、高速回転していた。
……それを、伝えられないだけで。
二人に若干遅れながらも、景色に目を凝らす。間違っても風光明媚な景観ではないが、今では間違いなく必要なことに思えた。
そして発見する。静かに白い布切れを拾う。土のついた包帯だ。これで、三枚目だった。

「……」
やっぱりそうだ。繰り返されていたのは、会話だけではなかった。
間違いなく、これは忌避性結界。植物などが、その本体や種子を守るため、成分の中に虫が嫌う成分を含めることがしばしばある。それと同じような忌避性を示す何かがあったのだ。
決意を込めて突入したときは、問題にならなかった。だから、あまり強いものではない。結界などと言うものでもないのかもしれない。暗く細い道と明るく太い道、穏やかな坂と険しい坂、そうした地形的差別を各分岐点へ意図的に配置しただけかもしれない。
恐怖という下地がある今、その効果は覿面だ。表向き社に突入する決意を示してはいるが、冷静に考えれば採算のつく見通しはなく、成功するとは思えなかった。だから、無意識のうちに社へと続く道を見過ごし、別の道を選んでしまう。それでも社の位

置は心の奥底で知っているから、その周りをぐるぐる回ることになる。
　たぶん、三人とも気付いているはずだ。あの結界を拓くには、私たち二人では足りない事を。
　四枚目の包帯を拾い、朝露にまみれた羊歯の密集する、陰気な獣道を横目で見ながら確信する。指摘しようとして考え直した。
　……今は、これでいい。

「……」
「？　なあに？」
「どうしたの芹香さん？」
「……」
「おなか減ったの？　長いこと食べてないもんね」
「……」
「一回、出直そうか」
「街に下りて、食べ物探そ」

　……芹香は一度として、今の会話の流れに沿った発言をしたつもりはない。
　単に自分達の欲求と不安が、芹香の意思というかたちを受けて発露したに過ぎない。半ば呆れて、密かに溜息をついた。それでも、出直すという結論は満足いくものだったから……黙っておくことにした。
「さっき、ニワトリ鳴いてたの聞いた？」
「うんうん、たまごあったら、ホットケーキできるかな？」
　……綾香も、浩之も、今はもういない。
　傍らに、どちらか一人でも居れば、忌避性結界の仕組みを解明したことすら伝わって、蛮勇を奮い社に突入していたかもしれない。
　そうだ。必要なのは、結界に対する力ではないのかもしれない。

芹香さえ引き込むような、太陽の光のような、強烈な意志。
それが今では欠けている。
精霊や神が世界を動かすのではない。
人材こそが世界を動かすのだ。

「……」
「あ、芹香さんもハチミツ派？」
「カットしたところに染みた味がたまらないよねー」
……そんなことは、一言もいっていなかった。
芹香は、メイプルシロップ派だ。

526　欺瞞

「もうやめよう――」
「もうやめよう、秋子さん！」
「な、なにを言ってるの？　祐一。秋子はお母さんの名前だよ」
「名雪が死んだショックで、今秋子さんは自分を名雪だって思いこんでるだけなんだ。名雪は死んだんだ！　お願いだから、正気に戻ってくれ、秋子さん!!」
祐一は血を吐かんばかりに自分の推測を叫んだ。
その叫びが秋子の耳に届いた瞬間、秋子の脳裏に名雪の最期の情景がよぎった。
「わたし、わたしは……名雪。いえ、名雪はわたしが……」
それと同時に秋子は崩れ落ちてゆく。その秋子を祐一が優しく抱きしめ支える。
「秋子さん、しっかりしてください、秋子さん」
その言葉に応え秋子の眼に光が戻る。
「………祐一さん……？」
「………よかった………正気に………戻ったんだ………」

秋子は呆然としたまま、祐一を見つめていた。
やがて秋子の頭の中に、今までのコトが甦ってきた。自分が名雪になった時、聞こえた歌がもう一度聞こえてきた。

Hallelujah!

For the Lord God Omnipotent reigneth
The Kingdom of this world is become the Kingdom of our Lord and of His Christ,
and He shall reign forever and ever,
King of Kings, and Lord of Lords,
Hallelujah!

思い出しましたか？
どこかで、自分と同じ声色の主が囁いた。
あなたの大切な名雪は死んでしまったのよ。
嘘よ。——それは嘘よ！
名雪は七年ぶりにやっと祐一さんに再会できたのよ。名雪に笑顔が、幸せが戻ってきたのよ。
なのに、なんでそんなコトを言うんです？
わかるはずですよ？
だって、あなたが殺してしまったんだから。
「な……ゆき……」
秋子は、震える手を鉈から離す。
それでも鉈は落ちなかった。

鉈は。
鉈は、壁に突き立っていた。
鉈は、名雪の笑顔を。
鉈は、名雪の笑顔を真一文字に叩き割り、壁に貼り付けていた。

可哀想に。大好きなあなたに殺されるなんて。

違います。わたしは名雪を殺していません。

じゃあ誰が名雪を殺したんですか？
殺したのは事実。
現実を素直に受け止めなさい。

認めません。それだけはわたしは認めません。それを認めてしまったらわたしはもう……。そんな事実なんかありません。
死んだのはわたしです。わたし、秋子は今日死にました。今生きているのはわたしの娘の名雪です。
いいえ、わたしが名雪です。

死んだのはお母さん。
お母さんを殺したのはわたし、名雪。
お母さんを殺しちゃったのは悲しいけど、でも祐一さえいればいい。そうだよね、わたし。

秋子に現実が戻ってきたとき、自分が床に横たわっていることに気づいた。そしてそばに祐一がいて何かを繰り返し言っていることを。
「秋子さん、しっかりしてください。秋子さん」
秋子はその声を理解するなり上半身を起こし、祐一を女とは思えぬ力で突き飛ばした。祐一は予期せぬ出来事に何の対応もできず頭を床に打ち付ける。
一瞬意識が飛んだ。
それを横目に秋子はそばにあった鉈をつかみ悠然と立ち上がる。

「あ、秋子さん、何を……」
「あなた、誰？」
「な、何をいってるんですか、秋子さん」
「わたしの祐一はわたしとお母さんを間違えたりしないよ。なのに、あなたはわたしをお母さんの名前で呼ぶ。祐一の偽物だよ」

唐突に祐一は理解した。事態は最悪の方向に転がったのだと。祐一の顔に絶望が浮かぶ。
「偽物の祐一がいるから、わたしを名雪として愛してくれる本物の祐一がいないんだね。偽物がいなくなれば本物の祐一に会えるね。さようなら、偽物の祐一」

あたかも子供が友達にさようならを言うかのような無邪気な口調で、秋子は狂気の論理を口にする。

そして秋子は鉈を振り上げた。

527　ぬくもり

涙が溢れ出してもうダメだった。自分の弱さに反吐が出る。嫌なのだ。もう大切な人を失いたくないのだ。なのに涙が止まらない。

——彰は言った。姉を失った自分でも、新たな日常を獲得することが出来ると。未来はそれでもあるのだと。優しくて、優しすぎて、どうすればいいのかもわからないくらい、苦しかった。

目の前で二人の人間が自分のために傷ついた。自分のような子供のために、命を賭けて彼らは戦った。そして彼らに命を救われた自分はただのうのうと泣いている。無様すぎた。

自分は子供だから。その言葉を免罪符にして自分は、ただただ、ただただ、彼らに守られていた。

泣いていてはいけない、と柏木初音は思った。

自分に未来が許されるのならば、彰に、この女の人に未来が許されないわけがないと思った。

涙を拭う暇さえ惜しかった。泣くということは涙を流すこととイコールではないし、涙を拭ったところで泣き止んだ、となど言える訳がない。意識の問題なのだ。立ち上がって歩き出そうとした瞬間に、やっと雨は止むものなのだ。

足に激痛。拳銃で撃たれていたことを今になってやっと思い出して、途端に汗が身体中を流れる。それがどうした。言い聞かせつつ苦悶の表情で彰の身体を抱き、右肩に背負う。そして少し離れたところで倒れている女、鹿沼葉子に近寄り、左肩に背負う。

「絶対、死なせないっ——！」

二人の身体は倒れそうになるほど重かった。自分の小さい身体ではひとりの人間を運ぶのさえ重労働なのだ。それでも初音はまっすぐに前を見据えて足を進める。この重さが命の価値なのだと思う。

街はどっちだ。もうすぐ近くにある筈なのだ。すぐ近くに。初音は二人の体重と体温を感じて、自分が正しい思考で歩かなければすべてが壊れるのだと何度も言い聞かせる。

彼らのお陰で今、自分は生きているのだ。

だから自分の力で、彼らのことを助けたい。

「——っ⁉」

なのに自分たち以外の気配がすぐ近くでする。そのことに初音は気づいてしまう。足を速める、まだ高槻のクローンがいるのだろうか。急げ。逃げろ。逃げろ、ダメだった、もう気配はすぐ傍に迫っている、くそ、初音はスカートのポケットの中に放ってある拳銃を手に取り叫ぶ、

「近づくなッ！」

「——っ！　初音ちゃん！」

予想に反して、すごく懐かしい声がする。

やっと見つけた、と柏木耕一は思った。自分の足があまりに遅すぎて、間に合わないのじゃないか、と実は少し思っていた。
　間に合ってよかった。
「――耕一お兄ちゃんっ！」
　さがしもの――柏木初音は、自分の顔を見るとへたへたと膝を突き、安堵と不安が入り混じった、ひどく矛盾している顔を見せた。その不安の正体が何なのかなど判らないわけがない。彼女の後ろに見えるふたりの人間だ。
　彼女が自分よりずっと大きな身体をした人間二人を背負って歩いていたという事実が、耕一の頭にやっと認識される。二人ともが滅茶苦茶に傷ついていて、このままでは危ないこともすぐに判った。
　自分の顔を見ても、初音は泣き顔のひとつも笑顔のひとつも見せず、まっすぐな目で自分を見つめて、
「わたし一人の力じゃ、もう駄目なんだよ。わたしのことを守ってくれた人が、ふたりとも、死んじゃうんだ。わたしは体力がないからこれ以上早く動けないんだ。お兄ちゃん。――力を、力を貸して」
　そう言った。
　彼女だって姉を失った放送を耳にしている筈だし、足には銃で撃たれた痕。服はぼろぼろで素肌が露出している。自分が遅れたばかりに、高槻に暴行を受けたのだろう。想像して、自分の鈍さに嫌気がさす。
　――それでも初音は泣いていなかった。
　目尻は真っ赤の癖に、涙は流れていなかった。
「当たり前だろ。俺が手伝わないわけがない」
　泣き狂ってもおかしくない状況で、それでも前を見据える柏木初音に、柏木耕一は間違いなく尊敬の念を向けていた。
　千鶴さん、梓、楓ちゃん。――あなたたちの妹はしっかり生き抜こうと根性出してる。俺は死んでも、この子を守り抜くよ。守り抜いて、それから泣く。それまで涙は勘弁してくれ。俺もせめて見かけだけは強くありたいんだ。

耕一は息を吐く、息を吐いて初音に寄り、その右肩に抱えていた七瀬彰を自分の背に乗せる。
　覗き込んだ顔は血に汚れていて、先に会った時よりずっと弱りきっていた。この数時間の間に何があったのか。或いはあの時から進行形でずっと悪くなっていたのだろうか。
　白くなった顔を見つめながら、耕一は、七瀬彰のことを、
　――禍々しいと思った。
「行こう」
「うん」
　――そんなことはどうでも良かった。今は急がなければ。彰を背負って耕一は走り出す。

528　天国への階段

「こいつ、どうしてやろうかしら」
　まだこれ以上どうにかするつもりなのか。
　最後に残った高槻もまた死の際にいた。七瀬留美の腕力によって完全に屈服させられた自分の頭蓋骨は半ば陥没してしまって、実は生きているのすら殆ど奇跡的な状況だった。この上更に拷問されるとなればそれこそショックで死ぬだろう。
　多分、自分たちは失敗してしまったのだと思う。他の二人も自分と出来がそれほど変わるわけでもない。柏木耕一との戦闘が最大の難関で他は大した事はないだろうとも思っていたが、その見通しが滅茶苦茶甘かったことを陥没した頭蓋骨が証明している。
　異能者の力を完璧に封印する機械を自分たち三人は持っていた。長い時間をかけて開発した機械だ。不可視の力だけではなく、鬼の力や電波の力も封じることが出来る力を持っていた。「結界」の範囲を狭めて、効力を増大させる装置だ。柏木耕一の力さえも完全に封じることが出来たであろう。
　なのに自分は、その装置を使用することすら出来ずに女子高生に負けた。火器を持っていた自分が、

鉄パイプを持ったただの女子高生にだ。異能者ではないらしいから装置を使って力を抑えることも出来なかった。
って馬鹿な！　これが一般人だと言えるのか⁉　十キロ以上はあるはずの鉄パイプを片手で振り回す女子高生がこの世に存在していいのかっ！　なんて恐ろしい女子高生だ！　悪魔か！
「悪魔って何よっ！」
声に出していたようだ。少しおかしくなる。自分はまだ声が出せるのだ。脳味噌だって潰れているだろうに。目を閉じて、口を少し歪めてみる。微妙に笑うことも出来た。
「何笑ってんのよ、あんた」
少女が不思議そうに呟く声。――少女は止めよう。表現的におかしいな。
「おかしくないわっ！」
また口に出している。ちなみにわざとやっている。自分をぶっ殺した奴に対するせめてもの復讐だ。
高槻は呟く。自分でも信じられないような淡々とした口調で、七瀬留美に語りかける。
「――まあ、これでこの殺し合いは終わりだわな。多分、オレの片割れ達も、皆殺されただろう」
というか、今生きていたとしても殺されるだろう。この鬼畜に拷問されてぐっちゃぐっちゃに。
「鬼畜じゃないわっ！」
おかしくなって大声で笑いそうになる。なんともミジメな復讐の仕方だな、と自分でも思う。
「ともかく、オレらが全員死んだっていうことは、まあ、本気でゲームに乗っている殺人者がいなくなった、って事だあな」
まだ舌が回る。奇跡だ。血が熱い。額を伝って落ちてくる赤、口の中に入って鉄の味を舌に乗せる。自分の人生で最後に感じる味覚なのだと思った。血がもっと旨い味をしていたら良かったのに。
「里村茜や篠塚弥生なんかがまだ殺人を続けるかも知れないが――それはまあ、止められるだろう。

奴らだって、本当なら殺したくなんてないんだからな」
——「他人」を殺したい人間なんて、いるわけがないのだ。他人だから殺せるけれど、他人だから、殺したくないものなのだ。そんなことくらい、鬼畜の自分にだって最初から判っていたことだ。
自分だって、誰も殺したくはなかったのだ。
それでも自分が殺してこれたのは。
「もうオレは死ぬ。ああ……死ぬのは嫌だが、まあ、仕方ないな。最低なことばかりしてきたからな」
饒舌になっている。自分でも信じられないくらい感傷的な口調で高槻は語る。
思う。
自分は死ぬ前に、誰かに自分の心のうちを話して、そして、それをちゃんと聞いて欲しかったのだ。
自分の言葉に七瀬留美が顔を赤くする。唇を噛み、歯を食いしばって言い放つ。すごく強い口調で、
母親が子供を諭すように、強い口調で。
「こんなことに関わった報いよ。アンタなんて死んでしまえばいい。アンタのせいで友達を失った。好きな人も失った。——わかってんの!?」
その言葉で、やっと高槻は心の底から後悔する。
自分の人生のこと。殺したくないのに殺してきたこと。殺さなくていいのに殺してきたこと。自分が害虫以下の存在であることをやっと認識して、がくりと首が落ちる。
「——そうだな。……は、どうにもおかしい人間だったんだな、オレはよ」
ったく、本当に、なんでこんな事をしてしまったんだろうな？　にしても、自分はいつからおかしくなっていたんだろうな？
生まれた時はまだおかしくなかった筈だ。そりゃそうだ。それなりに幸せなこともあった。
大人になって、大学に入り、科学を勉強し、ＦＡＲＧＯに入る事を決めた頃におかしくなったんだろ

うか？
たくさんの女を犯したし、たくさんの人間を殺した。人間という人間に嫌われようと、人類全ての敵になろうとまで思った時期があの頃確かにあって、確かに自分はあの頃には狂っていた。
けれど、あの頃狂ったんじゃないと思う。大学に入る前に、自分は狂い切っていた。
もっと昔だ。昔に何かがあった筈なのだ。
記憶は確かにある。脳というより魂に刻まれた記憶がある。喉に引っかかった魚の骨のような、狂おしいくらい記憶は確かにある。なのに自分は思い出せない。心の何処かに思い出の引き出しがあるのに見つけることが出来ない。
違う。心が自分の思いを否定する。
死の際になってやっと、あの頃の心が今の自分を諭そうと歩み寄ってきた。皮肉なものだった。心がまっすぐ指し示す。指し示した先には引き出しがある。あの引き出しの中に思い出が全て詰まっている。
けれど、その引き出しの前で高槻は立ち尽くす。動けない。手を伸ばして取っ手を引っ張れば思い出はすぐに見つけられるのに手を伸ばせない。
思い出せないのではなく、思い出したくないのだ。やっとそう気づく。すぐ目の前に引き出しはあるのに、それを開ける勇気がないのだ。思い出したくないから、自分は嫌な人間になろうとしていたのだ。
確かにあった数々の思い出。それが全てこの引き出しの中に詰まっている。眩しすぎて目が眩む思い出が、この中に眠っている。
——この思い出の中に。
自分が狂ってしまったルーツが、眠っている。
勇気を出して開けるべきなのかもしれないと思う。
一歩踏み込んで、引き出しに手を掛けて、
「——資格がないよな」
結局、ほんの少し引き出しを覗いて手は止まる。
そして高槻は小さく呟く、

「全部覗くには、オレは汚れすぎている」
ちらりと見えたのは綺麗な思い出。自分が純粋に人のことを好きになった思い出。好きな人の笑顔。
それだけで充分だった。
名前も思い出すことの出来ない大切なひと。
彼女が全てのきっかけだったのだと思う。彼女のことを、おかしくなるくらい好きになった。そのことが今の自分の始まりだ。
――ここからは、もう思い出す資格がなかった。けれどその断片からでも予測は出来る。
好きになったくせに結局自分が何も出来なかったから、彼女のことをすごく傷つけたり、自分自身がすごく傷ついたりしたんだろう。結局そんなものなのだと思う。自分は人間のカスだったから。
そして、すべての人間に嫌われようと思った。逃げるために。ただただ、逃げるために。
すべてのルーツは、結局弱い自分にあったのだ。

それが判っただけでも充分だった。
もう少し良い人間に生まれていたら、と思わなくもないけれど、それでも、
――。
高槻は思い出の引き出しに火をつける。もう二度と覗くことのない思い出だ。灰になってしまえばいいと思う。
おかしくなって笑う。もうそろそろ、思い出とかに浸っている場合ではないだろう。自分はもう、死ぬのだ。完全に。意識までが消滅して、高槻という人間は消滅するのだ。

「変な顔。何がそんなに――
――嬉しいのよ」

そう言って、七瀬留美が笑う。口元だけでくすりと笑う、少しだけ上品ですごく親しみやすい笑みが、今思い出の引き出しに垣間見た少女におかしなくら

い似ていて、少しだけ高槻はおかしかった。
「馬鹿に、すんなよ、女、」
七瀬留美は笑顔のままだった。高槻も、今度こそ心底からの笑みを見せて、――ゆっくりと呟く。
「……潜水艦が、この島の付近の何処かにある筈だ。それを、捜せ。……それで逃げられる、はずだ……」
気まぐれで秘密を教えてしまう。もうどうせ自分は死ぬ。何もしないまま死ぬよりも、長瀬一族に一泡吹かせる方が楽しいと思った。
「――ちゃんと生き残れよ、お前」
あの少女に似ている七瀬留美に、高槻は囁いた。
「――ありがとうな」
最後にそう呟く。それ以上は声は出なかった。
もう好きだった人の名前も思い出せないけれど、それは自分が最低の人間だったという証だ。最低であることを受け入れて生きてきた証拠だ。それに気付けたのはよかったことだと思う。
七瀬留美の声が聞こえて、やがて消えていく。
まあ、所詮クローンでしかなかった自分が、それでも思い出の引き出しを僅かでも開くことができて、
――――――それだけは少し幸せだった。

529 蘇生

七瀬留美は目を閉じて、目の前で果てていく哀れな男のために祈る。自分で殺したくせに、おかしなことをしている、と思う。
「――ありがとう」
反芻するが、意味はわからなかった。
自分が初めてこの手で殺した人間。おかしなくらい落ち着いている自分に驚愕するが、それほどこの男が憎かったということだろうか。
――手が震えていた。
動揺していないというのは嘘だった。

殺さなければ殺される、そんな状況の中で迷いなく人を殺せる自分が少しだけ怖いと思う。これから先、自分の命を脅かす奴がもしも現れたならば。
自分はそいつを殺すのだろうか。
「――ありがとう」
反芻しても、意味はかわらなかった。

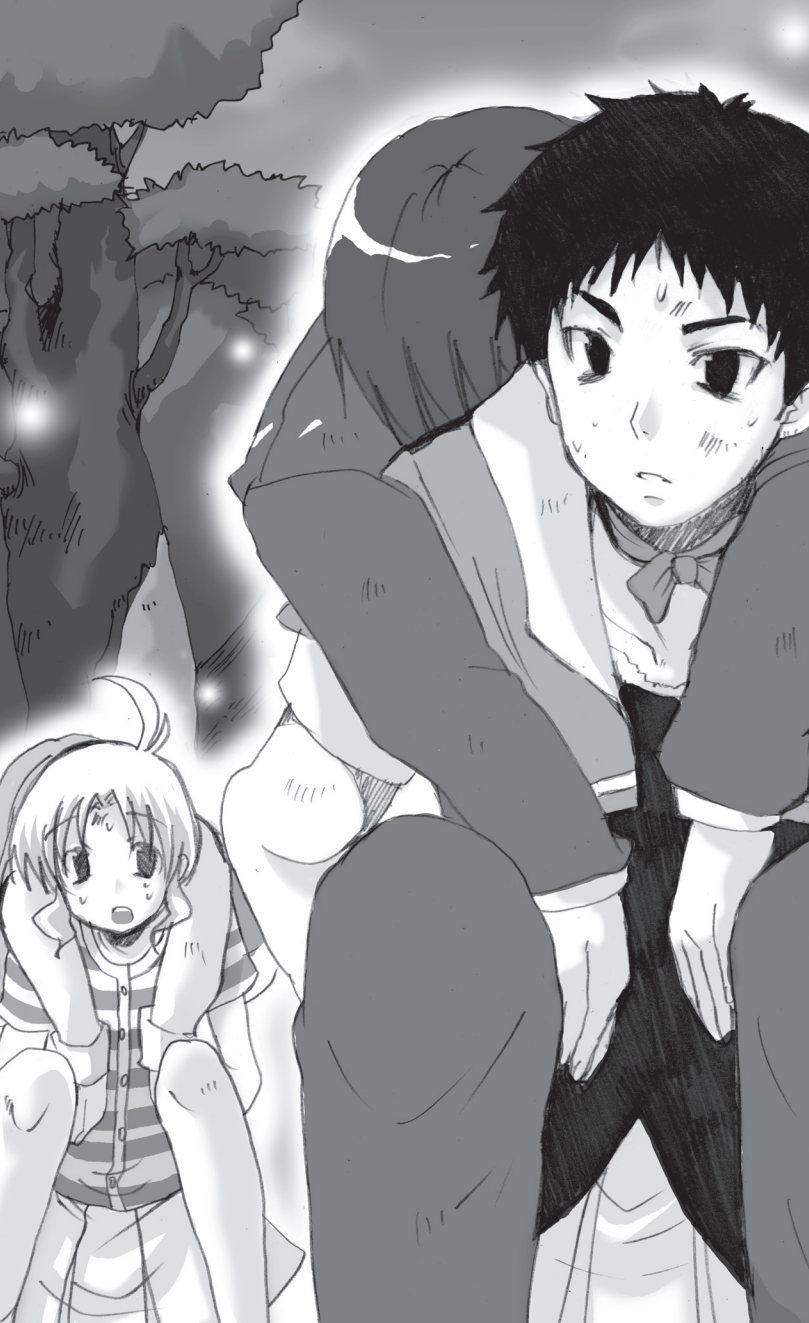
数秒の黙祷の後、七瀬は高槻の持つ武器を手に立ち上がって、柏木耕一の後を追うことにする。足に痛みはあるが動けないほどではない。
高槻の遺した言葉のことを思う。潜水艦が存在する、ということは本当なのかどうか。思う。嘘を吐く意味がない。潜水艦がある、と嘘を吐いて希望を煽ったところで果たしてどんな意味があるのか。それ以上に、最後に高槻が笑顔で言った言葉。
その言葉に、不思議な慈しみが充ちていた。
信じて、探してみるのもいいかもしれない。
もう一度高槻を振り返り、その顔をゆっくり眺める。自分が殺した人。これが初めてになるのか、唯一になるのかはまだわからない。
息を吐いて、七瀬は足を引きずって駆け出す。やらなければやられていた。それは判っているけれど、どこか納得のいかない気持ちがあった。
立ち止まっている暇はなかった。自分のことを正当化などはしない。自分は人殺しだ。それでも、生き残るために、走り出さなければいけない。

柏木初音は鹿沼葉子を、柏木耕一は七瀬彰をそれぞれ背負い、必死に森の中を走る。足を痛めている初音が懸命に走るのを横目で気遣いながら、耕一は周囲に意識を走らせる。敵襲はない。大丈夫だ。
三分ほど走ったかと思ったところで森を抜けた。すぐそこに街が見渡せるところに到着していた。二人が息を吐いて、街の中に足を踏み入れようとしたとき、後ろから声が聞こえてきた。
「耕一さーん、初音ちゃーん！　待ってーっ！」

二人は聞きなれた声に振り返る。息を切らせて駆けてきたのは、鉄パイプと銃を持った七瀬留美だった。
「留美お姉ちゃん！」
驚きの声を初音があげる。初音と同様に足を怪我していたが、初音と比較すれば驚くべき速さで彼女は走ってきた。
「うん。久しぶりね、初音ちゃん」
七瀬は何かを言いたげな顔をしていた。耕一にも想像はつく。七瀬は先に自分が定時放送で泣き崩れた姿を見ている。初音も同じ理由――姉を失ったことのために弱りきっているのではないか、と思っていたに違いない。
けれど初音の真っ直ぐな眼差しのせいで、七瀬はそのことを問う勇気が挫かれたようだった。結局何も言えずに気まずそうに視線をそらし、ふと初音の背に乗った人の顔を見て仰天した声をあげる。
「って、葉子さんじゃない！」
「留美、お姉ちゃん。知り合いなの？」
「うん、まあ……」
頬をぽりぽりとかきながら、七瀬は耕一に何か問いたげな顔を見せる。
「今は眠ってる。ともかく早く街に行って治療をしなくちゃいけない」
しかしそんな場合ではない。耕一は二人に呼びかける。背に乗る二人だけじゃなく、七瀬も初音もひどい怪我をしているのだ。
今は止まっている場合ではなかった。

530　戦士

ドガッ！

強烈な衝撃。
掴んだ鉈こそ放さなかったものの、その身体は、倒れた祐一を飛び越え教会の床を転がった。

倒れない。素早く身を起こす。
（こんな動きを人間がなし得るなんて――）
体当たりを食らわした当人である晴香は驚きを隠せない。視線を秋子からそらすことなく、日本刀から鞘を取り払う。
「――さっさと逃げなさい」
辛うじて立ち上がった祐一に、晴香は言った。
祐一は、近くに転がっていた濃硫酸銃を素早く掴むと、晴香に向き直った。
「……俺だけ逃げろと言うのか？」
「違うわ」
ぎり、と刀を握り直す音。
「その女を守る……そう決めたんでしょ？　だったら、ここで死ぬ訳にはいかないわよね。――その女を連れて、さっさとどっか行きなさい」
「――っ」
口を開く――しかし、祐一は何も言い返せない。
茜は、未だ気絶したまま。自分一人でも秋子に対するのは不安だというのに、万が一その矛先が茜に向いたら守りきれるとは思えない。
（言われるまま、か……これじゃ、結局、ヘタレじゃないか。くそっ！）
「……すまない」
そうとだけ告げる。
茜を抱き抱える。軽い。
しかし、血の流れた左肩が、ぐしゃりと音を立て、祐一の服を紅く染めた。
その様子に、秋子は眼を細める。
「ゆういち――ううん、ニセモノさんには、その人がいるんだね。逃がさないよ、捕まえてあげる。それで、ね、目の前で……〝わたし〟と、同じようにばらばらにするのォ」
ふふふふふふふ。
小さい、しかし背筋を冷やすような笑い声が響く。
おぞましい。
彼女はこんな笑い方をする人だったろうか――？

祐一は恐怖と共に秋子から背を向け駆け出す。
それに、凄まじい速度で近付く影。
それが放つ殺気が、祐一の背中に圧倒的な存在感で襲いかかってくる。

速い――！

ギィッ！

金属音。鉄と鉄が奏でる悲鳴。
それは祐一のすぐ後ろでおこった。
祐一は振り向くこと無く、走り去る。
その後ろでは、晴香の刀が秋子の鉈を受け止めていた。
「じゃますするのは――よくないよ、ね？」
ぎぎ……。
鉄が軋む。奇怪な腕力。晴香は、両手で刀を持っているというのに！

だからこそ、胴ががら空きであった。
「あぐっ！」
急な衝撃。それと共に、晴香の身体が跳んだ。
脇腹に痛み――咄嗟に引いていなくば、どうなっていたことか。
崩れた体勢を、空中で立て直す。胸が痛い。
ちっ、という舌打ちの音。ひょっとしたら、肋骨がイッている。
背後で、扉の開く音。そして閉まる音。
ヘタレ男は、脱出したらしい。こんな状況だというのに、晴香は内心安堵した。
だが――狂った瞳は、それを見逃さない。一瞬の緩みを。
影の如く、近付く。見えない死角から伸びた手が、晴香の首を掴んだ。
鉈であったなら、死んでいた――だが、どっちにしろ、同じだ。
チェックメイト。

「ぐっ……！」
動かない。強烈な握力に、血が止まる。景色が白く染まっていく——
「ふふふふ」
秋子が、笑顔を浮かべる。
その娘に、似た顔で。
そして、それが、一瞬の下に。
一瞬だけ。
〝秋子〟に戻った。
「……死になさい」
一閃。

それは、晴香の髪を少し切り裂いたに過ぎなかった。上に跳ね上がった腕——その先にある蛇に、晴香の長い髪が絡んでいる。
それを、秋子は、やはり狂気の眼で見ていた。
状況は、狂った頭にもよく分かった。〝なにか〟がうでをたたいた——と。
首が放される。咄嗟に身を引くと、先程まで秋子の身のあった空間を何かが貫いた。
鞘。晴香の、刀の鞘。
荒い息と共に見上げる晴香の目に、それを握った一人の少女の姿が映った。
なつみ。
「——別に、助けたつもりは無いわよ」
そう、ぽつりと呟いた。
秋子は、新たな敵の出現に、その手に握る鉈を握り直す。
晴香は返す。
「……じゃあ、礼は言わないでおくわ」
「——ご自由に」
その返事に、晴香は、にやりと笑みを浮かべた。
静まりかえった教会の内。
三人の女が、対峙する。

531　再会を誓って　～命の重さ～

朝焼けの中、手と手を取り合う二人。
生まれた友情……もともと、蝉丸と御堂は惹かれあっていたのかもしれない。長い長い、時の狭間の中で……
「坂神ぃ……今まで……すまなかったな……」
「御堂、お前とは思えないセリフだな」
「気付いたんだよ、俺ぁただ、お前に嫉妬していただけだったたってことに」
「……」
御堂はただ、バツが悪そうに頭を掻いた。
悪戯をした子供のように。
「許してくれ……なんて言わねぇ……だが、分かってほしい」
「御堂……」
「俺は、お前がうらやましかっただけなんだよ……」
少し顔を赤くして。
「こういうのって……なんて言えばいいんだか分からねぇがよ……」
「御堂……」
「……」
ただ何も言わず、蝉丸は御堂を抱きしめる。
陳腐な言葉なんていらない。無言のその行為はただ、美しかった。
どれくらいそうしていただろうか……
「坂神……俺は、たぶんお前を……」
やがて御堂がそう切り出した。
「……」
御堂を見つめる瞳。それは一点の迷いもない。
「御堂、よく、聞け……。お前がいま感じている感情は精神的疾患の一種だ。しずめる方法は俺が知っている。俺に任せろ」
蝉丸の言葉。それは甘く、切なく。

二人の少女が見ているのにもかかわらず近くの茂みへと倒れこんでいった。

「(;´Д`)そして二人はっ……!!　蝉丸た〜ん、御堂た〜ん、萌えっ！　……私も仲間に入れてぇ〜ハアハア……」

彼女の物語はついにクライマックスを迎えた。

（そ、それ……いいわね……ネタに使えるかもっ……！）

感化されている少女も一人。

「〜〜〜っ!!　いいかげんにしやがれっ！　このメスガキッ！」

バキャッ！

「(;ﾟДﾟ)グピィッ!!」

頭に、強い衝撃。

「(ﾟДﾟ)バタンのQ……だゴルァ(ﾟДﾟ)」

バッタリッ。

奇妙な遺言を残して月代が倒れた。

「なっ……いきなり何をする、御堂っ!?」

「にゃっ？」

「ぴこぴこっ!?」

蝉丸のげんなりしていた顔に、驚愕の表情が宿る。

動物達の間を駆け抜けて、蝉丸は、御堂につかみかからんばかりの勢いで迫る。

無論、御堂が手加減していることは見て取れたが、それでもその衝撃は計り知れないはずだ。

現に、仮面の表情が変わってしまったかのように歪んでいる。

「……」

御堂もまた、疲れたような表情をしてはいたが……すぐに蝉丸を睨み返した。

「坂神。俺がてめぇを憎む気持ちはいささかもかわりないんだぜぇ。やるというならいつでも受けてたってやる。……だが」

気絶している月代を抱え起こすと、物のように蝉丸へと渡す。
「すべては島を出てからだ……これが終わったら、すぐに決着つけてやるぜ」
「……」
蝉丸も、また御堂の瞳を正面から見据えた。
「で……だ。島を出る前に、まだやることがある」
森の奥、その向こうにあるであろう建物の姿を目に捕らえる。
「やること……？」
詠美もまた、思い出したかのように顔をあげた。
「行くんだろ？」
「う、うんっ……！」
コクコクッ……と詠美が上下にかぶりを振る。いささか大げさではあるが肯定の証。
「というわけだ……悪ぃが、少々面倒事に巻き込まれている」
自分たちの境遇の簡単な説明を終えた御堂は首をすくめた。
「御堂……」
「別れて行動した方が効率いいだろ？　俺と、おめえが本当に組むのは——最後の決戦の時だ」
口に出してこそ言わないが御堂も蝉丸の実力は認めている。
「ならば俺もいた方がいいのではないか？」
「てめぇはともかく……そっちの女はただの足手まといだ。これ以上、足手まといが増えるのはごめんだからな」
「足手まといってなによ!?　したぼくのクセにっ！」
「言葉通りだろ……」
「ああ、分かった……」
「ちょ、ちょっと……!?」
蝉丸もそれを二つ返事で承諾した。

強化兵である御堂と蝉丸。力が発揮できないとはいえ、二人が一緒に行動すれば確かに恐いものなしだろう。
だが、別々に行動した方が、島にいる他の攻撃的ではない参加者を保護できる……という点では確率があがるという考えもあってのことだろう。
それに、下手に反論して、御堂を再び敵に回すことだけは避けたかった。
「時がきたら……また、ここでだな」
もし今、蝉丸が教会での出来事を知っていたなら、彼は頭を縦には振らなかっただろう。
だが、御堂も、蝉丸も、その『名雪』と名乗る女性の向かう先が血塗られている場所とは知らなかった。
「じゃあ、俺らは行くぜ……」
詠美と、動物達を伴って。
「また、後で……だな」
「(ﾟДﾟ)……」
気を失った月代を腕に抱いて。
「坂神よぉ……」
去り際の、御堂の言葉。
「こんな島、確かに胸クソが悪ぃ」
「……」
「だが、俺やお前や岩切の奴だけは……こんな島がお似合いなのかもしれねえな」
命を奪ってきた数だけ、二人の命の価値は、重い。
「俺らは血で濡れた戦士だ。俺らには、決して消えることのねえ——罪だからな」

532 涙

「なんで……」
ぼそりと——。
「何で邪魔するの……」
駄々をこねる赤ん坊のように——。

「わたし、ずっと待ってたのに。とうとう来たと思ったのに」
静かに、だがもう消えない狂気を灯して――。
「何でみんな邪魔ばっかりするのよぉぉぉおお!!」
秋子は絶叫して駆け出した。――瞳から止め処なく涙が溢れる。
「くぅっ!?」
鉈が強烈な勢いで叩きつけられる。晴香はそれをかろうじて受けようとするが、その重さは最後まで支えきれるものではなかった。
「誰も……」
押し止めるにはあまりにも重い一撃を受け流すことでなんとか凌ぎ、その帰りの隙を狙って晴香は秋子を斬りつける。
「誰も邪魔なんてしてないわよ!!」
鈍い感触が痺れとともに両腕を疾(はし)った。……バカ、何で斬らなかったのよ。なんで峰を返したのよ。こんな……こんな時にまで。私の、バカ。

晴香の斬撃に追随して、今度は背後からなつみが襲い掛かる。彼女には少し扱いにくそうな長い鞘、しかし彼女はそれを意に介さずに全力で振るった。
「あなたが……勝手に、そう思い込んでるだけ!」
秋子の肩の辺りに強い衝撃が疾る。痛烈な打撃が二発も体に刻まれて、秋子はもはや立っていることも難しいほど苦しいはずだった。だが、彼女はうめき声一つ発しない。それは痛みで声が出ないとかいうものではなかった。既に彼女の心は――。
なつみは長大な鞘の振りの反動でしゃがみ込んで肩で息をしている。秋子はその彼女の顔を見つめる。一瞬後、顔を上げたなつみはその視線に気付く。目が、合う。秋子は目元と口の端をつり上げて、笑った。

――――うそばっかり。

「ぎぃぁぁぁあぁあぁあああ!」

鉈が疾る。その瞬間、紅色の線が宙を舞った。凄絶な一撃がなつみの太ももを一文字に切り裂く。
「……わたし、もう騙されないよ？」
貼りついた笑顔をそのままに。胸を張って、どこか自信に満ち溢れた様子で。
「……だってもう、たくさん騙されてきたんだもん」
再びなつみを切り裂くべく鉈を振り上げられる。ぎらぎらと光を照り返す刃が、なつみの血に染まって紅く輝いていた。
「ぐっ……、何、……で……」
苦しそうになつみが呟く。
「くっ！」
晴香は再び秋子を止めようと接近する。だが切りかかろうとして開いた胸元を思い切り肘で打たれ、そのまま崩れ落ちる。思ったより強い衝撃に呼吸が止まる。
「あぐぅっ⁉」

がしゃりと音を立てて鉈が落ちる。攻撃の一瞬に、指が緩んだ。
「祐一、いじわるだから」
にこにこと笑う。血まみれの笑顔、ひどく幼げな笑顔。なつみは、恐怖が心に芽生え始めたことに、既に気付いていて。
「すぐ、わたしのこと騙すんだよ」
優雅な物腰で鉈を拾い上げる。その様子は、秋子その人であるかのようにも見えたし、名雪のようにも見えた。
「香里も、みんなも、一緒になってそういうことするんだよ」
傷つくだけ傷ついていた。心も体ももうぼろぼろだった。倒れていてもおかしくないはずだった。
「でもね」
もう誰に言っているのかもしれない呟きに体を、心を鷲掴みにされたのか、なつみは動けない。
「わたしだって、騙されっぱなしじゃないよ」

秋子が、にっこりと、笑う。
「……いやぁ」
震える。体が震える。どこからきたのか分からない震えがなつみを揺らす。
「いっぱい、我慢してきたんだよ」
もうその瞳の中にはなつみはいない。晴香もいない。見ているのは、もう遠い過去の幻影――。
「ずっと、待ってきたんだよ」
「やめ……げほっげほっ！」
立ち上がろうとして激しく咳き込む晴香。放っておいたらあの子がやられる。止めなきゃ、絶対に止めなきゃ。もう人が死ぬのはうんざりだから――。
「だからもういいよね？　我慢しなくて」
にっこりと、笑う。口元だけの微笑み、濡れた口元が、まるで血の紅を塗ったかのごとく鮮やかに映る。――それなのに、止まらない涙。
「だから――」
「いやぁ、いや、いやぁぁぁぁあああ」

なつみが喚く。目の前に迫った恐怖に、異様に。瞳に涙をにじませて、ただ只管に恐れて。
前にはなつみ、斬られた足と恐怖に縛られて動けない。背には晴香、胸を穿たれて近寄ることが出来ない。
秋子は天井を見上げて呟いた。
「もう、イチゴサンデーじゃ許してあげない」
そして再び、鉈が振り下ろされた。

533　伏魔

はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……。
息切れの音が聞こえる。追って来ている、確実に追ってきている。俺は走りながら空の弾倉に銃弾を補充する。カシャ、カシャと小気味いい音が耳を突く。慣れた作業だ、こんなときだからといってしく

じりはしない。完了。後はこれで撃ち殺すだけだ。
ダァン！　……外れたか。
　目標は遠い。それは本来こちらの利点だった。視界も動きも制限される森、それは暗殺者のホームグラウンドだろう。相手が悪い？　そんなことは理由にならん。いずれにせよ早くこんな面倒なことは終わらせてしまいたい。……そうだ、罠を張ってやろう。老の得意な格闘戦に持ち込んでやれば、アドバンテージがあると思って隙をさらけ出すに違いない。今の私になら……それが出来る。
　男――源三郎――は立ち止まると高らかに言った。
「老は格闘に秀でておられましたな！」
　少し離れたところに源四郎も止まった。警戒した間合いだった。何を白々しい……と言わんばかりの表情がそこには浮かんでいる。
「ならば！　冥土の土産に、私がお相手して差し上げましょう！」
「貴様……ごときが……はぁ……相手になるか……」
　苦い顔で源四郎は言う。――少し、息が切れている。反対に源三郎は全く息を乱していない。
「果たしてそうですかね？」
　源三郎は拳銃をしまうと両手を空に翳（かざ）した。徒手空拳のアピールだろうか。そのまま両手を握りこんだ。
「日に二度の敗北を喫する屈辱を以って、引導を渡すもまた一興！」
「知った口をほざきおって！」
　源四郎は構えすら取らない。……臨戦の瞬間から、既に構えているとも言えるかもしれないが。
「行きますぞ！」
　源三郎はその姿勢のまま一気に源四郎の元へ接近し、渾身の一撃を見舞った。
「……ふん！」
　が、所詮、程度は知られたようなもの。源四郎は軽くそれを一蹴した。だが源三郎はすぐさま立ち上

がりまた拳打を繰り返す。
「まだまだぁ！」
見かけはそれなりの攻撃を仕掛けているようでも、実際は教え子が師匠にじゃれ付いている程度の問題でしかなかった。源四郎は全ての攻撃を捌ききっていた。だがその動きが、繰り返しを経る中で次第に俊敏になっていくことに気付き、源四郎はほんの少し焦りを覚える。この男の体力がそれだけの容量を持っているとは少し予想を超えていた。そんな応酬を数度繰り返すうちに、源四郎の頭に疑念が過ぎった。
（どういうことだ……これは）
焦りが、現実の脅威となり始めていた。源三郎の動きが源四郎や蝉丸に匹敵するほどの鋭さを見せ始めてきたのだ。加えて、何度も殴り倒されているはずなのに、まるで疲れや痛みを知らないかのように立ち上がってくる。血管、いや神経か——が異様に肥大し、その目はギラギラと異常な光を灯している。

——まさか。
「——ドラッグ、か」
源三郎は怪しく笑う。その通りであった。多重の薬物投与を行うことで、彼の体は異常発達していた。限界まで引き上げられた運動能力。超鋭敏なセンサーと化した感覚器官。……そしてそれに付随する形での、痛覚の麻痺。
いつのまに、と源四郎はいぶかしんだ。少なくとも先ほどまでに奴が投薬した様子は見られなかった。ならばここに来る前までに既に行っていたのか。何故そこまで——。
拳を握る。心に湧いた些末な哀れみなどは掻き捨てる。いや、なればこそ次の一撃で決める。ただ破滅に向かうだけの、この男を。
再び猛進してきた源三郎めがけて、源四郎は大きく振りかぶり、その拳を振るった。
——この瞬間を待っていた！　見える。今ならば見える。鉄壁の防御に空いた隙間。老の広い懐、絶

対の隙が全く晒し出されている！　源三郎は狂喜に一瞬震えた。打ち出すべく後ろ手に構えられた左手が背中越しに拳銃を掴む！　もちろん同時に高速で源四郎に接近している。この動きは、源四郎の目には入っていない！

「うおおおおおおおおお！」

ぐぉんと言う空を斬る轟音が、そのまま源四郎の正拳の威力だった。源三郎の胸に突き刺さる凄まじい拳勢、さすがに今回のはまずいかも知れないと源三郎は黙考する。

……だが、銃弾を阻むもの、何も無し。結論と同時に、源三郎はトリガーを引いた。

……。

…………。

………………。

森を静寂が支配する。それはひどく白々しい閑けさ。

しばらくして一つ影が立ち上がる。それは地面に横たわるもう一人を何か調べると、そのまま幾分もしないうちにそこを立ち去った。右手に、白いけぶりが漂っていた。

534　伏魔　～影～

高い空から、眺めていた。

そこはまるで、箱庭だった。

余は籠の鳥だから、自ずから敵うのは言の葉程度。

余は見続けることが、その一番大きな意味。

庭師は数人、それぞれが違う人間だった。

弱気なものもいれば、通じたものもいる。

勇なるものもいれば、下賎のものもいる。

時には余の声に耳を傾けてくれるものもいた。

賑やかな箱庭だった。
賑やかすぎて、多少手に溢れた。
しょうがないから手を入れた。
面白がって手を入れた。
時に少し静かになり。
時にさらに騒がしくなった。
庭師が傷を負う事もあった。
箱庭の外の籠から、余はそれを眺めていた。
箱庭の外ごと眺めていた。

手入れは、それが仕事だった。
だが常にはうまくいかなかった。
箱庭は色鮮やかな世界だった。
だからそれなりの人形が必要だった。
糸が切れても、しょうがないことだった。
箱庭はただそういう風に在った。
いつしか庭師の数が減っていた。
余はただずっと眺めていた。

誰かが来てくれるのを待っていた。
箱庭の外には誰もいなかったから。
余は黙って見続けた。
時には、人形に望みをかけて。

見続けるのに飽きた時、
箱庭は血に染まっていた。

535　男は蘇る

ザッザッザッザッ……
――草を踏む音。遠くから、しかし徐々に近付いて聞こえてくる、それ。
規則的に、身体が揺れる。
膝の裏と、背中の辺りで何かに支えられている感触。
　祐一の、腕。
（抱き抱えられてる？）

茜は祐一の腕の中で目覚めた。
祐一は茜の覚醒に気付いた様子も無く、ただひたすら駆けた。
晴香の助力によって不可能と思えた逃走は奇跡的に成功した。教会を脱出した祐一は森を走っていた。森に入った時点で秋子に追いつかれる可能性は低かったが、祐一はまだ足を止めようとは思わなかった。
あの秋子の表情、それは常人のものではなかった。ただならぬ雰囲気を持つあの人に狩られる対象となった現実に恐怖を抑えられなかった。
——それに。
茜をあの教会から——あの戦場から、遠ざけたかった。
憑きものの落ちた彼女は、もはやただの少女。
冷たくも、どこか優しかった——あの、里村茜なのだから。
「裕一……」
茜は、すぐ目の前にあった顔に向かって呟く。その小さな声に、祐一の足が止まった。
「……茜。起きたのか？」
「起きてなきゃ話せません」
相変わらず。
冷たい視線は、祐一を見ている。
「……まぁ、そりゃそうだな」
それでも、祐一は感じた。
それが、百貨店の売り場で再会した時や、教会でもう一度会った時の、見ているほうが悲しくなるような視線とは違うことを。
ゆっくりと——茜の身体を下ろす。
立てるか？　祐一はそう訊いたが、何事もなかったかのように、茜は立ち上がった。自らの足で。
そして、沈黙。
お互いに、相手の顔を見ていた。
しかし、二人の口が言葉を紡ぐ事は無い。
風が流れる——僅かな血臭を感じる、ような気がした。

随分と間を持って、茜が口を開いた。
「……詩子は」
ぽつりと。
「詩子は、どうしたんですか？」
「……」
放たれた言葉は、冷たく。
そしてそれが思い起こさせる、結末は、重く。
出来れば口にしたくない、聞かせたくない。だが、祐一は口を開いた。
逃げることなく。
そう、もう逃げるのは止めだ。
「——詩子は、死んだよ」
——そうですか、と茜。分かっていたかのように。
「笑ってた。最期まで——あいつは、お前を憎んでなかった。これだけは本当だ」
茜はそれを聞いていた。
無反応。だが、その言葉は、確かに耳を打って——
「最期に——最期に。お前に……お前が大好きだったって、言って……」
「……」
祐一の言葉は、そこまでだった。
お互いに、無言。
空白。
静寂。
時が止まったかのような中、祐一も、茜も、その目から、涙を零すことは無い。
祐一は、耐えていた。
強くあらねば、と思っていたから。
今は、今だけは、泣いていていい場合ではない、と。
——そして、茜は。
「……泣きません」
空白に放たれた呟き。
じわり、と広がったそれが、確実に時を進める。

「今は、泣きません——貴方が、耐えているなら」
「——そう、か」
強い、と。祐一は、素直に思った。
だが、当たり前だ、とも思う。
始まって間もなく、独りで生き残るが為に、全てを捨てた少女だ。
弱い筈がなかった。
鳥の声。
風の音。
足を止め、向かい合う二人を包むが如く、森は唄っていた。

——。

祐一が、それを聞いた。
声。
絶叫。
きっとそうだ。
そしてそれで思い出す。
——自分が、逃げてきたことに。
そう。
戻らなくてはならない。
男として。
「茜——」
「はい」
「隠れててくれ。俺は、教会に、戻らなくちゃならない」
水鉄砲を、固く、握る。タンクの中の、濃硫酸が、たぷんと揺れた。
「あいつらが、助けてくれたんだ。だから、俺達は今ここにいる。……このまま、逃げていたら、俺は本当に駄目になっちまうと思うんだ……だから」
息を吸い込む。
吐き出す。
吐き出された息が、震えているのを、祐一は自分で感じていた——それを無理矢理おさえ付けた。

「あいつらを助ける。そして……秋子さんとの決着をつける。それが、今、俺がしないといけないことだと思うから」
固い決意。
茜は、それに何か言うわけでなく、腰に下げた短刀を抜き、祐一に手渡した。
祐一を見る、その目は。
今度ばかりは冷たくなかった。
それを見て、祐一はまた新たに決意する。

――必ず、帰ると。

茜に背を向け、駆けだす。
振り向きはしなかった。
走る。
走る。
木を抜け、草を蹴り。
右手には水鉄砲。
左手には短刀。
それに、今の祐一は、彼が所持する武器以上の心強い何かを胸に感じていた。

536　空の青

――いやぁ、いや、いやぁぁぁぁあああ――

魂が震え、搾り出される声に導かれて、意識が現実へと引き戻される。
「わた……し……？」
まだ鈍く痛む後頭部をさすりながら、ゆっくりと繭は起き上がる。自分の、置かれた立場が理解できずにゆっくりとあたりを見渡した。
「そっか……私は……」
なつみの一撃を後頭部に受け、昏倒していた。
それはどの位の時間だったのだろう。

（でも、まだそれほど時間は経ってないっ……！）
痛みを振り払うように、頭を左右に激しく振った。倒れたときの空の明るさは、今とほとんど変わらない。
今、繭達が置かれている状況には、まぶしすぎるくらいの空の青。
自分が何をしていたのか、何をしたかったのか。気を失う前の出来事がゆっくりと思い出される。まるで白黒のフィルムに色がついていくかのように。
何か大切な者を、大切なことを失ってしまうことの予感と共に。
（祐一、詩子さん、なつみさん……）
駆けた。張り裂けそうな心の痛みに耐え切れずに。
何故、なつみが繭を殴ったか、そんな疑念はその痛みの前に吹き飛んでいた。
（長森さん……）
既に失ってしまった大切なお姉さんの名前を、顔を、思い浮かべる。
もう、決して失いたくない。
（嫌だよ、そんなのっ！）
後から後から湧き上がってくる予感が、膨れ上がって繭を覆い尽くす。だから全速力で走った。息が苦しくなっても、横腹がひどく痛んでも。
心の痛みに比べれば、何でもなかった。
手で、心を覆い尽くす闇を振り払うようにしながら。
駆けた後に残ったのは、振り払った心の闇ではなく、きらきらと光る涙の軌跡だった。

537　紅い雫

震えが止まらないまま、私は恐怖に直面していた。
誰も助けてくれないの？　このまま死ぬの、私？
助けて、誰か助けてよ。晴香さん、晴香さんねえ！
そんなところにいないで、私を助けてよっ！　誰

か……店長さん……私……。
　鉈が振り下ろされる寸前のとても長い一瞬のこと、耐え切れずに、私は目を瞑った。
「あああああああああああああああっっっっっ!!」
　教会に、紅い叫びが響いた。
「………………………え？」
　なつみは、違和を感じて目をあけた。斬られたのは、自分では無い。よく見れば、目の前にいたはずの秋子の姿がない。
（これは……どういうことなの？）
「うっ……うっ……」
（呻き声が聞こえる。私じゃない、誰――）
　死角になった客席の影から、一人、立ち上がる。
「あなたっ……」
　それは気絶していたはずの繭だった。あの瞬間、なんとか立ち上がることが出来た彼女が、身を挺して秋子を制してくれたのだった。
「斬られてるんじゃない！　大丈夫なの!?」
「かすり傷……ね」
　肩を押さえながら繭はそこから離れる。少し足を引きずっている。傷はそれなりに深い。だが、即死に至るほどの致命傷でもない。
「大丈……夫」
「早く、そこから離れなさい」
　いつのまにか起き上がった晴香が静かに言った。既になつみたちの近くまで移動してきている。
「――まだ、終わってないんだから」
　その言葉に反応したように、繭が倒れていたところとは反対側の影から、むくりと彼女は立ち上がった。もはやあとから付いた傷に気付けないほどのボロボロの風体でなおも立ち上がる秋子。その両手は鉈を掴んで放さない。口からはこぼれる笑い声。あらぬ方向を向いていた彼女が、ゆっくりと、晴香たちの方へ向き直る。そして、それを見た三人は絶句する――。

「どうして、祐一さんはいないんでしょうね？」
「祐一のことだから、きっと夜更かししてまだ寝てるんだよ」
「あら、そうなのかしら」
「うん、祐一もおねぼうさんだね」
「まあ、名雪はずっと祐一さんに起こしてもらってたって言うのに？」
「うーっ、いつもじゃないよお母さん」
「ふふ。でも、それってとても幸せなことじゃないかしら」
「……うん、そうだね。わたし、今とっても幸せ」
「幸せだよ――」

両の瞳は赤く染まっていた。つややかな頬に、紅い雫が流れて跡を残していた。口から外へ出る言葉は、既にこの世界を見放していた。
なつみはぶるっと一瞬震えた。繭はぎゅっと拳を握った。晴香は――歯を食い縛って、前へ出た。

「あああああああああ！」
目の前に佇む彼女めがけて斬りかかる。刃を向ける。もう覚悟は出来た。させられた。誰かがやらなきゃいけないことだった。そうしなければ止まらない。その紅い涙は止まらない。秋子という人物はもういない。目の前にあるのは、もはや壊れたお人形。
秋子は鉈を振り回す。肘が異様な方向に曲がっているにも関わらず、まだ握力が維持されている。大きな音を立ててそれが風を斬る。その様子は正に機械そのものだった。晴香は後ろに飛んでそれを避ける。単調な動きだ、難しいことではない。両手で握った日本刀の重みがいつもよりはっきりしている。刀も思っているのか、目の前のこの異形を討てと。秋子の目は――もう、ずっと――こちらを向いていない。
自然な動きで刀を振るう。上段から下段へ落ちたそれは、簡単に秋子の肩に刺さった。握られていた鉈が落ちる。肉を切り裂き、骨を砕く嫌な感触が、

手のひらにじわっと広がる――。
バチィイン！　秋子は、反対の腕で晴香のことを殴った。その思わぬ勢いに晴香は客席に叩きつけられた。その見た目からは考えられない強さだった。その帰り手に肩に刺さった日本刀を引き抜いて捨てる。刀はカランと音を立てた。少しまごついた動作だった。なぜなら、秋子の細くて綺麗だった指はもうどれもひしゃげて使い物になっていなかったから。
秋子はそのまま晴香の方に迫る。ずりずりと足を引きずりながら少しずつ迫る。意図の無い威圧。晴香は動くことが出来なかった。――恐怖。乱暴な口調でごまかしていたこととの限界が見える。だが、血に染まった赤い瞳に灯る寂しさが、まるで目を放さないでと懇願しているようで――晴香にはそこから逃げることも、目を背けることも出来なかった。
「……ああ、あああああ……」
もう声も出ない。虚ろに、もう嘆きも届かないほどに虚ろに、秋子は迫った。

ぶすっ。
鈍い音がした。何の音だろう、これは？　晴香は、目の前に迫りつつあった秋子の、――その腹の辺りから、何か突き出ているのを見た。捨てたはずの日本刀だった。何故――。
荒い息が聞こえる。それは繭のものだ。秋子の後方に座り込んでいる。その両手は、先ほどまで刀を握っていた形で凍り付いている。震えが走る。その気持ち悪い手応えを体に残して。
だが刺された秋子からは、何の声も発せられない。反応すらも無い。時が止まったかのように、ただそのままの姿で固まっている。
瞬間、晴香は秋子の目に光が戻っていることに気付く。そしてその様子に思う。――何を待っているの？

ばぁん！

再度、扉を叩く音が響く。大きく開かれた扉からは光が差し込み、そこにある人物の影を映す。息を切らし辿り着いた一人の少年の、その影を。

「……最後まで…………遅刻だよ…………」

天井のステンドグラスから七色の光が差し込む。その偶然のスポットライトは、登場人物を二人だけに絞り込んでいた。一人は少年、もう一人は少女。教会の真ん中で、艶やかな、そして無垢な笑みを浮かべて、その少女は言った——。

「祐一」

538　一歩

まるで喜劇だった。せめて悲劇のヒロインなら格好だけはよかったのに、と思う。俺は女じゃないから無理か、それは。

ぼやきたかったのはそんなことじゃない。この島に来てから、その一瞬一瞬が俺の人生の縮図だとしたら、なんて滑稽なんだろうかって自虐してみたかったんだ。狙った道化ならまだ諦めも付くさ。でも違う、違うんだ。俺は本当に叶うと思っていたんだ。夢に描いていたことが、願っていたことが。

後悔の連続だった。今この瞬間だって、嗚呼やってしまった、そう思ってる。もっと他にやりようがあったんじゃないか？　もっとうまくできたんじゃないか？　いつまでたっても考える。ずっと終わらない、まるでメビウスの輪のように。

現実なんて見たくなかった。何か目的を見出した、

それが他人に対する優越になった。こんな狂った環境でも、俺は自分に対する意味を見出してるって、そう思って不安を押しとどめていた。それで、過去を追いつづけて、色んなものを犠牲にして、今のところ、手に残ったものは無い。
　ただ、走り続けていられるうちはそれでもよかった。誰も正解なんて教えてくれないけど、少なくとも百パーセントの間違いではない道を歩んでいられたことは、それだけで安心だった。取り返しの付かないものがどんどん無くなっていったけど、自分の手が汚れるよりはそれもマシだった。
　そんなつまらない道、どこまでだって走ってやろうと思った。現実からほんの少しだけ視界がずれていた。でもそれで少し勇気が湧いた。
　どこまでいっても獣道、だけど選んで歩む道。どこまでだって歩いてやる。それだけが矜持、俺がここにいる理由。

……………違う、違うだろ!?　本当は何も失いたくなかった。香里も栞も舞も佐祐里さんも、あゆも……真琴も……名雪も……秋子さんも…………茜も。全部欲しかったんだ。俺はあの暖かい日常も、穏やかな生活も、失ったと思っていた初恋も、全部、全部この手に収めたかったんだ！　どれもこれもかけがえの無いものだって分かっていた！　分かっていたんだ！
　もう、沢山失った。だけどまだ失ってないものもある。まだ、間に合う。間に合うんだ！　そう信じて門を叩く。ずっと探していたものと、ずっと傍にあったもの。はいつくばってでも守りたい、それらを目指して俺は今一歩を刻む。それが、どれだけ見苦しい足掻きであったとしても。

539　蒼は神の下に散る

――ああああああああああっっっっ!!――

悲鳴。
続く悲鳴。
森の中に響き、消えて行く。
それが、祐一にはまるで少女達の命が消えて行くかのように聞こえて、ぞっとした。
「頼む――頼む、頼む、頼む！　無事でいてくれっ――！」
祈るように、叫んだ。
それは誰に。
――即ち、神に。
だが、それは、教会まで届いたのだろうか。
絶望感。
もう既に全ては遅かったのではないかという思い。
だが。
諦めるのは、まだ早い。
そう思って、彼は駆けた。
しばらくして、森が切れた。

つい先程、通り過ぎた壁。教会の壁。
見つけた。
脇を駆け抜ける。もはや、荒れる息すらも気に止めず、彼は走った。
そして。
その扉を開ける。

――ばぁん!!

勢い良く、扉は開いた。
その瞬間目に飛び込んだのは――。
血に塗れた、蒼。
長椅子の間で、手を後ろに付け、怯えた子供のように後ずさる晴香。血に塗れた手を、我が物でないかのように呆然と見る繭。
そして――呆然とへたり込んだ、なつみ。
それは、誰よりも早く反応した。
まるで、祐一が来るのが分かっていたかのように。

その指を有らぬ方向へとねじ曲げ。
その腕を折り曲げられ。
そして、その身を刀で貫かれ。
それでも、彼女は立っていた。
「……最後まで……………遅刻だよ…………」
薄暗い教会の中。
七色の光が、ステンドグラスから差し込まれる。
それはまるで、神が舞い降りたように、綺麗で。
「祐一」
重い、重い足取り。
生きる死霊の如く、重い足取り。
虚ろな瞳。
それは、この世のどの闇よりも、深く。
哀しかった。
「――行こう――よ――――祐一」
ぽつり、ぽつりと。
こぼれ落ちるように、呟く秋子。
――いや、それはもはや〝秋子〟ではなかった。

認める他、無い。
それはまさしく――水瀬名雪。
「――学校に――遅れ――ちゃう、よ？」
一歩、一歩。
その足は、血に塗れて。
もはや歩けぬ筈なのに。
その足は、確実に祐一へと。
既に亡き娘の心を、愛しき人へと。
「――ねぇ――祐一――――」
祐一は。
一瞬だけ、目を閉じた。
目の前の現実を、受け入れる為に。
己の為すべき事を、為し遂げるが為に。
目を開く。水鉄砲を小脇に置いた。
一歩。近付いて行く。
全ては、静止していた。
呆けたように。傍観者達は、見ていた。

その悲劇の、終幕を。

どん

小さく、重い音。
ずしりとした重さ。
確かな重さ。
人の命の重さ。
「――え？」
祐一は。
祐一の右手には。
短刀。
それは、今、彼女の胸に。
「――いい加減、目を覚ませよ」
どしゃっ。
血を弾き、彼女は床に倒れる。
その側に近寄って。
言った。

「――なぁ、名雪？」

――祐一。

――そうだね、もう、学校に行かなくちゃいけないよね。

――うん、行くよ。

――目覚まし止めて。

――朝ご飯食べて。

――学校に、行くよ……。

「……祐一さん」

ぽつりと。
か細い声。
「……はい」
祐一は、目の前の人の顔を見た。
それは、先程よりもずっと落ち着いた顔で。
酷く哀しげな顔で。
確かな、いつか見た母親の顔で。
「——名雪を、よろしくお願いしますね？」
その目が、光を失って行く。
消えて行く、命の灯火。
それは、紛れもなく——水瀬秋子のもの。
「——待って——ますよ——」

そして、光は消えた。

鳥の声。
風の音。
その中で。
その中に建つ建物の中で。
祐一は。
既にこの世の人でない人に——言葉を返した。
上を見上げて。
ステンドグラスの向こう側に。
届くように、と。
「……すみません、俺は、俺には——もう、大切な人が、いますから」
光は淡く差し込んで。
祐一を包んだ。
神が見ているかのように。
「——さよなら、秋子さん——」

九十番　水瀬秋子　死亡
【残り30人】

540　今、一度の門出

「悪い……」
祐一は上を向きながら言った。
ずいぶんと不自然な姿勢だった。
でも、誰もそれを咎めようとはしなかった。
「遅くなった」
「何で、……戻ってきたのよ」
晴香は座り込んだままで聞いた。
「……あの子を放って置いていいの？　けっきょくヘタレね……あんたって」
毒舌は変わらない。
……なのに、その言い回しからは不思議と棘は感じられず。
「……ああ、そうだな」
祐一は上を向くのを止めて、
――その拍子に水滴が僅かに跳んで――、
倒れた秋子を一瞥する。
「結局、俺はヘタレさ――」
選ぶことが出来なかった選択肢。
見送ってしまった選択肢。
もう、正しいかどうかも分からない、過去の選択肢。
戻れるものなら戻りたい。
運命を変えられたかも知れない、その瞬間に。
だが、そんなことが出来るはずが無い。
俺は受けたんだ、報いを。
そして、これからも――。
すっと立ち上がる晴香。
その様子は、もうずいぶんと落ち着いている。
ゆっくりと歩いて、繭に近づく。
繭は……何かに憑かれたように、ぼうっと固まっている。

「気にすることは無いわ。……よく、頑張ったわね」
ポン、と繭の頭の上に手を置いた。
晴香のそのねぎらいの言葉は、
——ひどく重く感じられて。
「そっちの方もまだ生きてるわね。悪いけど手当ては出来ない、自分でどうにかして頂戴」
脚を切り裂かれながらも、
なつみもまた、そこで生き長らえていた。
晴香はさらに教会の奥へ向かう。
「そこのヘタレ男、来なさい」
「……なんだ？」
「……放っておくわけにはいかないでしょう？　つくづくヘタレね、あんた」
「……ああ」
彼女の視線の先には、寝かされた詩子の遺体があった。

「埋葬しないと遺体が傷むわ。女の子をそんな風にするわけには行かないでしょ」
そして、詩子と秋子、両方の遺体を運び出して埋めた。
繭は手伝いたそうだったが、傷に響くといけないので断った。
途中、置いてきぼりにした茜のことが気になったが、彼女がいまさら何かするとも思えなかったので、そのまま埋葬に集中した。
そこまで彼女は愚かではないし、埋葬は茜もきっと望むところだと思ったから。
「——私はそろそろ行くわ」
「……そうか」
「馴れ合いは嫌いなのよ、由依が居ない今、群れる必要もなくなったし」
「……」
「あとは復讐を達成するだけ、よ」

晴香は、回収した鞘と刀を、元の通り納めた。
「まだ、殺すのか……？」
「簡単に言わないで頂戴。私は何人もの思いを背負ってここに居るのよ。そんな単純なことをやってるんじゃないの」
「………」
祐一は、何も言い返すことが出来なかった。
「――もう、ヘタレは卒業しなさい。そうしないと、今度こそ本当に守りたい、と思ったものも、守れなくなるわよ」
ポン、と晴香は祐一の頭を叩いた。
――そう、先ほど繭にそうしたように。
「次に会う時までに、もう少しかっこよくなっておくことね」
そう言い残し、晴香は教会を去っていった――。

541　望まぬ遭遇

森は、深く、深く、何処までも続いている。
その中で、草を踏み締め、歩く三人の足音。
鋭い目を持った、黒ずくめの男、国崎往人。
その後ろを、幸いにしてまだ生き長らえている神尾親子が続く。
殿を務めるのは、神尾晴子。
その手に、シグ・ザウエルショート９㎜を構え、滑るようにして歩く。一般人の手には馴染まぬ筈のその銃は、何故か、滑稽なまでに自然に見えた。
そして、二人の間には、恐る恐る進む神尾観鈴の姿があった。
その手には、しっかりとナイフが握られていたが、この武器で彼女自身が身を守れるとは期待していない。あくまで牽制、おどしのための武器だ。
観鈴は、人を殺すにはやさしすぎる性格をしてい

た。
早い朝食を摂ってから、どれだけ経ったろう？
あれから結構歩き続けたが、誰にも会う気配がない。
襲撃を警戒して、用心して歩いているものの、襲撃どころか、人っ子一人見かけることなく、ただ、闇雲に歩き続けるばかりだった。
太陽は、既に木々の上から姿を現そうとしていた。
時間は過ぎ去っていた。
放送も流れた。
その中で、彼らは佳乃の死を知った。

それから、無言が続いている。
互いに、何も言わず。何も触れず。
だが、決して〝それ〟から逃れようとしているわけではなかった。
だからこそ。

何も言わなかった。

往人の足が止まったのは、それからもう少ししての事だった。
続いて、観鈴が素早く足を止める。
ちょうど横手を警戒していた晴子は、歩く勢いをそのままに、観鈴の背中に体当たりする。
土の上に転ぶ二人。
「つぅーっ……」
「が、がお……」
ぽくっ。
森の中に、割と小気味の良い音が鳴る。
「その口癖止めえって、前から言うとるやろ」
「が……」
もう一度出そうになったものの、辛うじて押し留まった。
「何やってんだお前ら」
往人の軽い突っ込みが入った——が、その声は冷

ややか。至って、冷静に。突っ込むのに適した声ではない。それを感じ取った晴子の目が、すっ、と細まった。
「――なんや。おるんか？」
「……確証は無い。だが、恐らくは――」
「……」

じゃきっ。
鉄の音。
一変して緊迫したムードに包まれた観鈴が、一歩身を引いた。
正解だ。戦闘が始まった場合、観鈴は只の足手まといとなる。
たとえナイフを持っていても、それは逆に敵の感情を逆撫でするだけかもしれない。そもそも投げナイフを上手く扱えないであろう。それでも、観鈴はナイフを堅く握りしめて離さなかったが。
往人は。

冷静な表情の割に、突然の遭遇に焦りを覚えていた。手に握る、やたらと重い銃。残り一発のデザートイーグル。
――これだけで、戦えるのか？
牽制には使えない。当てるつもりで使うのなら、一撃必殺を狙う他、無い。
仕方がない――ハッタリを、使う。
「そこにいる奴。悪いが、出てこないのなら勝手に撃たせてもらうぞ」
がさ、と草が揺れた。
これで、予感は確信へと変わった――すぐ側に、誰かがいる。
晴子の顔にも、より緊張が漲っていく。
――沈黙。
返事は、無い。
「蜂の巣になりたいのか？」
脅す。
これで、姿を現してくれれば――

「出たところで、撃たれない確証はありません」
返ってきたのは、いつか聞いた声。
少女の声。
自分の記憶が正しいのなら――
「お前、まさか住宅街の時の」
「茜、です」
静かな声。
それは森の中から。
上から聞こえる気もすれば、すぐ側の草むらから聞こえる気もする。
森の作る闇が、往人の感覚を狂わせていた。
何処だ。
何処にいる。
「名前なんてどうでもいい……攻撃する意志が無いのなら、こっちも撃つつもりはない」
「何故です?」
疑問を投げ掛ける返事。
心なしか、後ろから聞こえてくるような気すらしてきた。
「貴方は、私を殺すつもりだった筈です」
「それは、お前が俺を殺すつもりだったらの話だ。やる気の無い奴に銃を向ける程、落ちぶれてはいない」
そう。
それは往人の予想。
この少女に、自分達を攻撃する意志は無い、という。
無論、それはあくまで予測に過ぎない。
何処か、近くから三人の命を狙うべく時期を見計らっているだけに過ぎないのかもしれない。
――だが、それなら何故。最初の一瞬で撃たなかったのか、と。
その事実が、往人の勘を呼び起こす。
「……確かに、やる気はありませんね」
ふぅ、というため息の音――それが聞こえるという事は、それほど遠くはないということか。

「むしろ、やる気を削がれた、といった感じです
――何処かのヘタレ男さんに」
「……」
茜の独白が森の中に溶けていくのを待って――往人は、銃を下ろした。
無論、右手には握られたままだ。いざとなれば、即座に構える事も可能である。
だが、しかし。
――晴子は、往人の行動に従った。四方八方に巡らせていた殺気を静めると、銃口を下げた。
「出て、いいのなら出ますけど」
「そう、だな。後ろから刺されかねないというのも厄介だ……姿を見せろ」
「――」

がさり。
音は、上から聞こえてきた――
往人が、上を見上げると同時に、近くにあった木の上から亜麻色の髪の少女が姿を現した。
とさ、と地に着く音。軽い。
しかし、先程の草むらの音はフェイクだったのか。
つくづく、油断のならない女だ――と、往人は何と無しに思う。
「お久しぶりですね」
「会いたくはなかったがな」
「――まったく、です」
ふぅ、と目を閉じて溜息。
観鈴は、目の前に立った彼らの様子を、そして現れた少女の姿を呆然と見つめていた。

542　教会にて　～Last Episode～

「これから……どうする？」
誰へと言うでもなく祐一が呟いた。
晴香が去った後、祐一と、そして満身創痍のなつみ、繭だけが残った。

「どうするって……どうするの？」
そしてどうしたいの？　と繭が付け加えた。
いろいろなことがありすぎて、これからのことなんて何一つ考えられなかった。
だけど……
「俺は、茜を守る」
それだけは、絶対に、言えた。
いろいろな人を失ってなお……いや、だからこそ。
「茜だけは、守りたい」
悲しみの傷が癒えることはなかったが、鮮やかな空の蒼は、それでも優しく祐一達を包んでくれた。
泣きたいくらいに澄み渡ったクリスタルブルーの空。いっそ、雨が降ってすべての悲しみを洗い流してくれたらいいのに、とさえ思っていたのに。
祐一たちの心は、穏やかだった。
「うん……」
いいと思うよ、と繭が呟く。
傷は痛むだろうが、それでもつらい顔など微塵も見せずに。
それはなつみも同様だった。
だから余計に言い出せずにいた。
「私達は、いいよ」
繭が呟く。
「えっ……？」
祐一が言い出せずにいた言葉。
これからは茜を守っていきたい。生きて帰る為に。
その為にはこれから危険を冒していくことになるかもしれない。それでも、茜となら乗り越えていける、と思った。
だけど……
(繭やなつみちゃんまで巻き込んでしまっていいのか？)
祐一は思う。
俺は弱い。
繭やなつみを守りきれる自信なんて、まったくな

かった。ましてや彼女らは怪我人だ。危険を冒さないで済むのなら、その方がいい。
だが、置いていけるのか？
ただでさえ、怪我をしてるというのに。そして、殺人ゲームが行われている島だというのに。
俺や薊達、そして茜も含めて、いつかは生きて帰るために殺し合いをしなければいけないかもしれないのに。
――もちろんそんな選択をする気はないが。
（置いて行ける訳、ないじゃないか）
「私達は、ここでお別れです」
だから、なつみが、薊が、そのセリフを口にしたときには驚いた。
「足手まといですし、それに……」
「野暮な存在にはなりたくないしね、祐一」
（俺は、バカだ）
ただただ、自分の浅はかさを呪った。
もう、この二人は、ずっと前から決めていたんだ。
俺の、為に。
「俺なんかより、ずっと、強いよ」
二人の頭を、交互に撫でる。
「今頃気付いたのね」
薊の呆れ顔。
「さ、行って、祐一」
薊が、そっと祐一を押した。
「俺が、バカだったんだよ」
だけど、歩き出さずに。
「祐一……」
「俺が、全部悪かったんだよ。一番大切な女性に目を奪われていて……他の……本当に大事なものが見えなくなっていたんだ」
栞も、香里も。
真琴も、名雪も。
そして秋子さんも。
「俺が選択をあやまらなければ、死ななくて済んだのかもしれないのに……俺が、違う道を行けば、み

んな生きていられたかもしれないのに……！」
「そうかもね」
「……ああ」
「ちょっと、椎名さんっ!?」
「いいのよ」
藺が、抗議の声を上げるなつみを手で制した。
「祐一、人は強くて、弱いのよ。だから、あなたひとりでできることなんて限られてるの。私だってそう。人生なんて後悔の繰り返しよ。それでも、前を向いて生きていけることが強さだと思う。だからこそ、誰もが現在（いま）を、輝いて生きてる」
藺もまた、真琴のことを思い出す。
「藺……」
「自分一人で背負い込まないでよね……他の選択肢もあったかもしれない。他の生き方も、他の人生もあったかもしれない。だけど、それで今より良くなった保証なんて無い。だから――」
一旦言葉を区切り、深呼吸する。
「自分だけは――せめて自分くらいは、選ばれなかった選択じゃなくて、自分が選んだ選択を信じなきゃ駄目よ。そうして、前を向いて歩けば、強くなれると思うから」
たとえ、その先に後悔が待ち受けていたとしても。
「先を恐れて行動しないほうが、ずっと、ずっと……つらいと思うから」
「藺……」
藺の言葉の意味をひとつひとつ噛みしめるように、目を閉じる。
「やっぱお前、きのこ食べると大人っぽいな」
「……どういう意味よ？」
そのあと、ひとしきり、笑った。
「さ、行こうぜ。ゆっくりな。……歩けるか？」
えっ？　……っと、二人が顔を見合わせる。
「一緒に行こうぜ。俺は確かに頼りないし、駄目な奴かもしれないけれど……」
すっと、差し出された手。

「俺も、信じた道を行くことにしたよ。後悔しないように」
始めからこうすれば良かったんだ、と祐一。
「出来る限り守るぜ、俺は」
みんなを、な。
「せいぜい、私達に守られないよう気をつけなさいよ」
繭が、そしてなつみが、祐一の手を、しっかりと握った。

543　牝鶏晨す

前回までのあらすじ
――エロムービー立ち上げたらＰＣがすっ飛んでしまい、にっちもさっちもいかなくなったことであるなあ
さてさて。年増女と若者によるがっぷり四つの取り組みという、勝目梓や南里征典あたりが即座に脱稿しがちな劇空間が去った後には物言わぬノートＰＣと、テキオー灯を二十四時間照射しても、社会が歩み寄りを見せないであろう気の毒な人々だけが取り残されました。
こうして日米合同プロジェクトは宮内レミィちゃん（九十四番）の勇み足によって暗礁に乗り上げたわけですが、ここでアメリカの失策を正直に批判したところで北川潤くん（二十九番）に利はないですし、居直ったメリケンの恐ろしさは日本人として塩基配列レベルまで刷り込まれてる北川くんですから、結局彼は、うなだれてるレミィちゃんの横で、目頭を摘んでもっともらしく嘆く振りをすることにしたのです。彼は大人でした。
「……ジャジャマル」
ぼそり、と聞き取れるかそうでないか位の声でレミィちゃんが呟きました。
「……ん？」

「ピッコロも、ポロリも……」

「ああ。残念ながら当分彼らと会うことは不可能だな。さっきも言った通り、相変わらずぽろりはおいなりさんとお宝をチャックからはみ出したまま近鉄奈良駅界隈を闊歩するし、ぴっころは見境無しに口から玉子を吐き出し、じゃじゃまるは手を出したアルゼンチン国債にあえぎ続けるんだ。つまりこいつらは一生救われないままなのさ」

　不干渉を決め込んだのもつかの間、ツッコミどころさえあれば、あっさり主義主張を翻して、余計なことを言ってしまうのは、北川くんのどうしようもなく救われない部分であるのかも知れません。

「…………!」

　それを聞いたレミィちゃんは最初目を見開き、次に俯き、そして小刻みに震えだしました。

　しまった、と北川くんはすぐさま後悔しました。客観的に見ても、ヤンキーが粗相をしたせいとはいえ、やはりここで米側を無闇に刺激するべきではなかったのです。こういう時は、なだめすかしご機嫌を取って関係修復を図るべきだったのです。

『そのコリコリとした睾丸を食わせてくれるのは貴様カァ!』と、絶望に打ちひしがれ、ニトロもびっくりなくらいに不安定になったレミィちゃんに胸ぐらを掴まれてそのままデイジーカッターで粉微塵にされてしまう。半ば確信を伴った予知的ヴィジュアルが北川くんの脳内で鮮やかに再生されました。もはや外交交渉は決定的にご破算です。北川くんは国際連盟を脱退してジュネーブの会議場を後にしたときの松岡洋右の気持ちが少しだけ分かった気がしました。

　どこか遠くへ旅に出たい気分でした。旅はとても素晴らしい。人を賢くさせます。外に出てみなければわからないことがたくさんあります。学校で教えていることは全て本に書いてます。だから、本を読んでいれば学校なんて行かなくてもいい。それよりも旅をすべきです。イスラエルの若者は兵役に就く

前の一年間、世界中を旅しています。ユダヤ人にしてみれば放浪は宿命みたいなもの……。
　北川くんは急にユダヤ人が羨ましくなり、国籍をイスラエルに移したい気持ちでいっぱいになりました。

「見るヨ」
　その声が、遥か遠くヨルダン川西岸付近に魂を飛ばしていた北川くんを、現実に引き戻しました。
「見るヨ！」
「は？」
「絶対見るよジュン！　アタシCD全部集めてノート直してにこぷん全話みるヨ！」
　大宣言したレミィちゃんは、手早く荷物をまとめて、担ぎあげると北川くんの腕をひっつかんでそのまま立ち上がりました。
「そうと決まれば早速出発するヨ！　ほーら、行くよジュン！　一刻千金、うかうかサンジューきょろきょろヨンジュー、CD探しは巧遅よりも拙速を尊んで、陽の照っている内に干し草を作らないとダメだヨ！」
　まくし立てるレミィちゃんに、北川くんは狼狽することしきりです。
　痛いくらいに強く腕を引っ張られながら、「女は強い。そしてたくましい」と北川くんは改めて確信しました。
　そういえば創世記の頃から女は強く眩しい存在でした。アダムが知恵の実を食べたのも、イヴのプッシュに押されたからですし、足利義政は日野富子の言いなりだったし、玄宗皇帝は楊貴妃の為にわざわざ都から数千里も離れた所からライチを持ってこさせたのです。
　そんな彼らより力も金も何も無い北川くんがレミィちゃんに逆らえるはずなどありません。
　けれどもその一方で、もしCDを全部集めたとき、中に入っているのが『にこにこぷん』ではない事が

ヤンキーにばれたら、いったいどう対処すればよいのだろうか、北川くんは将来設計に不安を抱かずにはいられませんでした。
「アハハッ、シュッパーツ！」
ガラガラとシャッターが開いて、なだれ込んできた外の日差しが二人を真っ白に染め上げました。

544　楽園追放

朝日とは呼べなくなった太陽の光が降り注ぐ中、僕達は墓場の近くを歩いていた。
誰のための墓なのだろうか？
もしかしたらこれから死に逝く僕達のために用意したものなのかもしれない。いや、そんなことにはさせない。せめて僕の隣にいる彼女だけでも守りたい。
しかし、今はとてもそれができる状態ではなかった。せっかく巻いてもらった包帯に海水が染み込み、問答無用な痛みが首筋を駆け巡るのを半泣きになりながら何とか耐えているからだ。
「くそっ、かっこつかないなぁ」
「どうしました？」
ぼそっと呟いたつもりだったのだが、天野さんの耳には届いたようで、心配そうに僕を覗き込んでいる。
「あ、いや、その、目にゴミが入ったみたいで」
「キスする時の常套句ですか？　そんな下手な嘘をつかないでください。傷が染みるんですね？」
天野さんの指が優しく僕の首に触れてくる。フローレンス・ナイチンゲールに会ったことは無いが、今目の前にいるかのような錯覚を引き起こす。
「意外とドジなんですね。怪我してるときに海水で顔を洗うなんて」
手厳しい一言。続けて。
「でも、この傷は私のせいなんですよね」
捨てられた子狸みたいな顔をしながらそんなこと

をのたまう。天野さんにそんな表情は似合ってるようで似合わない。
「えーと、気にしないでよ。僕が間抜けなだけだから。それにしても、雄大な海なら僕の心と身体を癒してくれると思ったんだけどね。そうはいかなかったよ」
場を和ませるためにちょっとおちゃらけてみる。
「……」
天野さんがきょとんとした顔で僕を見つめ、そして破顔する。天野さんはやっぱり笑顔が素敵だ。
「ありがとうございます」
「いえ、こちらこそ」
本当にこちらこそだよ。僕が今正常な意識のままでここにいられるのは君のおかげだよ。母なる海の潮は僕を癒してはくれなかったけど、母性あふれる美しい汐は確実に僕を癒してくれている。
僕達がいる場所だけはこのすさんだ島の中で唯一残された楽園であるかのようだ。
「ところで、これからどうするんですか？」
「うん、それなんだけど僕達は逃げる手段を探そうと思うんだ。もし、彰兄ちゃんがこのゲームを終らせたとしてもこの島を出る手段が無ければ意味が無いからね。泳いでいくという案は流石に却下として、そもそもこの島には管理者側の人間が何人もいるんだから、彼らがこの島から出るために何らかの手段があるはずだ。それを、僕達で奪ってしまえば良いんだよ。まあ、僕達二人だけで奪取するのは難しいとは思うから、せめてそれがあることだけでも確認できれば御の字、それにそういう場所には僕の叔父もいるかもしれないしね。そしてその情報が広まれば希望が湧いて、みんな争いを止めてくれるかもしれないからね。こんな考えは甘いかな？」
僕は柄にも無く熱弁を振るってみたが、自分でもそんなにうまくいくとは思ってない。それでも何もせずにいるわけにはいかない。
「そうですね。甘いです。どれくらい甘いかと言う

と、餡子に蜂蜜かけて生クリームでデコレーションしたくらい甘いです」
うわ、酷い言われ様だ。
「でも私の名字はあまのって言うくらいですから甘い物は好きですよ」
「あまのってそう書くの？　僕はてっきり……」
「ごめんなさい。冗談です。祐介さんがあまりに思いつめた顔して言うものだから……」
そんな顔をしてたのかな、僕は。
「だから、祐介さんの雰囲気を和ませようと思って……」
「天野さん……」
「祐介さん。きっとうまくいきます。そして私達で日常を……新しい日常を取り戻しましょう！」
天野さんがぐっと引き締まった顔になる。歳は僕と同じくらいなのにずっと大人っぽい表情だ。その表情に僕は元気づけられる。
「うん、そうだね。一緒に頑張ろう」
「でも、どうやって探しましょうか？」
天野さんが当然の疑問を投げかけてくるのを、僕は近くにあった墓石に寄りかかりながら答えようとする。
「それなんだよ。全く手がかりというものが存在しないからね。そういえば、ゲームの元管理者だった高槻なら何か知ってるかもしれない。けど、放送の雰囲気を考えると知ってたとしても素直に教えてくれるとは——って、ととと……うわっ⁉」
ドシンっと僕は尻餅をついてしまった。見ると寄りかかった墓石が見事に倒れている。
天野さんはそんな僕の様子を見てくすくすと笑っている。
「大丈夫ですか？　やっぱりドジなんですね。墓石に寄りかかったりするから罰が当たったんですよ」
そう言ってからかいながらも、僕に手を伸ばし起こしてくれようとする。僕はその手を掴み、下からの風に押されながら立ち上がる。

……風？
……下から？
僕は天野さんの手を左手に握りなおしてから、辺りを見回す。
「ど、どうしたんですか？」
「風が吹いてるんだ！」
「そんなのさっきからずっと吹いてますけど？」
「そうじゃなくて！　下から、地面の方から……」
僕が倒れた墓石をさらに動かすと、その下には何処かへと続く地下通路が現れた。ごくりと唾を飲み込む。
「この道、どこに続いてるんでしょうか？」
「わからない。でも、行ってみようと思う。危険だから天野さんはここに残ったほうが……」
　突然僕の唇に人差し指が置かれる。目の前には首を横に振る天野さん。
「そんな事言わないでください」
　じっと僕の目を見つめてくる天野さんの瞳の意志は強かった。僕はそれ以上何も言えなくて、ただ唇に触れている指の感触に鼓動を高めながら頷くだけだった。
　中は思ったより綺麗な造りになっていて、コンクリート張りの通路は明らかに人工物であることを示し、太陽系の惑星並に点々としかない薄暗い照明が、一応現在のところ使われていないわけではないということを示している。
「暗い、ですね」
「うん。けど、そっちの方が人に見つかりにくくて好都合だよ」
「ですが、何があるかわからないと偵察の意味がありませんよ」
　うーん、全くその通りだ。しかし、ここで手をこまねいて突っ立っているだけじゃ始まらない。僕は天野さんに同意を求めるアイコンタクトを送る。彼女がそれに対して首を縦に振る。僕達は同時に深呼

吸をしてから薄暗い通路を奥へと進み始めた。
幾分か進むと薄緑色のドアが見えてきた。扉やその周辺には何も書かれておらず、この部屋が何の部屋なのかはわからない。僕は慎重に慎重を重ね、中の部屋の物音を探りながらドアノブをそっとひねり、少しだけ開けて中を覗く。が、そこで管理者が僕らを待ち受けていたり、奇跡的に脱出できるようなものがあったりするわけでも無く、ただがらんとした室内に錆び付いたパイプ椅子と捨て置かれた折り畳み机が転がっているだけだった。
ふと緊張の糸が途切れる。張り詰めていたものが抜けていくと同時にどっと汗が吹き出る。
やれやれ、この調子では先が思いやられる。何も無いところでこの有様だからな。
拳を作っていた右手を開く。手に汗握るとはまさにこのことなのだろう。天野さんも緊張していたのか、左手を心臓に当ててどきどきしてます、と言わんばかりの顔をしている。薄暗くてはっきりとはわからないが、頬がほんのりと朱に染まっているようだ。僕と同様、手に汗を掻いているみたいで緊張の度合いが僕に伝わってくる。
……え？　……手？　……天野さんの？
そのとき僕は初めて、天野さんの手をずっと握り締めていることに気付いた。彼女の顔が赤いのはもしかして僕のせいなんだろうか。
「うわっ！　ご、ごめん！　その、て、手を……」
「い、いえ、べつに……」
「僕、いつから握ってた？」
「え？　あ、あの、倒れた祐介さんを助け起こしたときから……」
僕は顔面からガスバーナーの空気調節ねじを回してないかのような炎が出そうなくらい熱くなった。
「えーと、その……離したほうがいいよね？」
「そんなこと無いです。心細かったんで、すごく安心できました。だから、離さないでください」
ぎゅっと天野さんが両手で強く握り締めてくる。

「うん、わかった」
　僕はその愛しい人の手を改めて強く握り返す。
「何があっても僕はこの手を離さないよ」
　一体、誰にこの手を離すことができようか。いや、決してできはしない。僕は絶対にこの手を離すことなく、天野さんを守り通してみせる。
　そう心に誓いさらに奥へと進むべくその部屋を後にした。そしてそこからの僕の心臓は管理者に対する緊張と、天野さんに対する動悸とで休まる暇がなくなっていった。

　この地下通路に入ってどれくらいの時間が経っただろうか。あるかどうかもわからない希望を探す道程と、こちらはほぼ確実に存在するだろう敵に怯えながらの行進は精神的疲労を募らせていった。
　そして、もうそろそろ戻ったほうが良いかもしれないと考えたとき、今までにない雰囲気の部屋を見つけた。これまでにあった部屋は、机や椅子などが並べてあるだけの部屋や、ガラクタが放置してあるだけの倉庫しかなく、脱出の手がかりになりそうなものは一切無かった。だが、今回見つけたこの部屋のドアには【Staff Only】と書かれたプレートが取りつけてあった。白地に黒の文字で書かれたそれはわずかな誤差も無くドアの中央に取りつけてある。なんとも几帳面なことだ。
「ここ、怪しくない？」
　声量を天野さんだけに聞こえるように落として彼女の意見を聞いてみる。
「そうですね。今までこんなこと書かれていませんでしたしね。でも、誰か中に人がいるんじゃないでしょうか？」
　声を落としているせいか自然と二人の距離が近くなる。鼻の先にしかつめらしい顔をした天野さんがいる。今の僕の心臓の動悸は三四〇％彼女で占められている。
「大丈夫だと思うよ。人の話し声とか物音とか全然

しないし」
僕はドアに耳を当てながら中の音を探るが、心臓の鼓動が邪魔をして実はそれどころではない。
「とりあえず開けてみようか」
「はい」
今までにもやってきたようにゆっくりとドアノブをひねる。ほんの少しの隙間から中を覗き込むが人の気配は無い。またはずれかと考えたが、ドアについているプレートが気にかかる。ここはやはり中に入ってみるべきだろう。
僕は入る意志を目に乗せてから天野さんに送る。
――天野さんはコクリと頷いてくれた。
人一人通れるくらいにドアを開けて中に入ると、なんとも言えぬ不快な気持ちに襲われる。何の部屋だろうかと訝しみつつも、さっと物陰に隠れながら周囲を見渡すが、この部屋はかなり広いらしく一番端が見えない。
「これだけ広いのに誰もいないのかな？」
奥の方には何かがあるようなのだがここからでは確認できない。
「あっちに何かあるみたいだね。なんだろう？　コンピューターかなぁ？　行ってみようと思うんだけど大丈夫かな？」
そう言って、僕は振り返る。
だが、そこには僕の左手によって繋がれているはずの人はいなかった。僕の左手は切断面から雫がぽたりぽたりと落ちている白く綺麗な右手だけを握り締めていた。
「天野さん‼」
僕はあたりを何度も見渡す。
「天野さん！　天野さん！　天野さぁん‼」
周りに敵がいるかもしれないなんてことはお構い無しに、僕は大声でその愛しい人の名を叫んだ。
そして、僕は気付く。
【Staff Only】の意味に。
このゲームのスタッフ、この理不尽なゲームの主

催者とは……

そう、長瀬一族であることに。

つまりはこういうことなのだろう。
この部屋は長瀬一族しか入れない。
どんな技術でそうしているのかはわからないが、一族の人間以外は決して入れぬようにしてあるのだろう。
だから、長瀬である僕以外はこのドアをくぐれなかった。
だから、長瀬でない天野さんの手は、このドアで切断された。
僕が長瀬だから
僕と一緒だったから
僕がプレートの意味に気付かなかったから
僕と出会ったから
僕が手を離さなかったから
僕とキスをしたから
僕が存在したから
僕は僕が僕に僕とボクへ僕でぼくはボクがボクの
僕がボクにボクは僕を僕がぼくが僕が僕がぼくが
僕がボクがぼくが――――――
「うわあぁぁぁあぁぁぁ!!」
体がよろよろとふらつく。
まるで自分の体ではないかのように。
自分の中に抑えきれない電波が増幅していく。
しかし、封印のせいか電波が外には向かわない。
ならば抑えきれなくなったそれはどうなるのか?
自らの中に暴走した電波が蓄積されていく。
臨界を超えたそれは僕の中で爆発する。
目の前が白い光で満たされるかのような。
身体中の血液が逆流しているかのような。
DNAの配列を並べ替えられているかのような。
僕を構成する原子が解離していくかのような。
そんな気分に襲われる。

「あ、天野さ……ん……」
そして僕の意識の糸は切れ、その場に倒れた。
天野さんの右手を決して離すことなく。

545　忘れない

まだ少し熱がある。先よりは余程マシだとはいえ、それでも安心するには程遠い顔色だった。血がないくせにどうして熱まで上がるのだろう。
柏木初音はまだ青い顔をした七瀬彰の傍で必死に看病をしている。足の治療を手早く受けてからずっとつきっきりで、初音は七瀬彰を看病し続けている。
先程の戦闘で彰は高槻の放った弾丸に撃たれた筈だったが、実は彼は防弾チョッキを着込んでいて、致命的な一撃にはなっていなかったようだ。それでも額や足、腕、いろいろなところから流れてしまった血の量は多過ぎた。
「どうだ？　彰くんの様子は」
後ろから声がした。
柏木耕一は七瀬彰の眠る部屋に入ってきて初音に尋ねる。初音は振り返って小さな声で言う。
「だんだん熱は下がってきてる。けど、顔色は悪いままだよ。血が流れすぎたのかもしれない」
「そうか。目が覚めたら何か精力がつくものを食べさせよう。それで元気になるさ。——初音ちゃん。そろそろ看病替わろうか？」
「ううん、大丈夫」
頑として首を振る初音。こういうところで彼女はすごく強情だった。耕一は溜息を吐いて何かを言おうとするが上手い言葉が浮かばない。黙っていると初音が喋り出す。
「あのね」
耕一はそのかすれるような声に耳を傾ける。
「彰お兄ちゃんはね、わたしに、新しい日常をくれる、って言ってくれた」

初音の後姿はすごく小さかった。
「日常はみんな壊されちゃった。もう、家に帰れたとしても、お姉ちゃんは誰もいないんだ」
絶望の隕石が降ってくれれば、おそらく真っ先に潰れるくらいに、小さな背中だった。
「けど、彰お兄ちゃんは、きっと、日常は何処かに、——何処にでも、あるんだって言って」
声にならなかった。
ここまでずっと耐えてきた初音の背中が震え出す。苦しみに震えるこの小さな背中の前にあっては、自分は果たして何が出来るのだろう、と思った。
初音は泣いていた。
「泣いちゃダメだってわかってるけど……っ！　わたしは、彰お兄ちゃんに死んで欲しくない。誰にも死んで欲しくないんだよ……っ！」
することなど決まっていた。
彼女に残された微かな希望の火。自分はその微かな希望のひとつだ。彼女をこの非日常から連れ出すために、自分は彼女の傍にいよう。
「大丈夫。俺も彰君も、絶対に死なないよ」
震える肩に両手を置く。せめてこの震えが止まるまでは、初音の傍にいようと思う。

目を開けるとベッドの上にいた。
鹿沼葉子はゆっくりと身体を起こして部屋の中を見回して、そこに七瀬留美が座っていることを認識する。このゲームが始まったばかりの頃に出会った少女だった。
「あ、起きたね。お久しぶり、葉子さん。あたしのこと覚えてるかな？」
「ええ。七瀬さん、お久しぶりです」
答えると七瀬は満面の笑みを見せた。
最初に出会ったときに比べて彼女の姿は変わり果てていた。血で汚れた黄色い制服、顔や腕などに見られる多くの生傷、そして短くなった髪。
特に髪が短くなっていることに葉子は気を奪われ

た。自分の傍らに座っている七瀬はその視線に気づき、苦笑いをして答える。
「ああ、髪切ったんだ。動きにくかったから」
「はぁ」
完全に納得したわけではないけれど、葉子は取り敢えず納得したような顔を見せる。自分も髪が長く、戦いを続けていく中でこの長さが鬱陶しいと思う時がくるのかもしれない。
「葉子さんが高槻と戦ってくれたお陰で、初音ちゃんも彰君も無事だったよ。ありがとう」
無事だった。自分が意識を失った後、助けが間に合ったということか。良かった。安堵の溜息と言葉が漏れた。自分の顔を見てか、七瀬はにこりと笑う。
――この時点では、覚醒したばかりで脳味噌の働いていなかった葉子には、七瀬に起こった「一番の異変」に気付くことは出来なかった。
「――積もる話もありますが、私はそろそろ行かないといけません。私は高槻や長瀬一族を殺さないといけないんです。それでは、」
動こうとして脇腹に鋭い痛みが走る。表情まで歪んで、七瀬が慌てて葉子を止める。
「まだ動かないで、無理しちゃ駄目だよ」
強引にベッドに戻される。怪我をしているせいか力が戻らない。いつもならこのくらいの力簡単に退けられるのに、
怪我のせいではないことに気づくのに二秒。
握り拳を作る。力が入らない。怪我とかそういったものでは説明できないくらいに脆弱な握り拳だった。普通の女の子のような腕力しか持っていない自分を嫌でも直視することになる。制限されているとはいえ、自分はもう少し力があった筈だ。
高槻の持っていた、不可視の力を封じる装置はまだ働いたままなのだ。そこに気づくのにまた二秒。
強引に身体を起こして立ち上がる。
「駄目、まだ動いちゃ」

「それどころじゃないんですっ！」
「それどころよっ」
自分の力が弱っているせいで、このベッドから立ち上がることさえも出来なかった。
「寝ておいて。色々しなくちゃならないのは判るけど、今は身体休めて」
ベッドに押し付けると七瀬は丸椅子にどしんと座る。じい、と葉子のことを見つめて、しばらくは目を離しそうにない。
（しかたありません。あの機械を取りに行くのは、身体を休めてからにしましょう）
どの道身体は怪我で弱っているのだ。休んでから行った方がまだマシというものだろう。
葉子が違和感に気づくのは、再び睡魔に襲われて目を閉じようとしたときだった。
不幸なことに自分の脳味噌は疲れ切っていて、していい質問としてはいけない質問の境界線が曖昧になっていた。疑問をそのまま口にしてはいけない、そんな時があることは判っていたくせに。
「——七瀬さん、その、」
勿論、訊くべきではなかったのだ。言葉にしようとした瞬間に後悔が走り、最後までは言えなかった。最悪の言葉を口にしそうになった。
折原さんと、長森さんはどうしていますか。
——判りきっているではないか。七瀬留美の見せる微妙な翳りで、判っていたことではないか。
七瀬留美は思っていた以上に聡明だった。自分のその断片的な言葉だけですべてを理解してしまう。泣きそうな顔で笑顔を作る七瀬留美は恐ろしいほどに脆そうだった。
自分は最低だと思った。
「ごめんなさい！　私は最低です、」
「いいの。ごめんね、気を遣わせて」
七瀬留美の笑顔を直視することが出来なかった。大切な人を二人失った、まだ成人もしていない少女

の顔は、底が見えないほどに悲しかった。
　思う。自分が何もしないでいた時間。あの少年と話していた時間。高槻の傍にいた時間。その時間に何かをしていたならば、もしかしたらあの三人組は今も無事に生きていたかもしれなかった。思っても仕方がないことを思って、
「私が、私がもっと早く動いていれば――っ！」
　口にしても仕方がないことを口走る。
「自惚れちゃダメだよ、葉子さん」
　七瀬は真顔で言う。自分のすぐ近くに顔を寄せて、心底真剣な眼差しで、自分の目を見つめた。
「葉子さんのせいじゃない。あのふたりが死んだのは、葉子さんのせいじゃない。勝手に責任を負わないで。ふたりが死んだのを、勝手に自分のせいにしないで」
　葉子は喋れない。喉に絡まる何かのせいで声が声にならず、脳を走る何かのせいで思念が思考にならなかった。
「だから、自分のせいなんて言わないで。お願い」
　そう言って七瀬留美は一粒の涙もこぼさずに笑う。
「あたしは、あのふたりの分も生き続けてやる、って決めた。あのふたりのことは死ぬまで忘れないけど、それでも、生きていくって決めた」
　七瀬の言葉は、強かった。
「葉子さん。絶対、生き残ろう？」
　七瀬の目は、優しかった。
「それじゃあおやすみなさい、葉子さん」
　七瀬の手は、温かかった。

　程なく眠りに落ちた葉子を残して七瀬が部屋から立ち去ろうとすると、柏木耕一と鉢合わせになる。
「目、覚めたみたいだな」
「うん。すぐに寝ちゃったけどね」
「――そっか」
　ドアを静かに閉めて部屋を出る。
「彰君は？」

「まだみたいだね」
小さく息を吐いて耕一は答える。流石にあれだけの傷を負っていては、体力の回復もなかなか難しいのだろう。しかし耕一から更に聞くと、容態は良くなってきているようなので少し安心する。
会話が途切れる。この診療所の周囲はすごく静かで、殺し合いがすぐにでも起こるかもしれないなどとは思えなかった。沈黙を嫌った七瀬が口を開く。
「潜水艦がこの島の何処かにあるらしいんだ」
高槻から聞いた情報をそのまま口にする。
「死に際の高槻が言ってた。脱出用なんだって。みんなが元気になったら探してみるのもいいかもしれないわね」
想像はしていたが、耕一からは大袈裟な溜息が漏れる。肩を竦めて耕一は言う、
「あんな奴のこと信用できるか？」
「わかんないわよ、そんなの」
「今まで自分たちを殺し合わせてきた奴だぜ？　俺は簡単には信じられないな、そんなこと」
当然の反応だった。大きく溜息を吐いて更に言葉を続けようとした耕一を制し、七瀬が口を開く。
「――それは、わかってるけどさ。あたし、あいつと少しだけ話したんだ。わかんないけど、あたしは、この情報は信頼できるかもしれないって思う」
七瀬は真っ直ぐに耕一を見て言った。
七瀬の目には不思議な確信があって、耕一は瞬間気圧される。自分の大切な人を奪った奴が言ったことなのに、何故七瀬はここまで信用出来るのだろう。
「――何故？」
問うと、少しだけ歯切れの悪そうな間があって、
「女の勘」
そんな答えが返ってくる。バカな耕一にだって、七瀬のその言葉の裏に何か色々な思いが巡っていることくらいはわかる。言葉に出来ない思い、言葉にするべきではない思い。
小さく息を吐いて耕一は頷く。

「――判ったよ。確かに嘘情報を流したところで、何のメリットもないだろうしな、あいつには」
言うと、七瀬は少しだけ嬉しそうに笑う。
「潜水艦見つけて、みんなで生き残ろうね」
「ああ」
――みんなで生き残るために。
人の気配がする。本当に微かな気配なので、耕一以外の誰も気付かないような気配だ。
耕一には勿論、その気配の正体が判っている。
「んー、便所。それと外の空気吸ってくるわ」
その気配が何をするつもりなのかも判っている。
「？　わかった。あんまり遠くに行かないでね」
怪訝そうな顔をしている七瀬に背を向けて、耕一は気配の動く方に向かう。
「わかってるさ」
すぐ帰る、
と言おうとしたけれど、辛うじて思いとどまった。

546　ぼくらは間違ってゆく

夢を見ていることが判っていて、自分が眠っていることも判っていて、眠っちゃいけないことも判っていて、彰の看病をしなければならないことも判っていて、それでも初音は、彰の眠るベッドに倒れこんだまま、指を動かすことさえも出来なかった。
初音も疲れ切っていたのだ。看病をされる側であってもおかしくないくらいに。
多分夢の中で、自分は彰と言葉を交わしている。
「彰お兄ちゃん」
うん。ありがとね、初音ちゃん。初音ちゃんのお陰でだいぶ救われた。すごく助けられたよ。
「わたしの方が救われたよ。ずっと、ずっと」
ううん。君の方が僕にたくさんのものをくれているよ。今してくれていた看病もそうだ。何より、好

きな人や友達を亡くして心が壊れかかっていた僕に、生きる意志を与えてくれたのは君なんだ。
「わたしは、何もしてないよ」
君がそばにいて、笑ってくれただけで。君が僕らから離れても、必死に生きていてくれただけで、僕は例えようも無いくらい救われたんだ。だから、お礼といっちゃあなんだけど、君に新しい日常をあげたかったんだ。
「新しい、日常？」
今は、哀しいだろうしつらいだろう。泣けばいい。死ぬほど泣けばいい。泣いてもいいんだ。堪えなくてもいいんだ。好きなだけ泣いていいんだよ。日常を失うって言うのは、それくらい悲しいことだ。
「――ッ」
だけど僕は、どれだけの時間がかかっても良いから、日常に戻って欲しい。君は僕に生き続ける新しい理由をくれた。君にも新しい、生き続ける理由が見つかればいいと思う。僕は、そのために戦おうと思うんだ。
「彰、お兄ちゃん」
君のために僕は戦うよ。
「勝手だよ！　だめだよ、彰お兄ちゃん、」

それじゃあ、さよなら。

初音は夢から舞い戻る。夢の中で遠くに歩いていく彰の姿があまりに恐ろしくて、これ以上夢を見続けてはいけないと思った。目が覚めればすぐ傍に彰はいるのだ。
いる筈なのだ。
「彰、お兄ちゃん？」
ベッドの脇に置かれていた防弾チョッキやサブマシンガンが無い。血で汚れた彰の上着や、ぼろぼろになっていた靴もない。
そして、ベッドのふくらみは気付くと消えていて、そこには微かな温もりだけが残っていた。

風が吹いて初音は思わず顔を上げる。開け放された窓。さっきは開いていなかった筈の窓が盛大に開け放され、舞い込む風で初音の髪が俄かに舞い上がる。事態を瞬時に理解することは、今の疲れ切った初音の頭では酷というものだろう。
それでも、五秒もすれば意味は判る。
目の前が真っ白になった。

——高槻は殺した。後は自分の親族一人残らずぶち殺せば良いだけだ。あいつらは何処にいるのだろう？　熱に浮かされた頭で彰は懸命に考える。身体中がずきずき痛む上に右足を引きずりながら歩くので移動速度は出ない。
何処でも良いじゃないか。
そんな事を脳髄が命じる。歩き続けていれば何処かで見つけられるだろう。何処かで。
脳髄の声に魂が首肯する。
少し狂ったような眼差しで彰は歩く。

「行かせないよ」
そんな声がするまで、彰の頭は自分の目の前に立ちはだかっていた男に気付けもしなかった。
「耕一さん」
肩を竦めて耕一は笑う。
「とまあ、止めたところで君は行くんだろうな。管理者をぶっつぶしに」
右腕には小銃。弾数がそれ程残っていないだろうサブマシンガンよりは、余程有効な武器だ。あいつを殺してあの武器を奪っていくのもいいかもしれない、とまで考えた自分が流石に危険だな、と思う。
止めるのなら結局暴力で薙ぎ倒すしかないのかもしれないけれど、腕力では彼には敵わないだろう。
「ええ。行きますよ」
彰は答える。驚くほどにかすれた声で、いつから自分の声はこんな雑音のようになってしまったのだろうと思う。
言うと耕一は笑う。笑っているくせに目はちっと

も笑っていなくて、彰は少しだけ身じろぎする。
「止めるつもりなんか無いよ。ただ、ちょっと待って欲しい。君は本気で今すぐ行くつもりか？　だとしたら、君はあまりに自分の怪我の程を判っちゃいないようだとしか言えないね」
「もう、治りましたよ」
　身じろぎしたまま、しかし彰は強い口調で答える。
「馬鹿を言ってるな」
「そうですね、僕は馬鹿なんですよ。だから馬鹿に構わないでくれますかね？」
　挑発するようにそう言った。耕一が何かを言う前に彰は再び足を引きずり歩き出した。構っていられない。無言の耕一の横を通り過ぎて再び森の中に足を踏み入れようとしたところで、
　思いもかけない言葉を聞いた。
「俺も付き合うよ。俺もどうしようもない馬鹿だからな。君のやることに付き合おうじゃないか」
　声が出なかった。
「……それこそ馬鹿げてますよ？　あんたの役目は今診療所にいる三人を守ることだ。その為に僕は独りで出てきたんじゃないか」
「俺に劣らず馬鹿だね、お前は。これから先、いったい誰が彼女たちを殺しに来るというんだ？」
　言葉が出なかった。反論のしようも無い。それはそうなのだ。実行部隊として野に放たれた高槻が殺された以上、これから先殺人が起こる可能性はひどく低いし、あの閑散とした場所は、実際隠れ家としては適している場所かもしれない。
　だが。それでも、もしもということがある。誰かがあそこを守らないでいたら、どうなる。
「初音ちゃんが言ってたよ。君が新しい日常をくれるんだ、君に生き残って欲しいってな」
　そんな彰の思いを他所に耕一が呟く。初音の名前を出され、彰の意識は耕一の声に向く。
「君は生き残らなくちゃ、いけない」
　耕一の言葉がひどく胸に染みる。コーヒーに融け

ていく砂糖のように、ゆっくりと染み込んでいく。
生き残らなくちゃいけない。
思う。
自分が生き残ることには、もしかしたら何かの意味があるのかもしれない。
柏木耕一は強いのだと思う。外見からして体力が自分より優れていることは判るし、その言葉の持つ力から心が優れていることも判る。彼と一緒に戦えば、もしかしたら二人とも死なないで帰ることが出来るかもしれない、とも思う。
彰はそれでも言った。
「――一人も二人も変わらないですよ。僕だけじゃなく、あんただって死んでしまうかも知れない」
彼までが死んでしまえば、初音の希望の火は完全に消え失せてしまうと思った。
耕一は答える。
「構わないさ。大切な人が三人死んだ。俺はそれの仇討ちだ。いなくなって悲しむ人は殆どいない」
「それじゃあダメなんだ。あんたが死んだら、初音ちゃんの希望の火は全部消えてしまう！　わかってるんですか？」
吐き捨てるように言うと、耕一はそれこそ眼光だけで人を殺せるくらいに強い目をして、同じくらい強い声で答える。
「お前こそ何も判ってない！　お前ももう既に初音ちゃんの希望の火なんだよ。お前が死んでも、俺が死んでも、それで初音ちゃんの火は消えるんだ。どちらかが終わればそれで全てが終わる！」
「でも、」
「独りで戦ったらお前も俺も死ぬかもしれないけど、俺とお前、二人一緒なら、二人とも死なないで帰れるかもしれないだろ？」
その言葉で、何も言えなくなった。彰は殆ど泣きそうになる。この男が吐く言葉がすごく頼もしくて、まるで本物の兄のようにまで思えた。

「――行こう」
「脱出手段の捜索はあの三人に任せて、俺達はこれ以上死人が増えない内に、全部終わらせよう」
「――はい。犠牲は、あったとしても、僕達が最後であるように」
「馬鹿。生き残るんだよ、俺たちもな」
耕一は、肩を竦めて笑った。
彰も、同じようにして笑った。
「行きましょうか」
「ああ」
七瀬彰と柏木耕一は肩を並べて歩き出した。
強い風が吹いていた。何処へ続くとも知れぬ、冷たい風が吹いていた。風は自分が何処に向かうかも知らない。ただ、何処に向かうべきかだけは知っている。終わりに向けて風は吹くのだ。
風のように二人は歩き出す。
風の辿り着く終わりに向けて歩き出す。

547　迷い

何度となく駆けた林道を、軽やかに走る人影があった。差し込む朝日が木々に遮られ、櫛のように彼女の行く手を照らしている。
木陰と交互に投げかける光を、横目で眩しげに見ながら、千鶴は呟いた。
(今日も、快晴ね……)
朝日は、青空を約束するように輝いている。清々しい一日の兆しが、なんだか白々しく思えて悲しかった。
ほどなくして、小屋が見えてきた。たいして遠くはないから、当然ではあった。順調なら往復三十分とかからない。むしろ耕一へ謝罪するのに要する時間の方が、はるかに長いだろう。
少しばかりしゅんとして、戸口に立った、そのとき。

死体が、あった。
（刺殺⁉　これは……⁉）
血液が逆流する。
僅かな金属音を立てて爪を開くと、素早く姿勢を低くして小屋に張り付き、あたりを窺う。遠目に死体を観察すると、傍らに長い長い髪が添えられていた。
（あれは……七瀬さんの……ね……）
自分もそれなりの長髪だけに、その行為の意味は解らないでもない。
彼女の無念が、身に染みる。きっと今では楓のような髪形になっているのだろう、そう思って……しんみりとする。
そんな気持ちをよそに、髪はそよそよと風に揺れていた。
（……行こう）
小さく息をついてから、頭を強く振って気を取り直す。静かに息を吸い、止めると同時に静かに扉を開いてみる。反応はなかった。
音もなく進入し、階段を素早く上がると、簞笥でカモフラージュされた戸口の前まで、一気に駆け抜ける。そこで千鶴は気抜けした。簞笥はずらされ、ドアは開いたまま。部屋は、無人だったのだ。
（何者かに襲われ、それに追われて……？）
しかし、全ての装備は運ばれていた。浩平の死から出発までは、さほど慌しいものではなく、恐らくは逃げた襲撃者を追った、というほうが正しいのだろう。
それが、どういう事かといえば。
三十人を切った今でも、順調に殺人は続けられているということだ。

迷う。
耕一と七瀬。
そして初音。
今、どこにいるのだろうか。

手掛かりは、何もなかった。
部屋の時計を見ると、時間はまだ、たっぷり一時間半以上残っている。
再びあてもなく、耕一を探しに行くのが正解だろうか？
それともやはり、戻って報告するのが筋だろうか？
そのとき。
千鶴の迷いを断ち切るかのように、屋内に侵入する人の気配がした。

548 断罪（前編）

体の中が、熱い。
脳がうねるような感覚。
体が溶けてしまうような感覚だ。
僕の新型爆弾。次々と地球へ爆弾を落としていく。
地球上の人々が阿鼻叫喚の悲鳴をあげ続ける。
まるでいつもの妄想の中にいるような感覚だ。
瑞穂ちゃんが、沙織ちゃんが、瑠璃子さんが、月島さんが……天野さんが……みんなが、
「助けて！」
と口々に叫ぶ。
規模こそ小さいが、この島は、その世界によく似ていた。
あさましい、血で汚れた地獄の世界。
自分だけは助かりたい……と、口々に叫ぶ愚かな人達。
僕は、無慈悲にも最後の爆弾を、書いた。
「………」
ゆっくりと目を開く。
見たことのない部屋、見たことのない場所、知ら

ないベッド。
ゆっくりと朦朧とした頭で、あたりを見回す。
「気がついたのか？　祐介」
男が、いる。
部屋の隅に置かれた事務用の机の前に座って。
物音に、椅子ごと回転させてこちらを見やる。
長瀬源一郎。よく知っている人物。
僕の――叔父だ。
「……」
あれほど会いたかった叔父に出会ったというのに、心はまったくと言っていいほど動揺しなかった。
「ああ、そうか……そう硬くなるな。ここには、俺とお前だけしかいない。いろいろ話したいこともあるだろうが……とりあえず落ち着いてろよ」
別に動揺などしていない。至極落ち着いている。
寸分違わない自分の心臓の音が妙に大きく聞こえる。規則正しく血液を送り出す音。その振動までが体中を軽く震わせる。
「お前は、ここに来たんだな」
その台詞に祐介は自分の手を眺める。血の赤。
乾いた血の跡が、こびり付いている。
ようやく、祐介はその自分の置かれた状況を思い出した。
だが、心が騒ぐこともなかった。
「祐介、ここは、ある選ばれた人間しか入れない場所だ。いや、正確には……ある選ばれた人間は入れない場所……とでも言うべきか」
カチッ……
ジッポを取り出し、煙草に火をつける。
紫煙が宙に舞った。いつもの叔父の銘柄の煙草だ。
昔、よく嗅いだ匂いが祐介の鼻をつく。
「胃爆弾……あったよな？」
紫煙をひとしきり吐いてからそう切り出す。
「逆らったら爆発する、取り出そうとしても爆発する……そういう『設定』だったな。爆発する……という設定は放送で流れた通りだ。解除されている」

源一郎が美味そうに煙を吸った。
「確かに解除されたが……別の機能はいくつか残っている」
源一郎が口にだすことはなかったが、爆弾の現在位置捕捉センサーもそのひとつだ。
「今回のも、それだ。爆弾を体内に入れた者がこの施設に入ることは許されない。お前は、そんな所に迷いこんだんだよ」
「……」
源一郎は、『お前達』とはあえて言わなかった。
「……ここは、そんな場所だ。隔離施設、というわけだ」
祐介がここに入れた理由。それは長瀬という名に於いて、爆弾を取り付けられることのなかったイレギュラーの参加者だからだ。
他にもロボという理由に於いて取り付けることができなかった来栖川製のメイドロボの参加者が約二体いたが、死んだ――いや壊れた今となっては、もはやどうでもいい話だ。
「お前は、俺達を、恨んでいるか？」
どのような意味が込められているかは分からないが、そう、聞いた。
「汚いかも知れないな、俺の意見も言わないで」
黙っている祐介を見て、源一郎は力無く笑った。
短くなった煙草を銀色に鈍く光る灰皿でもみ消すと、すぐに二本目の煙草に火をつけた。
「煙草が多くなってイカンな……。学校ではガミガミ言われたもんだが、ここでは、誰も文句は言わないからな」
「……」
「それはまあ、置いといて、だ。俺は、このゲーム、あまり好きじゃない」
ピクリと、祐介のこめかみが動いた。
「御老達がどう考えているかは知らないがね。少なくとも、俺とフランクは好ましく思っていないはずだ」

正確には、フランクは寡黙すぎてよく分からんところもあるがな……と笑った。
「正直、すまなかったな。言葉で言えば、陳腐かも知れないが。一応、言っておきたくてな」
「……」
「お前は、ゲームの参加者だ。だが、今までの話で気付いてると思うが、お前には爆弾が入っていない。爆弾は生死判定も兼ねている。お前と……あと彰だな。その二人は死んでも確認されない限り放送されない」
――ちなみに、セリオとマルチは、長瀬源五郎が別の手段で生死判定装置をつけていたので、それで判断している――
「お前と、彰、そしてもう一人の誰かの三人だけが生き残ったら、おそらくはこのゲームは終了だろうな」
判断する手段がないからな、と笑った。
「まあ、つまり、だ。おまえは――ここにいろ」
「……」
「……残念だが……」
かなり言葉を選びながら、ゆっくりと切り出す。
「お前と一緒に行動していた少女は、保護できなかった。とりあえず命に別状がない程度には手当てしてはやったが……保護は、できない。俺がどうにか出来るのは、お前だけだ」
悲痛な顔。祐介は、ただその歪む叔父の顔を眺めていた。本当に『ただ』眺めていた。

549　命の教え

不可思議であった。
少女の肩には縛り付けられた布――往人の銃弾による傷によるものか。そこから未だに出ている事だろう、血が布を僅かに紅く湿らせていた。
だが。
――血の臭いが、薄い。

血を纏わせ。
機械のように、表情一つ変えず。
問答無用で人殺しを行っていたあの殺人鬼は何処へいったのだろう？
無論、完全に〝やる気〟が失せたわけではあるまい。その右手に握られた銃がそれを如実に語っている。銃口が往人の額を捉える事は、まだ、無かった。
「殺しは、止めたのか？」
疑問。
少女の目が、往人を見た。
冷たい目。
「止める――止められるとは言いません。一度、このゲームに乗った以上は。ただ、無駄な殺しは」
「……無駄な？」
「例えば」
すう、と右手が挙がる。
コルトガバメントの銃口が往人の額を捉えた――
「ここで引き金を引くような真似の事……です」
「……」
後ろでは。
恐らくは、晴子がその手に握る銃を少女に向けている事であろう。
人を殺そうとする想い――それが、殺気を起こさせる。
背中に伝わる、冷ややかな〝何か〟。
それが、それだ。
――分かりたくもない。
「人に銃を向けるような真似は関心しない――脅しとも取れる」
「……」
「とりあえず、下ろしてくれ。後ろのオバサンに一緒に撃ち抜かれたらかなわん」
「居候……撃ち抜かれたいんか？」
失言だった。
腰を下ろせば、風が強い事が分かった。

張り詰めた精神状態で歩き通せば、そんな事すらも分からないという事か。
無論。
今、目の前に居る者に神経を集中せざるを得ない状況であるというのは、間違いない。
どうやらそれは、晴子にとっても同じらしい、──当然だ。
晴子には、観鈴を守る義務がある。
それに。
観鈴が、いつ人質代わりにとられるか分かったものではない。
万が一、そうなったら──
「良い風ですね」
少女──茜と名乗った──が、何と無しに呟く。
往人は無言のまま。
「──血の、臭いがキツくてしゃあない」
代わりに晴子が返した。
返事と共に、少女を睨み付けた──睨み付けたのは、目だけではない。
銃口。
「おまえ……何人殺った？」
臭い。
殺した者だけがその身に纏う、死臭。
それが分かるというのか──不意に、往人は哀しく感じた。この親子だけは、血に染まって欲しくないと思うのに。
少女は。
時折、その顔を歪ませる。
それは、頭の中で殺した人の顔が浮かぶ故にだろうか。
知る由も無い。
「──七人」
じゃきっ。
「──止めろ」

「黙っとき、居候」
「もう一度言う……止めろ」
「黙っとけ言うんか！　こんなけったくそ悪いゲームに乗ったクズ目の前に置いて、黙っとけ言うんか！」
「観鈴の前で、殺す気か」
横を見る。怯えている。
目の前の少女に？
――否。
隣に立つ、自分の〝母親〟に。
「くっ……」
「――殺すというのなら、構いません」
「!?」
銃を向けられた少女の声。
その声は、この状況に於いて、尚、冷ややかに。
「ただ、黙って殺されるわけにはいきません……約束ですから」
「――っ！」

気が付けば。
コルトガバメントの銃口は、観鈴を捉えていた。
これでは、撃てない――！
「精一杯、生き残るんです……例え、あなた達を殺してでも」
観鈴は今度こそ、目の前の少女に怯えていた。
自分に向けられた銃口。
そして、恐るべきことに、全くと言っていいほど、それに殺意が感じられない事に。
「……」
無言。
晴子は銃を下ろした――同時に、茜の銃口も観鈴を放した。
それでも。
睨み付ける視線は、殺意を帯びている――。

550　指向性

社を離れるときは、あっという間だった。
ただひたすら坂を下り、林道を抜けて行く。結花とスフィーは、結界に対する果てしない考察を更に加えていた。
そのうしろに、黙々と歩く黒い影。
小脇に抱えた大きな本に、黒マントとトンガリ帽子。時代を超えて現代によみがえる魔法使いが、そこにいた。端から見るとぼーっとしているようにしか見えないのだが、来栖川芹香の頭脳は高速回転していた。ちょっと前に三人で行った、リストの分析を一人脳内で続けていた。
(……危険人物は、やはり能力者)
気になる人物を思い浮かべ、再びリストを開く。

＞御堂
【強化兵】：戦闘能力のいくらかは制限されるが、技術的なものに衰えはない。
(……顔が怖い……)

＞国崎往人
【法術】：現状まま。
(……目付きが邪悪……)

気になるのは、この二人だ。
オカルトに詳しい芹香は、組織側の新興宗教についても若干聞き知っていた。そのため、生き残っている不可視の力使いに危険人物はいないと判断した。鬼の伝承についても知っており、柏木耕一も特に危険とみなさなかった。
「あれー？　芹香さん、またそれ見てるのー？」
「なになに、こんなのが好みだとか？」
「……（ふるふる）」

……好みかどうかは関係ない。
個人的感情をよそに置くと、国崎往人が気になる。こちらを睨みつけるような三白眼がギラリと光っている。
法術というのは……こういう人物が使うものだったろうか？
それに……〝現状まま〟とは、どういうことだろうか？
「うんうん、人は見かけによらないもんね」
「そーだね、実際は、どんな人なんだろうねー」
「……（ふるふる）」
……どんな人かは興味ない。
能力を制限する結界が島内にあるのは、これ以上なく確かなことだ。そして、制限のかかり方にはムラがあり、纏めてみると指向性がある。
制限は技術や知識には全くかからない。
物理的能力に関しての制限はそこそこ。
精神的能力に関しての制限はかなり強い。
芹香の知っている法術は、間違いなく精神的なものを根幹に発するもの。
それが、現状まま？
……現状？
現在の情況と、同じ？
……このリストを編集した際、すでに結界の影響を受けていたと？
ピンと来た、という奴である。そうであれば、この目付きの悪い青年から、結界に関する何かが得られるかもしれない。打つ手のない今となっては、唯一の頼りかもしれない。
「またまたー照れちゃってー」
「しょうがないなあ、前言撤回して探してみる？」
「……」
「どうせ社も見つからないしねー」
「こっちには銃もあるし、なんとかなるよ！」

……相変わらず、会話は通じていなかったが。
それでも国崎往人を探すという結論は、満足のいくものだったから……黙っておくことにした。

551　幽霊さん？

この島は、悲しみに満ちている。
たくさん、たくさん辛い目にあって、たくさん、たくさん人が死んだ。死体だって、どれほど見たか覚えてられないほどだ。
観月マナは、目の前の死体に手を合わせ祈っていた。
(死だけは、どうにもならないものね)
多くの医療従事者が、諦めとともに漏らす感想を抱いて、開け放してある扉に向かう。何の装備も持たない死体があるということは、誰かが持って行ったか、どこか別のところに……多分、この小屋に……放置したままと言う事だ。
鞄を開き、機関銃と拳銃に目をやってから考え直す。苦笑を浮かべて、念のために拳銃だけを鞄の外ポケットにねじこみ、室内へ入る。
ソファーが二つくっつけてあった。誰かが寝てたらしい。
キッチンへ向かう。食器がたくさん……洗ってある。乾燥棚の底は、まだ水滴が残っていた。数時間前ね、と分析しつつ、思わず苦笑する。こんなときでも、普段どおりに炊事してしまう人もいるんだな、と考えて。箸の数を数え、それなりの人数がここを利用してたと推理する。食料はあまり残っていない。利用者が持って行ったのだろう。
(国崎さんは……ここにいたかしら？)
求める人物の手掛かりを探して、階段を上る。
きらり、と何かが光った気がして。
階段を上りきって、廊下を曲がろうとした瞬間だったろうか、くるりと視界が回転し、床が目前に迫

っていた。
脚を払われ、同時に首根っこをつかまれたまま床に叩きつけられていた。マナはそのまま、背中に圧倒的な殺気を注がれ、恐怖を遥かに通り越し、硬直していた。
(もう、こんな化け物しか残っていないのかしら?)
そう思うのと同時に、あっさりと殺気は消え、首の戒めから開放された。
(解んないひとだわ……)
目の前で平謝りして、小さくなっている女性。これが先ほどの、化け物じみた殺気を発していた人物と、本当に同じ人物なのだろうか?
「で……あなた、誰?」
気を取り直して、若干態度大きめに聞いてみる。
「柏木……千鶴、です」
しゅんとして、黒髪の女性が答える。
「……はあ?」
柏木千鶴は、先ほどの死亡者放送で聞いた名だ。生存している柏木は耕一と、初音だったと思う。
「初音さんじゃなくて?」
「はい」
「耕一さんじゃなくて?」
「……はい」
「幽霊さんじゃなくて?」
「……はい」
「じゃあ、なんでよ……」
マナの開いた口は、塞がらなかった。

552　断罪(後編)

「実際は、一部わずかに禁止区域があることを告げなかった俺達も悪かったんだが――」
まあ、それも罪のうちだな、言い訳にはならない。と呟く。

「本当はな、祐介。俺達にあの娘――天野美汐を助ける権限なんてないんだ。例え、ルールとして説明されていない禁止区域に踏み込んだ少女が瀕死になったとしても、我々の救済措置なんてない」
また、煙草をもみ消しながら、三本目の煙草に手を伸ばす。
「血を流して気絶していた彼女を助けたのは、俺の独断だ。だが、俺に出来ることはここまで。これ以上は、問答無用で消去されてしまう。というか、もし気付かれたら今の行動でも――お前を保護したことも含めてだな――俺は用済みとして処理されてしまうだろう。……高槻のように、な」
紫煙が舞う。すでに閉めきられた空間は視界がかすむ程の煙に包まれている。
「高槻は、死んだよ。全員な」
最後にそう付け加える。祐介に、動揺はなかった。高槻が死んだことにも、『全員』という単語にも、反応はしない。
「彼女は、腕の止血をした後、森の中に置いてきた。そうそう他の参加者に見つかることは無いだろうが、それも彼女の運次第だろう。だが、どちらにしろあの少女も――」
生き残ることはできないだろう、と告げる。
「一応、念の為に、これは取っといたがな」
ポリ袋の中に、大量の氷と、手首。
「特殊なポリ袋だ。中はクーラーボックスになっている。この中の氷が溶けることは二、三日はあるまい」
「……」
「このゲーム、日和見でいられる程甘くはないぞ。過去に開かれたゲームでも、同じように反抗した者達がたくさんいた。だが、いずれもすべてたった一人になるまでゲームは続けられた」
……いや、例外は一度だけあったが――と、源一郎。
「だが、それは常人には不可能なことだ。それは、

彼らが皆人並み外れた人間だったからこそ為し得た奇跡だ。だから、お前はここにいろ。そうしていれば安全だ。少なくとも、お前だけは。ここだけは、この禁止区域だけは、俺が絶対の存在だ。俺がここにいる限りは」
なにせ、この施設には俺しかいないのだからな。と自嘲気味に笑いながら——ふう、と、溜息を漏らす。煙も一緒に漏れた。
「ゲームが終われば、遅かれ早かれいずれはバレるだろう。バレたら、死ぬ。俺がな。だが、お前は大丈夫だ。ここにさえいれば。参加者は何をしたってルール無用、バレたところで生き残るために俺を利用したということで受理されるだけだ」
源一郎の、選んだ道だった。
「お前を保護できたのは奇跡に近い。爆弾兼発信機がなかったのだからな。もう、死んでいるかもしれない、とも思った。それは、彰もだがな」
運がよければ、彰もここに迷い込むだろう、とも言った。
「俺がこんなことを言うのは憚られるが……命は粗末にするな」
軽く笑いながら、それでも目は真剣だった。
「……俺が、憎いか？」
「……」
祐介は何も言わない、何も答えない。
「無理にとは言わん。お前にも思うところがあるんだろうからな。お前が自ら選んだ道なら、信じて進む道なら、俺に止める権利はない」
反応こそないが、祐介の視線はずっと叔父の顔に注がれていた。
ただし、どこか遠くを見ているように、その瞳には何も映していないようにも感じられる。
それほど、祐介は無表情だった。
「俺にできることは、ここまでだ。あとは、自分で考えて、自分で決めろ」
再び机に向かいなおし、何らかの書類に筆を走ら

せはじめた。
　それを最後に、あたりを沈黙が包みこんだ。
　僕は、必ず天野さんを守ろうと、決めた。
　だけど、手首だけの天野さんが、僕に優しく笑いかける。

　　ソレハゲンジツ――

　守れなかった。
　今、僕はここにいる。こんな場所にいる。
　瑠璃子さんが言った。

――長瀬ちゃん、才能あるよ。
　僕に、そんな才能はないよ。
――でも、来てくれたじゃない。

　ドコニ？

　僕に、電波は感じられないよ。
　ここに来たのだって、偶然だったんだ。

　ココッテドコダ？

――偶然でも、来てくれたから、
　きっと通じてたんだよ。

　僕に……そんな力はないよ。
――あるよ、長瀬ちゃんには。
　とびっきりの強い力が。
　瑠璃子さんが、僕に何かを手渡した。
　僕の、新型爆弾。体中を電波が駆け巡る。

ソレガ――ゲンジツ

沙織ちゃんが言った。

――本当は、みんな狂っているのかもしれないね。
退屈な日常に。
もう、先が見えちゃってるじゃない？
学校行って、卒業して、
就職して、働いて……。
みんな、刺激を求めているのかもしれない。
狂っては、癒して、狂っては癒して。
その繰り返し。
退屈な現実から、何かの刺激を求めて。

ソレガ――ゲンジツ

彰兄ちゃんが言った。

――日常は、そこを日常なのだと思えば、
きっと、そこが日常なんだ。

この島の現実。みんな、刺激を求めているのかもしれない。

狂わないように、退屈な日常から、逸脱した狂ったゲームを。天野さんも、彰兄ちゃんも、非日常の中に刺激を求めて、日常に変えた。

魂が、癒される。

体内を駆け巡る、電波で。

たいくつで、つまらなくて、それでも、優しかった日常、そして、島と心の狂気の狭間で、ボクハユレル。

天野さんが言った。手首のない天野さんが、手首になった天野さんが言った。

——私は長瀬さんを信じます。
今度こそ、最後まで……
——私は長瀬さんを信じます。
今度こそ、最後まで……
——私は長瀬さんを信じます。
今度こそ、最後まで……

ソレガ——ゲンジツ。
それが、現実だ。

ゆらりと、祐介の体が揺れた。ゆっくりと立ち上がる。
「……」
「やはり、行くのか。祐介」
源一郎は、机に向かったそのままの姿勢で呟く。
「自分で決めたなら、そうするといい」
どんな表情をしているかは分からない。だが、軽く溜息をつきながら。
「本当は、生きていてほしい。祐介、何かあったらいつでもここに来い。もちろん一人でな。……待っている」
再び、もう何本目か分からない煙草に火をつけた。
「ふぅ！……煙草は、死んでもやめられんな」
祐介が、叔父の真後ろに立つ。
「……それが、お前の答えか？」
源一郎の首に、巻きつけられた細いワイア。
斬鋼線とも呼ばれる糸。
「……」
「俺の……罪だからな。ケリをつけなきゃならない罪だ。いつか誰かに裁かれるのだと思ってた。それが、お前なら俺は何も文句は言わんさ。ただな……」
すっ……と源一郎が息を吸った。煙草の火種が、一際明るく輝く。
グッ……ほぼ同時に、首に糸が食い込む。血が、垂れた。

「お前は、死ぬな。泥をすすってでも生き延びろ。たとえ、つらくても……な。身勝手かも知れないが、それが――」

俺の願いだ。

吐き出された紫煙と共に、鮮血が、舞った。

祐介が、目の前のピンと張られたワイアを見つめている。

それとも、その先のどこか遠くを。

張られた糸の真ん中から、付着した血が小さな玉を作って。

血溜まりに一つの雫が跳ねて落ちた。その音が、ひどく切なく響いた。

燃える施設。

地面の墓石の横、地下への入り口から煙が立ち昇る。

その中から一人の少年。

無表情、そのままに。煙たさも見せず、咳き込みもせずに。

手には、銀色のワイアと氷詰めの手首。

「……」

あたりを見渡す。

特に何もない、特に感慨はない。

傍から見れば、そんな表情にもみえた。

あるいは、あまりの悲しみに何も感じられなかったのか。

一度、手の中にある氷漬けの手首を見つめて。

ゆっくりと、歩き出す。どこかに向かって。

地下から黒煙が立ち上り、やがて消えた。

553　残された者達

――遅い。

男性のトイレが長い理由など知るよしも無い（知りたくもない）が、それでもこれだけ遅いのはどう

いうことか。
三十分は経っているかもしれない。
しょうがない。そう呟いて、七瀬留美は外へ続くドアを開けた。

それから十分。
市街地の中を走り回る姿。
探し求める姿。
だが、探せどもその姿は見つからず。
――そう、耕一は何処かへ行ったのだ。
三人を置いて。
「あのバカ……！」
走りながら、ぼやいた。
どうやら、耕一は「バカ」と認識されたらしい。
しかしそれは、同時に、慣れてきたということか。
そう。
浩平もそうだったのだから――。

その後もしばらく探し続けたものの、見つかる事は無かった。
はぁ、と深く溜息を付くと、とりあえず二人の所へ帰る事にした。
ドアを開く。
出迎えたのは――
「留美お姉ちゃんっ！」
と、悲痛な初音の声。
彼女は、その顔を涙でぐしゃぐしゃにしていた。
「彰お兄ちゃん見なかった⁉」
「彰くん……？　今、寝てるところなんじゃ」
「違うの――」
息を吸い込む。時折、しゃくり上げながら。
「居なくなっちゃったの……私が、寝てた間にっ」
「……彰くんも？」
何て奴らだ。あの二人は、この守られるべき乙女達を置き去りにして行ったのだ。なんて自分勝手な奴ら。

「……耕一お兄ちゃん、も？」
はっ、とした声。
失言だった。
……だが、もう仕方ないか。
七瀬は開き直る事にした。
「そうよ。どうもおかしいと思ったら、彰くんと一緒にどっか行ったみたいね、あのバカ」
「……」
耕一と、彰。
何の為に出て行ったなんて答えは、彰の行動を思えば考えるまでもなく分かる。
初音はそれなりに頭の回転が速かった。
落ち着いていた。自分でも不思議なくらいに。
少なくとも、「バカはいくらなんでもひどい」と考えられるくらいには。
耕一は、彰を止めようとしたのだろう。ならば、どうして彼らは今ここにいないのか？
答えは簡単だ。
決意した彰を耕一は引き留める事は出来なかったのだろう。ならば、耕一は少しでも負担を少なくしようと――
耕一お兄ちゃんは、優しいからね。
そんな事を思った。
「探そう」
「へっ？」
初音の呟きに、忌々しげにぼやいていた七瀬が頓狂な声を上げた。
「探そう――ほっといたら、彰お兄ちゃん、死んじゃうよ」
「――」
七瀬留美は思い出す、自分と同じ名字の男の怪我の状態を。
幸いにも、見た目の凄さとは裏腹に怪我自体は比較的大した事は無かった。
生活に支障が出るような傷も、無い。
だが、あまりにも失血が酷い状態だった。

ここに来てからそう間も経っていない。体力が回復しているはずがない。
その状態で出ていった――
なるほど。死ぬ気に違いない。
ならば尚更、耕一の行動は怨めしい。
何故、止めなかった？
――ったく、バカね。
そんな風に思った。
「でも、どうするの？　いくらなんでも、葉子さんは動かせないわ」
「……うん」
後ろのドアを見やる。あの奥では、葉子が休息を得ている筈だ。
腹を撃たれた。場合によっては、死に至る危険性もある。無闇に動かせば、傷が悪化する。
しかし。
目覚めて、一人だったとしたら彼女はどうするだろう？
眠りに落ちる前の行動を思い起こす。
慌てて起き上がろうとした――
起きて再びそれを行わない理由は無い。
……どうする？
「――葉子さんが起きるまでは、ここを動けないわね」
「そんな！」
悲痛な声。何と痛々しげな表情。
決して間違ったことを言ってるつもりはないのに、悪い事をした気分にされる。
直接非難してくれたほうが、幾分も気分は楽だろうに、と思わせるほど。
「あいつらだって考え無しに行動しないでしょ。あの、バ――ああ、いや、耕一さんもいるしね」
「――」
「……ここは、お兄さんを信じてあげましょ、ね？」
そう、優しく説き伏せる姿は、まさしく乙女。

——あたし、良い保母さんになれるわね。
内心はこれであったが。
乙女の道は、遠い。

554　戦場デート

久々に見た太陽に、心が洗われる気がした。
耳に届く森のざわめき。
枝葉の間から暖かい太陽の光が漏れて、僕らを照らしつづけていた。
太陽というものはいいもんだ。
心を明るくさせる。
そして今、俺、北川潤の隣には女の子という太陽がいるのだ！　もちろん俺の心は明るく、新しい希望に満ちあふれているのである。
こんな状態ではパソコンもＣＤも戦場のコトも、なにもかも忘れしまいそうになる。
ある意味この状態ってデートだよな。
そんな風にも思うようになっていた。
「ジュン、きもちいーね」
レミィはとびっきりの笑顔で言った。
「あぁ、そうだな」
俺はそっけなく答える。
「もっとちゃんと答えたほうがイイヨ。そのほうが女の子、喜ぶよ」
自分の顔と俺の顔の間に人指し指を立ててレミィは言った。
それなら今度はもっとちゃんと答えてやるかな。
そんな風に考えながら、足を進める。
ふと浮かぶ疑問。
レミィは俺のことをどう思っているのだろうか？
「はやく、ジュン！」
考えていると、少し歩くスピードが落ちていたようだ。十メートルほど前で、レミィが俺に向かって手招きをしていた。

俺は軽く小走りで追いつく。
「行こうか、レミィ」
「うん」
また、レミィは笑顔。
そしてその笑顔はとてもかわいい。
俺たちは一緒に一歩を踏み出した。
パキッという音が鳴った。
「え……」
横に居た筈のレミィは居ない。
地面を観るとそこに伏していた。
パンツの色は白と黄色のストライプ。
それをすかさず俺は脳内メモリに格納した。
「大丈夫か？」
しゃがみこんで、レミィに向かって手を伸ばす。
「イタタ、チョットすりむいちゃったよ……」
「お前、よく何も無いとこで転げられるな」
「すごいでしょ？」
「あまりすごいとは言えないな」

そんなやり取りの後、二人で笑った。
太陽は相変わらず僕らを照らしつづけていた。
俺はこのときレミィのポケットの中で起こった重大な事件について知る由もなかった。
俺の頭の中では、未だに白と黄色のストライプが何度もリピートされていた。

555　死神を連れて

「──」
「──」
沈黙。
国崎往人（三十三番）は、口を開く事も無く、大きめの石の上に腰掛けていた。近くに居る三人は、皆、腰を下ろした状態で止まっている。
しかしその間を巡るのは、殺意、畏れ、疑念──
その渦中に居る少女──里村茜（四十三番）は、のらりくらりと風を浴びている。

あれからどれくらい経ったことか。
茜の右手には、コルトガバメントが。
晴子の右手には、シグ・ザウエルショート９㎜が。
そして、往人の手にはデザートイーグルが握られていた。
もし。
誰かが、己の獲物を持ち上げたなら——
恐らく、放たれる弾丸の数は一つではあるまい。
また、それに奪われる命も——
一つではあるまい。
完全な膠着状態。
複雑に凝り固まったパズルの中に、彼はいた。
二言三言、話をした。
茜の経緯——あれから、何があったか、など。
自分の経緯——神尾親子と出会った時の事、など。
その話の中で、彼女は。
氷上シュン、彼の死を知った。
自分が撃った相手の死。

その反応は。
「そうですか」
と一言だけ。
それでも。
その顔が、一瞬だけ悲痛に歪むのが解った。
——彼の願いは、叶ったのだろうか？
知る由も無い。

茜は、この状況を楽しんでいるわけではない。
むしろ不快に思う。
出来れば、誰にも会う事無く済ませたかった。
だが、物事はそう上手くは運ばないものだと、彼女は知っている。
（……それにしても、祐一は遅いです）
あの後、教会で何があったか分からない。
「誰」から「誰」を助けるのかも知らない。
それでも。
何も聞かなかった。

必ず帰ってくると思っている。
ヘタレだが、約束は守る男だ。遅くとも。
いや、待て。
そもそも約束なんてしただろうか？
そう言えば、そんな事を口にした覚えは無い。
（……しておけば、良かったかもしれません）
そんな事を思い——少しだけ、目を閉じる。
やがて、ゆっくりと目を開けた茜は静かに立ち上がった。
晴子は、すぐさま銃を構える。
躊躇いは無い。この子を守る為なら。
……その為に、怯えられようとも。例え、嫌われようとも。
「大丈夫です……何もしません」
「……信用出来んわ」
晴子は言い放つ。
しかし茜は臆せず、自分の鞄に銃をしまい込んだ。
他に武器は見当たらない。

それでも。
「人を——待ってるんです」
踵を返す。
「ここで、のんびりしてるわけにはいきませんから」
「呑気なもんやな。後ろからブチ抜かれるかもしれへんのにか？」
「撃てませんよ、貴女には」
冷ややかに、茜。
少しだけ振り向いた顔から見える瞳は、冷たく。
「なっ……」
「守る者があるから、撃つ。それと同時に、守る者があるから、撃てないんです」
晴子は隣を見た。
自分の娘が——観鈴が——晴子を見ていた。
僅かに塗れた瞳に映る、自分の顔。
恐ろしい。これが自分の顔か。
「お母さん……」

願うような呟き。
――殺さないで、お願い――
目が、そう語りかけているようで。
「くっ……」
敢え無く、銃を下ろす。
それを見届け、茜は前を見た。
森へ。
帰ってくるだろう人を、待つために。
「それでは」
「……ちょっと待て」
後ろから、声。
男の声。
振り向けば――デザートイーグルの銃口が、己の額を捉えていた。
（今日はよく銃を向けられる日ですね……）
そんな事を思い、息を吐く。
「勝手に行かれると困る。その待っている人とやらと襲ってこられたらやっかいだからな」
「――じゃあ、どうするんです？」
彼の言ってることは正論だ。
茜自身でもそう思う。
信じてくれ、なんて〝人殺し〟が言ったとして誰が信用するだろうか？
――往人の出した提案は、極めて単純であった。
「俺達と一緒に行動してもらう」
「……本気ですか？」
「かなり本気だ」
「居候――マジで言うとるんか」
晴子は、半ば呆れた様子だった。
何を言うかと思ったら、それか？　――といった感じだろうか。
「こいつが誰かを狙うにしろ、後ろに俺達が居ればそれも出来ないだろ」
「でも、もしウチらを襲ってきたらどうするんや？」
晴子はいらいらしながら言った。

そうなった場合、一番危険なのは自分の娘である観鈴なのだ。かわいそうに、観鈴は銃口を向けられた恐怖にまだ震えていた。

「その時は――死んで貰う。だが、まさかそんな危険な賭けにはでないだろうが……で、どうする？」

問い掛ける。

無論、選択権は無い――向けられたデザートイーグルの銃口が、そう語っていた。

溜息一つ。今度は、酷く長く。

返事の代わりに、再び自分の居た場所に戻った。

556　その選択が示すもの

それは、弥生が喫茶店から出たばかりの時のこと。

「なんだか……重たいですね、少し整理しておいたほうがいいでしょう」

あの二人の思い出を作っておいた所。そこにおいておくわけには行かないが、火器が多すぎて、逆に体力を浪費するのは不利だ、という判断は適切だった。

いったん軽装備で拠点を確保すべきと判断した弥生は、もうひとつ、慎重だが、誤った選択をしてしまった。弾の節約を考え、武器を今までの経験から選ぶことにした……一つはエアガンだったにもかかわらず。

その選択が示すもの、それが、運の尽き。

557　影の世界へ

もしも、この大きな木に登ったなら。

二階の窓から、なんだか間の抜けた、滑稽な様子を見ることができる。ベッドに腰掛けた子供が腕を組んで、成人女性を詰問する姿が、そこにある。

「じゃあ、なんでよ……」

ぽかんと口を開けて、思考を停止しかけるマナに、千鶴は答えた。

監視のこと。発信機のこと。爆弾のこと。死亡放送のこと。耕一と七瀬、そして初音のこと。
「ふ、ふーん……」
マナ自身も、高槻の所在を予測するにあたり、管理体制を考察したことがある。無線の隠しカメラと、その情報を集めて送る送信施設の存在。そう考えた。
しかし、この部屋ひとつに関しても、死角なくチェックすることはやはり不可能だ。それに発見されれば壊されてしまうだろうから、どうしているのだろうとは思っていた。
「衛星、ねえ……」
ちょっと話が馬鹿馬鹿しく大きい。このゲーム自体、そうなのだが……宇宙スケールとは……。
ひとしきり感心した後、なんとなく立ち上がり、上を向いて考えてみる。
「……ま、関係ないけどね」
結論は、実にあっさりとしたものだった。
「あたしは、もう誰かと戦う気もないし。高槻を倒そうと思ったこともあるけど……結局追い出されちゃった下っ端でしょ。それに今、あたしが吐いたら……不自然だもの」
そうでしょう？　と確認するようにマナは言った。
なるほどこの娘は頭がいい、千鶴は感心しながら答える。
「……そうですね、せめて相打ちの形をとらないと」
管理の抜け道を通る条件を、二人で確認してみる。
全てを確認した、そう思ったところでマナが鞄を手にする。
「それじゃ、先に行くわ」
「……はい」
そうだ。
自分は、この少女と同行するわけにはいかない。行けば、遠からず衛星に発見されるだろう。この少女に限らず、全ての生存者と同行することはかなわない。

……少なくとも、日の当たる場所では。
戸口を出ると、マナは振り向かず天を見つめて言う。
「それじゃ、行くから。耕一さんと七瀬さん、それに初音さんに会ったら無事を伝えておくわ」
「はい、お願いします」
「だから……あなたも頑張ってね。わたしの分も、お願いするわ」
「……はい」
機関銃（これが〝わたしの分〟らしい）を手に、千鶴は頷いた。
何のために、管理システムを欺いたのか。それは、もちろん管理側と対決するためだ。他に何の利点があるだろう？
脱出にせよ。
打倒するにせよ。
千鶴達は、三人だけで戦う他に道はない。光の世界を避けるように、影の世界を行く他に道はない。

……それは覚悟していたことだが、やはり辛いことかもしれない。
帰路を考えても、時間はまだ余裕がある。
それでも、なんとなく寂しくなって、千鶴は駆け足で学校に舞い戻った。

そのころ教室の一角に、巨大なバリケードが築かれていた。扉を封鎖するように積まれた机が、まもなく天井まで達しようとしている。
「梓さん、ボク疲れたよぅ……」
「これで最後だから頑張れって……よっ……と」
これでひと安心だろ、そう言って梓は床に座り込む。それに習って、あゆもぺたんと座る。
「千鶴姉、遅いなあ」
「そうだね……」
二人で時計を眺める。

そのとき、あゆのお腹がくーと鳴った。
「ははっ、あゆってホントに食いしん坊なんだな」
「うぐぅ……」
梓は笑って、恥ずかしそうに縮こまるあゆの頭を、くしゃくしゃと撫でた。
「まあ最近、なんだかんだでマトモなもん食ってるしね。初音の料理も、なかなか上手いもんなんだよ」
「へぇー……」
それを受けて、あゆは驚くべき一言を発する。
「ボク、千鶴さんの料理も食べてみたいなっ！」
「……」
「？」
完全な空白が、そこにあった。
「……あー……アタシ、ちょっと寝るわ」
「えっ？」
あゆに背を向けて、ごろんと寝転ぶ梓。
「お、おいしいんじゃないのっ？」
「うん、そう思っていればいいよ。じゃあ、おやすみ……くー」
「え、えっ、そう思っていればいいよって、なにっ？」
「くー」
「気になるよう……梓さんっ、梓さんっ……」

その半時後。
扉を開くなり押し寄せる机のために、あやうく下敷きにされかけた千鶴が、半ば殺意を秘めて梓を叩き起こした頃。
あゆは二度と千鶴の料理を食べたいなどと、言わないようになっていた。
……あゆは知っていた。
ちゃんと食べれるものを使っても、謎なものになる場合がある事を。

558　いつでも笑みを

小さな溜息がどちらともなく漏れる。柏木耕一と七瀬彰は少しだけ途方に暮れながら、恐らく殆ど同時に溜息を吐いた。
「どうやって行こうか」
言ったのは耕一だった。やるべきことは判っているる。終わりに向けてまっすぐ進めばいいのだ。だが自分たちは風ではない。思考する力がある人間だ。最良の道を決めて歩かなければいけない。長瀬一族と戦うための最短の手段を見つける必要がある。
「目星をつけなくちゃな」
「ええ」
そう答えたところで彰の身体がふらつく。当然だ。凄まじい怪我をしているくせに、ほんの僅かの睡眠しか摂っていないのだ。
「大丈夫か？」
「大丈夫です」
言う彰の顔はとても大丈夫には見えなかった。白くはないが青い。血の気の引いた顔の真ん中にある眼差しだけがやけにぎらぎらとしている。
「やっぱり休んでいこう」
「大丈夫ですよ！」
耕一の口調に多少なり腹を立てたのだろう、彰はムキになって反論する。色の悪くなった唇を震わせて言う彰を、赤子を宥めるような調子で笑い、耕一は言う。
「別に君のためじゃない。これからどうするかを考えなくちゃいけないだろ。ちょうどいい機会だよ」
「――でも」
何か言いたげな彰を制し、
「格好付けるなよ。満身創痍で、無理をして戦って、それで死んだら格好良いとでも思ってるのか？　映画やなんかのハードボイルドが、血を流して戦う姿は、確かに格好良いよ。けどさ、今、俺達に必要な

のは格好悪くたって生き延びることだ。よく考えて動かなくちゃな」
　早口で一気に捲し上げると、彰は何も言えなくなってしまった。勝った、とばかりに笑顔を見せ、強引に彰の腕を引いて木陰に近づく。
「ほら、そこの木陰で休もう」
　彰からはその後何の抵抗もなく、結局二人は並んで木陰に座ることになる。涼しげな風が時たま吹く場所だった。

「主催者がこの島の周辺にいる。これが大前提だ。そうじゃなけりゃ俺達にはどうしようもない」
　南に向けて昇り始めた太陽が眩く輝いている。木陰に座り込むと、耕一はゆっくり喋り出した。
「……叔父さん達は、必ずこの島の周辺にいる筈だ」
　耕一の言葉に、淡々とした口調で彰はそう答えた。断言だった。小さく息を吐いて空を見上げる七瀬彰を見ながら耕一は首を傾げる。
「どうして判る？　この島にいるのは高槻のような下っ端だけで主催者は居ない可能性の方が高いんじゃないか？」
　彰は笑い、
「高槻は死んだでしょう？　誰かが監視役をしなければならない。高槻以下の人間にそれを任せるのは論外だ。高槻がいなくなった今、叔父さん達がしっかりと監視しなくちゃこのゲームが破綻することは目に見えている。だから今、監視は叔父さん達がやっていると僕は思う」
「ふむ……」
　一理はある。下っ端の人間に任せっきりでは、現在の〈管理者―参加者〉の危うくなったバランスを支えきれるかは確かに怪しいものだ。彰は続ける、
「僕は先程、爆弾管制の装置を破壊した。他にも管制装置があるかも知れないけれど、僕が管制装置を破壊した直後に『爆弾は解除した』という放送が流

れた。これは、大本の管制装置が一つしかなかった、ということを示唆しているように思えませんか？　だとしたら僕たちは爆弾には脅えずにいつでも逃げられる。それこそ泳いでだってね。そんな僕たちを止めるために、叔父さんたちはこの島の近辺にいる必要がある」

　熱に浮かされた表情で彰は喋る。耕一は吸い込まれるような感じでその言葉に集中する。

「――上空から監視して、脱走者を見つける、ということは可能じゃないかな？　その処理を下っ端に任せて……とかは考えられると思う」

「上空から監視というのは、なんだか馬鹿げた事だと思いませんか？　『鑑賞』ならともかく『監視』なんだ。確実性があるとは思えない。迅速な指示を出すためにはこの島の近くにいなくてはね」

　その時ふとアイディアが耕一の頭に浮かぶ。その意見が彰にどんな影響を齎すかも考えず、あっさりと言葉にする。

「けどさ。そもそもの問題としてこういうことも考えられるんじゃないか？　こうすれば上空からの監視も充分確実性を持つだろう。体内の爆弾に発信機をつけておく。そうすれば、」

　その時彰は、恋人との大切な約束を思い出したような、そんな奇妙な顔をした。

「そうだ――あの時は頭がおかしくなってたから気にも留めなかったけど」

　彰の思考が一気に活性化する。意味を考えろ。まだ自分が生きていることとの意味を。

　あの爆弾管制施設での死闘の中で、自分の身体が爆弾で吹き飛ばなかった理由を考えろ。血の気の足りない頭で必死に考える。思念を言葉にする。

「そうですよ、爆弾に発信機が備えられていれば確実なんです、それだけで全部が全部解決する」

「だろ？」

「けど、それじゃあおかしいんです！　それならど

うして僕は生きているんですか？」
「え？」
「僕は爆弾管理者だった高槻のいた施設で戦ってきた。もしも発信機が爆弾の中に入っているなら、僕は施設に入る前に爆弾で粉々になっていた筈なんです！」
「――それは、」
「そう、絶対に発信機は爆弾に備え付けられている。僕が主催者なら間違いなくそうする。けれど、それならどうして僕はまだ爆死していないんですか？」
彰は頭に浮かんだことを全て言葉にして考える。そして思い出す。あの施設の屋上で、高槻は確かに自分に向けて爆弾爆破のトリガーを引いた。なのに自分は生きている。その事実を思い出し、やがて自分がまだ生きていることの重大な意味に気付いて、彰は小さく息を吐く。
「――僕は、最初から死んでいたのか？」

耕一は真剣な眼差しで何かを考える彰を見ながら、今の彼の言葉を反芻する。
「最初から、死んでいた？」
「あ、いや、こっちの話です」
それっきり彰は黙る。黙って考えている彰を見ながら、耕一も同じように考える。
爆弾に発信機が付いているとすると、彰が爆死していないことは確かに矛盾だ。だからと言って発信機を付けないメリットが思いつかない。
やがて彰がゆっくりと口を開く。
「恐らく、爆弾には生死判定装置もついているんだろうな……。バトロワの首輪と一緒の機能だ」
耕一は小さく唇を噛みながら彰の声を聴く。
「主催者が僕たちの身体の中に爆弾を入れていたのは多分間違いありません。そしてその爆弾には、現在位置を捕捉するセンサーと生死判定装置が備わっていると考えられます。体内に仕込んでおいて吐いたら爆発する、というような設定にしておくといい

んだ。僕達は主催者にあらゆる情報を吐き出してい
た。もしかしたら盗聴器もついているかも知れませ
んが、胃の中からでは音がくぐもってよく聞こえな
いでしょう」
　彰は続ける。
「そう考えると色々な事が想像できる。例えば僕
は爆破を操作する装置を破壊した。結果、吐いて
も、爆弾は爆発しなくなったと思う。どうなります
か？」
「死んだ事になる、な」
「それで管理者に捕捉されることなく行動が出来る
ようになる。今の時点では爆破管制装置がなくなっ
たことは僕と他数人しか知らないけれど、もしも全
員にこの情報が伝われば、僕達は勝てる」
　彰はゆっくりと立ち上がる。行きましょう、と耕
一に声を掛け、小さく目を閉じる。
「けど、今すぐ爆弾を吐くことは少し躊躇われます。
下手をしたら僕達の死亡放送が流れて、初音ちゃん
たちを混乱させてしまうかもしれないから」
　耕一は頷く。
「――一旦戻るか？」
　自分達の行動が主催者側に読まれたまま、という
のは戦うに当たっては不利だ。
「戻ったら、今度こそ彼女達に止められてしまう。
それでは意味が無い。行動を読まれることは不安で
すが、今は時間が惜しい」
　彰は目を開いて耕一の顔を覗き込んだ。耕一はゆ
っくりと立ち上がり、
「最短の道は考えても仕方がないな。もしかしたら
主催者はこの島にはいないかも知れないが、それで
も動き出さなければいけない」
　そう言った。
「――きっと、います」
　彰が小さく囁いた声を耕一は聞き逃さなかったが、
追及はしなかった。きっと何かの確信と共に彰はそ
う囁いたのに違いないのだから。

彰はフランク長瀬の顔を思い出している。無口だけれど優しくて大きな叔父のことを。
高槻と対峙した時、確かにあいつは自分の中の爆弾を爆破させた筈だ。なのに自分は死ななかった。ここから導き出される結論は一つ。
――自分の体内には、最初から爆弾など入っていなかったという事なのだ。とどのつまり、自分は最初から死人扱いだったのだ。
何故自分にだけは爆弾が入っていなかったのか？考える。自分に何をして欲しくて爆弾を入れなかったのか。歩きながら彰は考える。
そんなこと判りきっている。考えるまでも無かった。彼らは自分に殺されたがっているのだ。
このどうしようもなくくだらない戦いを終わらせてもらいたいのだ。他でもない自分に、その責任を負わせたのだ。同じ長瀬一族の自分に、全ての後始末を押し付けたのだ。もしかしたら長瀬祐介にも爆弾は入っていないかもしれない。
殺されたがっている奴らが、この島の近くにいない訳がないのだ。
フランク長瀬の顔を思い出す。無口だけれど優しくて大きな、けれど間違ってしまった叔父のことを。
彰は、せめて彼らを楽に殺してやろうと思う。

559 郷愁

「全く……どうしてこう無茶をするのかしらね？」
あきれたように郁未は言った。
――再会の瞬間は、ひどく滑稽だった。
「……凄い格好ね」
「君のほうが凄い格好だよ」
思い出したかのように郁未は体を見回す。……郁未は自分がマニア受けしそうな格好のままであるこ

とを思い出した。
「い、い、いろいろあったのよ！」
「いや、それにしてもその格好は――」
「し、し、仕方ないじゃないのよ！　人助けよ人助け！」
「どういう人助けなんだか――」
「だって放っておいたらあっちの方が私よりずっと悲惨――」
　そこまで言って、郁未はハッ、と思い出した。ブルマの上からスカートを履いている耕一の無残な姿を。しかしそんな郁未にも予想出来てはいなかった。
――まさか今ごろ耕一がコスプレさせられる羽目に陥っていようとは。
　もちろん如何に少年の卓抜した洞察力を以ってしてもそんなことを見通せるわけは無い。
「てっきり露出狂の気があるのかと――」
「何であなたがそんなこと知ってるのよ!?」
「――え？」

　結局、恥ずかしい思いをしたのは郁未だけだった。
　紅い顔をしながら、郁未は少年の髪を拭う。服に染み込んだ血は拭えないが、せめて顔と髪だけでも、そう思って。
「それで？　結局何がどうなってたのよ」
「……潜水艦が在った」
「はあ？」
「地下の空洞に、潜水艦の停泊場所があった」
「えーっと、それって……」
　郁未はちょっと顎に手を当てて考える。
「ちょっと!!　それって凄いことなんじゃないの？」
「まあね」
「やったじゃない！　それがあればこの島から簡単に脱出――って、ダメか。どうせ敵の人間がいっぱい乗っている、っていうオチなんでしょうね」
「……いや」

「え、乗ってなかったの？」
「……乗っていた」
「じゃ、ダメじゃない」
「……もう、乗っていない」
「……何で？」
「……」
「……まさか全員殺したなんて言わないでしょうね」
「……言い訳はしない、確かに乗員五人は全員息絶えた。結局僕は偽善すら最後まで守ることが出来なかったわけか――」
悟りきった表情で自嘲する少年。瞬間、ごすっといい音を立てて郁未の鉄拳が少年に炸裂した。胡坐をかいたまま少年は横にぶっ倒れた。
「そんなことを聞いてるんじゃないの!! 状況を正確に描写しないと殴るわＹＯ！」
「あ……あのぅ郁未さん……もう何か痛いんですけど……」

拳に肩を怒らせて目から光を発する郁未を前に、少年は小動物のようにガクガクブルブル震えている。
「さあ包み隠さず話しなさい！ 都合のいい自虐史観はお腹いっぱいよ！」
「いやそれは何か違」
「フーーーーッ!!」
威嚇をする猫のように全身の毛を逆立てた郁未が睨みをきかせる。もちろん、少年に逆らうべくも無い。小一時間、少年は要所要所にツッコミを入れられながらその全容を自白させられた。
話が終わって、一番最初の郁未の行動は深い溜め息だった。
「なんだ、殺ってないんじゃない。興醒めね」
「いや郁未さんその不穏当な言葉遣いは流石にどうにかならないかと思うのですが」
「シャラップ！」
座り込んだ少年の目の前に伸ばした人差し指を突きつけ、そのままずずいと郁未は彼の眼前に接近す

る。
「殺ってないものは殺ってないの。いくら武勲が欲しいって言ったって、そういうところで誤魔化しをしちゃいけないわ」
「僕は……」
少年はそれを聞いて一瞬口ごもる。
「僕は、そんなもの欲しくなんか無い。そんなものに価値は無い。殺人の数をカウントしてそれを成績にするなんて悪趣味は——」
差し出された人差し指が、少年の唇にちょん、と触る。
「だから——」
彼女はにっ、と笑って言った。
「撃墜数ゼロの落ち零れ、こんなところでも人一人殺せなかった甘いヤツ。……ねっ、そうなんでしょ？」
揺り籠のように包み込む優しい響きが、少年の動きを止める。
「いいじゃない、それで」
膝立ちの前かがみで少年の口を塞いだまま、郁未は囁く。
「どんなに力があったって、使えなければ……使わなければ……一緒だよ」
——それが、幸せなことだって、気付いて。
少年はそっと彼女の指を触る。唇の戒めを解いて、言った。
「——そうだね」
頬に掛かっていた血の痕が落ちて、綺麗な顔になった少年がそこにはいた。

560　独白

……あの時。
どうしてあんな事を言ってしまったのだろう？
どうして黙って引き金を引けなかったのだろう？

わたしの大切な人達……わたしの居場所と信じていたお兄ちゃん達の側。だけど、お兄ちゃん達は行ってしまった。
お兄ちゃん達はこの戦いに決着をつけに、その戦いには私は邪魔でしかなくて。
待っていよう、二人の帰りを。
それがベスト。
……けど、
もし、お兄ちゃん達が帰ってこなかったら？
あの酷い怪我だ、その可能性は十分に有り得る。
その時は——わたしの居場所はどこに残っているのだろう？
初音は、居場所を失ったという少女の事を思い出していた。
わたしもああなるのだろうか？
——そうなるくらいなら。
初音は手にした銃を構える。

狙うのは、倒れている少女。
「何をする気!?」
「こうすれば……もう、ここに居る理由もないっ！　早く耕一お兄ちゃんと彰お兄……彰さんを助けに行くの！　もう、大切な人を失いたくないの！」
「止めなさい！」
「じゃあ、行かせてくれるの!?」
「あなたが葉子さんを殺して、あなたの大切な人が喜ぶとでも思うの!?　あのバカ達は、あんたの日常を取り戻すために出て行ったんでしょうが！　そんなことも分からないあんたじゃないでしょ！」
自分の意見をこの場に居ない他人を利用して主張する。七瀬はそういう論法はあんまり好きじゃなかったが、なりふり構ってはいられない。彼らがこんなことを望んでないことは確かなのだ。
その証拠に大分冷静さを取り戻してきたのだろう初音は、逆に動揺を隠せない様子だった。

「……わ、わたし……こんな……」
　自分のとった行動が信じられないのだろう、初音はぶるぶると震えている。手にした銃を取り落とした。
　目には大粒の涙。
「ごめんなさいっ……ごめんなさいっ……わたし、わたしっ……」
　床に頽れる初音。
　そんな初音を七瀬は優しく抱きしめた。
「……仕方ないわよ。こんな状況だもの。追い詰められたら、人は判断力が鈍るし現実から逃避したくなったりもする。あたしだってそうだったし」
「……う、うぅ」
　七瀬は人差し指で初音の涙を拭う。だが、次々と溢れてくる涙は止まる様子を見せない。
「そんなふうに泣けるなら、あなたはまだ大丈夫。……そうね、あたしこの周辺を探して誰か信頼できる人を見つけるわ。その人に葉子さんを委ねたら、あたしたちはあのバカ共を探しに行きましょう？」
　そんなことこの島では望むべくもない。そんなことは七瀬にも分かっていた。だから、この提案は初音を落ち着かせるための方便のはずだった。
　……だが、
「……あんたたち。そんな大声で喚いて悠長なことね。外まで丸聞こえだわ。ゲームに乗ったアホが聞いてたらあんたたちの命は無いわよ？」
　現実とは案外都合良くできているものなのかもしれなかった。

561　七瀬と柏木

「……大体の事情は聞いたわ」
　と、ベッドの上に腰をかけた少女――マナと名乗った――は言った。ベッドのサイドテーブルに肘をついている。
「だから、悪いけどこの人をお願いできないかし

ら？」
七瀬からのその言葉を聞いたマナは、深く溜息をついて言った。
「……あんた、何を考えている訳？」
七瀬は、マナのその挑発的な台詞に堪忍袋の緒が何本かはじけ飛ぶのを感じた。
「なっ……！」
(なんて生意気なガキ！)
「だってそうでしょ。身も知らずの私に身動きできない子を預けるなんてさ……無責任にすぎると思わないの？　大体私があんた達を欺いてて葉子さんとやらを殺したら、いったい誰に申し訳する気よ」
まったくの正論に七瀬は言葉を詰まらせる。
「……わたしはあなたを信用します」
口を出したのは意外にも初音だった。
「……どうして？　貴方は自分の都合のためにそう信じこんで言い訳にしようとしているだけじゃないの？」
「……そう、かもしれません。わたしの言ってることはまったくの偽善です。だから……」
そう言って初音は床に落ちたままの銃に向かって歩き、拾う。
突拍子もない行動に七瀬とマナの体が緊張する。
銃を手にした彼女は、マナに向かって歩きだす。
初音はマナの目の前で止まると、銃口を手にして銃をマナの方に差し出した。
「……どういうつもり？」
マナは初音を見上げる。初音の瞳には決意が表れていた。何かを覚悟した表情。マナがこの島で何度も見た表情……。
「もし、あなたが葉子さんを殺すつもりなら、わたしを殺して下さい。抵抗はしませんから」
「初音ちゃん！」
「すみません、七瀬さん。これはわたしの問題なんです。……手出ししないでください」
マナは黙って初音の銃を受け取る。弾倉を空け、

弾が装填されていることを確認し、戻す。
——そして、初音に向けて構える。
ぎゅっと、目を瞑る初音。
七瀬はいつでも飛び出せるように体を緊張させていた。
張りつめた時間が何分にも感じられる。けれど実際は数秒も経っていないはずだ。
「……ばっかみたい」
そう言ってマナは、ベッドの上に銃を投げた。
「いいわ、その葉子さんは私が責任もって看てあげる。あんた達は、そのお兄ちゃん達のところにでも行きなさいよ」
「……ありがとうございます、マナさん」
そう言って初音は微笑んだ。それは、天使のような笑顔だった。
「……無茶するわね、あんた」
七瀬は、緊張から解放された反動に、立ち崩れそうだった。知らぬ間に流れた汗を、上着の袖で拭い去る。制服の汚れが気になったが、もう今更だった。
「……あんた達、名前は？」
「ん、そう言えば名乗って無かったわね。あたしは七瀬留美」
「わたしは、柏木初音です」
「……柏木って、あなた、もしかして柏木千鶴の妹？」
「ええ……今はもういないけど。……お姉ちゃんのこと知ってるんですか？」
「……やっぱり、知らなかったのね。——あなたの姉さん達は死んでないわ」

562　狂乱の鼓動

「先輩っ」
声を掛けられる。ああ、彼女の名前は立川郁美と言って、僕の後輩にあたる女の子だ。同じ部活だから、という偶然の出会い以来、彼女は何故か僕のこ

とを慕ってくれている。
「もう、ちゃんと仕事してくださいよ。次のこみパまでもう日が無いんですからね。印刷所さんに持っていくのが遅れたら先輩のせいですからね」
「分かってるよ、ごめんごめん」
——僕が美術部に入っていたのは単なる気まぐれだった。どうしても入らなくちゃいけないなら、出来るだけ楽そうなものにしようとかそういう浅はかな考えだった。そんな静かな日常が、彼女に出会ってしまったばかりほんの少しねじれてしまったようだ。
「まだまだ精進が足りません！　ブラザー2さんに追いつくには」
彼女と一緒にこういうことを始めたのはもう何ヶ月か前だった。彼女には憧れのサークルがあるらしい。その影響で彼女も本を作る立場へと踏み込んだ。同じ想いを共有できる喜びがそこにはあったのだろう。
——その落書き、かわいいですね。それが彼女の第一声だった。それが漫画を描く事に繋がるなんて予想も付かなかったが、彼女と一緒の作業はそれなりに実になったし、それに楽しかった。それまでの孤独な生活も気に入っていたが、誰かと一緒もいいななんて考えるようにもなった。
「先輩、枠線が曲がってます！　それにここにゴミの消し忘れが！」
「ああ、ゴメンよぉ」
こういうことに関しては彼女が先輩だった。そんなに不器用ではない方だと思っているが、やはり不慣れな作業は難しい。我慢しきれずに僕から筆を取り上げて作業しだす彼女の顔は不思議と楽しげだった。
「もう、ホントしょうがないんだから。先輩はっ」
苦笑いも輝いていた。今までに出来た本は三冊、どれもこれも修羅場だった。その分思い出になった。数を刷るわけではないが、売れなかったらどうしよ

うという不安は尽きなかった。
「全部売れたらいいですねっ」
それが即売会のたびの彼女の口癖だった。いつも惜しいところで数冊売れ残る。僕からしたら大したものだが、その数冊が彼女にとっては大きな壁のようだった。今回の本は、全冊完売の祈りを込めた渾身の一冊だった。
「今度こそ、目標達成です！」
握りこぶしを作り、熱く語る彼女。目には炎が灯っているかのようだ。僕にもその気迫が伝わってくる。
「ああ、そうなるといいね」
本は出来上がり、八月の夏こみに出展した。
結果は完売、最後にして夢は叶った。それが僕らの最後の即売会になった。
――立川郁美、彼女はその結果を見ることなく逝った。
「――心臓ですか」
彼女は僕に病のことを隠していた。電話で連絡を受けた僕は、彼女のお兄さんからそのことを知らされた。僕は彼女のために残していた製本された一冊をお兄さんに渡した。お兄さんはそれを受け取るとありがとう、と言って泣いた。
――彼女の通夜が終わって、また静かな日々が帰ってきた。
何だ、この夢は。僕に一体何をしろと言うんだ。やめてくれ、もう終わったことで僕を苦しめないでくれ。彼女はもういないんだ。いくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみ、目の前で彼女は死んだ。いないんだ、僕が守りたかったあの小さな女の子はもうどこにもいないんだ。いくみはもうどこにもい

ないんだ。
――違うだろ。いくみなら、もう君の傍にいる。え……どういうこと、騙されないよ。また幻視なんだろう。
――もう忘れてしまったのか。君が一番最初にそうしたいと思った同居人のことを。
同居人……。ＦＡＲＧＯ……。クラスＡ……。いく………み？
――感じるだろう。懐かしい、あの匂いを。
いくみ……いくみ……いくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみいくみ――――郁未。
ようやく思い出した人影を追いかけて僕は走る。いくつも扉が現れる。その度に扉を叩き開く。少しずつ影に近づく。扉が現れる。叩いて開く。影に近づく。扉が出る。叩く。近づく。扉。開く。近づく。扉。影。扉。影――

「郁未っ！」
やっとのことで追いついたその彼女の方に手をかける。すると彼女がこちらを振り向く。
――振り向いた彼女の顔は、醜くひしゃげて血に塗れ、もはや誰だかわからない。飛び出した眼球が、虹彩だけでこちらを見つめてくる。潰れた脳髄から滴る液が、ぴちゃりと気持ち悪い音を立てた。
「う………うわあああ！！！！！！！！！」
どくん、と、音が、する。これは、崩壊の、鐘の音、だ。僕、とい、ぅ仮面を、剥が、す、狂気の、鼓動。近寄、ってく、る、足お、と……。
「――――――よ」

声がする。

「―――ボディチェックよ」

僕を繋ぎ留めてくれる鎖、ずっと探していた、本当の郁未の声が。

563　つかの間の平和

「ボディチェックよ」

唐突に郁未はそんな事を言い出した。

「え……」

髪をとかされているときに眠ってしまったのか、少年は突然のセリフに驚きを隠せない。だがそんな彼に郁未は容赦なく――。

「涼しい顔してるけどさ、あんな無茶なことしてたんだったら、どこかに傷を負ってそうなものじゃない？」

そう言って、少年の服に手を掛ける。

「い、いや、いいよ僕は……」

いやいやする少年、だがそんな彼に郁未は容赦なく迫る。

「良くないわよ。そういうこと言う人に限ってなんか深い傷を負っているのを隠してたりするのよね。心の中で悲劇のヒロイン演じられても困るだけなのよっ」

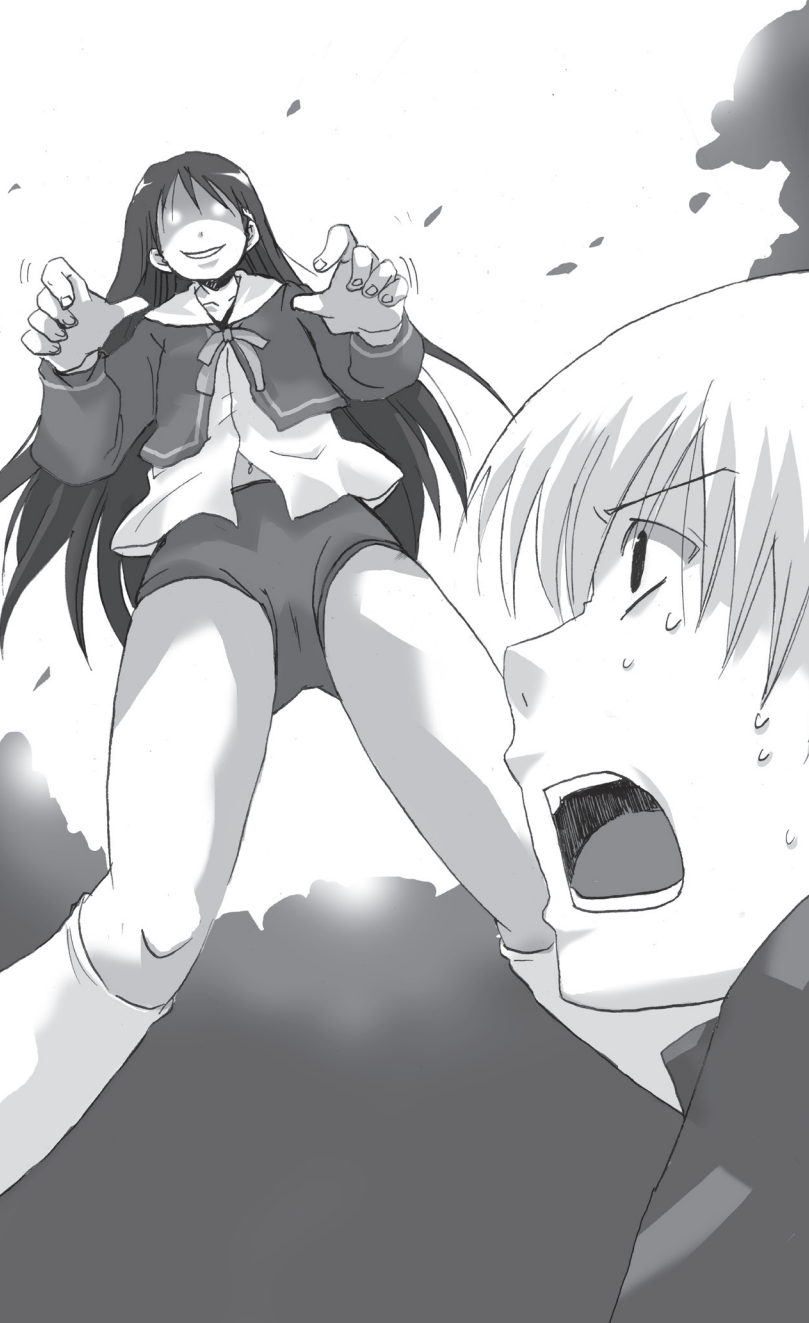
「い、いや、僕は男だし……」

座っていながらも後ずさりする少年、だが郁未もそれと全く同じ速度でじりじりと少年ににじり寄る。

「逃がさないわよぅ……。人が折角ボディチェックしてやるって言ってんだから、甘んじて受けるのが礼儀というものでしょ!?」

「い、いや、それは何か言葉の使い方を間違っている気が――」

引きつり笑いしながら突っ込みを入れる少年、だがそんな彼の言葉に耳を傾ける様子もなく、心持ち目に怪しい光を灯した郁未は容赦なく――。

「問答無用！（きゅぴーん！）」

「きゅぴーん！　ってなんだぁぁぁああ!!」
　静かな森に、少年の悲鳴が木霊した。
──そんなことばっかりしてるから痴女呼ばわりされるんだ、とは、例え知っていても口が裂けても少年には言えなかった。
「しくしく……もうお嫁に行けない……」
「そんなこと言える茶目っ気があったのね」
　パンパン、と手を叩いてほこりをはらいつつ、郁未がジト目で少年を睨む。一仕事終わったぜ、という達成感が伺える仕種だ。
「あ、いや冗談」
　少年はすぐそのセリフを撤回した。その悲痛な叫びも空しく、彼は見事に裸にひん剥かれていた。もとい、上着を脱がされていた。引き締まった肉体は、その幼顔には似つかわしくない男性らしい魅力がある。深い傷は確かに無いようだった──が、郁未が気になったところが二点。
「返り血の割に傷は少ないわね、でもここはちょっと……」
　少年の後ろ肩を優しく撫でる。丁度その部分は銃弾がかすったところだ。
「……ああ、そこか。まあ文字通りの掠り傷だよ。気にすることは無い」
　郁未は何かを思案しながらその部位を眺めている。
「骨に届いているわけでもないし、まあ多少ひりつくといえばそれはそうだけど」
　何をそんなに考えているんだろう、と少年は郁未の様子が気になった。
「……えいっ」
　すると突然、郁未はその部分をグーで殴った。
「あぐっ！」
　……当然、少年は痛そうに呻き声をあげる。
「あのー、郁未さん？　一体何をなさるんでしょうか？」
　傷を押さえながら少年はしょんぼりと尋ねる。

「やせ我慢チェック」
あっさりと郁未は言った。
「えー」
「また痛くない振りされても困るしね」
少年の表情からは不服な感じが満ち溢れている。
しかし、そりゃそんな強さで殴られたら普通は呻き声あげるさ、とは思っていながら、やはり口には出せない少年であった。
「……痛い」
いてぇよぉ、うわあああぁぁん。……とは言わないもののその雰囲気を瞳だけで表現してみる少年。流石に郁未もいたたまれなくなった。
「……ごめん」
「まあそれほどでもないけどね……」
苦笑する少年を尻目に、郁未は別な部分に目をやる。そこは気になった箇所のもう一つ——腕であった。ところどころ血が吹き出して、それが自然に収まった跡がある。これは——。
「——どういうこと？」
郁未は尋ねた。少なくとも、……これは外傷じゃない。
「いや……これはどうしたことだろう」
少年は面食らったような表情をした。長袖で覆っている故に、自分でその様態を見たのは初めてだったからだ。
——知らない。それが反動だなんてことは知らない。ほんの少し人間より外の力を使う度に積もり積もってきたものだなんてことは知らない。例え知っていたとしても、今気付くわけにはいかない。
「血は止まっているようだし、いいけど。……全く、無茶しないでよね」
そう言って郁未は嘆息した。その両手は優しく少年の腕をさすっている。
「……ん」
少年はこくん、と一回頷いた。
「……急いで処置しなきゃいけなさそうな傷も無さ

そうだし、ここで治療できるものも無さそうだな。
——そろそろ服を着ていいかな？」
少年は郁未に尋ねた。が、当の本人はそれを聞いていない。……なにやら少年の腕をさすり続けている。
「……郁未」
少年は疲れた様子で彼女の名前を呼んだ。
「——————————とう！」
かぷ。
「うひゃあぁあああああああああ‼」
「動かないで！　悪い血を吸い出すんだから‼」
れろれろれろれろれろ。
「そ、そんなこと言われたってっ、くはっ」
「放って置いたら感染症を引き起こす危険性があるわ！」
くちゅくちゅ、ちゅるるるるる、ぺろぺろ。
「うっ、嘘だ、絶対君の狙いは別にあるだろおおおお‼」
「うるさいわね！　大人しくマグロやってなさい‼」
にゅるにゅる、ぴちゅっ。
「いっ、いっいやあああああああああああああ！」
静かな森に、またも少年の悲鳴が木霊した。

564　笑顔

「それで、結局どうなったの？」
「その話、さっきしなかったかい？」
「だから続きよ続き！　潜水艦は結局どうなったのよ？」
「ああ……」
少年は、埋もれたまま建物に目を走らせて言った。
「放ってきたよ」
「何で？　もう敵の人間はいないんでしょう？」
「だからといってどうすることも出来ないよ。僕だ

け逃げることは出来ない。高槻ともまだ出会えていない……」
「高槻……」
沈黙が一瞬、二人の間を埋め尽くす。二人はまだ全ての高槻が死んだことを知らなかった。
「……ね、聞いて」
郁未はぼそりと言った。語り始めたのは、ここに至るまでの出来事や出会った人たちのこと。楽しいことも……つらいことも……全てをひっくるめて。
耕一の話のときは笑いが漏れて、秋子の話のときは少し暗く。母親の話をする時は……流石に、口が重くなった。少年は黙って彼女の話を聞いていた。
少年の話はそれより少し長引いた。往人との交差から始まって、郁美という、郁未と同じ名前の少女との出会いと別れ。やたら元気だった少女——詩子——の話。そういえば、彼女は元気にしているだろうか？　そしてその先で発見した良祐の死、その後の葉子との邂逅。
「葉子さんに会ったの？」
少年は頷いて、元気そうだったよと言った。それから、彼女も高槻を追っていたことを付け加えた。それを聞いて郁未がほんの少し嬉しそうにしたのを、少年は見逃さなかった。最後に、蝉丸との出会いと地下への侵入の話で終わった。
「そういえば、あの人たちには私も会ったのよね」
と、蝉丸たちのことを思い出し、郁未は一人頷いた。
「地下施設への入り口は……そこに埋まっている」
「うわ……これは見つからないわね」
自分の目でそこを見て、いやそうに郁未は言った。
「でも……、少なくともここから潜水艦まで直行できる」
少年は真剣な口調で言った。
「郁未」
少年は向き直ると、郁未のことを真正面から見つめた。

「……何よ」
郁美はほんの少し、口をこもらせてそう言った。
「僕は、できるだけ多くの人を助けたいと思ってる。でもそれが叶わない可能性は高い。最悪僕が死んだときは、郁未、君だけでもこれに乗って逃げ延びて――」

ちゅっ。

――少年の言葉は、そこで止められた。
「……郁未」
「……バカよね、あなたって。私一人で帰れたって、何の意味も無いじゃない」
郁未は笑った。とても、まぶしく――。
「葉子さんも、晴香も、他の人たちも……あなたも。――みんなで帰ろうよ」
「――うん」
穏やかな空気が流れた。額に残る仄かな温かみがじわっと体中に広がっていくような……そんな気がした。

565 Sweetless Days

二人は歩き出す。足取りが一人の時とは全然違う。これから先の道のりがやけに明るくすがすがしく感じられる。郁未が背負った鞄の重さはそう大したものではないけれど、少年の持った本はそれだけではない。何も生み出すことは出来ないけれど、何故だか不安は無い。
「ねぇ」
「ん？」
「高槻を倒したら……どうするの？」
「そうだね……」
少し沈黙して、言った。
「高槻の裏にいる黒幕は潰したいところだね」
笑顔で、いつもどおりの笑顔で言った。

――戻るべき日常など、僕には無い。
――なぜならそれはＦＡＲＧＯそのものだったから。
――ならば僕は、ただ死に場所を求めているだけなんだろうか？
――それとも、本当に、郁未と。
「私は――」
郁未が口を開いた。
「あの人と、決着をつけたい」
「お母さんを……殺した人かい？」
こくっ、と郁未は頷いた。
「――」
「……不服？　私が復讐に走ろうとしていること」
「――いや」
不可視の力が封じられた今、君はただの女の子に過ぎないけど――。
「――君がやりたいことをやればいいさ」
「……あなたは？」
「……ん？」
「あなたは……どうなの？　その、郁美ちゃんを殺した奴とか」
少年の顔から、笑みが消える。
「――――分からない」
人を殺すことへの嫌悪が沸き立っている。それは喜ぶべきことなんだろうか。本当の自分との乖離が進んでいく。沸き立っているのは……不可視の狂気。
分からない、僕は何処へ行こうとしているのか――。

566　童話戦隊

「ねえ、したぼく。あたしさっきからずっと考えてたことあるの。聞いてくれる？」
蝉丸達と別れ、教会に向かう途中、詠美は御堂に話しかけた。
「ああ、何を考えてた？」

「あんた、今頭の上に動物のっけてるでしょ」
「乗せたくて乗せてるわけじゃねえけどな」
「その光景なんかで見たことあると思ってたんだけど、今やっとわかったのよ。あんたのその格好ブレーメンの音……」
御堂は声を荒らげ、詠美の言葉をさえぎった。
「最後まで言うんじゃねえ、俺もなんだかそんな気がしてたんだが、口に出すと何か失っちまうような気がして言わなかったんだからよ……それにしてもおめえ、いつもいったい何考えて生きてんだ？」
「えっとね……」
詠美の言葉を右から左に聞き流しながら、御堂は思う。
（ブレーメンの音楽隊かよ。俺はロバの役ってわけか。そんな役俺は認めねえ。俺の役はもっとかっこいい役のはずだぜ。そう桃太郎のようなな。だが桃太郎を名乗るには猿が——いるじゃねえか、目の前に）
「……桃太郎だ」
「えっ、何？」
「俺様達はブレーメンの音楽隊じゃねえ、桃太郎だっていったんだよ」
「でも犬も鳥もいるけど、猿が——ってその可哀想な人間をみるかのような哀れみの目はどういう意味？」
「さあな、どういう意味なんだろうな」
「むっかぁ〜〜〜!!　したぼくのくせになまいき〜〜!!　なまいき〜〜〜!!」

567　生キル意味ヲ

自分の存在意義を考えてみる——。
基本的には「足手まとい」以外の何物でも無いと思っている。そして、自分自身すらもそれに甘んじているると。

それでいいのだろうか？
――いいわけ、ないよ。
当然だ。

目の前で、もう随分と長く共に行動している鬼の姉妹が、何やら言い争っている。
口喧嘩の絶えない姉妹だ――
もちろん、その内容も多種多彩だ。
よくそれだけ喧嘩出来るものだとも思える。
無論、それだけ仲が良いとも取れるのだが。
不意に、笑みが零れた。
失った家族の温かみ。
それを、そこに感じてしまったから。
――しかし、胸について言うのは禁句だと思ったあゆである。

――ボクには何があるんだろう？
ふと、あゆはそんな事を考えた。

自分は。
自分で考える限りでは、普通の少女であると。
それはもちろん、「うぐぅ」とか連呼する少女が普通とは言えないかもしれぬが。
――祐一君にも散々言われたし、ね。
いや、しかし。
それでも――
自分は、容易く人を殺す事など出来ない。
確認する。
己が、平常であると。
……「まだ」、平常であると。
だけど。
――それでいいのかな……。
そんな事を思ってしまう。
――イキノコルタメニハコロサナクテハナラナイ――
絶対の――この島に於いての――ルール。
それに抗うということは。

即ち、死を意味する。
もちろん、死ぬのはイヤだ。
だけど、殺すのもイヤだ。
それでどうやって生き残る？
結局のところ、自分は同行者に頼りっぱなしなのだ。
そして。
同行者に、戦わせている。
もし、万が一。
自分が狙われて、それで。
自分を守る為に、二人が死んだなら――
それは「殺した」のと変わりはない。
逞しくあらねばならない。
一人で――
自分の命を守りきれるくらいには。
それだけの力が欲しかった。
目の前の姉妹はとうとう取っ組み合いの喧嘩を始めている。
相変わらずだ。
こんな状況であるのに。
――いや、しかし。
やはり胸の話「だけ」は勘弁してほしい。

この島に来てから、感じていたものがある。
酷く――哀しい気配？
頭の奥底に、ちりちりと、伝わる何か。
酷く、深い、深い、カナシミ。
いや、それとも――
それの主は何処にいる？
自分だけが分かるそれ。

――ボクだけが分かる――

即ち。
それは、自分の存在意義に成り得るのではないだ

ろうか？
〝それ〟が一体何かは分からない。
だけど。
――ひょっとしたら、ボクだけにしか分からない
のかもしれないから。
だから。
探さなくてはならない――
〝それ〟を。
自分が。
自分が此処に在った意味を――
残す為にも。

568　罪と罰

たぶん、あれが一番の罪だったのだろう……私に
とっての。
気が付いたら、憂鬱。気分が、晴れない。
どうしたのだろうか？　自分の置かれている状況
がよく感じ取れない。
（確か……）
長瀬さんと、一緒で……
海水で顔を洗った、見かけによらずお茶目な彼を
笑って。
こんな島だけど、少し自分が幸せに思えて。
こんな状況なのに、悲しんでる人もいるのに。
本当は私も悲しまなければならないのに。
だけど、ささやかだけど、確かにあった幸せだっ
た瞬間。
海岸沿いを歩いて、そして……
「墓石……」
そう、墓石だった。
長瀬さんが寄りかかった墓石がまるで下に滑車が
付いているかのように動いて……
「それで……」
中に入った。

（それから……？）

中にある【Staff Only】の扉……そこに入ってから急速に光が私を包んで、

（そこから先が思い出せない……）

軽く、頭を左右に揺らす。かすかに……といった程度のものだけど。

長瀬さんの……

『うん、わかった。何があっても僕はこの手を放さない』

えっ……

私の……

絶対放さないはずの右手の……

感覚はなかった。

「な……」

何……これ……？

なんで……？

——ガサッ……

わたしが……

「い、いやあああああああああっ!!」

長瀬さんが……

「……」

茂みから出てきた影。

「ゆう……す……け……さん？」

手に握られていた、私の、右手。

「い、いやっ……いやあぁ————っ!!」

突き飛ばして、駆けた。

「はあ、はあ……」

もう、どの位走ったのか分からない。

「私の……みぎ……て……」

右手を見た。地面が見えた。

「いやっ……わたしっ……」

そのまま、景色が遠のいていって——消えた。

たぶん、あれが私の一番の罪だったのだろう。

『絶対に放さない！　僕が守り通してみせる!!』
『……長瀬さん……信じていたのに』
『君の手をこれ以上汚す事は無い。僕が自分の手で——自分を殺す、よ』
『私は長瀬さんを信じます。今度こそ、最後まで』

どうして、信じてあげられなかったんだろう……。
私は、逃げてしまった。
また、私は長瀬さんから逃げてしまっていた。
長瀬さんが、斬った。
長瀬さんが、私の……を持っていた。
錯乱状態の中で、私は、長瀬さんが……恐くて。
そうしなければ、壊れてしまいそうで。
——ダムの小さな亀裂を塞ぐように……私は駆けた。
私の罪。あそこでもし、逃げなければ——また変わっていたのかもしれない。
未来が。
たぶん、それは、私にとって消えることの無い心の痛みなのだろう。
あの子が光の中に消えてしまった——あの時のように。

569　命を越えて伝えるもの

ザッザッザッザッザッ……！

——遠ざかる足音。

逃げられた。
何故、逃げた？
……当たり前だ。
何も分からないうちに右手が無くなってて混乱してるのだろう。そんな中に、突然、失った自分の右

手を持った人物が現れたら、例えそれが誰だったとしても、逃げるに違いない。
きっと。
彼女の中で。
僕は、彼女の右手を奪った人になってしまったのだろう。
酷く、哀しかった。
だが。
正直、撃たれなかっただけでもまだマシなのだろう。彼女はデリンジャーを持っていた筈だ。それが自分の身体を貫かなかっただけでも、幸運だ。
——或いは？
僕だから、撃たれなかった、なんて思うのは……自惚れだろうな。
——探す？
しかし、それは良い結果を生むとは思えない。
彼女は僕の姿に怯え。
そして僕が逃げた彼女を追う。

本来なら、彼女が落ち着くまで待つべきだろう。
……だが彼女を放っておけるか？
答えは、ノーだ。
この島には、どんな殺人鬼が潜んでいるかは分からない。その中で、一人放っておける筈が無い。
手段としては。
彼女から見えない位置で、護る。
つまり、彼女の見える位置にあれば良い。
出来れば、すぐに駆け寄れる場所に。
木の上が最も理想的だが、移動が困難だ。
しかし。
まるでストーカーみたいだな。
そんな事を思って。
一人、微かな笑みを零す。
思いのほか、すぐ近くにその姿はあった。
草の上に倒れていた。
顔が青い。恐らくは、貧血だろうか。

抱え上げた。妙に軽く感じる。
近くの木陰で下ろすと、自分もその隣に座った。
右腕の包帯。その先には――何もない。
顔を顰めた。自分を、戒める。

――アノトキ、ボクガモットチュウイシテイレバ
　アノトキ、テヲニギッテナンカイタカラ

チリッ――

電波の衝動。
悔やめども、悔やみ切れぬ――
その、残酷としか思えぬ事実。
償うには、もはやどうしようもなさ過ぎて。
己を、酷く不甲斐なく思った。

――畜生。

――畜生、畜生、畜生。

――畜生、畜生、畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生
　畜生畜生畜生……

チリチリチリチリチリチリチリッ――

流れ。
行き場の失ったそれが、酷く自分を――癒す。
元来、それは「壊す為の物」。
――僕は、壊れてしまったんだろうか？
破壊。
破損。
壊滅。
かつては感じた、甘美な響き。
それはもはや感じられず。
ただ、空しく感じるだけで。
――不意に隣を見れば。
肩を並べた少女が、涙を流しているのが見えて。
決意する。

自分は。
――僕は。
今度こそ彼女を護る、と。
その為なら。
――タトエ、キミニ、コロサレタトシテモ。
コノイノチ、オシクハナイ。

570　拝啓おふくろ様リターンズ

――拝啓おふくろ様
我慢できずに再び文を送ってしまうバカ息子をどうかお許しください。
僕は驚愕いたしました。
当初、かの婦女子はなにもないところで転んだ様に見え、それはそれはそのまぬけっぷりを腹の底で笑いまくっておりました。
もちろん可愛い女の子のドジに向けられる微笑のようなものでありますが。
しかし違ったのです。
かの婦女子が転んだのは地面から顔を出した根っこにつまづいたからでした。
そしてその根っこは転んだ際に引き千切られていたのです。
なんというパワー。なんという突進力でしょう。
「これが力の一号の実力……」
「ジュン？」
さぞかしタックルでもさせたら強いことでしょう。
いっそ敵とでも会ったら試してみましょうか？
マッハオラ。
タックルさせるときに「Ready Go!!」とでも叫べば「Lady」と語感がかぶって良い感じです。
「てめぇは俺を怒らせた。ＨＡ！　ＨＡ！　ＨＡ！　ＨＡ！　ＨＡ！　ＨＡ！　ＨＡ！　ＨＡ！」
掛け声と共に次々と拳をたたきこむ金髪ヤンキー。

うむ。なかなか良い。掛け声が悪役っぽいが。
「ジュン？　どうしたノ？　怒っちゃヤダヨ……」
どうやら妄想のつもりが声に出ていたようです。
婦女子はいろんな意味の心配で僕の顔を覗きこみます。
「いや、なんでもない。怒ってなんかないって」
「そう？」
その時は確かに僕は怒ってなどいませんでした。
しかし気がついてしまったのです。婦女子のポケットの中で起こった重大な事件に。
CDは散々たるありさまでした。
そう。頑丈だと信じていたあれは、転んだときのショックに負けて割れていたのです。
今思うと、CDを分担して持つことにしたのが失敗だったのかもしれません。
かの婦女子のスカートには、スカートにしては大変珍しくポケットがついていたのです。
CDは一人が持ってるといっきに全て失う可能性があります。
とっておきの切り札となりうるそれを分担して持つのはしごく当然といえるでしょう。
だが、かの婦女子は転んでしまいました。
おかげで緩衝材として一緒に詰めていた「もずくパック」が割れ、CDは散々たるありさまです。
硬めのビニールだから頑丈だと信じていたのですが……。
このもずくのメーカーに対しては怒りを禁じえません。
あとはあの無記入のCDが、あらゆる外的要因に弱い「ミスったーデータ」様に焼かれたものではないことを祈るばかりです。

追記
もずくパックが割れてしまったおかげで、レミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチのスカートはもずくの汁でぐっしょりです。乾かさないと風邪

をめされてしまうかもしれません。
こういうとき、男はどうしたらよろしいのでしょうおふくろ様。

追記二
この島に来てから、僕の周りには事件が絶えません。
いつになったらこの現実逃避人格はなりを潜めてくれるのでしょうか。
このままではどこぞで見た、目覚ましかチップルです。
それもまた良しとしますか……。

571 調査

プルルルルッ……ガチャッ
「はいこちら来栖川電工中央研究所プログラム支部……あ、源之助さんですか。……はあ、源一郎さんが、死んだかもしれない？ ちょっと待ってください……えーと、……今しがた、彼のいた施設が破壊されましたね。殺されたかどうかは……ちょっと……こちらでは分からないですね」
モニターを眺めながら、キーボードを叩く。
カタカタカタ……。
「ええ、ええ……まあ、そうですね。あそこには参加者は入れないようになってましたから。さらにそこに近づいたのは五番、天野美汐だけですしね……。可能性としては一緒に行動していた長瀬祐介ですかね。あとの七瀬彰……は、今は十九番、柏木耕一らといますね。長瀬祐介で確定でしょう。やはりあの祐介と彰、二人の生死確認が厳しいのは否めませんね。……えっ？ 他にもいるだろうって？ あと爆弾機能に気付いた誰か、ですか？ 十一番、大庭詠美ならさっき電話した通りですよ？」
カタカタ……モニターに大きく女の顔写真が映し出される。

「ええ、大庭詠美はずっと御堂といますよ。監視カメラで姿を確認してます。それに、いまさら御堂が彼女を殺すとも思えませんしね……えっ？　他にもいる可能性……ですか？　長瀬祐介以外には考えられませんがね——そんなことで言ってるわけじゃない？　う〜ん……放っておいてもいい気はしますがね、調べてみます。ええ、方法はいくらかありますよ。死亡した時の爆弾情報をログで調べれば、まあ、不審な死に方なんてすぐ目星がつきますよ。あとは調べればいいだけの事です。——ええ、まかせておいて下さいよ。で、見つけたらどうするおつもりで？　……任せる？　無責任だなぁ……私は動くわけにはいかんでしょう。この施設からそう離れられませんよ。まあ、とりあえず調べてはおきますわ。不審な点が見つかったらその場所へ誰かをよこせばいいんじゃないですか？」

カタカタカタ……モニターに死亡者達の通し番号が映し出される。

「と、言われましてもねぇ……父さんと源三郎さんは結果的に独断で動いちゃってますからねぇ……連絡とれませんよ。なにしろ生死確認さえできないんだから。向こうからコンタクト取ってくれないことには……はい？　戦闘型ＨＭは駄目ですよ。一応この施設の要ですから。なに、分かってるって？……なんてこと言うんですか。一応私達の汗と涙の結晶ですよ。まったく……」

溜息をつきながらキーボードを叩く。

002……004……次々とコンピューターに死亡者の死亡までの行動ログが高速で映し出されていく。

「ええ、もう始めてますよ。……分かってるなら邪魔しないで下さいよ、まったく……まあ、いいですけどね。何か分かったらまた連絡しますよ……嫌ですよ、それらをどうするかは御老が決めてください。そもそも手出ししないと決めたのはあなたじゃないですか……。とりあえず大庭詠美に関しては私は通しですよ。祐介らがもう一人増えた……と思えばい

いだけですから。私からはそれだけです……はい、では……」
ふうーーっ……
溜息を大きくついた。
「源之助さんもなかなか無茶な注文を出してくれるよまったく…」
一本、煙草を咥えて、大きく息を吸った。
「とはいえ、こちらの目の届かないところで動く人間がいるのは好ましくはないんだけどね。……まあ、やれることだけはやっときますか」
004……006……再びコンピューターに向かいなおすと、キーボードを軽やかに叩きだした。

572　運命の輪

市街地を抜け、しばらく草原を横断したところ。
朝露の反射する虹色の光を浴びながら、うちよせる柔らかな草の波々を掻き分けて、ふたりの少女が漂流していた。
遠目に後ろから見れば柏木初音と、その姉……楓、に見えなくもない。しかしそれは、現実にはありえない組み合わせだ。
「七瀬なのよ、あたし」
そう、それは七瀬留美。初音のボディーガードを自称するという、矛盾の乙女だ。
ふたりは、柏木耕一と七瀬彰を追っている。
もともと行く先に迷いはあった。
選択肢のひとつは、先行した二人を追うこと。
これは初音の希望でもあるし、二人の助けになれば……という思いもある。
もうひとつは、潜水艦がどこかにある、という高槻の言葉から来るものだ。七瀬は、その疑わしい言葉を信じている。だから、そうした沿岸部の施設を捜索するべきなのかと、思考を巡らせていた。
しかし、その時（小さいから解らなかったのか）忽然とあらわれた、さすらいの女医（ヤブっぽいけ

ど）観月マナによって、迷いは吹き飛んだ。死んだと思われた柏木家の長女と次女が生きている。そして初音や耕一を探すとともに、ゲームの主催者達と対決する決意を見せていることを知ったのだ。

「……でさ」
頭の後ろで手を組みながら、いくぶん緊張感なさげに七瀬は言う。
「ずんずん進んでるけど……なんかの、目星はついてるの？」
「うん。……マナさんの話にあった、バイクとロボットの話なんだけど……」
「それが、あの二人とどういう関係になるの？」
七瀬にはさっぱり解らない。年下の少女に教えを請うように、あとを促す。
「うん、そのロボットなんだけど。参加者に来栖川製のロボットが二体いたのを除けば、この島では珍しいでしょ？」
「そういや他には見ないわね。主催者側の手伝いにいるくら……」
「だよ、ね？」
そうだ。
戦闘用のロボットが出現するようなところは、裏を返せばそれなりの重要施設があるということなのだ。
ふたりは丘を登り始める。
……思った以上に、目指す二人は近かった。

殺風景な岩山に、ざっくりと穿たれた出入り口。
そこは、いかにもここが軍事施設だと言い張っているようにしか見えない、異様な光景だった。岩場に巧妙に隠され、簡単には発見できないはずのそれを、目立たせる存在があったからだ。
施設への通路守るように、不似合いな人影が仁王立ちしている。小柄な、女性の姿。しかし、容姿に似合わぬ威圧感が、彼女にはあった。戦闘ヘリに匹

敵する機動性と、砲弾の直撃に耐えうる装甲。そうした性能は、顔付きさえ変えてしまうのだろうか。人への奉仕のために作られた、彼女の姉妹たちと大きくかけ離れた、厳しい表情を浮かべ、ひとり立ち尽くしている。
「彰君……あれ、なんだろうな」
林立する岩塊のうしろで、気味悪そうな声を出す青年がいた。
「なんです耕一さん？　なんか、見つけたんですか」
ふたりでロボットを観察する。
再び岩陰に隠れると、彰は腰をおろして言った。
「来栖川の……メイドロボット……じゃなさそうですね」
「あんな顔のメイド、誰が買うもんか」
藪を抜け岩場に入り、道なき道を進んできた彼らは、運良くロボットの死角に出ていた。
もし通路を歩いて来て、正面から遭遇していたならば……とは、あまり考えたくない。
「そもそも、あの通路にだけ配置されているのは、どうしてなんでしょうね」
「どういうことだい？」
耕一にはさっぱり解らない。年下の少年に教えを請うように、あとを促す。
「それは……」
「……穴熊でもなければ、重要拠点には抜け道を用意するものだ。頭のよい兎は、三つの抜け穴を用意するという。人間ならば、尚更だろう」
何の気配もなく。
降って沸いたように、男が立っていた。
彰と耕一はキツネにでも化かされたかのように、呆然として動けなかった。
「な……」
「勇気ある青年たちよ。……悪いが、尾行させてもらった」

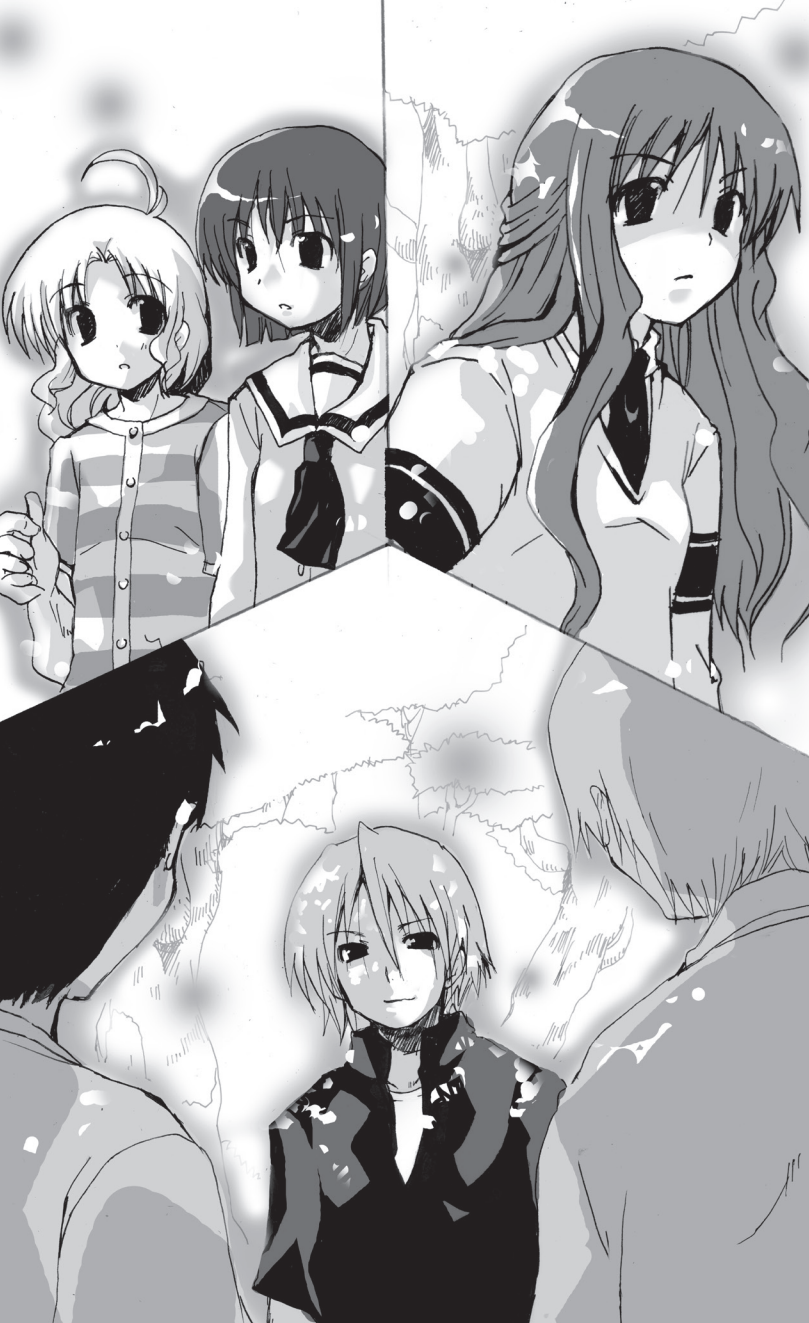
「!?」
彰が怪我をしている以上、距離さえおけば二人を尾行することなど簡単かもしれない。しかし、こういう気配を身に纏える人物に、すぐ後ろを尾行されたという事実は、恐怖に近い。
「あんた、何者……だ」
幾分気圧されながらも、耕一が集中力を高める。それを抑えるかのように、渋みのある微笑を浮かべ、男は言った。
「そう身構えるな。俺は、君らのような同志をこそ、望んでいたのだ――」
いくぶん悲壮な顔をして、腕に抱えた女性(?)をそっと降ろす。それに合わせるように、荒涼とした岩場を一陣の旋風が吹き抜ける。
「俺の名は、坂神蝉丸。蝉丸と、呼んでくれ――」
男は。
……月代の気絶により、久々にハードボイルド満喫な蝉丸であった。

鬱蒼とした森を抜けながら、少女はひとり、考えていた。
(あたし、何してるんだろうね?)
失った仲間のことを思うと、これ以上むやみに他人とツルむ気にはなれなかった。
だからと言って主催者側の連中が、一人でどうこうできるような、そんな軽い相手ではないと解ってもいる。
(刀一本道連れに。……仁侠映画じゃないんだから、いくらなんだって無理だってーの)
無理矢理気を楽にしようとした想像も、やはり不可能の三文字へと到達してしまう。
(仲間、ねえ……)
郁未。葉子さん。少年。
この三人がまず浮かぶ。しかし、あれほど捜しても会えなかった相手を目的に、再び駆け回るのはどうだろう。
(他には……)

……いない。
誰が好き好んで闘争の場に身を置くだろう。普通は怯えて、誰かを襲うか、または逆に襲われて、それで手一杯のはずだ。
主催者側の人間と戦う。それは個人的な怨恨を抜きにして高度な視点で見れば、他の全員に対する奉仕と言ってもいい。知らない誰かさえも含めた全員を守るために、戦争屋と戦う。そんなことに手を貸すような知り合いは、先の三人を除けば全て……。
……いや、ひとり、いた。

『さっさと行きなさいよ』
『ふん。……言われないでも、出て行くわよ』
『次はきっと、絶対、勝つわよ！』

……あまり気が進まない気もするが、いた。あいつなら、きっと。
そう考えが纏まると、なんとなく気が軽くなる。
もともと考えるより、行動するほうが好きな性質だ。巳間晴香の性質は、求める相棒と良く似たところが多々ある。
本人達は認めないだろうが、それは間違いのない事実だ。

いくぶん明るさを取り戻し、駆け出そうとした晴香の前を、人影がよぎった。慌てて晴香は見を隠す。
男が、ひとり。
最初のホールに、こんな男はいなかった。最年長だと思われた、目付きの悪い男よりも、明らかに年上だ。
（主催者側の……人間……）
なにやら呟く声が聞こえる。
意味が通っているのだが、何か浮ついたような、そんな不安定な言葉を、声の大小絡めて垂れ流していた。怒っているのか、それとも何かに憑かれているのか。汗とも涎ともつかぬ水滴を、ぼたぼたと流

しながら、男は丘へと続く道を進んでいった。
（この先に……主催者側の施設でもあるのかしら？）
　小首を傾げて、晴香は考える。
仲間を集めるのが先か。場所の見当をつけるのが先か。
（ま、あとでも……チャンスは一緒だしね……）
晴香はそう決めて、男の後を尾けることにした。
それが、求める人物への道でもあったのだが。

もしも空から眺めたなら。
彼らが大きな、輪の上に居るように見えただろう。
大きな
大きな
輪を描いて。

運命の流れは、いま一点に集中しようとしていた。

573 二択

（……やっぱり、こうなるのですね）
　向けられるデザートイーグルの銃口を見つめながら、里村茜はため息をついた。その感情は絶望というよりも、現実の認識といったほうがいい。
　当たり前の話だった。この自分が、七人の命を踏みにじった自分が、慕ってくる後輩を手にかけ、やさしいあの少年を手にかけ、親友を手にかけた自分が、許されるはずない。
　その罪を背負い、少しでもその償いができるように——そんな風にして自分が生きていることを喜んでくれる少年の傍ら生きていくことなんて、許されるはずがない。
（いいえ、これこそ身に過ぎた果報かもしれませんね）

本来ならば即座に頭を吹き飛ばされても文句は言えないのだ。
　ならば、早く連れて行ってほしい。これ以上ぐずぐずしていたら祐一たちが来てしまう。
　こんな身から出たさびに、祐一を巻き込むわけにはいかないのだ。
「わかりました」
　だから茜はそう言った。
「はやく連れて行ってください」
　ゆっくりと手を頭の後ろで組む。
「……ほら、お母さんも住人さんも……危ないよ、こんなもの」
　その声に呼応して観鈴が一歩、住人と晴子の前に出る。
「私観鈴、よろしく。あなたの名前、聞きたいな」
　観鈴がそう笑いかけたのと、
「茜ぇぇぇぇ！」
　祐一の叫び声がこだまするのが、同時だった。

「なんやっ!?」
「仲間か!?」
　一瞬、二人の注意が祐一の声のほうに向けられる。
　その一瞬に茜は、
先ほどしまいこんだガバメントを引き抜くと、
その行動は
その動作とともに観鈴の腕を引っ張り、
祐一が戦いに巻き込まれるなら
有利な状況に持ち込むべき
という理屈ではなく
その身を盾にして、
相手の隙を見つけたならば
それに乗じて動くという

銃口を首に突きつけて、
既に染み付いてしまった
叫んだ。
殺人者としての
性だったのかもしれない

「動かないで、撃ちますよ！」
祐一が、繭が、なつみが見たのはそんな光景だった。
何をしているんだろう。
なつみは思った。
何をしているんだろう、この女は。
『復讐とか何だか知らないけど、折角残った命を大切にしようって気があるの？』
あの人はそういった。

『居場所が無いなら、探せばいいじゃない』
日本刀を手にした、私たちの前で戦った、文句なしにかっこいいあの人はそういった。あの人、巳間晴香さんには、何度礼を言っても足りないと思う。
だから、里村茜を許そうと思った。
憎しみが消えたわけじゃない。
わだかまりがなくなったわけでもない。
でも、あの人には敬意を払いたい。
『生きる権利なんて、誰にもあるのよ。あんたなりに、生き残りなさい』
その言葉を大事にしたい。
だから、今は無理でも、この女を許そうと思った。
そばにいることで、ゆっくりと許していこうと思った。
そこを、私の居場所にしたいと思った。
なのに。
何をしているんだろう、この女は。

友人を殺しといて、その涙も乾かぬうちに……
女の子を盾にしているなんて……！
許せなかった。
思いを、決意を、踏みにじられた気がした。
だから、
「あなたはぁぁぁぁっ！」
怒声を上げて、隣にいた祐一から濃硫酸銃をひったくって、その銃口を茜のほうへ向ける。
だけど、
「っく……!?」
往人たちにしてみれば、それは、茜の援護をしているようにしか見えなくて。反射的になつみのほうへ向けた往人のデザートイーグルが火を噴く。
バッァン、ビチャァ。
それは銃声、なつみの左腕がはじけとんだ音。
「て、てめぇは!?」
「な、なつみさん!?」
叫ぶ祐一、繭。

だが、なつみは倒れなかった。銃を手放さなかった。そうして引き金を引く。茜に向けて。
「キャァッ!!」
悲鳴をあげる観鈴。だが、硫酸は茜にも観鈴にもかからない。狙いをつけるだけの余力がもうないのだ、なつみには。
だが、なつみは引き金をさらに二度三度引く。
「なにやってるんだよ！　なつみぃ!!」
そういってウォーターガンを取り返そうとする祐一を無視して。たまらず茜は、観鈴を晴子のほうへ押し付けると背を向けて茂みの中へ駆け出した。
「またんかいこらぁ！」
観鈴を抱きかかえる格好になりながら、それでも晴子は茂みの中に消えようとしていた茜の背に狙いをつける。
だが、その引き金を引くよりも、祐一がなつみから奪い返したウォーターガンで晴子を撃つ方がはやかった。

その濃硫酸は服の上から晴子の二の腕にかかる。
その肌からジュッと耳障りな音がたつ。
たまらず悲鳴をあげる晴子。その手からシグザウエルが落ちる。
「グア……！」
祐一はすばやく銃口を往人のほうへ向けた。
往人も既にデザートイーグルを祐一のほうへ向けている。
「何もんなんだよ、あんたら……！」
茂みの中へ消えた茜を追う繭を尻目にみながら祐一は怒鳴りつける。
その額には汗。即死させるのが難しいこのウオーターガンで拳銃と立ち向かうことができるだろうか？
だが、動揺というなら往人のほうが深い。先ほどの一発が最後の弾だったのだから。
晴子のシグザウエルは、観鈴が拾い上げていたが、
（あいつに、人が撃てるか？）
撃てるとは思えなかったし、撃てると思いたくもなかった。
「晴子！　大丈夫なのか!?」
祐一から目を離さずに往人は問う。
「平気や。こんな……もん」
「ダメ……！　すぐに水で洗い流さないと!!」
「チッ」
往人は舌打ちした。ここまでか。
だから、往人は強引に晴子を引き寄せ片腕で抱き寄せると、銃口を祐一に向けたまま、
一度だけ強く祐一をにらむと、観鈴とともに茂みの中へ消えた。
繭が茜の跡を追ったのは、実はそれほど賢い選択ではなかった。残って祐一のサポートをすべきだったのかもしれない。
だが、繭の中にもある種の疑念が渦巻いていた。
それは、なつみの場合はもはや確信となったもの

であるが、すなわち、
まだ、里村茜は、殺人者ではないのか？
と、そういうことだった。
観鈴に銃口を突きつけている姿はそう思わせるに充分だった。
そして、茜がまだ殺人者だというならば。
最も多くの武器を所持している彼女を放置しておくことほど危険なことはないのだ。
「待ちなさい、里村さん……‼」
そうやって呼びかけながら、走る茜の背中に、ほとんど体当たりといっていい勢いで組み付いたのは、結局その疑念がさせたことだった。
『キャアッ……⁉』
茜と繭は同時に悲鳴をあげる。
全速力でそのように組み付けば、二人とも転倒するのは当然だった。そのまま惰性で、ごろごろと二人は組み合ったまま茂みの中を転がる、
そして、急に視界が開けた。

それだけじゃなくて、
「嘘……！」
「なッ……⁉」
下に地面がなかった。
崖が、茂みのせいで隠されていたのだ。
そのままだったら、二人とも組み合ったまま転落していただろう。下の地面にたたきつけられていただろう。
だが、今まさに落下していく二人の腕が引っ張られた。
「祐一……」
「あんた、大丈夫なの⁉」
「くッ……待ってろ……今引き上げてやる」
ほとんど飛びつくようにして祐一は右手で繭の腕を、左手で茜の腕を引っつかんでいた。
腹ばいになって、肩より上を乗り出し、虚空にぶら下がる少女二人を必死に引き上げようとしている。
だが、

「く……そ……」
それは無理だ。とても無理だ。
繭も茜も、小柄な方ではあるが、それでも二人の人間をこの体勢で引き上げることはできない。
そう、二人の人間は。
ズリッ、ズリッと、祐一の体が前に引きずられていく。
ぱらぱらと落ちる小石。
おもわず識は下を見てしまう。
高い。下に植物があるとはいえ、落ちたらおそらく、助からない。
「必ず……必ず……助けて……やる」
食いしばった歯の間から悲痛なうめきがもれる。
けれど……三人はもはや悟っていた。
このままでは、全員が転落するか、繭か茜、どちらかが死ぬしかないということに。

574　新たなる目的

「お母さん、大丈夫？」
「大丈夫なわけあるかい！　硫酸みたいなのをぶっかけられたんやで！」
「そ、そうだよね」
「とにかく、腕を洗わんと……」
現在、往人、晴子、観鈴の三人は、森を離れ、とにかく晴子の腕にかかった硫酸を洗い流そうと、水のある所を探していた。
幸いにもすぐに池が見つかり、近くに人の気配もなかったので、一行は晴子の治療に専念することにした。
晴子が水辺に腕を近付け、往人が水をかける。
バシャ！
「ぐう……メッチャ染みるで……」
「我慢しろ、洗い流さないと更に酷くなるぞ」

こんな時、聖がいればな、と往人は晴子の腕の処置をしながら唐突に思った。
だが、聖はもういない。
佳乃も、美凪も、みちるも、もうこの世には居ないのだ。
晴子の腕に付いていた硫酸を洗い、観鈴の持っていたハンカチで傷口を縛った。
「よし、一応はこれで大丈夫だと思う。後でちゃんとした治療をしないとな」
「すまんな、居候」
「気にするな。あの時判断を誤った俺にも責任がある。撃った時点ですぐに逃げればこうはならなかった」
「しかし、あの女……今度会ったらゆるさへんで。絶対に殺したる」
「ダメだよ、お母さん……」
そう言ったのは他でもない、銃を突きつけられた観鈴本人だ。
「何言ってんねん。撃たれてたかもしれんのはあんたなんやで？」
「だけど……あの人の目、凄く寂しそうだった。きっとあんな事したのも訳が……」
「観鈴」
観鈴が言い終えるのよりも早く、往人がその言葉を遮った。
「どんな事情があろうとも俺はもう、あの女を信用は出来ない。多分晴子もそうだろう。だから――」
そこで往人は息を吸い、
「次にあの女に会ったときは、容赦なく撃つ。その時に、邪魔をするなよ。観鈴」
「うん……」
仕方が無くといった感じで観鈴は引き下がった。
「ならこの話はもうお終いだ。問題はこれからの行動だな……」
何かいい考えはあるかと、往人は二人に聞いてみたが、返ってきたのは何も、という答えだけだ

った。
「それなら……」
と言って往人は言葉を続けた。
「俺は、仲間を探そうと思う。このゲームの管理者とやらと戦うにも、ここから逃げるにしても、人数は多い方がいいからな。ただ、さっきのような目に遭うということももちろん考えられる」
往人は一旦息を吐き、言葉を続ける。
「だから信用できる奴のみだ。タイミングよく近づいて、しっかりとこちらの考えを話せばうまくいくはずだ。いろいろ考えたが、現状ではこれが一番ベストな考えだと思う。二人とも、いいか？」
「そうやな、さっきみたいな目に遭うのはゴメンやけどこの先ウチらだけじゃどうしようもないもんな。賛成や」
「私も……往人さんがそういうなら間違いないと思う。私も賛成する」
「分かった。ならすぐに動こう。こうしている間にもまた誰か死んでいるかもしれない」
そうして、動く準備をしている時に、往人は自分の銃にもう弾が入っていないことを思い出した。
（バッグに戻しておくか……ん、待てよ……）
そう言えば、自分はあの時会った——確か氷上シュンといっていた男のバッグに何が入っているか確かめただろうか？
（そういえばずいぶんと重かったな、あのバッグ）
今まで確かめてなかった事に、自分の迂闊さを悔いながら往人はシュンのバッグを開けた。
「本当に迂闊だったたな……」
バッグに入っていた大きなものの正体はかなり大きな銃（ベネリM3ショットガン）だった。
「なんや……そんなもん持ってたんかいな」
自分の銃に弾を込めていた晴子が驚きの目をこちらに向けていた。
「いや……今分かった。開ける気もなかったんでな。やけに重かったので気にはなってたんだが……」

「ちゃんとみとけや、アホ」
「気をつける」
そういいながら往人はベネリＭ３に目をやった。
（氷上といったな……この銃、使わせてもらうぜ
……）
「よし、行くぞ」
「ええで」
「うん」
そうして三人はまた動き出した。
新たなる目的を持ち。

575　霞

全てが夢であればいいと思った。
そして、朝が来て私は自宅のベッドの上で目を覚まし、怖い夢を見たと今の自分が日常にあることを確認してほっとするんです。

「真琴？　……ええ、私の友達なんです」
海。
夕暮れ――いや、明け方の海岸。
朝の淡い光の差し込む海岸。
何故か、少女は此処に居た。
隣に立つ――見てはいないが――少年の気配は。
酷く優しげで。
自分を捨てる事で、他の全てを救おうとする――
そんな優しさ。
それを何処かで得た少年。
得る事になってしまった少年。
でも、何処で？
「随分とわがままで……いつも祐一さんを困らせてるそうです」
「祐一さんっていうのは……確か、天野さんの友達だったっけ？」
「……はい」
砂を踏み締める。

じゃり、という微かな音。
確かめる……これは現実だと。
――コレハゲンジツ。
なのに。
どうして、目の前の朝日が眩しくないのか？
「〝これ〟が終わったら、まず、会いに行こうと思いまして」
「これ？」
――あれ……。
――これって、何でしたっけ？
困ったような、苦笑するような。
そんな感じの笑みを、隣に立った少年は浮かべた……筈だ。
少年――祐介が、立ち上がる。
ふわりと、肩に手を置いた。
酷く、冷たい手を。
「天野さん」
――はい。

「君は、その真琴って子に会いに行かなきゃいけないんだよね？」
――はい。
「だったら……ゲームに戻った方がいい」
突然、消えた。
先程まで感じていた筈の、そこに在った筈の人の気配が。
振り返る。
――居ない。
いや、いる。
否、〝あった〟。
右腕だけが。
――ひっ……！
「……さぁ」
酷く冷たい声。
――ざぁっ
風が巻き起こる。
消える。

消える。
先程まであった筈の景色が。
そこにあった筈の人の気配が。
身体が。
そして広がる――紅。
深紅。
血のような――
ぎっ。
全身が絡め取られるような。
いや、違う。
……ピアノ線？
祐介、さん？
「あ……い……い、あぁ」
もはや声にもならぬ声。
何かが叫ぶ。
誰、これは――私？
それとも？

――殺――
――殺サ――デ
――殺――ナイ――！
――殺さないで！

「……い……いや」
「嫌……嫌ぁぁあぁああああ……っ!!」
ぶつん。

――右腕が飛んだ。

跳ね起きた。
途端、押し寄せる嘔吐感。
構わず、吐いた。
服に掛からない様にしたのは、微かに残った理性が為したものか。
……。
吐いたところで、何も出てくる事は無い。

木漏れ日。
寝転ぶ少女の顔に掛かるそれは、優しげで。
残酷な現実を。夢ではないと確認させるようで。
右手に当たる日差しは、その暖かさを伝え――ない。
当たり前だ。
――右手はもう存在しないのだから。
「……」
ぐるぐると、思考は巡る。
――裏切られた？
いや、違う！
――違う？
そう。
なら、ついさっき、出会った時の顔は何だ？
驚いていたじゃないか。
喜んでいたじゃないか。
――取り逃がした獲物を見つけた喜びかもしれない。
――遭うとは思わなかった敵と出逢ってしまった驚きかもしれない。
違う――。
違う、違う、違う！
私は――
ワタシ、ハ――
彷徨う想いは、まだ――
出口を知らない。

576 いつかの決着（ケリ）

「ぐうっ……」
きしむ腕、悲鳴をあげる筋肉。
恐ろしいほどの血管を浮かび上がらせながら、祐一は呻いた。
ガラッ……砂が、固まった泥が、崖の断面にぶつかり合い、粉となって虚空に消える。

「まっ、繭っ！　どっかに足場……ないのかっ……!!」
「ごめんっ……ないっ!!」
そう言いながら、自分の体に括り付けてあった荷物を捨てる。舞い降りる土砂と共に、繭の荷物が崖下へと吸い込まれていく。
それを見た祐一の視界がぐらりと揺らいだ。
「里村さんも……荷物捨てて！」
繭の言葉。
「……そうですね」
落ち着いた風に、茜もそれに習う。
ガクン……若干、左腕にかかる重量が一気に軽くなってバランスを崩しかける。
「くぅ……」
だが、祐一も男。そこは持ち直した。
おかげでもう少し保ちそうだったが、それも時間の問題だ。
(くそっ……こんなときに力があればっ……!!)
脂汗が、祐一の全身を包み、力を奪っていく。
「……じゃあ、こういうのはどうですか？」
開いたほうの手で、唯一捨てなかったコルト・ガバメントを構える。
カチッ……。
「茜っ!?」
「このままじゃ全員死にます。それよりは……いいと思います」
繭に、向けられた銃口。
「里村さんっ……!?」
予期せぬ事態に、繭の下半身が宙に揺れる。
(な、なにしてんだ茜っ!!)
叫びたかったが、叫べなかった。少しでも気を抜くと、自分も含め、三人全員が奈落の底へと落ちてしまうから。
「私は——ためらいませんよ」
繭と、祐一と。
それぞれの顔を交互に目だけで見やりながら茜が

呟いた。
――その声はとても冷たく。
茜が大切な親友達を撃ち殺したその罪。
(私は、一番汚い方法でケリをつけようとしてるのかもしれません)
「……茜っ！」
祐一の叫びが聞こえる。
(帰ってこなかった幼なじみのあの人。いつまでも待ちつづけた私)
すっ……と、大きく息を吸って。
(帰るために殺しつづけた私)
「これが、私の選んだ道です」
グイッ……
繭の頭に、照準を合わせる。
「さ、里村さんっ!!」
繭の自由な方の腕が、それを奪おうと宙をかいたが届かなかった。
繭の体が、振り子のように揺れる。

(もし、撃ってみろ……そのときは、茜、お前も死ぬぞ……もちろん俺も)
声にこそ出せなかったが、その表情と思いは、二人の心に伝わった。
(やめろ……茜……)
極限状態の中で腕を閉じ、出来る限り二人の体の幅を縮める。もちろん繭に茜の銃を奪ってもらう為だ。
体と共に、繭と茜の心が揺れた。
「祐一、私達を引き上げることはあなたでは無理です」
「里村さんっ……！　そんなこと言わないでっ!!」
既に、祐一の腹までが崖下に乗り出している。
一人ならばいざ知らず、二人相手では絶対に踏ん張りがきかない。
「あ……かねっ……！」
「あなたは……何も変わってませんでした。私がこう言うのは許されないことだけど、少し嬉しかった。

あなたはきっと……最後まで手を放さないでしょうね」
ただ……それは、ただのバカです……と付け加えて。
「だから、私が決めます。どうせ死ぬのなら、私が撃てば……」
「やめて、里村さんっ!!」
「さようなら」
ドンッ……!
――銃声が木を大きく揺らした。
「多分、私は、一番汚い……方法で……決着を……つけようとしてたのかもしれ……」
茜の手から、コルト・ガバメントが落ちた。
「がはっ……ハア……ハア……」
祐一の、背中越しに見えた影。
苦しそうに息を吐きながら、銃を撃った少女、牧部なつみ。残された右腕に、放り出されていたカスタムウォーターガンを携えて。
流れ出る血が、祐一の背中を濡らし、脂汗と交じり合って、地面へと流れた。
「な……」
弾丸は、茜の体を。
酸は、茜の顔を。
それぞれ蹂躙して。
「あかねっ!!」
「かはっ……私……撃ったのね……」
もう、痛みなどなかった。ただ、血の流れ行く感覚だけが……なつみには感じられた。
ただ、撃った。祐一と、繭とを、助けて……そして、非道な里村茜への復讐の為に。
「店長さんの敵……」
取った。復讐は、叶った。
ただ、今、本当にそれを望んでいたのか。
復讐なんて馬鹿らしい。
「本当ね……」
晴香の言葉を思い出しながら。

(なんにも……ならないね)

嬉しくも、なんともなかった。ただ、殺した……というだけの事実。

(なに、してたんだろうね、わた……し)

その思考を最後に、なつみが倒れた。祐一の背に覆い被さるように。

一瞬遅れて、涙の雫がなつみの体に、落ちて流れた。

――あの瞬間、茜は確かに自分の方向へと銃口を向けた。

祐一の体の上から降り注ぐ酸と、血。

そして、大地を揺るがす銃声。

茜の体が、大きく揺れた。

酸が顔から首を伝い、制服を黒く焦がしていく。

「わた……し……の……罪です。結局……逃げてしまいました」

腹部から、血が垂れた。

「あかねぇっ！」

制服が、黒と赤とに彩られて。

「ごめんなさい……生きて償っていけなく……て」

澪と、詩子と、そして殺めてきたすべての人に。

そして、あの人と、祐一に。

「ごめんな……さいっ……!!」

口元から血を滴らせながら――茜の言葉。

罪人には、許されないかもしれない――陳腐な言葉。

頬を濡らした涙が、酸を洗い流していく。

――結局……あの空き地には……帰れませんでしたね。

最後の力で、祐一の手を振り払って。

茜の姿が吸い込まれていく――下へ、下へと。

「あっ……あかねぇーーーっ!!」

「里村……さんっ!!」
祐一の叫びと共に、繭の体が舞った。
なつみの体を乗り越え、地面にと転がる。
「くそぉっ！」
祐一は降りられそうな場所に目星をつけると、崖下へ一気に滑り降りた。

七十九番　牧部なつみ　死亡
【残り29人】

577　永遠は閉ざされて

――それは酷く長い一瞬だった。
手を払う。
それは、茜に残された最後の力。
祐一の手は血で滑り、
――その手は離れた。

途端に襲い掛かる、無重力感。
上に見えるのは。
手を放した祐一の、酷く、酷く悲壮な顔。
「そんな、哀しい顔をしないで下さい。私は、死んで当然のことをしてきたのですから――」
そう、言いたかった。
けれど、声は出なくて。
胸に穿たれた風穴は、確実に己の命を削り。
奪っていく。
底知れぬ闇へと――

とうとう、祐一の顔も見えなくなった。
後ろには、深い、深い闇が広がっているのだろう。
振り返る？
いや。
振り返ったところで、顔から落ちるだけ。
けれど。

この焼け爛れた顔を。
彼の目に晒すよりはいいかもしれない。
いや、〝彼ら〟か。
今。
数瞬前に。
最後の最後に裏切ってしまった、彼。
そして――
もはや還れぬ、あの地で。
待たねばならなかった、あの人。
不意に。
遠くに見える、木が。
風に揺れて。
その向こうにある空を覗かせた。
蒼い空は、何処までも深く。
一瞬だけ、ぽっかりと空いた空間に。
蒼く、蒼く広がっていて。
茜は、手を伸ばした――

もし、この背中に翼があるのなら――
最期に、一つだけ、願いが叶うのなら――
私は。
あの空を越えて。
行きたい――

「永遠」に。

けれど。
再び風は吹いて。
空はその姿を覆い隠された。
それは。
道を閉ざされたようで。
――ふふ。

何となく、笑えた。

ごぐっ。

――随分と、鈍い音。

それが、彼女が聞いた、最期の音だった。

四十三番　里村茜　死亡

【残り28人】

《葉鍵ロワイアル　第四巻　了》

葉鍵ロワイアル　第四巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に
この場を借りて、お礼を申し上げます。

450　潜入 …… 命さん
451　導かぬ灯台 …… 名無したちの挽歌さん
452　朱の鳥が鳴く頃に　～少年～ …… 111 さん
453　朱の鳥が鳴く頃に　～郁未～ …… 111 さん
454　いろんな意味で負けるな御堂！ …… 名無しさん
455　大いなる誤解 …… 名無しさん
456　幕間 …… 111 さん
457　天を衝く剛拳 …… 111 さん
458　企む三人彷徨う二人 …… 名無しさん
459　Morning Gloomy …… 。さん
460　てのひらをたいように …… 。さん
461　騙し騙されて …… 名無しさん
462　discovery …… 駄っ文だよさん
463　忘れていた事実 …… 名無しさん
464　これまで、そしてこれから …… #3-174 さん
465　血塗られた花嫁 …… いつかさん
466　天使の導き …… 林檎さん
467　俺のこの手は汚れているけど …… 箕崎さん
468　闇の声 …… 箕崎さん
469　命の炎　～鈴の音～ …… 命さん
470　命の炎　～現実～ …… 命さん
471　命の炎　～そびえたつ洋館～ …… 命さん
472　命の炎　～盛る灯～ …… 命さん
473　命の炎　～生きるということ～ …… 命さん
474　道中、ふと思うこと …… 名無しさん
475　舞い降りる白 …… 名無しさん
476　あなただけは　～蜘蛛の巣より～ …… セルゲイ＠Ｄさん
477　歪む世界 …… いつかさん
478　烏 …… 箕崎さん
479　気持ちは灰色 …… 名無しさん
480　くそったれたゲーム …… 命さん
481　異端 …… 111 さん
482　葉子さんのデンジャークッキング …… #3-174 さん
483　月代よサラバ⁉ …… 林檎さん
484　僕たちの失敗――砂の果実 …… YELLOW さん
485　喪失の黒 …… 名無したちの挽歌さん
486　儚き魂の円舞 …… 彗夜さん
487　哀 …… 命さん
488　魂の導き手 …… 彗夜さん
489　zoo director …… いつかさん
490　きずな。 …… 。さん
491　Sweet berry Kiss …… 。さん
492　停滞 …… 111 さん
493　侵攻 …… 111 さん
494　一瞬の出来事 …… 林檎さん
495　笑うということ …… 名無したちの挽歌さん

◎制作者一覧
制作協力：
111、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、独活大樹、
久々野　彰、冴村浩志、静かなる中条、真空パック、
駄っ文だ、ないしょ、ナナツさんだよもん、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、遥か昔の書き手、箕崎、
観月、林檎、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、５、Alfo、Kyaz、MIU、NBC、命、いつかの書き手、
感想スレ R の 142、葵原てぃー、シイ原、
七連装ビッグマグナム、暇人、日向葵、祐一＆浩平、
名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様

（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　(4)
二〇〇三年　一〇月　五日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：(別頁に記載)
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：秋★枝
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

9784445304543

1921130100010

ISBN4-31034-193-7

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅳ

『やっと……会えたね？』

向けられた笑顔は全て間違っていた。

『ずっと……好きだったんだよ…？』

握りしめた短刀から伝わってきたのは
命の重さだった。
何が大事なのかは解らないのに
誰が大切なのかが解ってしまった。
人を愛していたが為に
色んなモノを失ってしまった。

それでも俺は——。

全ては生き残るために。
あの場所へ君と還るために。